

板 平 遺 跡 (第 3 ・ 4 次 調 査)

Itabira Site

東九州自動車道(門川 ~ 日向間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3

2011

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第199集

『板平遺跡（第3・4次調査）』正誤表

ページ・図番号	誤	正
p49 右16行目	5～10cm大のものが <u>1</u> 個	5～10cm大のものが <u>10</u> 個
p136 右 2行目	中期末葉までの土器器	中期末葉までの土器群

第91~93図の挿図出典一覧

挿図No.	遺跡名	出土遺構
109	板平(2次)	SA1
230 232	板平(2次)	SA3
16	板平(2次)	SA4
263	板平(2次)	SA5
215	板平(2次)	SA6
4 35 54	板平(2次)	SA9
76 114		
117 155		
14 15	板平(2次)	SA10
52 57		
260	板平(2次)	SA11
77 80	板平(2次)	包含層
170 180		
206		
17 18	板平(3次)	包含層
30 133	板平(4次)	SA1
140 147		
149 219		
234 236		
47 121		
32 264	板平(4次)	SA13
21	板平(4次)	SA11
23 56	赤坂	SA6
83		
112 173	赤坂	SA9
51	赤坂	SL3
61 164	赤坂	SM1
131 132	生目7号墳	周溝
145		
91 127	生目22号墳	周溝
225	上菌E地区	SA20
59 70		
134 150		
227	上菌F地区	SA1
33 257		
258 259		
261 262	上菌F地区	SA5
248 250		
153	上菌F地区	SA9
90 130	上菌F地区	SA10
139		
94	上菌F地区	SA12
177	上ノ原	SA2
66 79	上ノ原	SE1
118		
36	上野原	SA7
46 87	上の原1	土器埋納遺構
129 207		
208		
135 137	上の原2	SA2
138 148		
229		
68	上の原2	SA10
191	内野々	SH234
60 146	江田原3	SE1
235		
12 22	大戸ノ口2	SA13
82 97		
166 169		
174 181		
98 182	大戸ノ口2	SC4
45	橿中学校	表探
64	尾立2	SZ1
106	川床	C-15墓
108	川床	包含層
10 101	祇園原	SAG0601

挿図No.	遺跡名	出土遺構
142 143	木脇	SA19
228		
152	木脇	SA20
154	木脇	SA33
89 126	銀代ヶ迫	SA13
26 188	国光原	SA3
211 212	熊野原C地区	SA5
216		
120 210	熊野原C地区	SA7
213		
115 116	熊野原C地区	SA10
119 204		
196 202	熊野原C地区	SA12
105 193		
194 205	熊野原C地区	SA14
214 218		
162 195	熊野原C地区	SA19
28 125	黒仁田	SA1
221 222		
226		
141	黒仁田	SA10
86	黒仁田	SA12
78 192	黒仁田	SA9
199		
42 237	黒仁田	SC4
238 239		
53 200	猿野	SA1
203		
81 88	猿野	SA3
217		
49	下北方	ST16
223 224	浄土江	204号堅穴建物
197	新立	SA2
102 201	新立	SA10
107 209	陣ノ内	SA12
128 233	陣ノ内	SA15
73	陣ノ内	SA18
165	新別府下原	SA1
96 113	新別府下原	SC2
158 171	新別府下原	1号周溝状遺構
24 63	鶴野内中水流	SA8
84		
48	天神河内	包含層
27 67	樋田	SA8
1	中尾原	SA25
55 136	中野内	SA11
247 249	中野内	SA13
251 253		
8 19 31	中野内	SA17
41 252	中野内	SA18
255 256		
71	中ノ迫2	SA2
3 13 34	西ノ別府	SA1
65 85		
183 184		
189 190		
245	野首1	SA5
5 7 220	野首2	SA5
161	野首2	SA37
44 58	野首2	SA38
231		
20 43	野首2	SA71
123	登り口2	SA1
29 69	八幡上	SA3
92		
50 62	東平下	1号周溝墓
100 110		
111 167		

挿図No.	遺跡名	出土遺構
2 74 75	百町原	周溝状遺構
99 160		
163 175	百町原	堅穴住居
25 159		
172 176	前原北	SA49
37 122	前原南	SA7
103 179	間越	SC23
178	六野原地下式	3号墓
124	森ノ上B区	SA4
6 38 40	山口2地点	SA21
93 144		
151 240		
241 242		
243 244	山口2地点	SA37
39		
156	山ノ田1	SA1
157	山ノ田1	SA7
72	湯牟田(2次)	SA5
198	湯牟田(2次)	SA8
187	湯牟田(2次)	SA11
95 104	湯牟田(2次)	SA13
185 186		
11	湯牟田(2次)	SA20
9 246	吉野2	SA2
254		



第4次調査区全景（北より）

平成 21 年 7 月、調査区全域を富高川上流側から撮影したものである。中央に見える道路が東九州自動車道（門川～日向間：平成 22 年 12 月開通）であり、この部分が第 1・2 次調査（平成 17・18 年度）調査区にあたる。道路右側はアスファルト製造プラント建設予定地であり、撮影当時発掘調査中の第 4 次調査区にあたる。

卷頭図版 2



F - 1区 (第4次) 土層



8号集石遺構 (第4次) 半截状況



F - 2区 (第4次) 炉穴群 (1)



F - 2区 (第4次) 炉穴群 (2)



50号陥し穴状遺構（第4次）半截状況



1号竪穴建物跡（第4次）遺物・炭化材出土状況



1号竖穴建物跡（第4次）出土遺物



1号竖穴建物跡（第4次）出土転用羽口と鉄滓

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（門川～日向間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成17年度から実施しております。本書は、その発掘調査報告書であります。

本書に掲載した板平遺跡（第3・4次調査）は、平成20・21年度に発掘調査を行い、後期旧石器時代の遺物や、縄文時代早期の炉穴や集石遺構などの遺構や遺物、弥生・古墳時代の竪穴建物跡や土師器などの遺構や遺物、陥し穴状遺構などさまざまな遺構や遺物を確認することができました。特に1号竪穴建物跡で「鍛冶炉」・転用羽口・金床石・鉄滓などが確認されたことは、南部九州における古墳時代中期中葉の鉄生産を考える上で貴重な調査事例です。ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 森 隆 茂

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道(門川～日向間)建設に伴い、平成20・21年度に実施した日向市所在の板平遺跡(第3・4次調査)の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、西日本高速道路株式会社(NEXCOWest)九州支社の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地での実測・写真撮影等の記録は、第3次調査については、島木良浩、日高優子が、第4次調査については、松田博幸、土屋雄毅、橋口由佳、岸田裕一、岡田諭が行った。
- 4 整理作業は、遺物洗浄・注記・接合を整理作業員が行い、実測・トレースは整理作業員の補助を得て島木・日高・松田・橋口が行った。一部の石器実測及びトレースを(株)パスコに委託した。また、整理作業全般について今塩屋毅行の、石器類の分類や石材同定については松本茂の助言を得た。
- 5 次の業務はそれぞれ業者に委託した。

基準点測量・グリッド杭設置	第4次調査:(株)日向測量設計
空中写真撮影	第4次調査:(株)九州航空
自然科学分析	第3次調査:(株)パリノ・サーヴェイ
	第4次調査:(株)古環境研究所
金属分析	第4次調査:(株)JFEテクノロジーサーチ
- 6 本書で使用した周辺遺跡位置図は国土地理院発行の5万分の1図を、周辺地形図等はNEXCOWest日本延岡高速道路事務所から提供の1,000分の1図をもとに作成した。
- 7 国土座標は平面直角座標系(世界測地系)に基づく。また、標高は海拔絶対高である。なお、本書で使用した方位は、第3章(第3次調査の記録)については磁北(M.N.)、その他については座標北(G.N.)である。
- 8 土層断面・土器等の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。
- 9 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

S A... 竪穴建物跡	S B... 掘立柱建物跡	S C... 土坑	S E... 溝状遺構
S I... 集石遺構	S P... 炉穴	S H... ピット	
- 10 本書の遺構及び遺物実測の縮尺は明記しているが、主に以下のように統一している。

集石遺構...1/30	炉穴...1/40	竪穴建物跡...1/50	掘立柱建物跡...1/60
陥し穴状遺構・その他の土坑...1/30	縄文土器・弥生土器...1/3	土師器...1/4	
須恵器...1/3	陶磁器...1/3	旧石器...1/2	石鏃・石斧・スクレイパー...1/2
磨石・敲石・砥石...1/3	石皿・台石...1/4		
- 11 本書の石器実測図中の使用痕については、次のように表現している。
 - ・面的に図示可能な磨面・砥面...網掛け
 - ・断面図での磨痕(面)の範囲...矢印+「ス」
 - ・断面図での敲打痕(面)の範囲...矢印+「コ」
- 12 本書の執筆・編集は土屋(第3章)、島木(第4章)、松田・今塩屋(第5章)が担当した。
- 13 出土遺物、その他の記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第 章 はじめに		第 章 第 4 次調査の記録	
第 1 節 調査に至る経緯.....	1	第 1 節 基本層序.....	30
第 2 節 調査の組織.....	1	第 2 節 調査の方法及び経過.....	34
第 3 節 遺跡の位置と環境.....	2	第 3 節 整理作業及び報告書作成.....	37
第 章 第 3 次調査の記録		第 4 節 教育普及活動.....	37
第 1 節 基本層序.....	5	第 5 節 調査の記録	
第 2 節 調査の方法及び経過.....	5	1 旧石器時代の遺物	
第 3 節 整理作業及び報告書作成.....	5	(1) 概要	38
第 4 節 調査の記録		(2) 遺物	38
1 旧石器時代の遺物		2 縄文時代早期の遺構と遺物	
(1) 概要	8	(1) 概要	46
(2) 遺物	8	(2) 遺構	46
2 縄文時代早期の遺構と遺物		(3) 遺物	63
(1) 概要	11	3 縄文時代後～晩期の遺物	
(2) 遺構	11	(1) 概要	66
(3) 遺物	14	(2) 遺物	66
3 縄文時代後期の遺物		4 弥生時代の遺構と遺物	
(1) 概要	15	(1) 概要	67
(2) 遺物	15	(2) 遺構	67
4 古墳時代の遺構と遺物		(3) 遺物	67
(1) 概要	16	5 古墳時代の遺構と遺物	
(2) 遺構	16	(1) 概要	69
(3) 竪穴建物跡出土の遺物	18	(2) 遺構	69
5 中世の遺構		(3) 遺物	90
(1) 概要	22	6 古代～近世の遺構と遺物	
(2) 遺構	22	(1) 概要	95
6 その他の遺物.....	23	(2) 遺構	95
第 5 節 自然科学分析の結果.....	25	(3) 遺物	101
第 6 節 小結.....	29	7 その他の遺構と遺物	
		(1) 概要	104
		(2) 遺構	104
		(3) 遺物	117
		第 6 節 自然科学分析の結果.....	119
		第 7 節 小結.....	123
		第 章 総括.....	131

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図.....	3	第39図	集石遺構実測図(1).....	51
第2図	調査区と周辺地形図.....	4	第40図	集石遺構実測図(2).....	52
(第3 ~ 26図 : 第3次調査に関する図)					
第3図	全体遺構配置図.....	6	第41図	集石遺構実測図(3)及び集石遺構出土遺物実測図.....	53
第4図	土層断面図.....	7	第42図	炉穴実測図(1).....	55
第5図	旧石器時代遺物分布図.....	8	第43図	炉穴出土遺物実測図(1).....	57
第6図	旧石器時代トレンチ配置図.....	9	第44図	炉穴実測図(2).....	58
第7図	旧石器時代遺物実測図.....	10	第45図	炉穴出土遺物実測図(2).....	59
第8図	縄文時代早期遺構配置図.....	11	第46図	炉穴実測図(3)及び炉穴出土遺物実測図(3).....	60
第9図	縄文時代早期集石遺構実測図.....	12	第47図	炉穴実測図(4).....	61
第10図	縄文時代早期陥し穴状遺構実測図.....	13	第48図	縄文時代早期包含層等出土遺物実測図(1).....	62
第11図	縄文時代早期炉穴実測図.....	14	第49図	縄文時代早期包含層等出土遺物実測図(2).....	64
第12図	縄文時代土器実測図(1).....	14	第50図	縄文時代早期包含層等出土遺物実測図(3).....	65
第13図	縄文時代石器実測図.....	15	第51図	縄文時代後 ~ 晩期土器実測図.....	66
第14図	縄文時代土器実測図(2).....	16	第52図	弥生時代竪穴建物跡(S A 3)及び出土土器実測図.....	68
第15図	古墳時代遺構配置図.....	17	第53図	弥生時代包含層等出土土器実測図.....	69
第16図	古墳時代竪穴建物跡(S A 1)実測図... 17		第54図	古墳時代遺構配置図.....	70
第17図	古墳時代竪穴建物跡(S A 1)出土土器実測図.....	18	第55図	古墳時代竪穴建物跡(S A 1)実測図... 72	
第18図	古墳時代竪穴建物跡(S A 1)出土石器実測図(1).....	19	第56図	古墳時代竪穴建物跡(S A 1)内炉・土坑実測図及び遺物出土状況図.....	73
第19図	古墳時代竪穴建物跡(S A 1)出土石器実測図(2).....	20	第57図	古墳時代竪穴建物跡(S A 1)出土遺物実測図(1).....	74
第20図	古墳時代竪穴建物跡(S A 1)出土石器実測図(3).....	21	第58図	古墳時代竪穴建物跡(S A 1)出土遺物実測図(2).....	75
第21図	中世遺構配置図.....	22	第59図	古墳時代竪穴建物跡(S A 1)出土遺物実測図(3).....	76
第22図	中世掘立柱建物跡実測図.....	22	第60図	古墳時代竪穴建物跡(S A 2)実測図... 77	
第23図	その他の遺物(D - 1 区出土)実測図... 23		第61図	古墳時代竪穴建物跡(S A 4)実測図... 79	
第24図	その他の遺物(D - 2 区出土)実測図(1).....	23	第62図	古墳時代竪穴建物跡(S A 4)出土遺物実測図(1).....	80
第25図	その他の遺物(D - 2 区出土)実測図(2).....	24	第63図	古墳時代竪穴建物跡(S A 4)出土遺物実測図(2).....	81
第26図	自然科学分析の結果.....	28	第64図	古墳時代竪穴建物跡(S A 5)及び出土遺物実測図.....	82
(第27 ~ 89図 : 第4次調査に関する図)					
第27図	グリッド配置図.....	31	第65図	古墳時代竪穴建物跡(S A 6)及び出土遺物実測図.....	83
第28図	土層断面図(1).....	32	第66図	古墳時代竪穴建物跡(S A 7)実測図... 84	
第29図	土層断面図(2).....	33	第67図	古墳時代竪穴建物跡(S A 7)出土遺物及び竪穴建物跡(S A 8 ~ 10)実測図 ... 85	
第30図	全体遺構配置図.....	35・36	第68図	古墳時代竪穴建物跡(S A 11)及び出土遺物実測図.....	87
第31図	旧石器時代調査トレンチ配置図.....	39	第69図	古墳時代竪穴建物跡(S A 12)及び出土遺物実測図.....	88
第32図	旧石器時代遺物分布図.....	41			
第33図	旧石器時代石器実測図(1).....	42			
第34図	旧石器時代石器実測図(2).....	43			
第35図	旧石器時代石器実測図(3).....	44			
第36図	旧石器時代石器実測図(4).....	45			
第37図	縄文時代早期遺構配置図.....	47			
第38図	散礫分布図.....	48			

第70図	古墳時代竪穴建物跡(SA13)・土坑及び出土遺物、古墳時代包含層等出土土器実測図.....	89
第71図	古代～近世遺構配置図.....	96
第72図	掘立柱建物跡実測図(1).....	97
第73図	掘立柱建物跡実測図(2).....	99
第74図	掘立柱建物跡実測図(3).....	100
第75図	掘立柱建物跡実測図(4)及び古代～近世遺物実測図.....	102
第76図	土坑配置図.....	105
第77図	陥し穴状遺構実測図(1).....	107
第78図	陥し穴状遺構実測図(2).....	109
第79図	陥し穴状遺構実測図(3)及び陥し穴状土坑出土遺物実測図.....	110
第80図	土坑実測図(1)及び土坑出土遺物実測図(1).....	112
第81図	土坑実測図(2).....	114
第82図	土坑実測図(3).....	115

第83図	土坑実測図(4)及び土坑出土遺物実測図(2).....	116
第84図	包含層等出土土器実測図.....	118
第85図	自然科学分析の結果(1).....	126
第86図	自然科学分析の結果(2).....	127
第87図	自然科学分析の結果(3).....	128
第88図	自然科学分析の結果(4).....	129
第89図	自然科学分析の結果(5).....	130
(第90～93図：第1～4次調査全体に関する図)		
第90図	全体遺構配置図.....	133・134
第91図	板平遺跡出土土器の変遷的位置(1).....	138
第92図	板平遺跡出土土器の変遷的位置(2).....	139
第93図	板平遺跡出土土器の変遷的位置(3).....	140
第94図	竪穴建物変遷図.....	144
第95図	土坑配置図.....	148

表 目 次

(第1～10表：第3次調査に関する表)

第1表	基本層序.....	5
第2表	旧石器時代石器計測表.....	8
第3表	縄文時代土器観察表(1).....	14
第4表	縄文時代石器計測表.....	15
第5表	縄文時代土器観察表(2).....	16
第6表	古墳時代土器観察表.....	19
第7表	古墳時代石器計測表.....	21
第8表	その他の遺物観察表(土器類).....	24
第9表	その他の遺物計測表(石器).....	24
第10表	自然科学分析の結果.....	27
(第11～42図：第4次調査に関する表)		
第11表	基本層序.....	30
第12表	旧石器時代石器出土地点別器種・石材分類表.....	40
第13表	旧石器時代石器計測表.....	45
第14表	縄文時代早期集石遺構一覧表.....	49
第15表	縄文時代早期炉穴一覧表.....	54
第16表	縄文時代早期土器観察表.....	63
第17表	縄文時代早期石器計測表.....	65
第18表	縄文時代後～晩期土器観察表.....	66
第19表	弥生時代竪穴建物跡一覧表.....	67
第20表	弥生時代土器観察表.....	69
第21表	古墳時代竪穴建物跡一覧表.....	71
第22表	古墳時代土坑一覧表.....	90
第23表	古墳時代土器観察表(1).....	90
第24表	古墳時代土器観察表(2).....	91

第25表	古墳時代土器観察表(3).....	92
第26表	古墳時代土器観察表(4).....	93
第27表	古墳時代竪穴建物跡出土石器計測表(1).....	93
第28表	古墳時代竪穴建物跡出土石器計測表(2).....	94
第29表	古墳時代竪穴建物跡出土装飾品計測表.....	94
第30表	古墳時代竪穴建物跡出土鉄滓計測表...94	94
第31表	古墳時代竪穴建物跡出土棒状礫計測表.....	94
第32表	掘立柱建物跡一覧表.....	95
第33表	古代～中世土器観察表.....	103
第34表	近世陶磁器観察表.....	103
第35表	中世銭貨計測表.....	103
第36表	陥し穴状遺構一覧表.....	104
第37表	陥し穴状遺構を除く土坑一覧表.....	110
第38表	土坑出土土器観察表.....	117
第39表	土坑出土土器計測表.....	118
第40表	包含層等出土土器計測表.....	118
第41表	自然科学分析の結果(1).....	124
第42表	自然科学分析の結果(2).....	125
(第43～45図：第1～4次調査全体に関する表)		
第43表	土師器の色調 / 胎土の分類基準.....	141
第44表	板平遺跡出土土師器の色調 / 胎土の分類(1).....	141
第45表	板平遺跡出土土師器の色調 / 胎土の分類(2).....	142

図版

- 巻頭図版 1 第4次調査区全景(北より)
- 巻頭図版 2 F - 1区(第4次)土層
8号集石遺構(第4次)半截状況
F - 2区(第4次)炉穴群(1)・(2)
- 巻頭図版 3 50号陥し穴状遺構(第4次)半截状況
1号竪穴建物跡(第4次)遺物・炭化材出土状況
- 巻頭図版 4 1号竪穴建物跡(第4次)出土遺物
1号竪穴建物跡(第4次)出土転用羽口と鉄滓
- 図版 1(第3次) 1号集石遺構検出状況
2号集石遺構検出状況
散礫検出状況
2号陥し穴状遺構完掘状況
1号炉穴完掘状況
1号竪穴建物跡完掘状況
1号竪穴建物跡遺物出土状況
- 図版 2(第3次) 旧石器時代石器
縄文時代早期遺物
縄文時代後期土器
1号竪穴建物跡出土土器(1)・(2)
- 図版 3(第3次) 1号竪穴建物跡出土土器(1)~(4)
古墳時代土器(1)・(2)
中世・近世遺物
- 図版 4(第4次) 1号集石遺構検出状況
3号集石遺構検出状況
4号集石遺構検出状況
6号集石遺構検出状況
8号集石遺構検出状況
8号集石遺構半截状況
10号集石遺構検出状況
11号集石遺構検出状況
- 図版 5(第4次) 12・13号集石遺構検出状況
14号集石遺構検出状況
1号炉穴完掘状況
2号炉穴完掘状況
F - 2区炉穴群(1)
- 図版 6(第4次) F - 2区炉穴群(2)
6・7号炉穴完掘状況
8~10号炉穴完掘状況
25号陥し穴状遺構完掘状況
- 図版 7(第4次) 27号陥し穴状遺構完掘状況
27号陥し穴状遺構半截状況
31号陥し穴状遺構完掘状況
36号陥し穴状遺構完掘状況
60号土坑遺物出土状況
- 図版 8(第4次) 3号竪穴建物跡完掘状況
1号竪穴建物跡遺物出土状況(1)・(2)
1号竪穴建物跡炭化材出土状況
1号竪穴建物跡貼床下状況
2号竪穴建物跡完掘状況
4号竪穴建物跡遺物出土状況
5号竪穴建物跡完掘状況
- 図版 9(第4次) 6号竪穴建物跡焼土検出状況
7号竪穴建物跡完掘状況
10号竪穴建物跡完掘状況
11号竪穴建物跡完掘状況
12号竪穴建物跡完掘状況
13号竪穴建物跡完掘状況
F - 1区全景
- 図版10(第4次) 旧石器時代石器(1)・(2)
- 図版11(第4次) 旧石器時代石器(3)
縄文時代早期土器
- 図版12(第4次) 縄文時代早期炉穴出土石器
縄文時代早期包含層等出土土器(1)
- 図版13(第4次) 縄文時代早期包含層等出土土器(2)
縄文時代後期土器
弥生時代中期土器
3号竪穴建物跡出土土器
1号竪穴建物跡出土土器(1)~(4)
- 図版14(第4次) 1号竪穴建物跡出土土器(5)~(12)
- 図版15(第4次) 1号竪穴建物跡出土土器(13)~(17)
- 図版16(第4次) 1号竪穴建物跡出土土器(18)~(22)
1号竪穴建物跡出土石器
- 図版17(第4次) 4号竪穴建物跡出土土器(1)~(3)
4号竪穴建物跡出土石器
古墳時代竪穴建物跡出土石器
古墳時代竪穴建物跡出土棒状礫
- 図版18(第4次) 5号竪穴建物跡出土土器
6号竪穴建物跡出土土器(1)・(2)
7号竪穴建物跡出土土器(1)・(2)
- 図版19(第4次) 11号竪穴建物跡出土土器
12号竪穴建物跡出土土器(1)~(4)
13号竪穴建物跡出土土器(1)
- 図版20(第4次) 13号竪穴建物跡出土土器(2)
古墳時代包含層出土土器(1)・(2)
60号土坑出土土器
1号土坑出土土器
古代・中世・近世遺物

第 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

東九州自動車道（延岡～清武間）は、平成元年 2 月に基本計画区間に決定された。本遺跡が所在する門川～日向間約 14km については、県文化課が平成 15 年 8 月に日本道路公団（当時、現在：NEXCO 西日本）から遺跡の分布調査の依頼を受け、翌 16 年 3 月、7 遺跡 174,000㎡の埋蔵文化財包含地の所在を回答している。そして、門川～日向間を担当する公団延岡工事事務所が開設された同 11 月には、工事計画や用地取得、埋蔵文化財調査等の調整会議も開催されている。

また、平成 17 年 2～3 月には「埋蔵文化財発掘調査におけるコスト縮減及び限定協議に伴う除外面積について」の協議が同公団と県文化財課との間でなされ、これらにより発掘調査の対象面積が当初の 174,000㎡から 91,000㎡に縮減された。

本遺跡は、平成 17 年度から第 1 次調査、平成 18 年度に第 2 次調査（A・B・C 区）を行った。第 2 次調査の成果は平成 19 年度に報告書として刊行している。（『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 176 集）

その後、平成 20 年度に第 2 次調査区の西側に側道を作ることになり、その側道部 460㎡の調査を第 3 次調査（D 区）として行った。また、高速道本線の西側にアスファルトを作るためのプラントを建設することになり、その建設場所と資材置き場にあたる、約 8,500㎡を平成 21 年 5 月より調査することとなった（第 4 次調査：E・F 区）。平成 22 年 1 月に調査を終了した。

第 2 節 調査の組織

板平遺跡（第 3 次・4 次）の調査組織は次のとおりである。

【調査主体】

宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

平成 20 年度（第 3 次調査）

所 長

福永 展幸

副所長 加藤 悟郎
総務課長 長友 英詞
同課主幹兼総務担当リーダー 高山 正信
調査第一課長 長津 宗重
同課主幹兼調査第二担当リーダー 菅付 和樹
同調査第二担当 主査 島木 良浩
主事 日高 優子

平成 21 年度（第 4 次調査）

所 長 福永 展幸
副所長兼総務課長 長友 英詞
同課主幹兼総務担当リーダー 高山 正信
調査第一課長 長津 宗重
同課主幹兼調査第二担当リーダー 菅付 和樹
同調査第二担当 主査 松田 博幸
主査 土屋 雄毅
主事 橋口 由佳
臨時調査員 岡田 諭
同調査第一担当 主事 岸田 裕一

平成 22 年度（報告書作成）

所 長 森 隆茂
副所長 北郷 泰道
総務課長 矢野 雅紀
同課副主幹兼総務担当リーダー 長友由美子
調査第一課長 長津 宗重
同課主幹兼調査第二担当リーダー 菅付 和樹
同調査第二担当 主査 松田 博幸
主任主事 今塩屋毅行
主事 橋口 由佳

【調査協力】

日向市教育委員会

東九州自動車道用地事務所

第3節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

板平遺跡は、宮崎県日向市大字富高字板平・程ヶ迫・前原・鍛冶屋・小板平に位置する（第1図）

日向市は、宮崎県の北部に位置し、尾鈴山系の北端にあり、東に日向灘を臨む。市内のほぼ中央を流れる塩見川を挟んで南北で基盤層が変わり、北が四万十層群、南が尾鈴山酸性岩類である。本遺跡は、塩見川の支流富高川左岸河岸段丘上に位置し、標高は、約20～40mを測る。基盤層は四万十層群で、富高川の埋積谷低地にあたる。富高川は本遺跡付近の上流地域では、雨季と乾季で水量が大きく変化する。

本遺跡は弥生時代の散布地として、周知の遺跡である。

2 歴史的環境

今回の第3次・4次調査でも第2次調査同様、旧石器時代～近現代までの遺構や遺物が確認された。本遺跡の周辺には以前から多くの遺跡が周知されており、一部は発掘調査も行われている。そこで、発掘調査が行われた遺跡を中心に、時代ごとに述べる。

旧石器時代の主な遺跡は、寺ノ上遺跡（図1-32）や奥野B遺跡（同-33）、東草場遺跡（同-14）、池ノ下遺跡（同-6）がある。寺ノ上遺跡では、AT（始良Tn火山灰層）直上から礫群4基や、石器ブロック5箇所よりナイフ形石器など1,200点の石器が確認されており、奥野B遺跡ではAT下位から石器ブロックが検出されている。池ノ下遺跡では、角錐状石器が出土している。板平遺跡第2次調査では、二次加工剥片が3点、石核が4点、剥片が2点AT下位層から出土している。

縄文時代では、早期の後陣遺跡（同-31）、越シ遺跡（同-30）、後期の東草場遺跡、分蔵遺跡（同-2）などがあげられる。後陣遺跡、越シ遺跡の両遺跡とも早期の集石遺構を検出している。特に後陣遺跡では、60余基を数える集石遺構が早水台式の押型文土器や吉田・前平式の円筒貝殻文土器、無文の円筒土器等に伴って検出された。また、後期の東草場遺跡では、円形竪穴建物跡が、分蔵遺跡では御領式の黒色磨研土器などを確認している。板平遺跡第2次調査では、縄文早期～後晩期にかけての集石遺構や炉

穴・土坑が確認され、貝殻腹縁刺突文土器や後晩期の土器が出土している。

弥生時代では、越シ遺跡で弥生時代終末期の間仕切りのある方形基調の竪穴建物跡が検出されており、東草場遺跡で中期の溝状遺構、終末期の方形竪穴建物跡等が確認されている。

古墳時代では、本遺跡の南東2kmには県指定富高1号墳・2号墳（同-12）があり、盟主と目される2号墳（全長86mの前方後円墳）では盗掘坑から仿製の四獣鏡が発見され、市指定の鈴鏡塚古墳（同-13）では、獣文八鈴鏡が出土している。板平遺跡第2次調査では、古墳時代前期～後期にかけての竪穴建物跡12軒が確認され、土師器や須恵器等が出土している。また、古墳時代前期のものと思われる車輪石が出土している。

古代では、越シ遺跡から土師器坏を伴う集石遺構や布痕土器を確認している。

さらに中世では、南方3kmに戦国時代には日知屋城、門川城とともに「日向三城」とよばれた塩見城跡（同-3）や中山遺跡（同-4）があり、中世の掘立柱建物跡や輸入陶磁器等が確認されている。

板平遺跡第2次調査では、古代から近世にかけての掘立柱建物跡11棟確認され、土師器や布痕土器・陶磁器・銭貨等が出土している。

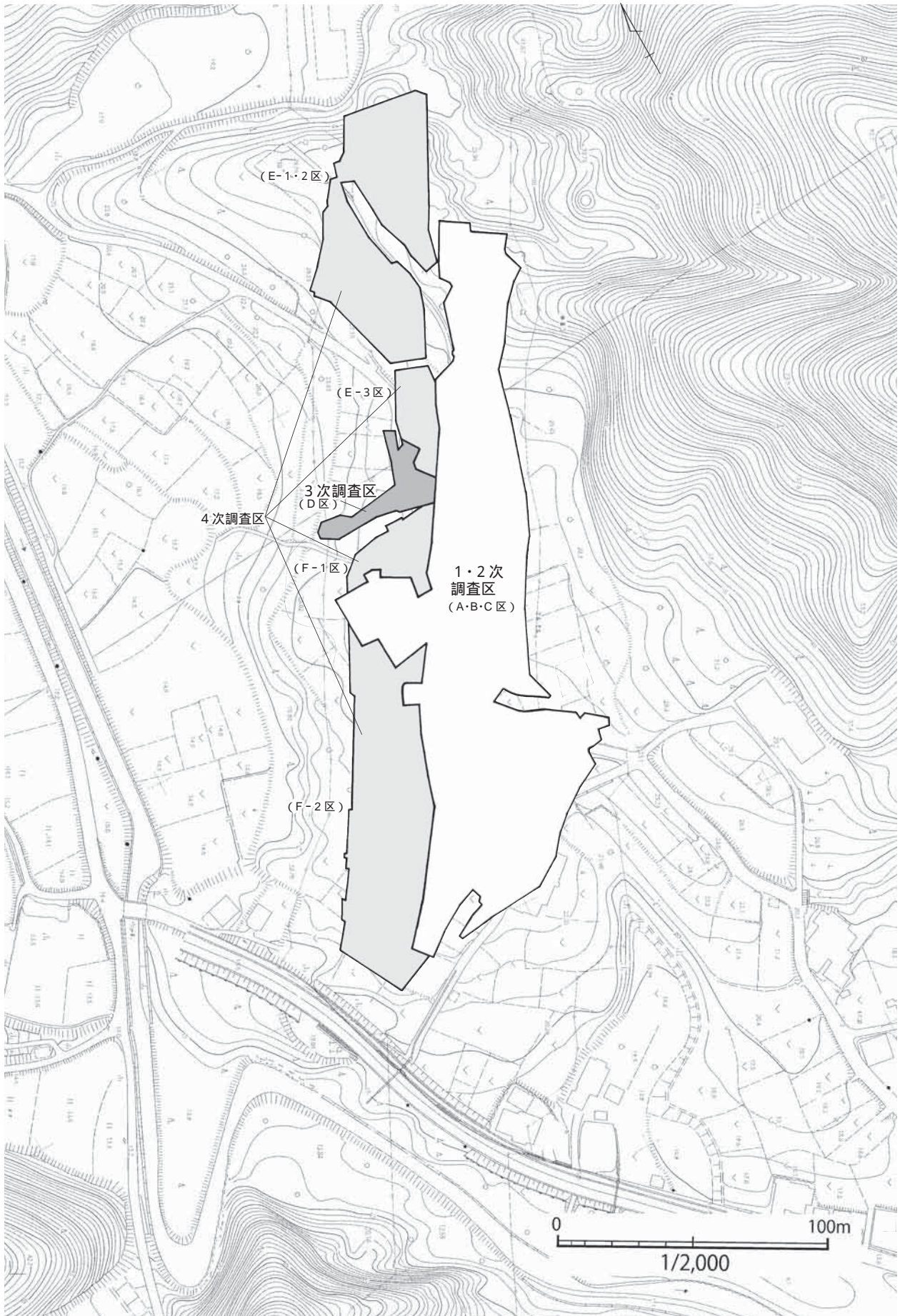
【引用参考文献】

- 日向市教育委員会 1983 「寺ノ上遺跡」
- 日向市教育委員会 1986 「後陣遺跡・越シ遺跡」
- 日向市教育委員会 1991 「富高古墳2号墳」
- 宮崎県 1989 「宮崎県史」資料編考古
- 日向市教育委員会 1985 「日向市遺跡詳細分布調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004 「中山遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第93集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006 「分蔵遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』139集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 「板平遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第176集



- | | | | | |
|-----------|------------|----------|----------|----------|
| 1 板平遺跡 | 2 分蔵遺跡 | 3 塩見城跡 | 4 中山遺跡 | 5 権現原遺跡 |
| 6 池ノ下遺跡 | 7 大谷尻遺跡 | 8 秋留遺跡 | 9 比良山古墳 | 10 比良遺跡 |
| 11 山下遺跡 | 12 富高古墳群 | 13 鈴鏡塚古墳 | 14 東草場遺跡 | 15 西谷穴群 |
| 16 西草場遺跡 | 17 谷口遺跡 | 18 宮ノ尾遺跡 | 19 和田遺跡 | 20 谷川遺跡 |
| 21 北川内遺跡 | 22 黒原遺跡 | 23 山口遺跡 | 24 畑浦遺跡 | 25 細島遺跡 |
| 26 日知屋遺跡 | 27 伊勢ヶ浜古墳群 | 28 野首遺跡 | 29 竹之下遺跡 | 30 越シ遺跡 |
| 31 後陣遺跡 | 32 寺ノ上遺跡 | 33 奥野B遺跡 | 34 奥野A遺跡 | 35 門川城遺跡 |
| 36 門川南町遺跡 | | | | |

第1図 遺跡位置図



第2図 調査区と周辺地形図

第 3 次調査の記録

第 1 節 基本層序

第 3 次調査は用地買収の都合上、現道と側道とをつなぐ道路の事前調査として 480m²(D 区)実施した。第 2 次調査(2008 年)の基本層序を参考に調査を行った。ただし、第 層(二次堆積アカホヤ火山灰)はほとんど残存していない(第 4 図)。

第 1 表 基本層序

層	層名	特徴
	表土	10YR3/4 暗褐色土。粘性はない。固くしまる。5mm 程度の角礫を多く含む。現在の耕作土。
	二次堆積アカホヤ火山灰層	7.5YR7/8 黄褐色土。粘性はない。しまりはややある。10YR3/3 暗褐色土が混ざる。アカホヤ火山灰の二次的堆積物。第 3 次調査では残存していない。
	暗褐色土層	10YR3/4 暗褐色土。粘性ややある。しまりがある。
	褐色土層	10YR4/6 褐色土。粘性は層に比べて強い。しまりがある。
	白斑ローム層	10YR3/2 黒褐色土。粘性なし。非常に硬くしまり、10cm 程度のブロック状の呈をなす。2mm 以下の白色のガラス質を含む。
	始良 Tn 火山灰層	10YR5/8 黄褐色土。粘性なし。しまりなし。
	小礫混じり褐色粘質土層	10YR4/6 褐色土。粘性ややあり比較的やわらかい。A T 粒子が混ざるためサクサクしている。層と層の漸移層にあたる。
	褐色粘質土層	10YR4/6 褐色土。粘性が非常に強い。固くしまる。最大 4 ~ 5 cm の小角礫を多く含む。
	礫層	10YR4/4 褐色土。粘性非常に強い。固くしまる。0.5cm ~ 10cm 大の礫を多く含む。

D - 1 区は側道が通っていたため、舗装部分を重機で除去すると第 層から確認できる部分と第 層からわずかに残存する部分とに分かれる。

D - 2 区は、東側が柑橘類の植栽により攪乱されており第 層がわずかに残存する。また西側は、第 層から残存していた。以下で各層ごとに概説する。

第 2 節 調査の方法及び経過

D - 1 区は道路の舗装部分をバックホーで除去後、第 層で遺構の検出作業を行った。

その結果、中世の掘立柱建物跡、古墳時代の竪穴建物跡、縄文時代の集石遺構、陥し穴状遺構および土坑が検出された(第 3 図)。

D - 2 区は、以前畑地で栽培されていた柑橘類(へべず)の影響が多く見られ、攪乱を受けていたが、陥し穴状遺構、炉穴が検出された。

旧石器時代の調査は、トレンチを設定した後、第 層を掘り下げて調査を進めた。

遺物包含層中の遺物は、平板により位置を記録して取り上げた。他の遺物は一括等で取り上げをした。

遺構実測図は 1/10 を基本とし、一部 1/20 で記録した。写真記録は 35 mm および中判ネガ・リバ・サル・カラ - 写真及びデジタルカメラを併用した。

調査日誌抄

H20.05.07 第 3 次調査開始。D - 1 区の舗装部分を重機で除去。トイレ・テント搬入・設置。器材搬入。

05.08 集石遺構実測。

05.09 ピット 8 基、陥し穴状遺構 1 基検出。

05.12 作業員投入。

05.13 A T 下よりチャート剥片 1 点出土。

05.14 掘立柱建物跡 1 棟実測終了。

05.15 竪穴建物跡 1 軒検出。

05.16 土坑 1 基検出。

05.26 D - 2 区調査開始。

05.27 陥し穴状遺構 2 基検出。

05.28 炉穴 2 基検出。

05.29 陥し穴状遺構 1 基検出。

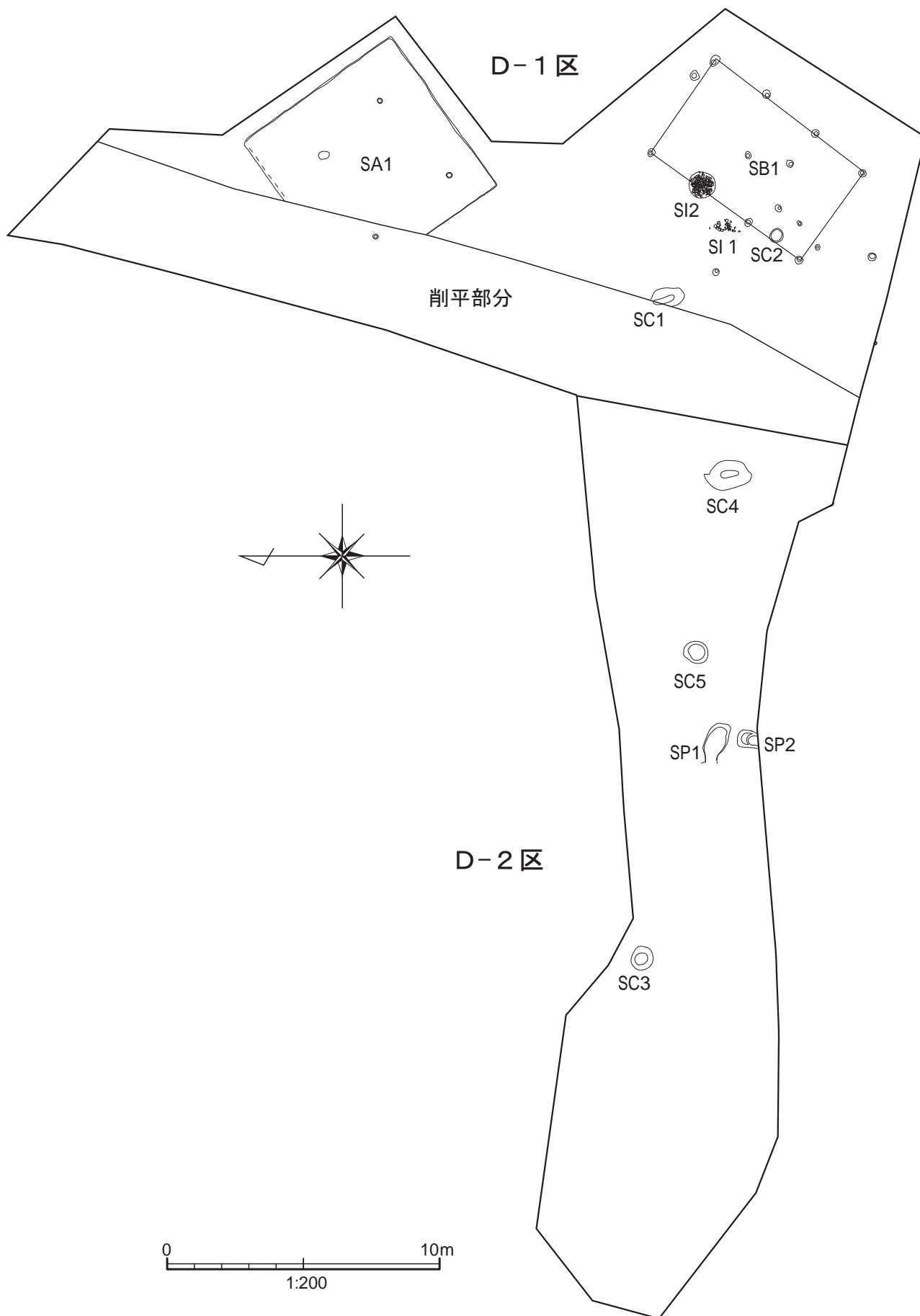
06.05 竪穴建物跡完掘、写真撮影。

06.06 A T 下トレンチ掘削終了。作業員終了。

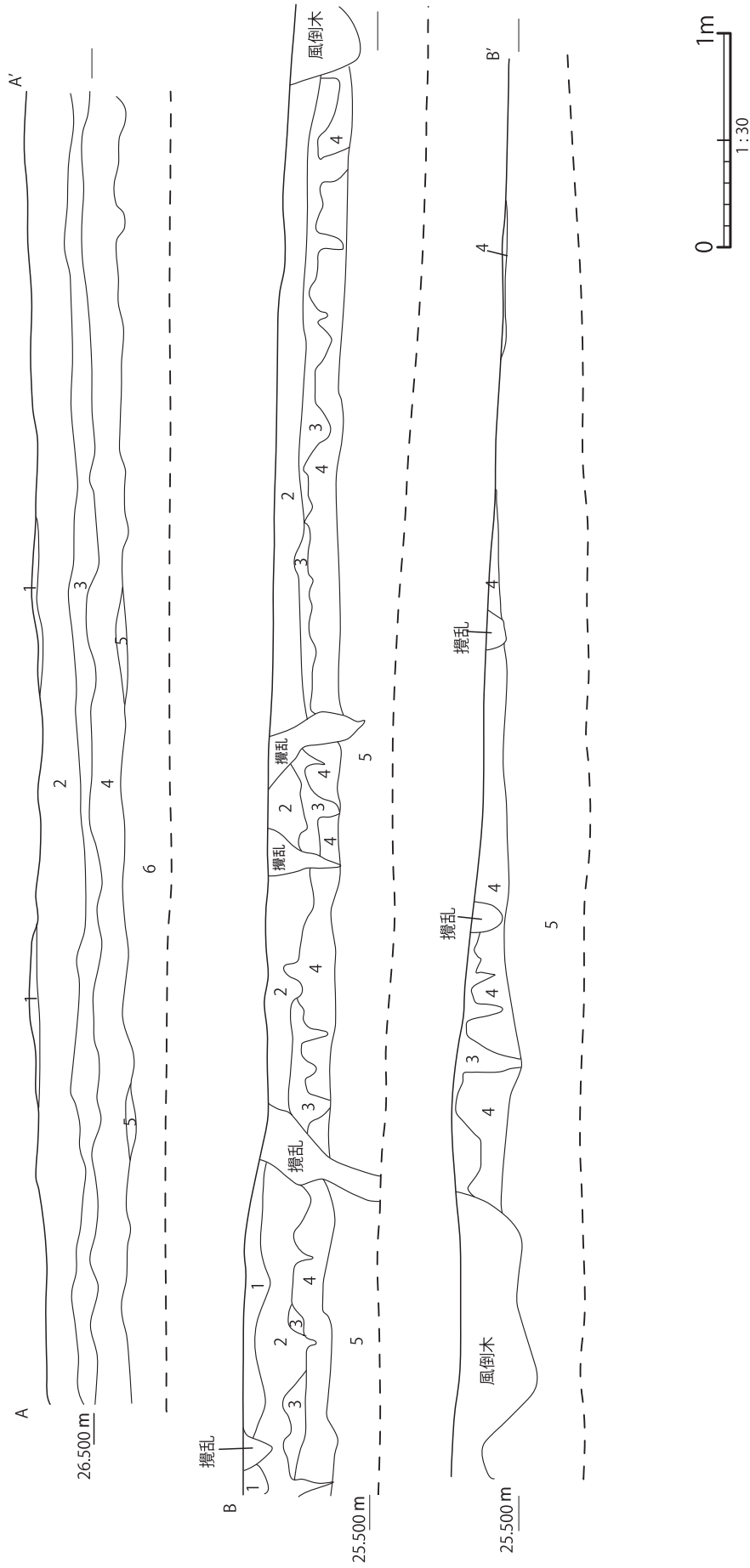
06.13 テント等リース品撤収。最終確認。

第 3 節 整理作業及び報告書作成

遺物の洗浄・注記・接合・実測・拓本・トレース等及び報告書作成は平成 20 年 10 月 ~ 平成 21 年 3 月の期間において埋蔵文化財センター本館で実施した。平成 20 年 10 月 ~ 11 月に遺物の洗浄・注記・接合・実測を行い、12 月 ~ 平成 21 年 3 月にデジタルトレース、図面レイアウト、文章作成を行った。



第3図 全体遺構配置図



土層断面 B - B' (第 6 図参照)

- 1 : 暗褐色土 (7.5YR3/3.5) 粘性あり、ややしまる。シルト質で微細な砂粒を含む。
- 2 : 褐色土 (10YR4/4) 粘性あり、しまりは普通。シルト質で微細な砂粒を含む。
- 3 : にぶい黄褐色土 (10YR5/6) 堆積は部分的であり、西側にいくほど堆積状況は悪い。
- 4 : 明黄褐色土 (10YR6/8) 下層は粒子の密度が高くしまりが強い。上層は砂利が多く含まれ、しまりは下層より弱い。
- 5 : 褐色土 (10YR4/6) 粘質土中に 1 cm ほどの扁平礫を少量含む。

土層断面 A - A' (第 6 図参照)

- 1 : 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性ややあり、固くしまる。(第 層)
- 2 : 褐色土 (10YR4/4) 粘性あり、固くしまる。(第 層)
- 3 : 褐色土 (10YR4/4) 固くブロック状のものが AT の上に層になるところがある。(第 層)
- 4 : にぶい黄褐色土 (10YR6/8) AT 層 (第 層)
- 5 : 褐色土 (10YR4/6) 粘性ありやわらかい。AT 粒子が混ざるとためサクサクしている。(第 層)
- 6 : 褐色土 (10YR4/6) 小角礫をまんべんなく含む。(第 層)

第 4 図 土層断面図

第4節 調査の記録

1 旧石器時代の遺物

(1) 概要

トレンチ(T1～T8)を設定(第6図)し、A T下位の第層まで掘り下げた。T1・3・4周辺の第層にて石器が出土した。しかし、礫群などの遺構は認められなかった。

(2) 遺物

第層からは、石器が14点出土した(第5図)。チャート1点(剥片)、ホルンフェルス8点(石核1点、剥片7点)、流紋岩5点(石核1点、剥片4点)である。

石材については、第2次調査に合わせて説明するが、流紋岩については二つの様相に分かれる。

流紋岩類は、灰褐色から褐色を呈する。表面にやや風化が進むが、流理構造は明瞭に観察される。

流紋岩類は、淡黄白色を呈し、表面の風化が進

んでいるため流理構造は明確でない。新鮮な面は黒色緻密である。流紋岩類とも肉眼的特徴が、五ヶ瀬川流域の旧石器時代に多用される石材に類似しており、同種の石材と考えられる。

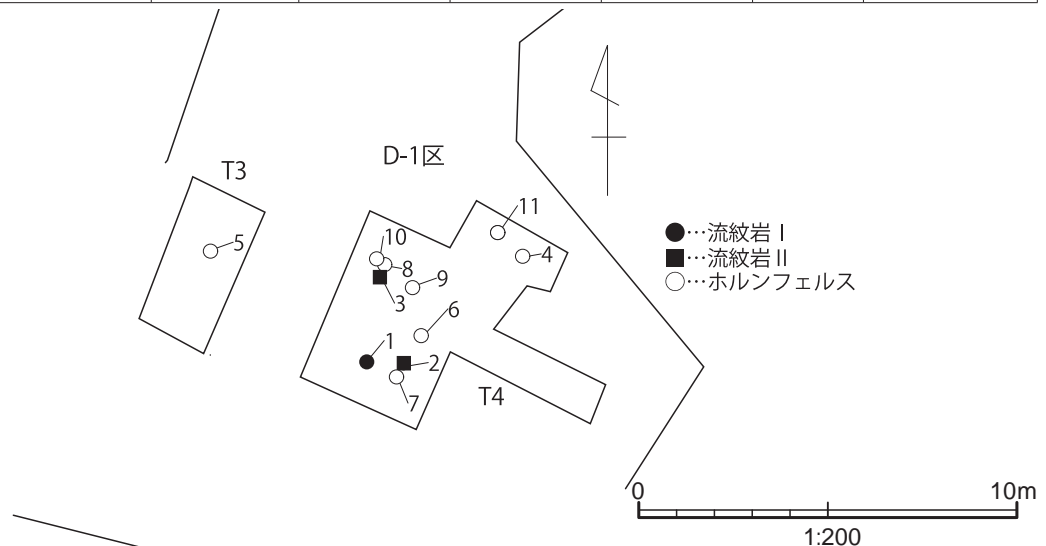
ホルンフェルスは、やや光沢のある黒色を呈し、風化はさほど進まず緻密である。点紋が見られるものもある。

1は流紋岩類の剥片である。背面に自然面を残す。2・3は流紋岩類の剥片である。ともに自然面を残す。4はホルンフェルスの石核である。剥片剥離痕を多く残す。5～11はホルンフェルスの剥片である。接合関係は認められなかった。12はチャートの剥片である。上面に自然面を残す。

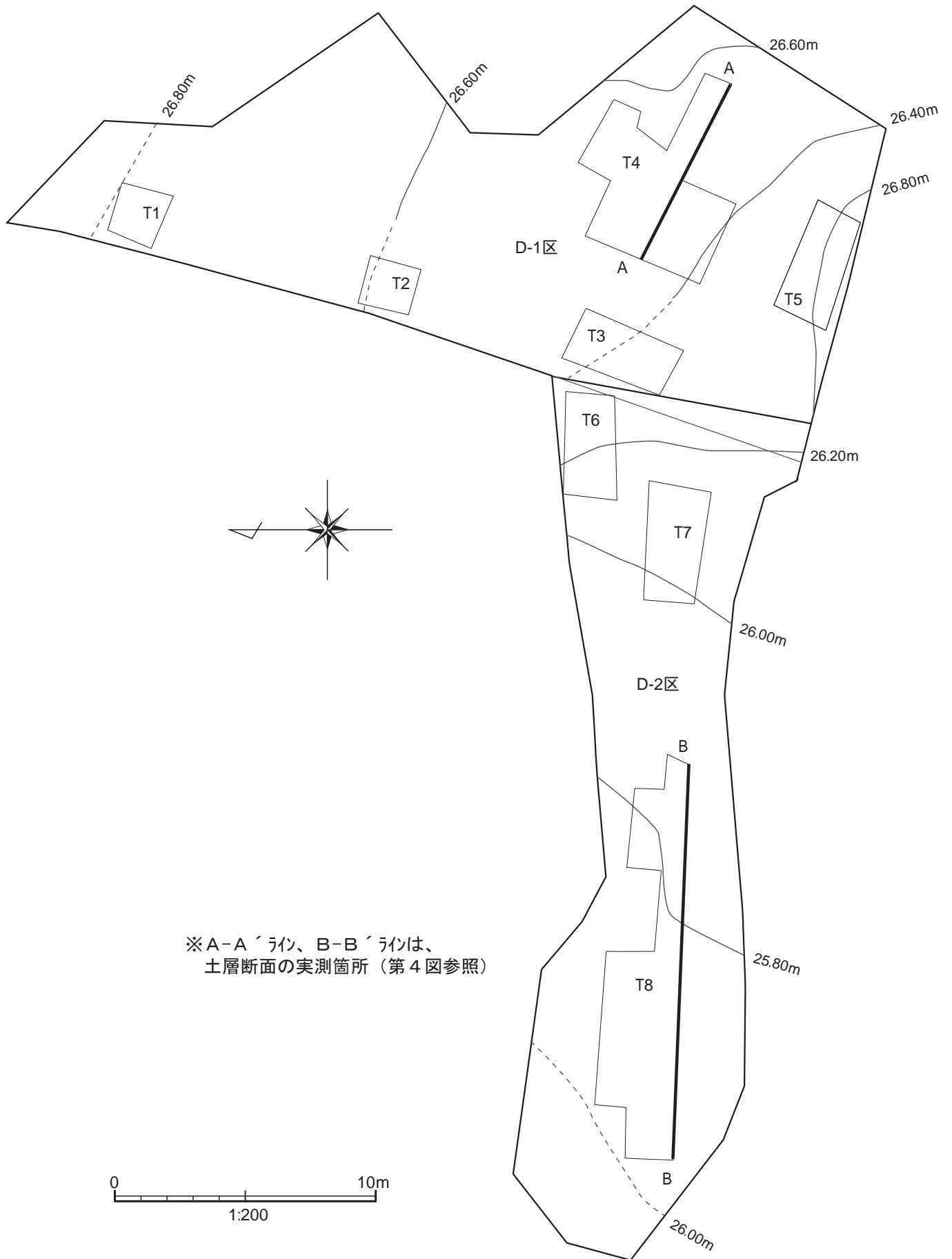
13は流紋岩類の石核である。打面をかえて多方向からの打撃による剥片剥離痕を残す。背面に自然面を残す。14は流紋岩類の剥片である。背面に自然面を残す。

第2表 旧石器時代石器計測表

	器種	石材	出土地点	計測値				備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
1	剥片	流紋岩類	D-1第層	5.20	2.95	1.50	21.3	
2	剥片	流紋岩類	D-1第層	3.10	3.35	0.85	7.3	
3	剥片	流紋岩類	D-1第層	2.55	1.90	0.65	4.1	
4	石核	ホルンフェルス	D-1第層	4.15	2.70	1.65	11.6	
5	剥片	ホルンフェルス	D-1第層	3.45	2.85	0.80	4.7	
6	剥片	ホルンフェルス	D-1第層	2.50	2.55	0.75	3.1	
7	剥片	ホルンフェルス	D-1第層	3.15	2.55	0.60	6.0	
8	剥片	ホルンフェルス	D-1第層	3.50	3.40	0.85	12.0	
9	剥片	ホルンフェルス	D-1第層	3.20	5.85	1.20	17.0	
10	剥片	ホルンフェルス	D-1第層	2.95	2.50	1.00	7.1	
11	剥片	ホルンフェルス	D-1第層	6.05	5.40	1.20	43.0	
12	剥片	チャート	D-1 T1第層	2.30	3.30	0.80	6.2	
13	石核	流紋岩類	D-2 T1第層	7.15	8.40	7.55	438.1	
14	剥片	流紋岩類	D-2 T1第層	4.40	2.95	1.80	15.3	

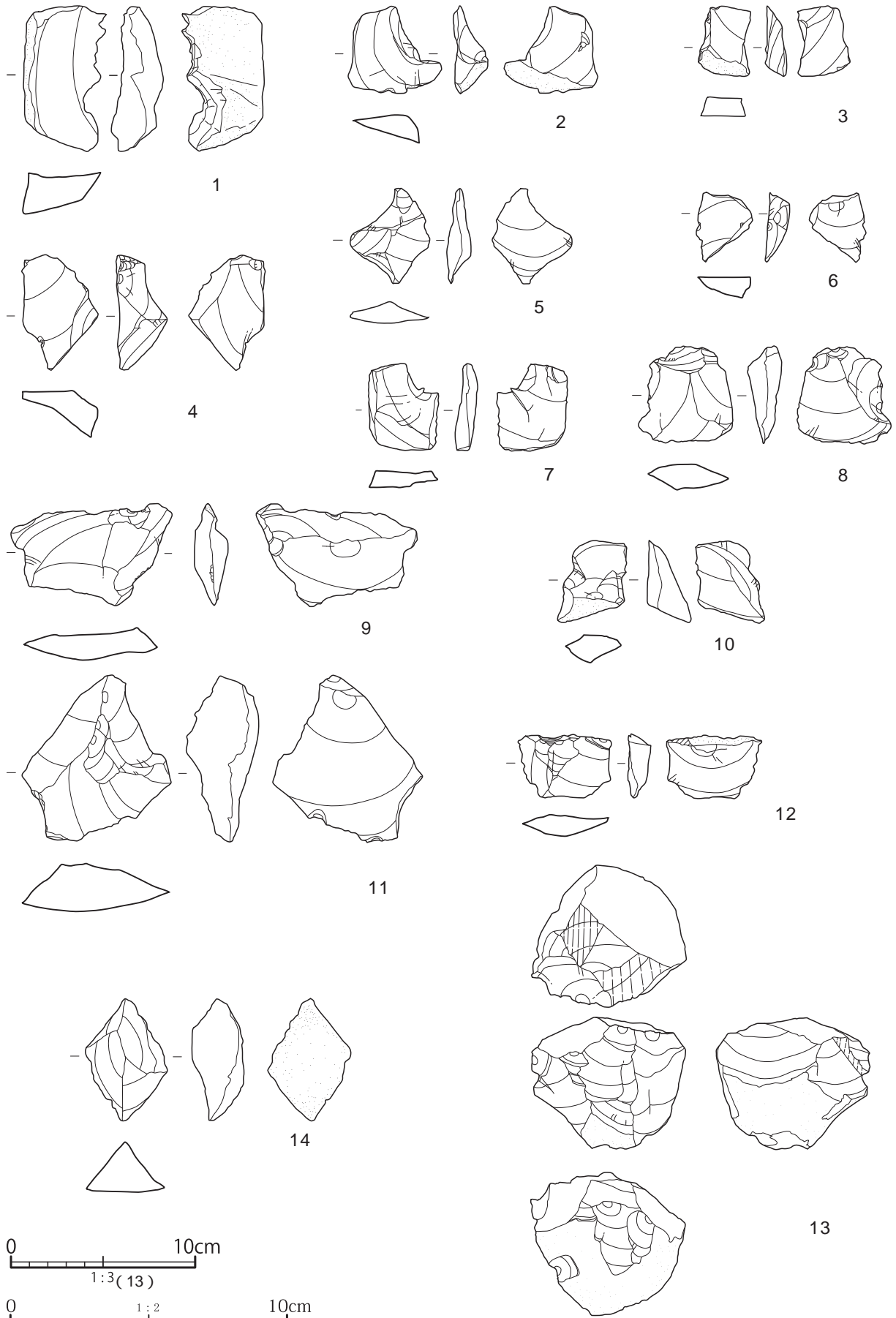


第5図 旧石器時代遺物分布図



※A-A´ライン、B-B´ラインは、
土層断面の実測箇所（第4図参照）

第6図 旧石器時代トレンチ配置図



第7図 旧石器時代遺物実測図

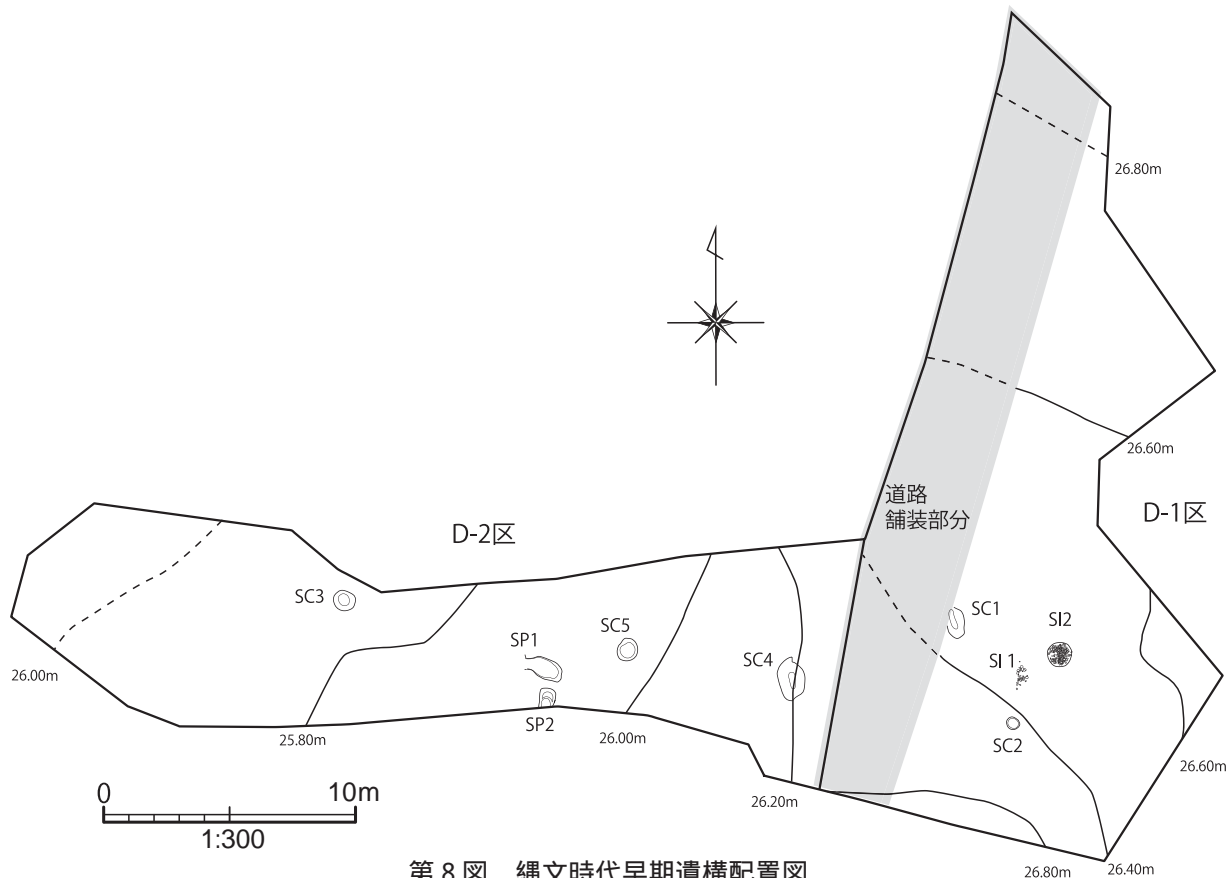
2 縄文時代早期の遺構と遺物

(1) 概要

D - 1 区の道路の舗装部分を剥ぎ、遺構検出を行っていくと第 層(暗褐色土)から礫が集中している部分が2箇所あり、集石遺構と認定した。陥し穴状遺構が1基と土坑1基も検出された。D - 2 区では、陥し穴状遺構3基、炉穴2基が検出された(第8図)。

遺物としては、貝殻刺突文土器、石斧、石錘等少量が出土している。

なお、土坑は削平・攪乱等により検出面から時期を確定することは難しい。しかし、埋土中にK-Ah火山灰が含まれないこと、同じ検出面で隣接して炉穴が検出されたこと等から縄文時代早期の可能性が高いので、この節にて報告する。



第8図 縄文時代早期遺構配置図

(2) 遺構

集石遺構

集石遺構は2基検出された。礫はほとんどが砂岩で破碎していた。報告にあたっては、第2次調査で行った分類に従って整理した。なお、第3次調査ではA類は確認されていない。

分類と検出された集石遺構との関係は以下のとおりである。

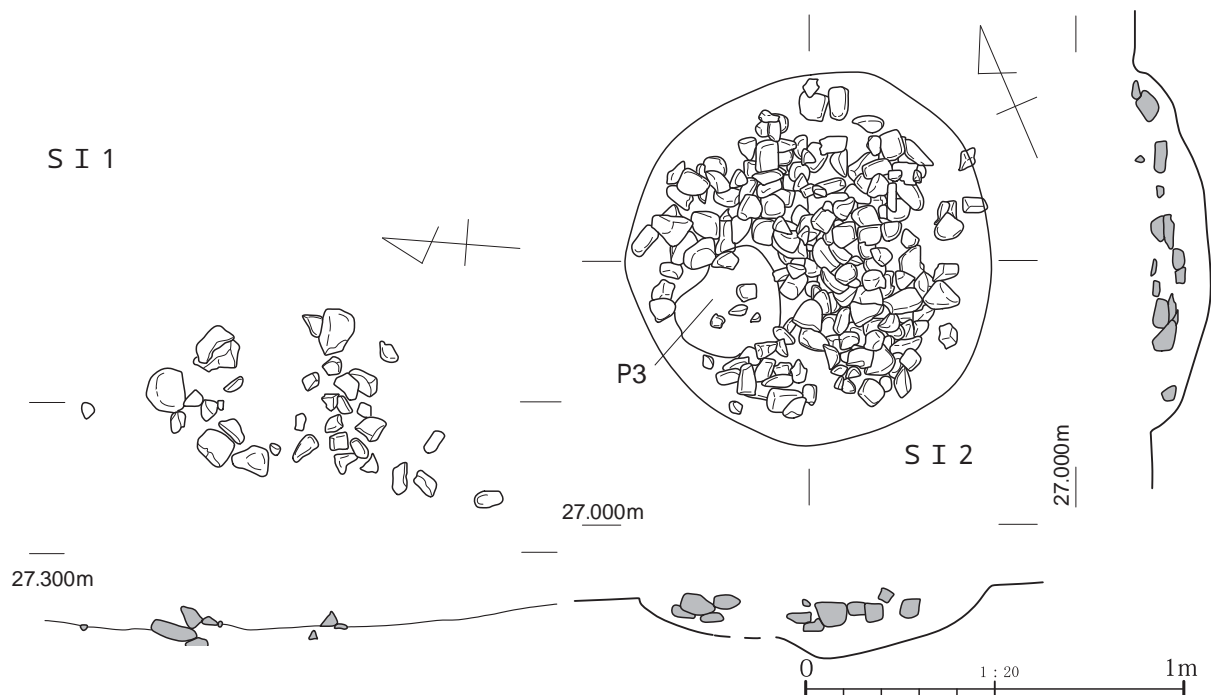
- A類...掘り込みがあり、配石の有るもの(未検出)
- B類...掘り込みがあるが、配石の無いもの(SI2)
- C類...掘り込みが無いもの(SI1)

SI1(第9図)

D - 1 区の第 層で検出された。長径1 m、短径0.45 mで掘り込みははっきりと確認できないが中央部が若干黒色である。礫は5 ~ 12cm 大の円礫で赤化している。削平により構成礫は少ないが、本来的にはより多くの礫が存在していたと考えられる。

SI2(第9図)

D - 1 区の第 層で検出された。長径0.9 m、短径0.85 mで約0.2 mの掘り込みを持ちわずかに炭粒が混じる。礫は3 ~ 15cm 大でわずかに赤化がみられる。一部の礫は、掘立柱建物跡の柱穴で失われる。



第9図 縄文時代早期集石遺構実測図

陥し穴状遺構

4基の陥し穴状遺構が検出され、いずれも第 層まで掘り込む。報告にあたっては、第2次調査における下記の分類に従って整理した。

A類...平面形態が楕円形のもの (SC1・4)

B類...平面形態が円形のもの (SC3・5)

A類

SC1 (第10図)

D - 1 区の平坦面で検出され、長軸方向は等高線に直交する。検出面の1/3程度は道路により失う。平面形態は長軸1.3m程度×短軸0.7mの楕円形である。断面形態は深さ1.3mの逆三角形である。中ほどにテラス状の平坦面をわずかに設け、そこから更に深く掘り下げている。埋土中部に第層(AT)を含む。なお、遺物は出土しなかった。

SC4 (第10図)

D - 2 区の平坦面で検出され、長軸方向は等高線に並行する。平面形態は、長軸1.7m×短軸1.05mの楕円形である。断面形態は、深さ1.1mの台形である。中ほどにテラス状の平面を設け、そこから更に深く掘り下げている。埋土上部に第層(AT)を含む。なお、遺物は出土しなかった。

B類

SC3 (第10図)

D - 2 区の平坦面で検出され、長軸方向は等高線に直交する。平面形態は、長軸0.85m×短軸0.8mの円形である。断面形態は深さ0.8mの台形である。埋土の中位には第層(AT)が含まれる。遺物は、埋土より石錘(第13図の17)が出土した。

SC5 (第10図)

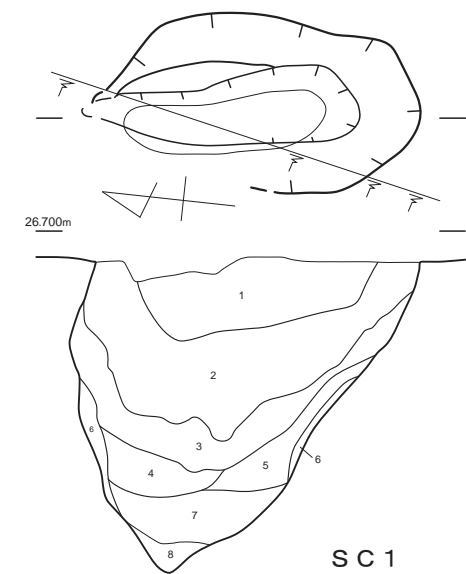
D - 2 区の平坦面で検出され、長軸方向は等高線に並行する。平面形態は、長軸0.9m×短軸0.8mの円形である。断面形態は深さ0.6mの台形である。埋土の下位には第層(AT)が含まれる。なお、遺物は出土しなかった。

土坑

土坑は1基、検出された。

SC2 (第10図)

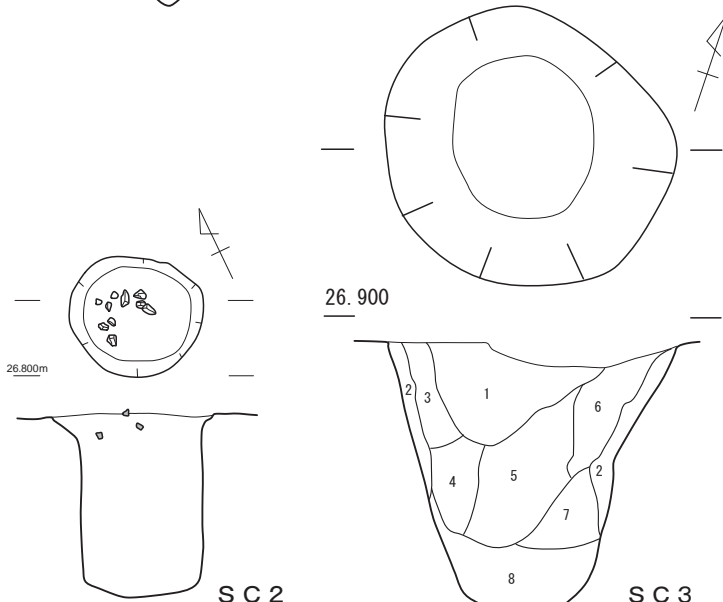
D - 1 区の平坦面で検出された。平面形態は、直径0.5mの円形である。断面形態は深さ0.75mの長方形である。直径の小さい割には、掘り方は深い。検出面に礫の集中が認められ、埋土の中位には第層(AT)が含まれる。なお、遺物は出土していない。



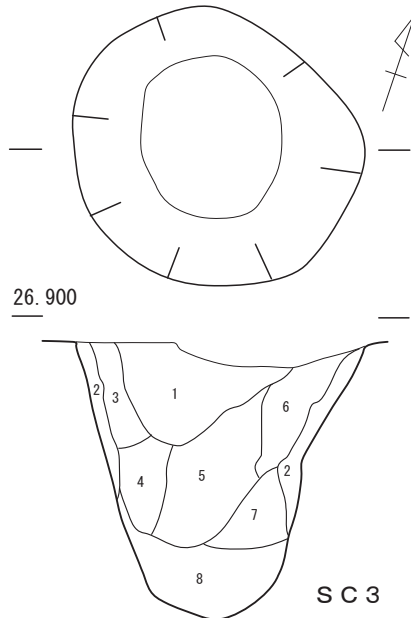
SC1 土層注記

- 1: 暗褐色土 (7.5YR3/3) 1 ~ 10mm の礫、1mm 以下の明褐色粒子が少量混じる。しまりやや強い。粘性普通。
- 2: 暗褐色土 (7.5YR3/3) 1層より明褐色粒子が多い。しまり普通。粘性やや弱い。
- 3: 褐色土 (7.5YR4/4) 1mm 以下の A T の粒子や 10mm 以下の A T のブロックが全体に混じり土色明るい。しまりは弱い
- 4: 褐色土 (7.5YR4/4) 3層より A T を多く含み、サラサラしている。しまり、粘性弱い。
- 5: 褐色土 (7.5YR4/4) A T 粒子 (1mm 以下) や明褐色土 (7.5YR5/6) ブロック (0.1cm 以下) が全体に混じり斑状を呈する。しまりやや弱い。
- 6: 明褐色土 (7.5YR5/6) 軟質だが、地山(第 層) の可能性あり。しまり、粘性やや弱い。
- 7: 暗褐色土 (7.5YR3/3) 1mm 以下の砂粒を全体に含み、ザラザラとする。流水作用による堆積土と判断される。しまり弱いが粘性は強い。
- 8: 褐色土 (7.5YR4/3) 7層に似るが土色やや明るい。しまり弱い、粘性は強い

SC1



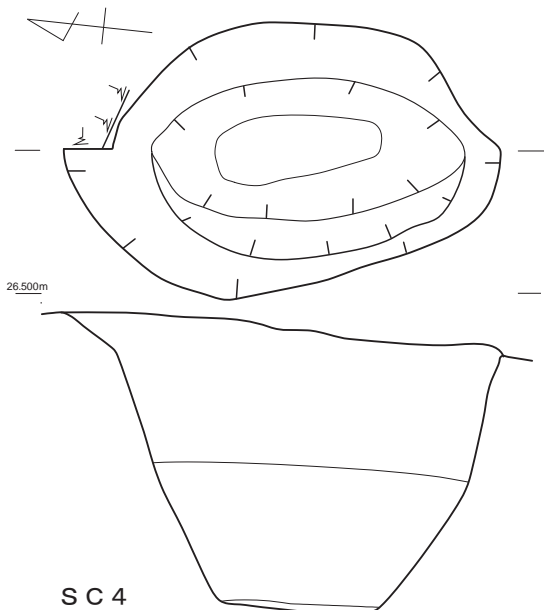
SC2



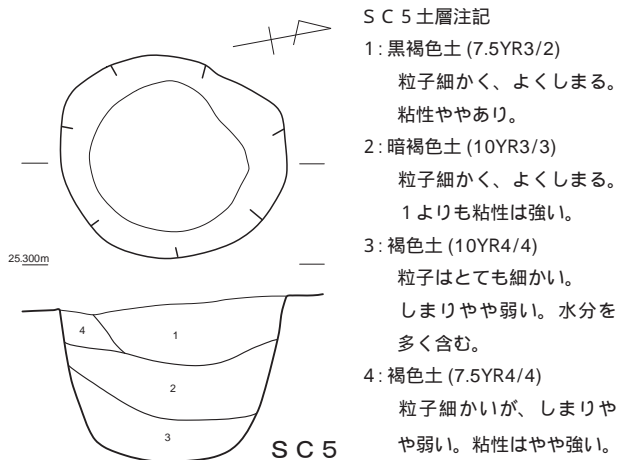
SC3

SC3 土層注記

- 1: 黒褐色土 (10YR2/2) 粒子細かく、しまり強い。硬質の土がブロック状に入る。
- 2: 暗褐色土 (10YR3/4) 粒子細かく、しまり弱い。水気に富む。
- 3: 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 粒子細かく、しまりやや強い。
- 4: 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 粒子細かく、硬質である。
- 5: 黒褐色土 (10YR2/3) 粒子細かく、硬質である。
- 6: 暗褐色土 (10YR3/4) 粒子細かく、しまり弱い。黒色土が斑点状に混じる。
- 7: オリーブ褐色土 (2.5Y4/3) 粒子細かく、しまりやや弱い。粘性の弱い部分が混じる。
- 8: 褐色粘質土 (10YR4/4) しまり弱く、水分を多く含む。炭化粒のようなものを含む。



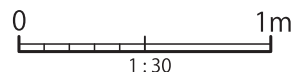
SC4



SC5

SC5 土層注記

- 1: 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粒子細かく、よくしまる。粘性ややあり。
- 2: 暗褐色土 (10YR3/3) 粒子細かく、よくしまる。1よりも粘性は強い。
- 3: 褐色土 (10YR4/4) 粒子はとても細かい。しまりやや弱い。水分を多く含む。
- 4: 褐色土 (7.5YR4/4) 粒子細かいが、しまりやや弱い。粘性はやや強い。



第 10 図 縄文時代早期陥し穴状遺構実測図

炉穴

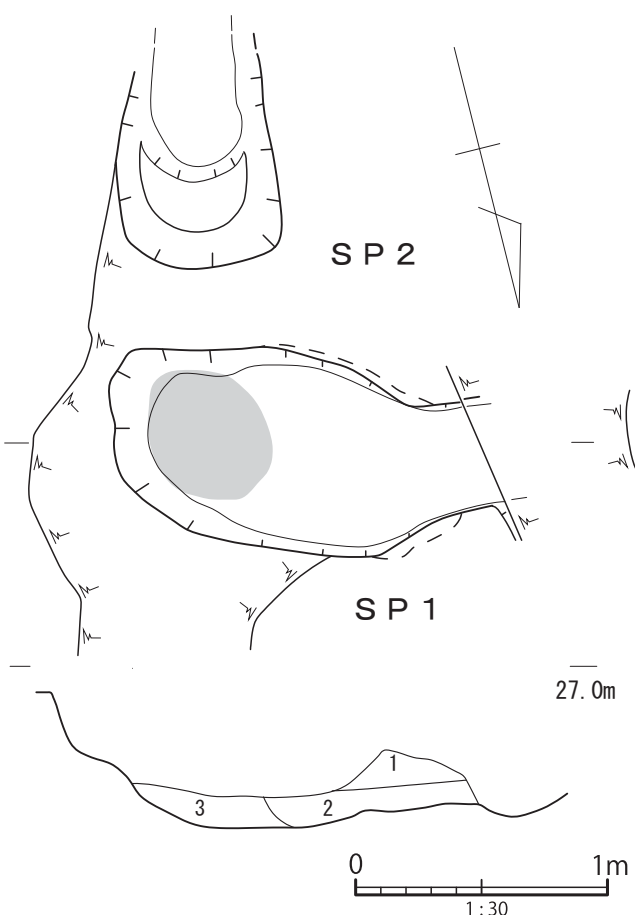
D - 2 区で 2 基の炉穴が検出された。2 基は隣接しているが切り合いは見られない。第 2 次調査では単独の炉穴を B 群と分類して報告している。

SP 1 (第 11 図)

攪乱により大きく上部が削平されていた。長軸 1.5 m+、短軸 0.8 m、深さ 0.3 m+ を計る。長軸方向は東西をとるが、その西側は失われる。床面は第層 (AT) で、焼土面は西端にある。焼土と炭化物は大量に広がる。なお、床面の張り出し (ブリッジの残存部) 部分がわずかに見られた。

SP 2 (第 11 図)

SP 1 と同様に攪乱により大きく上部が削平されている。長軸 0.8 m+、短軸 0.6 m、深さ 0.1 m+ を計る。長軸方向は南北で SP 1 と直交する。長軸の南側は調査区外のため確認できなかった。床面は第層 (AT) である。北側に段が見られ、足場の可能性もある。



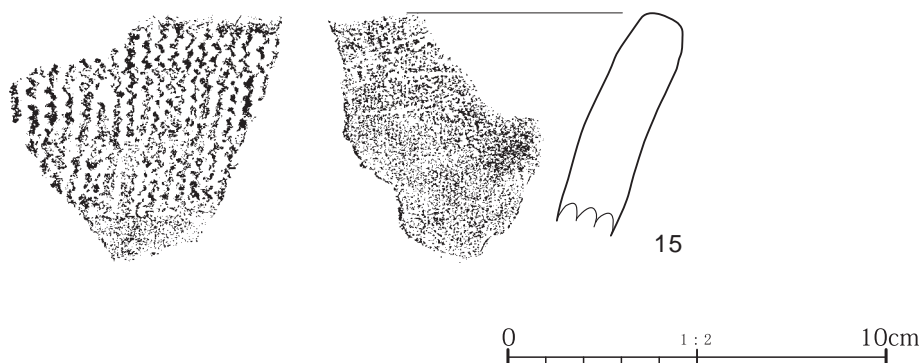
(3) 遺物

包含層出土の土器 (第 12 図)

15 は、深鉢の口縁である。口縁付近に間隔の狭い貝殻腹縁刺突文 1 段の下に、間隔の広い貝殻腹縁刺突文を 2 段施す。第 2 次調査分類では A 類に属する。

- 1: 極暗褐色土 (7.5YR2/3) しまりやや強い。粘性弱い。
- 2: 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり強い。部分的に硬質なブロックが混じる。小さい炭粒と焼土が混じる。
- 3: 褐色土 (10YR4/6) 黒褐色ブロック焼土と炭の大きな固まり (1 ~ 2cm 大) が混じる。しまりは強いが脆い。

第 11 図 縄文時代早期炉穴実測図



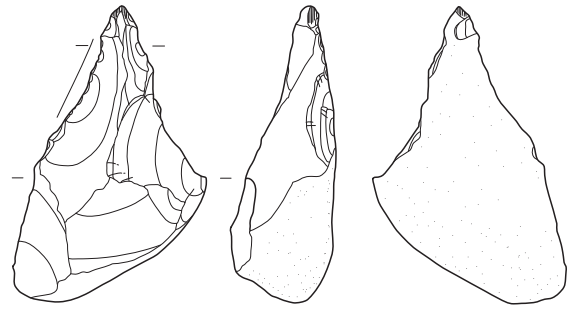
第 12 図 縄文時代土器実測図(1)

第 3 表 縄文時代土器観察表(1)

器種	部位	出土地点	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考	
			外面	内面	外面	内面			
15	深鉢	口縁部	D-1	貝殻腹縁刺突、ナデ	ナデ	明黄 (10YR7/6)	黄橙 (10YR7/8)	3mm 以下の白色粒を多く含む。 1.5mm 以下の黒色光沢粒を多く含む。	

包含層出土の石器（第13図）

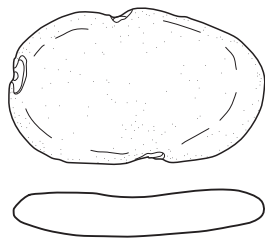
16は流紋岩 類の二次加工剥片である。右側縁に背面からの調整を施す。先端部を錐状に加工している。背面に自然面を残す。



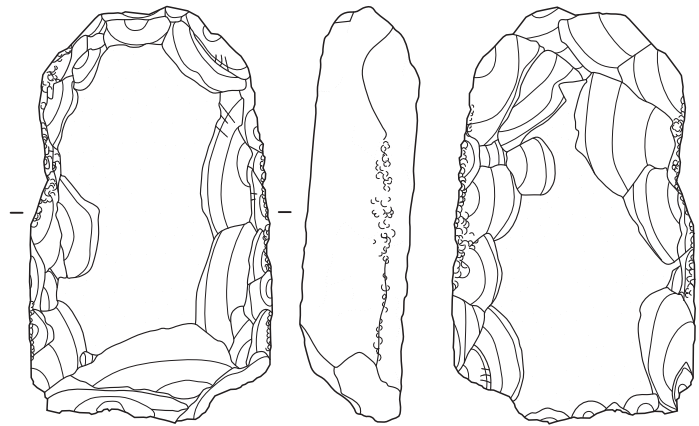
16

遺構出土の遺物（第13図）

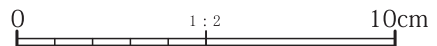
17はSC3に伴う遺物で、砂岩の石錘である。短軸の両端と長軸の左側縁を打ち欠いている。18はSP1から出土した砂岩の打製石斧である。礫を素材としている。刃部が欠損している。上左右縁部に背腹両面から加工が施されている。背腹両面に自然面を残す。17の砂岩よりも目が粗い。



17



18



第13図 縄文時代石器実測図

第4表 縄文時代石器計測表

	器種	石材	出土地点	計測値			重量(g)	備考
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)		
16	二次加工剥片	流紋岩	第層	7.85	5.10	2.40	78.8	先端部に摩滅
17	石錘	砂岩	SC3	4.10	6.75	1.25	53.0	
18	打製石斧	砂岩	SP1	11.00	6.40	2.70	310.8	

3 縄文時代後期の遺物

(1) 概要

縄文時代後期の遺物は、古墳時代の竪穴建物跡の埋土中から出土した土器が挙げられる。

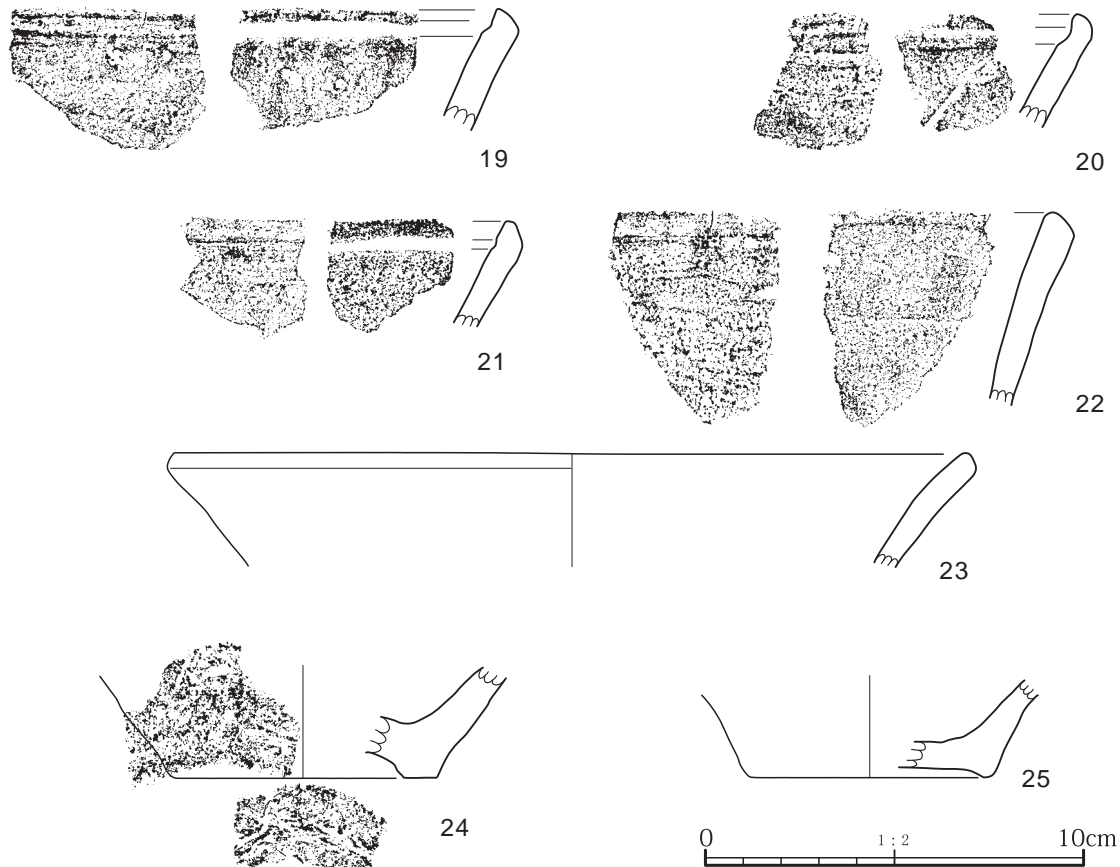
(2) 遺物

土器（第14図）

19～21は、深鉢の口縁部である。いずれも平口

縁で口縁部内面に1本の沈線を施す。22は深鉢の口縁部である。平口縁で文様はない。23は深鉢の口縁部で外側に炭化物が付着している。

24・25は、深鉢の底部である。24は上げ底の底部である。底面からなだらかに斜め上方に伸びる。25も上げ底の底部である。24よりも接地面積が小さく、底面からなだらかに斜め上方に伸びる。



第 14 図 縄文時代土器実測図 (2)

第 5 表 縄文時代土器観察表 (2)

器種	部位	出土地点	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考 (質量 :cm)
			外面	内面	外面	内面		
19	深鉢	口縁部 (古墳時代)	ナデ	沈線、ナデ	明褐 (7.5YR5/8)	橙 (7.5YR6/8)	1.5mm 以下の黒、灰白色粒をまばらに含む。	
20	深鉢	口縁部 (古墳時代)	ナデ	沈線、ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	2mm 以下の褐色粒・1.5mm 以下の乳白色粒を少し含む	
21	深鉢	口縁部 (古墳時代)	ナデ	沈線、ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	微細な浅黄橙粒と黄橙粒を少し含む。	
22	深鉢	口縁部 (古墳時代)	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	明赤褐 (5YR5/6)	微細な浅黄橙粒を少し含む。1mm 以下の褐灰粒を少し含む。	
23	深鉢	口縁部 (古墳時代)	ナデ	ナデ	赤褐 (5YR4/8)	明赤褐 (5YR5/8)	1mm 以下の灰色粒をわずかに含む。	炭化物付着
24	深鉢	底部 (古墳時代)	工具によるナデ、ナデ	工具によるナデ、ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm 以下の黄橙粒・2mm 以下の透明粒を多く含む。	底径 (7.0)
25	深鉢	底部 (古墳時代)	ナデ	ナデ	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)	2mm 以下の赤褐、灰褐、灰色粒を多く含む。	底径 (6.2)

4 古墳時代の遺構と遺物

(1) 概要

D - 1 区の道路の舗装部分を除去後、第 層で
穴建物跡 1 軒が検出された。

(2) 遺構

穴建物跡

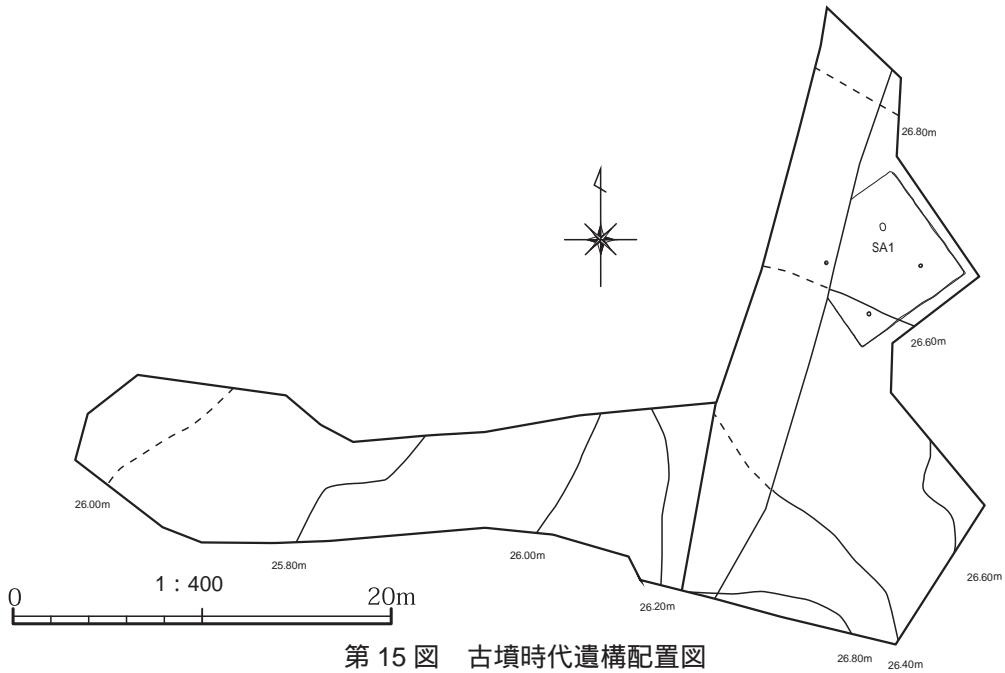
SA 1 (第 16 図)

穴建部の北西隅部を道路により失う。平面形は

6 .5 m x 6 .5 m の方形である。穴建物に伴う主
柱穴は 4 本が確認できる。P 4 からは根石や根固め
石と考えられる礫が出土した。

また、遺構埋土 2 層上面で炭化材が検出された (炭
化材の詳細は自然科学分析結果参照)

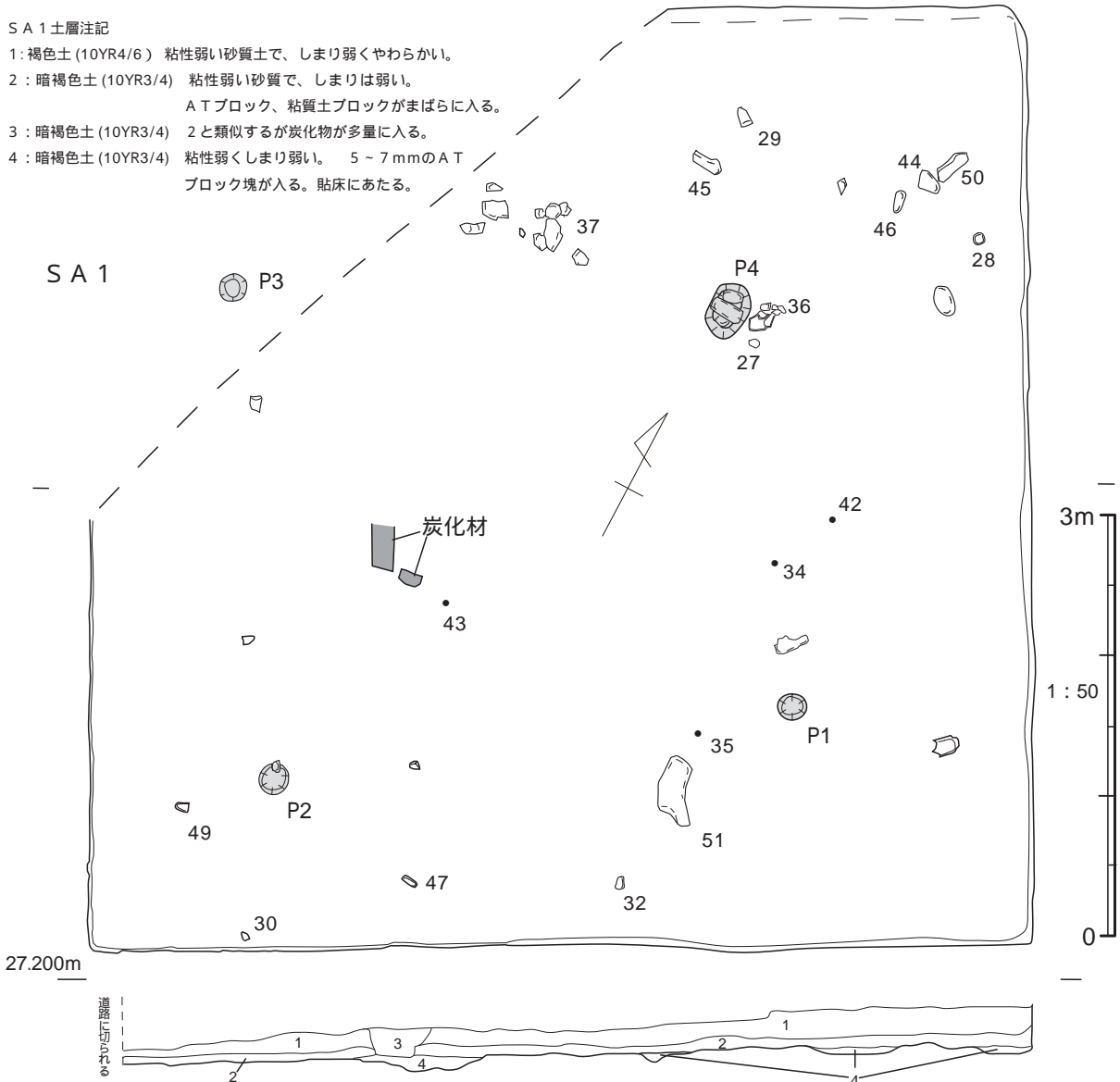
遺物は、床面で土師器 (壺、高坏脚部) や台石が
出土している。また、縄文時代後期の遺物 (土器、
石器類) も出土している。



第 15 図 古墳時代遺構配置図

SA1 土層注記

- 1: 褐色土 (10YR4/6) 粘性弱い砂質土で、しまり弱くやわらかい。
- 2: 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱い砂質で、しまりは弱い。
ATブロック、粘質土ブロックがまばらに入る。
- 3: 暗褐色土 (10YR3/4) 2と類似するが炭化物が多量に入る。
- 4: 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱くしまり弱い。 5 ~ 7mmのAT
ブロック塊が入る。貼床にあたる。



第 16 図 古墳時代竪穴建物跡 (SA1) 実測図

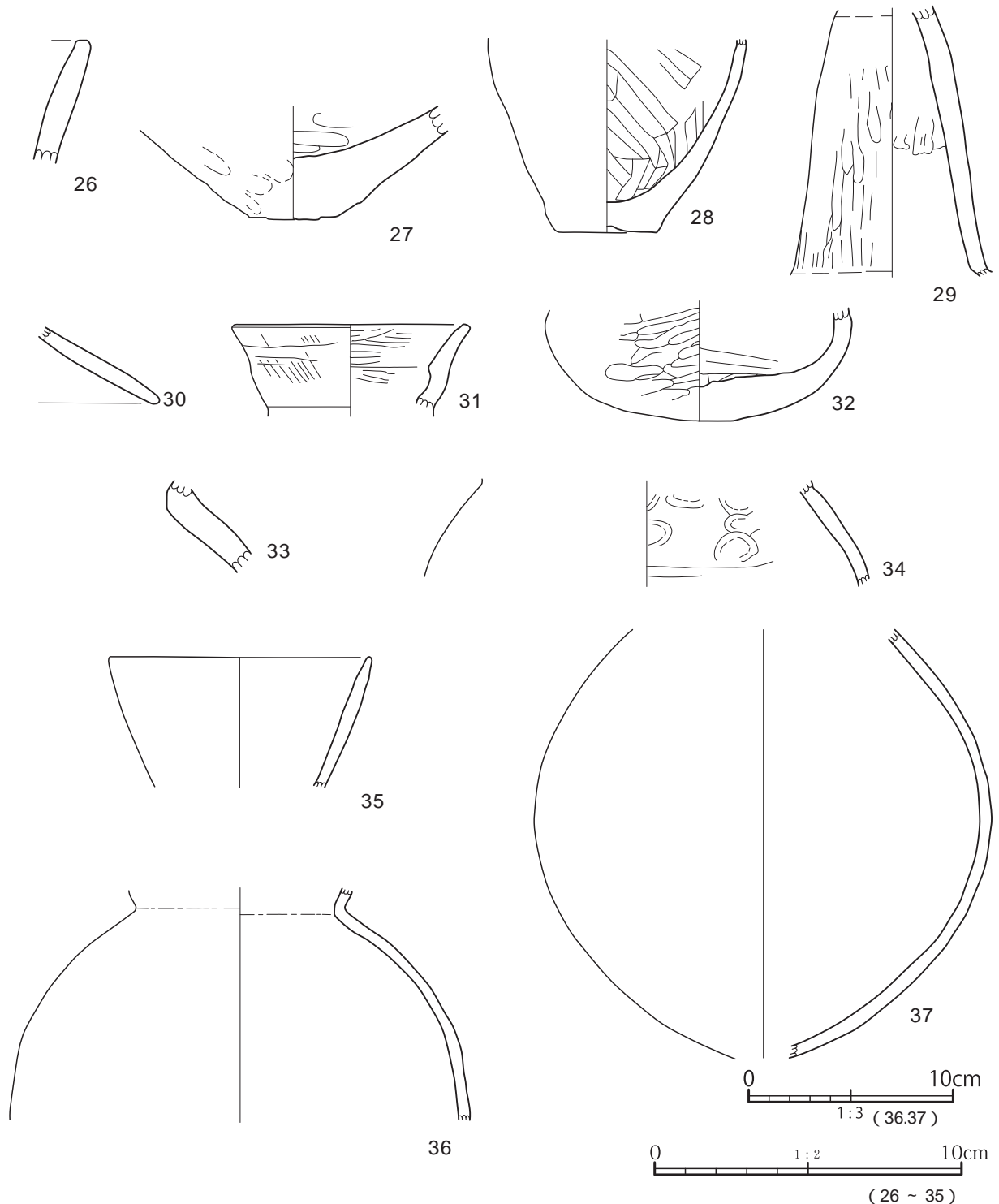
(3) 竪穴建物跡出土の遺物

土器(第17図)

26・27は土師器の甕である。26は口縁で、27は底部である。

28は鉢の胴部から底部である。29と30は高坏である。29は脚部で丁寧なミガキがある。内側にシボリ痕を消す工具痕が残り、その後にナデ調整が見ら

れる。30は裾部である。丁寧なミガキがある。31は壺の口縁部である。口縁から頸部が残存する。32～37は壺である。32は底部である。内面に外側から中心に向かってナデた跡が明確に残る。33は頸部であり34は口縁部から胴部、35～37までは頸部～胴部である。



第17図 古墳時代竪穴建物跡(SA1)出土土器実測図

第6表 古墳時代土器観察表

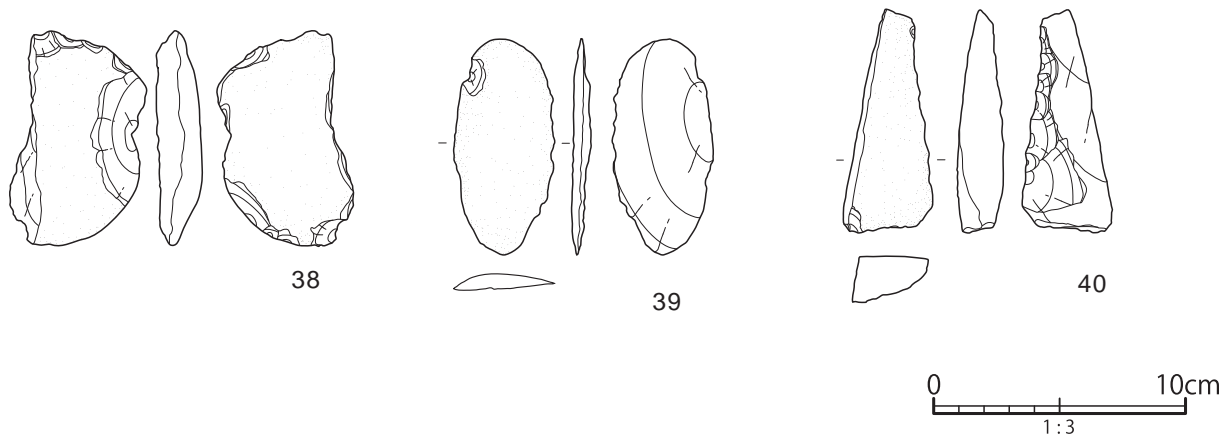
器種	部位	出土地点	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考 法量 (cm)	
			外面	内面	外面	内面			
26	甕	口縁部	SA1	工具による横ナデ	工具によるナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	明黄褐 (10YR7/6)	2mm 以下の灰赤、黒、灰白色粒を多く含む。	炭化物附着
27	甕	底部	SA1	指押さえナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	4mm 以下の灰、灰褐、赤褐色粒を多く含む。	底径 (2.9)
28	鉢	胴部～底部	SA1	縦ナデ、横ナデ	ナデ	橙 (5YR6/8)	橙 (7.5YR7/6)	5mm 以下の灰赤色粒を多く含む。	底径 (3.0)
29	高坏	脚部	SA1	ミガキ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (10YR8/6)	1mm 以下の灰色粒を少し含む。	
30	高坏	裾部	SA1	ミガキ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	黄橙 (7.5YR8/8)	透明で微細な光沢のある粒を多く含む。2mm 以下のにぶい橙色粒を少し含む。	
31	壺	口縁～頸部	SA1	斜方向のナデの後に横ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)	1mm 以下の灰、白色粒を多く含む。黒色粒を多く含む。	内面に稜 口径 (7.6)
32	壺	底部	SA1	横方向ミガキ	工具ナデ	淡黄 (2.5YR8/2) 黒褐 (2.5YR3/1)	浅黄橙 (10YR8/4)	2mm 以下の灰白色粒を少し含む。3mm 以下の暗灰黄粒、明赤褐粒を多く含む。	
33	壺	頸部	SA1	横ナデ	ナデ	黒褐 (5YR3/1)	黒褐 (5YR4/6)	2mm 以下の灰赤色粒を多く含む。	
34	壺	口縁～頸部	SA1	横ナデ	横ナデ	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/6)	微細な黒褐色粒を多く含む。微細な灰白色粒を少し含む。	胴部最大径 (10.0)
35	壺	頸部～胴部	SA1	ミガキ	指押さえ	黄橙 (7.5YR8/8)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mm 以下の明赤褐色粒を多く含む。微細な灰白粒を少し含む。	口径 (8.6)
36	壺	頸部～胴部	SA1	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/8) 浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (7.5YR7/6) 明黄褐 (10YR7/6)	3mm 以下の明褐色粒を少し含む。1mm 以下の橙色粒、浅黄褐色粒、灰白粒を多く含む。	
37	壺	頸部～胴部	SA1	たたきの痕跡有り	風化のため調整不明	橙 (2.5YR6/8) 浅黄橙 (10YR8/4)	灰黄褐 (10YR5/1)	2mm 以下の明黄褐色粒、1mm 以下の浅黄褐色、灰白色粒、橙色粒、褐色粒を多く含む。	胴部最大径 (22.4)

石器 (第 18 ~ 20 図)

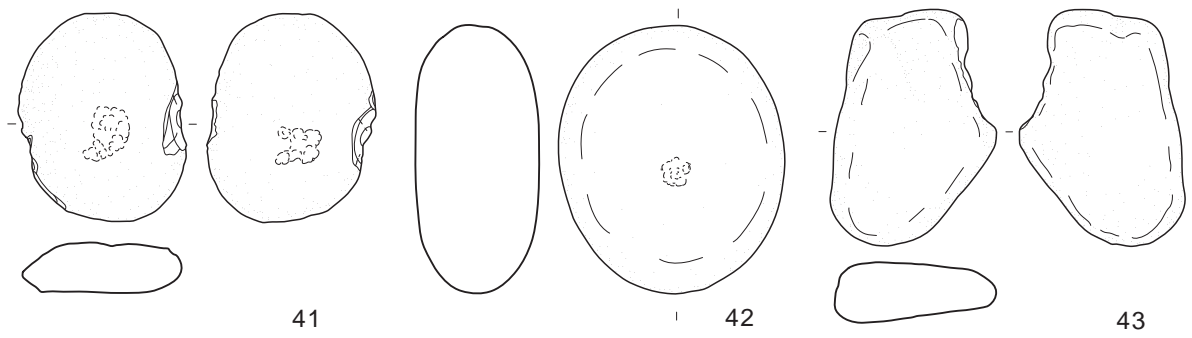
38・39 は砂岩の二次加工剥片である。右側縁に背腹両面から調整を施す。40 は砂岩の二次加工剥片である。左右両側縁に背腹両面からの調整を施す。

41 は砂岩の石錘である。赤褐色の楕円礫である。短軸の両端を打ち欠いている。表・裏面中央部に敲打痕が認められる。42 は尾鈴山酸性岩類の磨石である。表・裏面ともに磨痕が残る。表面中央にわずかに高好打痕が見られる。

43・44 は砂岩の磨石である。43 は裏面に磨痕が残る。44 は表面に磨痕が筋状に広範囲に残る。45・46 は砂岩の磨石・敲石である。45 は裏面に磨痕とわずかな高好打痕が残る。46 は上・下面に高好打痕が明瞭に残り、表面に磨痕が残る。47 ~ 51 は、砂岩の敲石である。47 は表・裏面ともに高好打痕が残る。48 は表面中央部と側面に高好打痕が明瞭に残る。49 は表面中央部に高好打痕が残る。50 は裏面に高好打痕が残る。51 は砂岩の台石である。表面に使用痕が明瞭に残る。



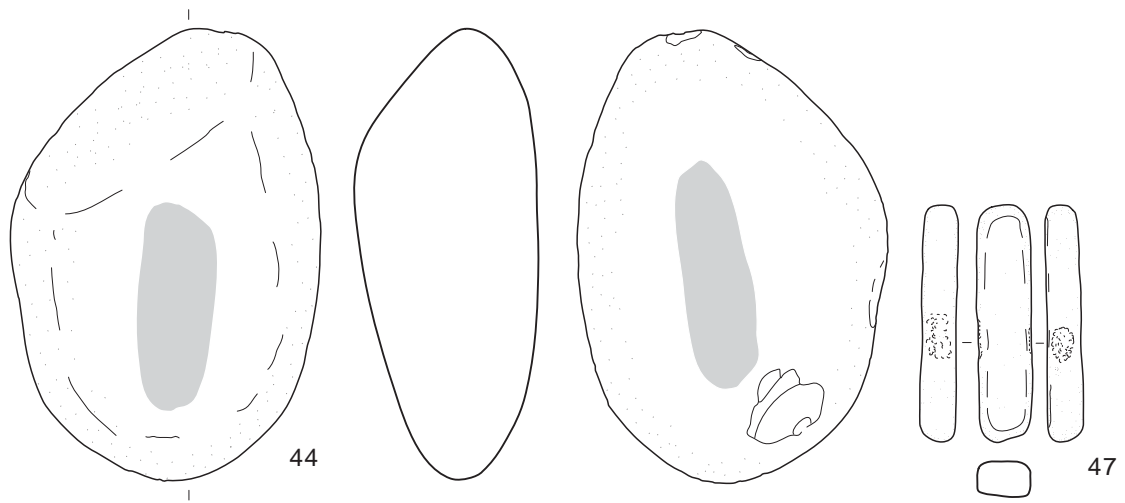
第 18 図 古墳時代竪穴建物跡 (S A 1) 出土石器実測図 (1)



41

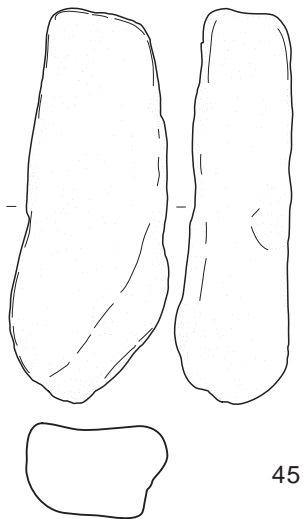
42

43

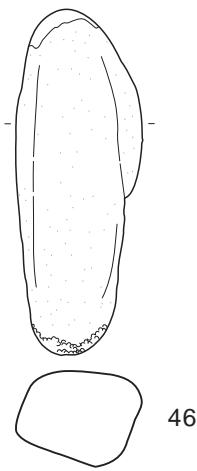


44

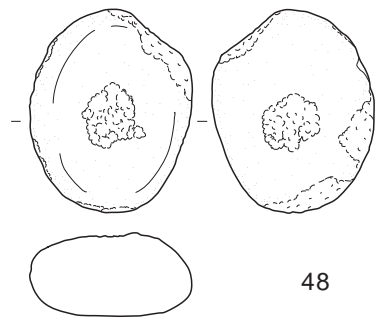
47



45



46

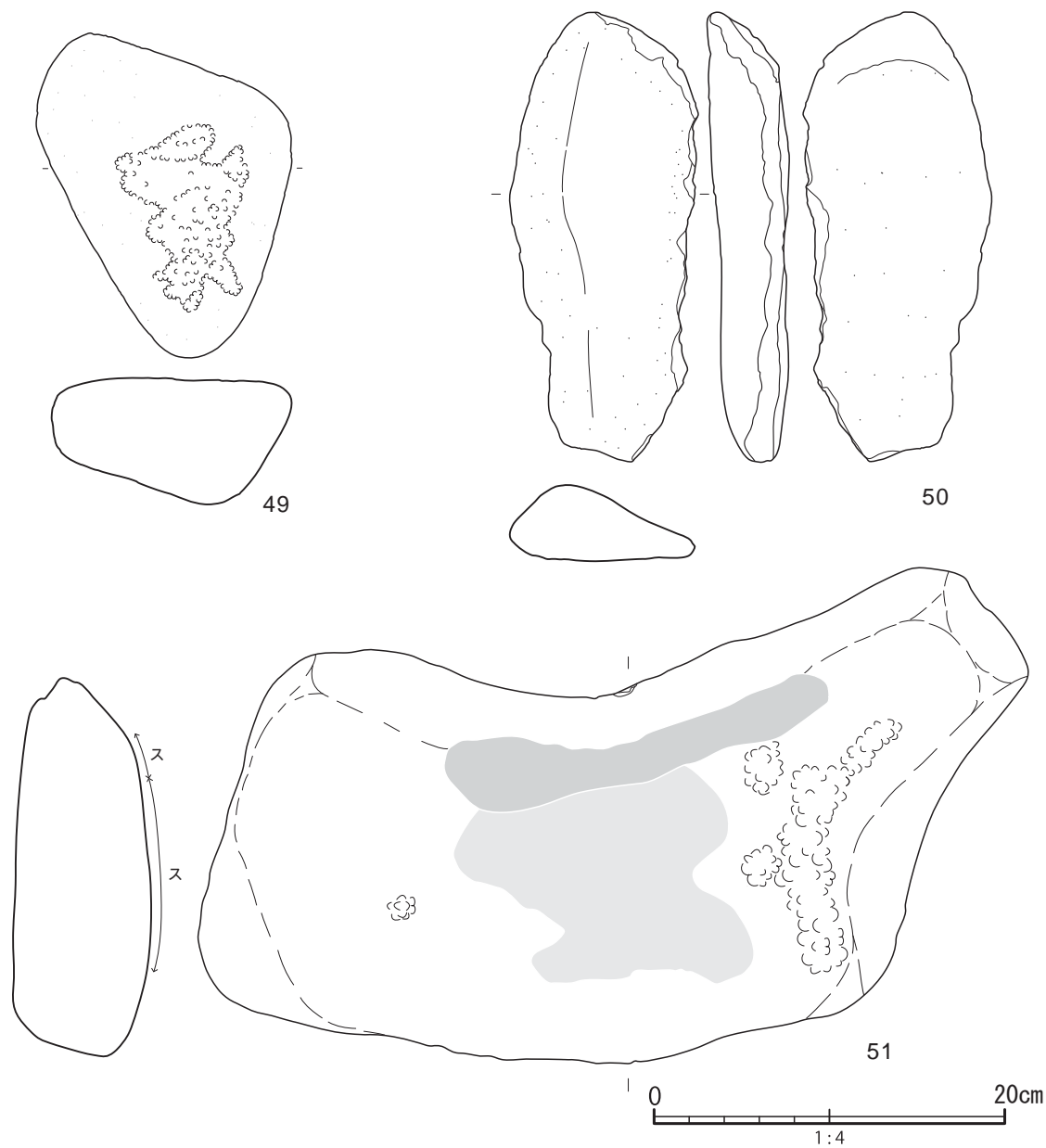


48

0 10cm
1:3 (41 ~ 43·47·48)

0 20cm
1:4 (44 ~ 46)

第 19 図 古墳時代豎穴建物跡 (S A 1) 出土石器実測図 (2)



第 20 図 古墳時代竪穴建物跡 (S A 1) 出土石器実測図 (3)

第 7 表 古墳時代石器計測表

	器種	石材	出土地点	計測値				備考
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	
38	二次加工剥片	砂岩	SA1	8.65	5.40	1.80	85.6	
39	二次加工剥片	砂岩	SA1	8.55	4.00	0.70	24.4	
40	二次加工剥片	砂岩	SA1	8.90	3.50	1.80	58.6	
41	石錘	砂岩	SA1	8.40	6.70	2.00	166.3	
42	磨石	尾鈴山酸性岩類	SA1	10.65	8.95	4.90	721.5	
43	石皿	砂岩	SA1	9.40	6.60	2.40	206.5	
44	敲石	砂岩	SA1	24.00	16.55	9.80	4732.7	
45	磨石・敲石	砂岩	SA1	20.55	8.45	5.00	1365.5	
46	磨石・敲石	砂岩	SA1	18.40	6.70	5.00	791.2	
47	敲石	砂岩	SA1	9.45	2.25	1.35	56.7	
48	敲石	砂岩	SA1	8.10	6.40	3.30	234.8	
49	台石	砂岩	SA1	18.80	14.60	7.20	2097.7	
50	台石	砂岩	SA1	25.70	10.75	4.35	1360.2	
51	台石	砂岩	SA1	47.50	27.90	8.00	13600.0	

5 中世の遺構

(1) 概要

D - 1 区の道路舗装分を剥いで遺構検出を行うと、第 1 層面で掘立柱建物跡を 1 棟確認した(第 21 図)遺物は、陶磁器が数点出土している。

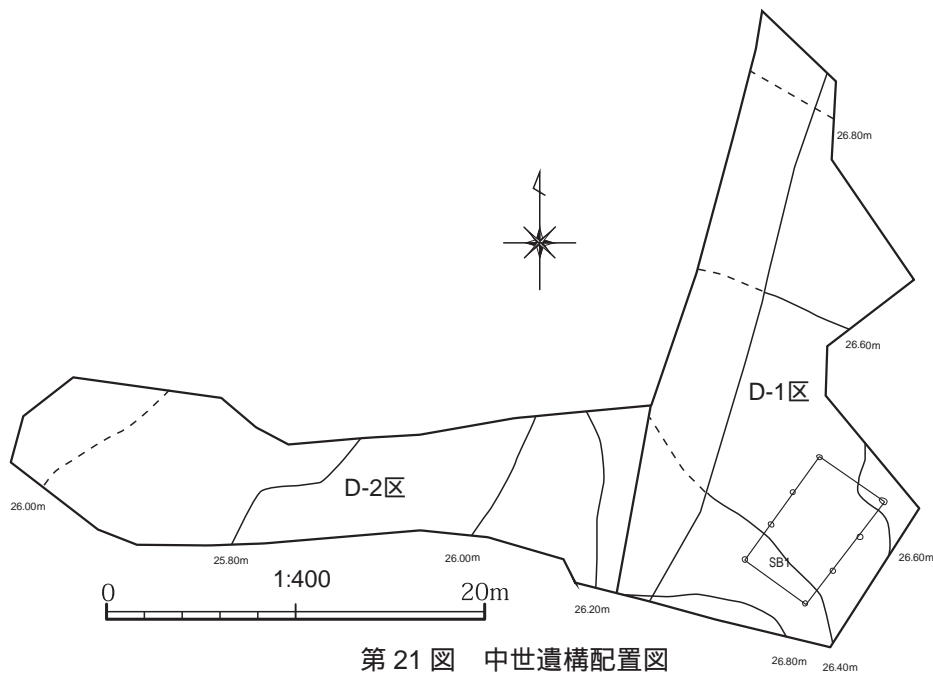
(2) 遺構

掘立柱建物跡

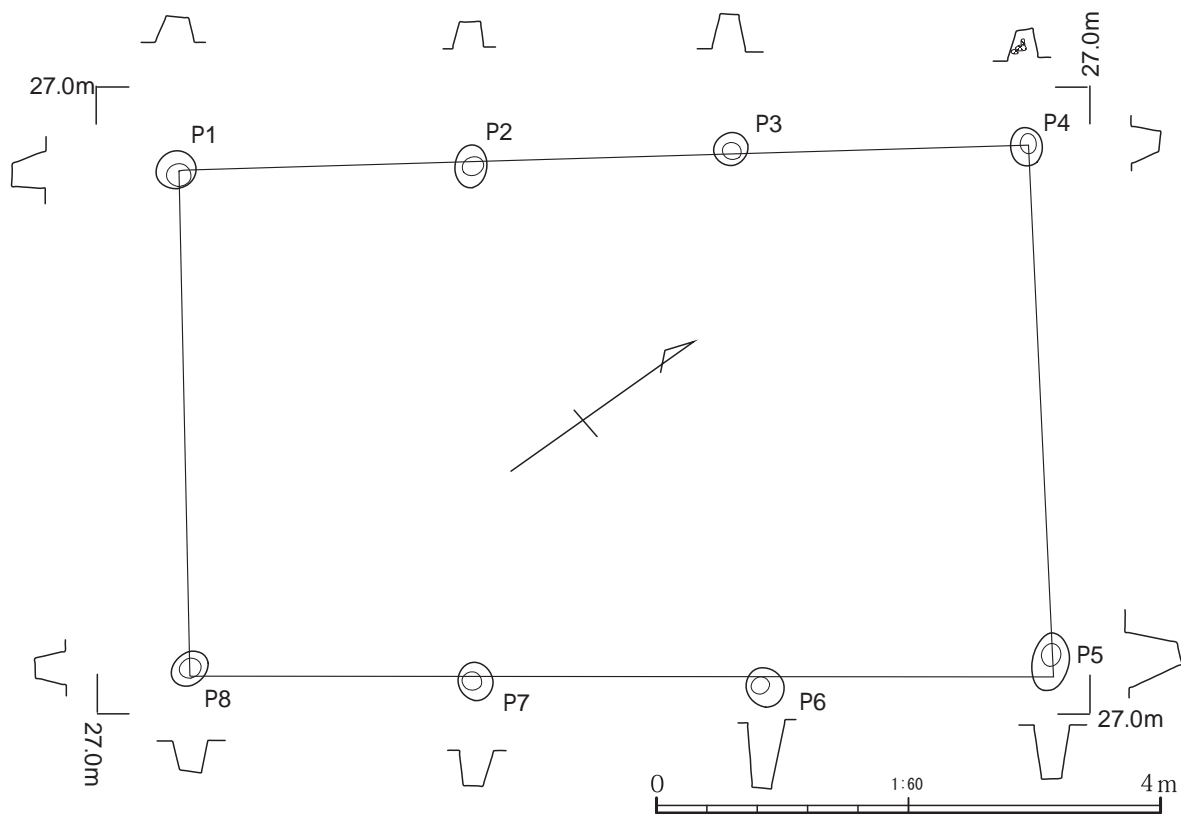
S B 1 (第 22 図)

主軸は北から 40 度東に振れる。梁行 1 間(約 4 m)桁行 3 間(約 6 m)で、身舎面積は 24m²を測る。柱穴は 2 m 間隔の均整のとれた配置となる。P 3 から根石や根固め石と考えられる礫が出土した。

S B 1 の時期は、遺物が伴わないため推定は困難だが、柱間隔から中世に属すると考えられる。



第 21 図 中世遺構配置図



第 22 図 中世掘立柱建物跡実測図

6 その他の遺物

D - 1 区出土 (第 23 図)

52 は S B 1 の P 8 から出土した、土師器甕の口縁部である。埋土に混入した可能性が高い。

53 は、中国龍泉窯の青磁皿の体部である。54 は肥前の陶器鉢で施釉で刷毛目装飾が施される。55 は、肥前染付皿の底部で、高台側面に二重界線を描く。

D - 2 区出土 (第 24・25 図)

56 は土師器高坏の脚部である。57 と 58 は土師器甕であり工具によるナデが見られる。T 5 トレンチで出土した。調査区外に遺構がある可能性が高い。

59 は肥前の磁器で丸文が施されている。

60、61 は、チャート製の石鏃である。60 は平面形態が正三角形で基部に抉りがあるもの (第 2 次調査では B 1 類) である。脚部の先端が平坦面を作る。61 は平面形態が砲弾型・五角形で基部に抉りがあるもの (同 C 1 類) である。62 はチャートの尖頭状石器である。全面に加工を施し、丁寧なつくりである。

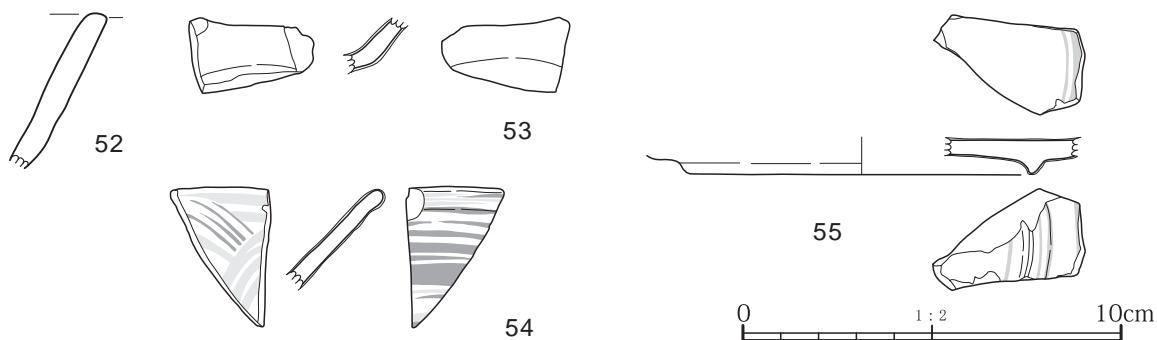
63 は尾鈴山酸性岩類の二次加工剥片である。左側縁部は腹縁から、右側縁部は背面から調整を施す。

64 は馬の鞞 (しりがい) である。一部欠損しているが長さ約 5 cm、直径約 1.2 cm で形状は円筒形をなし、両端部分は若干内側に湾曲している。側面部分の曲面がやや平坦になるように整形されている。

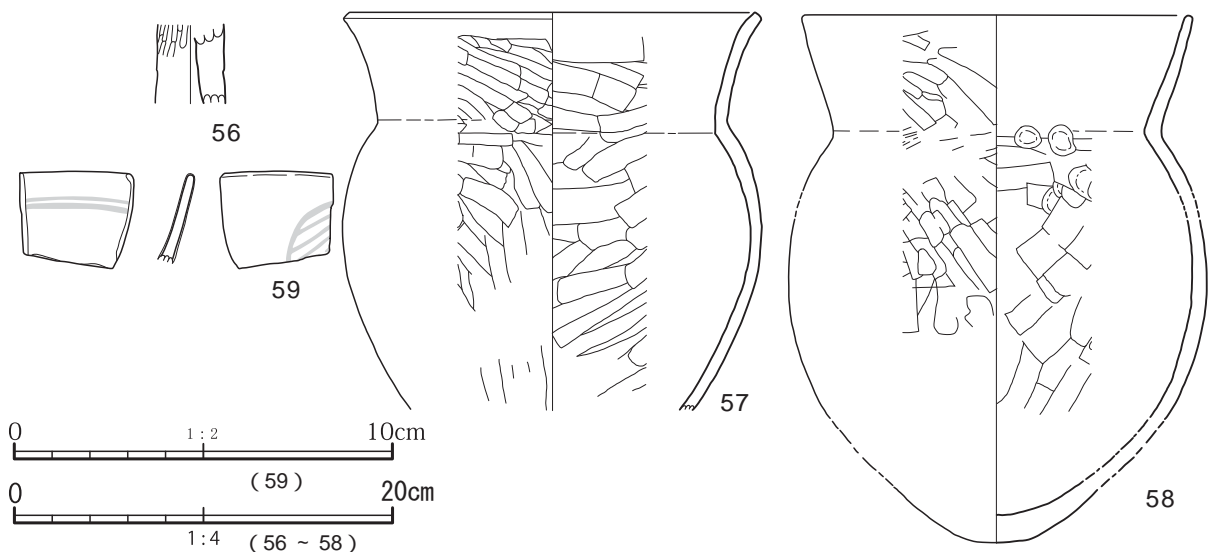
この遺物は、宮崎県立西都原考古博物館の藤木聡氏によると、鹿児島地方の方言で「ウンマン シッゲ」と呼ばれる馬の鞞 (しりがい) の一部であるという。本県では、本城跡や宮鶴第 1 遺跡で類例がある。

65、66 は表面採集の遺物である。65 はキセルで、雁首部分は 2.3 cm、火皿の径 1.6 cm で、火皿の厚さ 0.1 cm、吸口側端の径 0.6 cm、吸口側端の厚さ 0.1 cm を計る。雁首部分は一部欠損している。材質は、全体的に緑青が生じているので銅と考えられる。

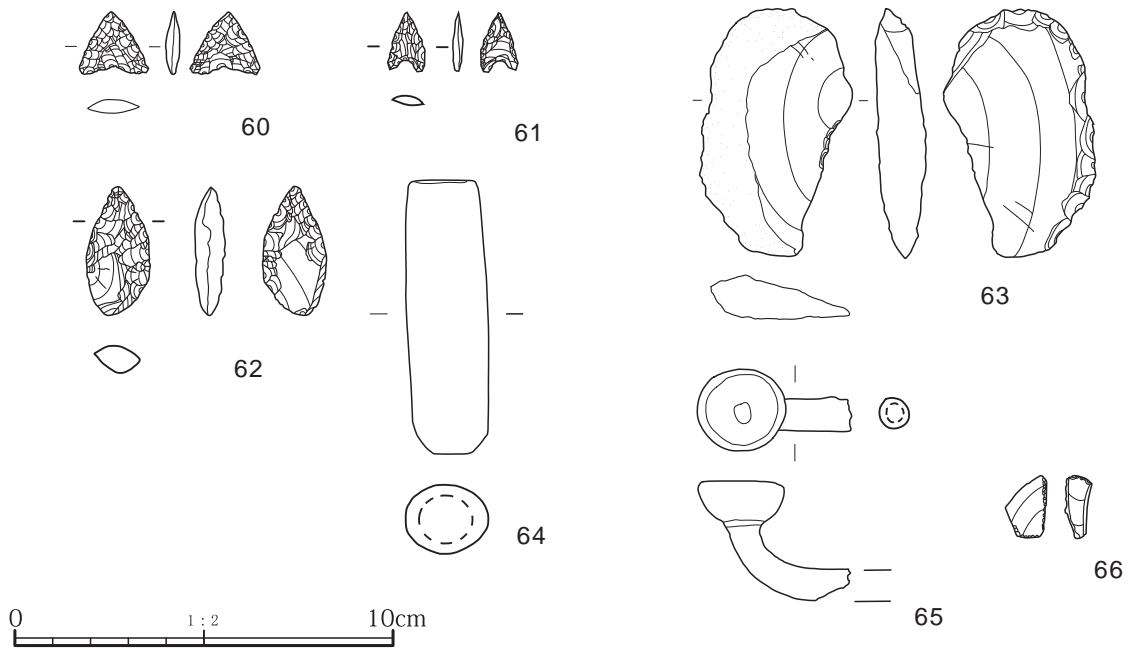
66 は太田井産チャートの火打ち石である。使用時のつぶれが明瞭に残る。



第 23 図 その他の遺物 (D - 1 区出土) 実測図



第 24 図 その他の遺物 (D - 2 区出土) 実測図 (1)



第 25 図 その他の遺物 (D - 2 区出土) 実測図 (2)

第 8 表 その他の遺物観察表 (土器類)

器種	部位	出土地点	手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考	
			外面	内面	外面	内面			
52	甕	口縁部	SB1	工具によるナデ	ナデ	明赤褐 (5YR5/8)	明赤褐 (5YR5/8)	1mm 以下の黒、灰、白色粒を多く含む。	
53	青磁皿	体部	D-1	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	緑灰 (7.5GY6/1)	緑灰 (7.5GY6/1)	黄灰 (2.5Y7/2)	
54	陶器皿	口縁部	D-1	回転ナデ 施釉 文様あり	回転ナデ 施釉 文様あり	灰白 (5Y7/2)	灰白 (5Y7/2)	灰白 (5Y5/4)	
						にぶい黄橙 (10YR4/3)	にぶい黄橙 (10YR4/3)		
55	磁器皿	底部	D-1	回転ナデ 施釉 文様あり 施釉は ぎ	回転ナデ 施釉 文様あり 二重の 界線見込み	灰白 (2.5GY8/1)	灰白 (2.5GY8/1)	灰白 (7.5Y8/1)	
						青灰 (10BG6/1)	青灰 (10BG6/1)		
56	高坏	脚部	攪乱	縦方向ミガキ	ナデ	暗青灰 (10BG4/1)	暗青灰 (10BG4/1)	1mm 以下の灰、白色粒を多く含む。	
						橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)		
57	甕	口縁～ 胴部	攪乱	口縁...工具による 横ナデ	工具による横斜ナ デ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	4mm 以下の赤褐色粒を多く含む。	
				胴部...工具による 斜めナデ					
58	甕	口縁～ 底部	攪乱	工具ナデ	工具ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	4mm 以下の明褐色粒を多く含む。4mm 以下の褐灰色粒を少し含む。	スス附着
59	磁器碗	口縁	攪乱	回転ナデ 施釉 文様あり	回転ナデ 施釉	灰白 (7.5Y8/1)	灰白 (7.5Y8/1)	灰白 (7.5Y8/1)	
64	鉄製鞆	完形	表採			灰白 (7.5Y8/1)	灰白 (7.5Y8/1)	灰白 (7.5Y8/1)	

第 9 表 その他の遺物計測表 (石器)

器種	石材	出土地点	計測値				備考	
			最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)		
60	石鏃	チャート	D-1	1.60	1.80	0.35	0.8	
61	石鏃	チャート	D-1	1.55	0.95	0.25	0.4	
62	尖頭状石器	チャート	D-2	3.40	1.65	0.70	4.8	
63	二次加工剥片	尾鈴山酸性岩類	D-2	9.20	5.60	1.60	84.0	
66	火打ち石	チャート	D-2	1.65	1.10	0.70	1.3	太田井産と考えられる

第5節 自然科学分析の結果

(1) 分析の目的

第3次調査区は道路部分による削平や耕作により、土層の堆積が乱されている関係で、遺構は表土直下で検出された。

そこで、遺構出土の炭化物の自然科学分析を通して、遺跡の当時の植生や遺構の詳細な年代などの有用な情報を得ることで当時の様相をより詳細に復元するために自然科学分析を行った。

この自然科学分析では、竪穴建物跡から出土した炭化材を対象として、住居跡の年代確認のための放射性炭素年代測定と、木材利用を明らかにするための樹種同定を委託した。

(2) 試料と分析方法

試料

試料は、竪穴建物跡(SA1)から出土した炭化材1点である。同じ試料を分割して、年代測定試料と樹種同定に供する。

分析方法

(a) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。

その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅()と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500(30分)850(2時間)で加熱する。

液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデ

ム加速器をベースとした14CAMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma68%)に相当する年代である。測定年代は、13Cの値を元に同位体効果の補正を行う。また、補正年代値を利用して暦年較正を実施する。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表すこととする。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。また、試料が炭化材であることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差、2双方の値を計算する。1は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、2の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(b) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴等については、島地・

伊東(1982)およびWheeler他(1998)を参考にする。また、各分類群の組織配列については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

(3) 分析の結果

(a) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表1、暦年較正結果を表2、暦年較正曲線を図1に示す。SA1から出土した炭化材の補正年代は、 $1,870 \pm 30BP$ を示す。また、測定誤差をとして計算させた暦年較正值は、calAD79 ~ 209である。

(b) 樹種同定

炭化材はクリ近似種に同定された(表1)。解剖学的特徴等を記す。

・クリ近似種 (cf. *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科 クリ属

試料はいずれも薄い板目板状を呈する。年輪界で割れており、早材部の大部分を欠く。年輪界部分に翌年の道管壁が僅かに残っており、比較的径の大きな道管と考えられることから環孔材と判断される。晩材部の小道管は、多数が集まって紋様状あるいは火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ~ 15細胞高。

以上の特徴からクリが最も近いが、よく似た組織を有する環孔性放射孔材のシイ属や、環孔材で複合放射組織を有するコナラ節の可能性もあるため、クリ近似種とする。

(4) 建築部材と古環境の復元

竪穴建物跡SA1は、第層上面から検出されており、床面は一辺約65四方の方形を呈し、床面から土師器や台石等が出土しており、出土遺物から古墳時代前期の遺構とみられている。炭化材は、住居中央部のやや南寄りの床面から出土しているが、用途・部位等の詳細は不明である。

炭化材の暦年較正結果は、cal79 ~ 209であり、住居の推定年代より古いが、樹齢の問題等を考慮すれば同調的な結果といえる。

この炭化材は、クリ近似種に同定された。クリや

よく似た組織を有するコナラ節は、落葉広葉樹であり、木材は重硬で強度の高い材質を有する。一方、シイ属は、常緑広葉樹のツブラジイとスタジイがあるが、強度的にはクリやコナラ節より劣るとされる(平井,1996)。

宮崎県内では、野田町八田遺跡(延岡市)で弥生時代後期~古墳時代初頭の住居跡から出土した炭化材にアカガシ亜属、シイ属、シャシャンボ、ツバキ属、モッコク等の常緑広葉樹が確認されているが、クリやコナラ節などの落葉広葉樹は確認されていない(大塚,1978a)。

一方、熊野原遺跡および前原北遺跡(宮崎市)と大萩遺跡(野尻町)では、アカガシ亜属、タブノキ属、ハイノキ属等の常緑広葉樹と共に、ハンノキ属、クヌギ節、クリ、コナラ節等の落葉広葉樹が確認されている(大塚,1975,1984)。

薄糸平遺跡(高千穂町)では、ミズキ属やカエデ属などの落葉広葉樹を主体としており、常緑広葉樹はニッケイ属が1点確認されたのみである(大塚,1978b)。

これまでの結果をみると、より標高の高い地域で落葉広葉樹が多くなり、標高が比較的低い地域で常緑広葉樹が多くなる傾向がある。これは、現在の植生とも調和的であり、樹種構成の違いは遺跡周辺の植生を反映したものと考えられる。

今回の炭化材は、クリの他にコナラ節やシイ属の可能性が考えられるが、いずれもこれまで弥生時代後期~古墳時代の竪穴住居跡出土炭化材に確認されている樹種であり、今回の結果はこれまでの調査結果とも矛盾しない。

引用文献

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

平井 信二,1996,木の百科 解説編. 朝倉書店, ...p.

伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載. 木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載. 木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.

伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載. 木材研究・資

料,33, 京都大学木質科学研究所,83-201.
 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載 .木材研究・資料,34, 京都大学木質科学研究所,30-166.
 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載 .木材研究・資料,35, 京都大学木質科学研究所,47-216.
 大塚 誠,1975,住居跡木材炭化物の樹種.「大萩遺跡(2)」,宮崎県教育委員会,15-18.
 大塚 誠,1978a,住居跡木材炭化物.「野田町八田遺跡」,延岡市教育委員会,28-32.
 大塚 誠,1978b,住居跡木材炭化物の樹種.「薄糸平遺跡」,高千穂町教育委員会,71.
 大塚 誠,1984,住居跡出土の木材炭化物.「宮崎学園都市住居跡出

土の木材炭化物」,宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概要()59-66.
 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
 Wheeler EA,Bass P.and Gasson PE(編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler EA,Bass P.and Gasson PE(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

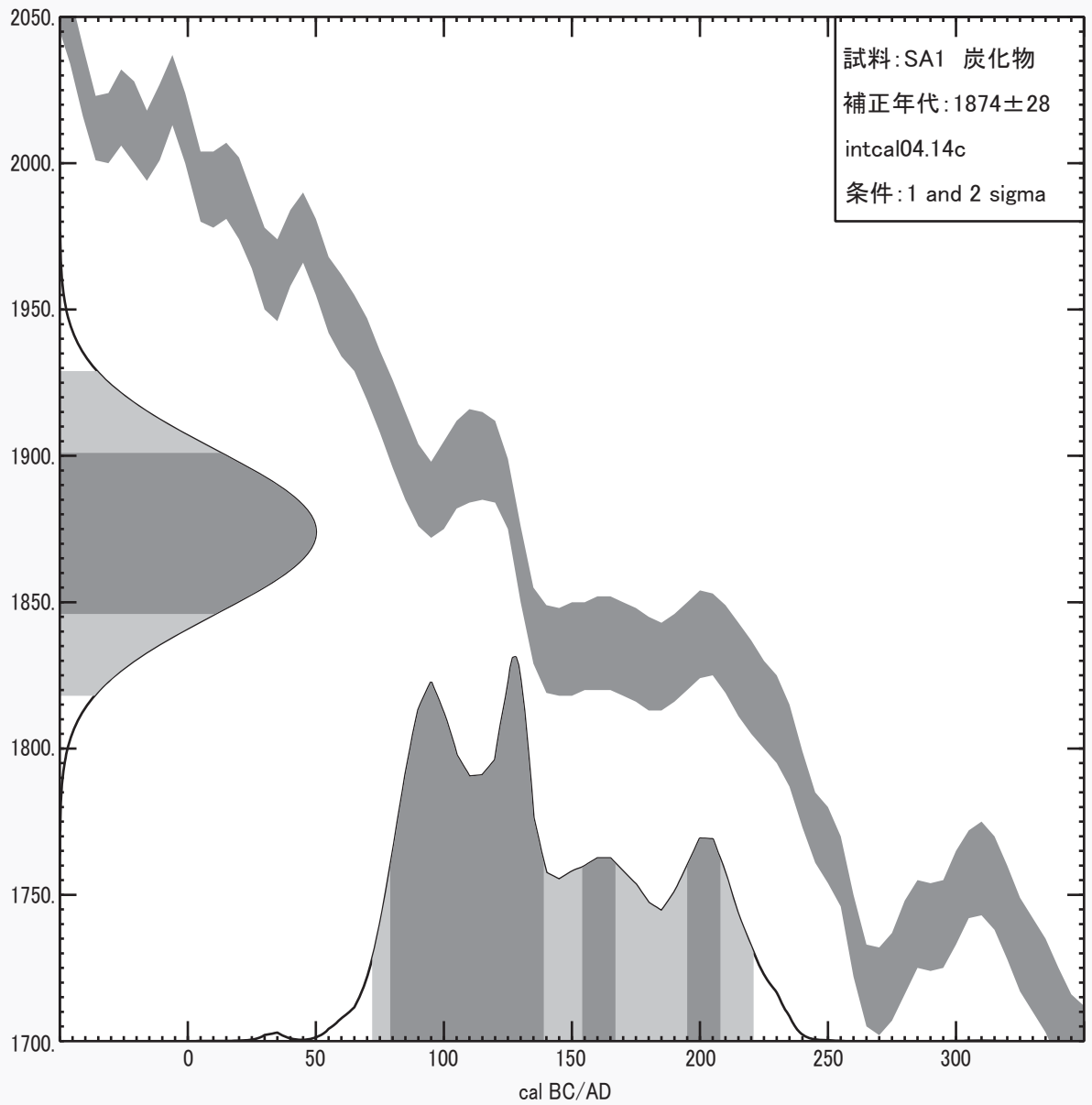
第 10 表 自然科学分析の結果

遺構	試料名	種類	樹種	補正年代 BP	¹³ C (‰)	測定年代 BP	Code No.	Measurement No.
SA1 (竪穴建物跡)	炭化物	炭化材	クリ近似種 cf. <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	1,870 ± 30	-27.20 ± 0.64	1,910 ± 30	10191-1	IAAA-81060

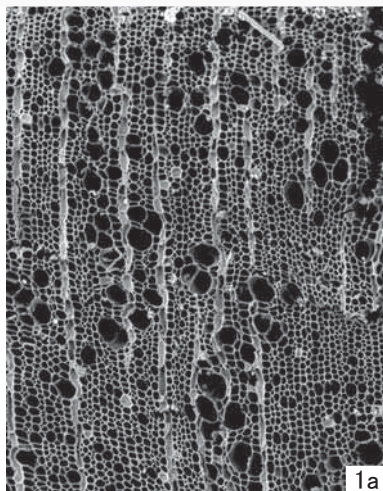
- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)										相対比	Code No.		
		cal	AD	79	-	cal	AD	139	cal	BP	1,871			-	1,811
SA1	1,874 ± 28	cal	AD	155	-	cal	AD	168	cal	BP	1,795	-	1,782	0.110	10191-1
		cal	AD	195	-	cal	AD	209	cal	BP	1,755	-	1,741	0.118	
		2	cal	AD	72	-	cal	AD	222	cal	BP	1,878	-	1,728	

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は 1 は 68%、2 は 95% である
- 5) 相対比は、1、2 のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



暦年較正曲線



1. クリ近似種 (SA1; 炭化物)
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

第 26 図 自然科学分析の結果

第6節 小結

板平遺跡第3次調査は、第2次調査と同じように旧石器時代から縄文時代早期・後期、古墳時代中期、中世までの遺構や遺物が確認されている。自然科学分析のデータでもほぼ第2次調査と同様である。古環境の復元については第2次調査の報告書を参照されたい。以下に時代ごとに説明する。

旧石器時代

A T火山灰層下位の褐色粘質土層で、ホルンフェルスと流紋岩とチャート製の剥片と石核が出土した。

流紋岩については、第2次調査と同様に五ヶ瀬川流域で見られる火成岩と類似している。

縄文時代早期

今次の調査区では、集石遺構2基と陥し穴状遺構4基、炉穴2基が検出された。

集石遺構は、削平により一部礫が動いている。1基(S I 2)は中世のピットによって切られており、集石遺構の礫を根固め石として使った可能性もある。

陥し穴状遺構は、平面形態が楕円形のもの2基、円形のもの2基である。楕円形のものは、ともに中ほどにテラス状の平坦面を設け、そこから更に深く掘り下げているという特徴を持つ。

炉穴は、S P 1において第2次調査と同じくブリッジの痕跡が見られた。

縄文土器は、口縁部付近に貝殻腹縁刺突文を3段施す深鉢が1点出土した。いわゆる「政所式土器」に類似する考えられる。石器は、流紋岩製の二次加工剥片が1点と陥し穴状遺構1基から砂岩の石錘1点、炉穴1基から砂岩の打製石斧が出土した。

縄文時代後期

遺構は検出されなかったが、古墳時代の竪穴建物跡(S A 1)の埋土中より当該期の縄文土器が得られた。その内訳は、深鉢の口縁部が5点、底部が2点である。これらの土器群は、口縁部内面に沈線を有することや底部は上げ底状をなすことからいわゆる「三万田式土器」の様相をもつ。第2次調査でも同様な土器が出土している。

古墳時代中期

竪穴建物跡(S A 1)1軒が検出された。一部道路に切られているが6.5m×6.5mの方形である。柱穴を4本確認した。出土した土器群の形態的特徴は、古墳時代中期でも前半に位置づけられるので、竪穴建物跡もこの時期に帰属すると考えられる。

竪穴建物跡埋土出土の炭化材は、放射性炭素年代測定の結果、AD.79～209年となる。出土遺物の年代とは調和的ではない。

中世

遺構は、掘立柱建物跡(S B 1)が確認された。第2次調査の特徴は、柱穴の径約30cm、庇をもたない、3間×1間の割合が多い、身舎面積は15～25m²、桁行の柱間は2m前後、梁間が桁行の約1.5倍の6点を上げている。第3次調査の遺構もその6つの特徴に全てあてはまる。

遺物は、龍泉窯の青磁が出土している。

まとめ

第3次調査は480m²と面積は狭いが、第2次調査と同様の遺構と遺物を確認することができた。

この調査区は、東九州自動車道建設範囲の西端に位置するので、調査区外にも旧石器時代～中世にかけての遺構や遺物が広がる可能性を強く示唆する。

なお、本書の第4章にて、第1～4次調査全体の調査成果がまとめられている。

〔参考文献〕

東京大学出版会 2003『新編 火山灰アトラス』
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005「大坪遺跡」
『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第79集

第 章 第 4 次調査の記録

第 1 節 基本層序

1 E 区の土層堆積状況

E - 1・2 区の北側の谷部において、表土直下に第 層（二次アカホヤ）の堆積が見られた。第 層（暗褐色土）・第 層（暗褐色土）は約 0.4 ~ 0.7 m で谷の下部ほど厚くなり、第 2 次調査の谷部と同様に、小礫が混じっていた。はっきりとした第 層（AT）が見られなかった。第 層は 0.4 m 程の厚みで第 層に達した。

E - 1・2 区の南側では、表土直下は第 ~ 層であり、南に行くほど第 層が露出するようになった。農耕等の影響を強く受けている範囲と思われる。ここでは、AT は第 層上面に時折ブロック状に見られる程度であるが、E - 2 区南側では層として確認できるところもあった。

E - 3 区では、表土直下は第 層であり、明確な

第 層の堆積が見られた。その下の第 層が 1 m 以上の厚さであることを確認した。

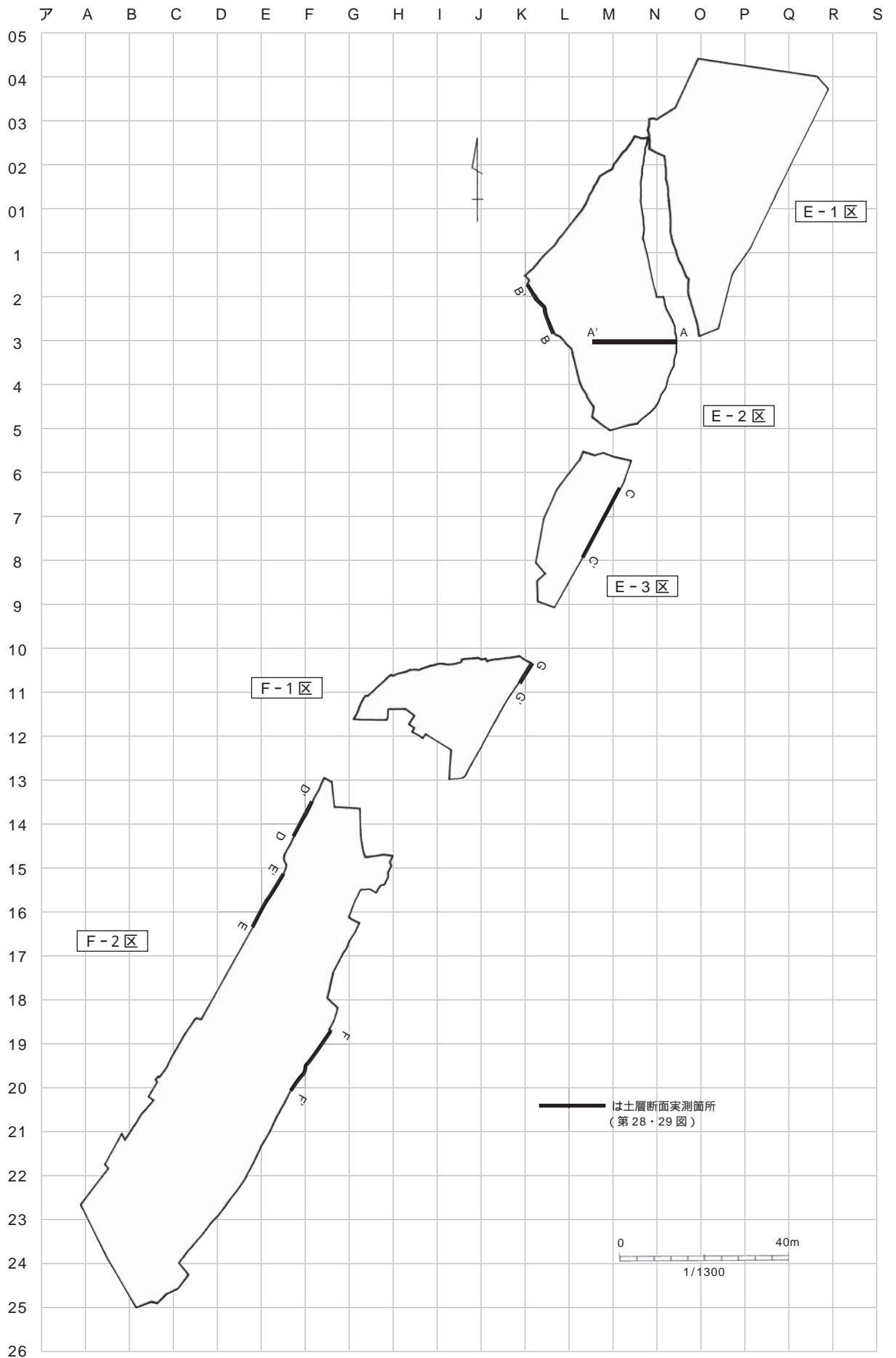
2 F 区の土層堆積状況

F - 1 区の表土直下は第 層であり、明確な第 層（白斑ローム層）・第 層の堆積が見られた。その下の第 層はそれぞれ約 0.4 m・0.6 m ほどの厚みで、第 層に達した。

F - 2 区では、表土直下は主として第 ~ 層であった。E 18 グリッドや SC 48（土坑）、SA 12（竪穴建物跡）周辺では第 層の良好な堆積が見られた。第 層は、場所によっても違うが、それぞれ概ね 0.1 ~ 0.3 m ほどの厚みで堆積していた。全体的に第 層は良好に残存しており、その下の第 層はそれぞれ 0.4 ~ 0.6 m の厚みで第 層に達した。F - 2 区の南端、SE 8（溝状遺構）より南側では、表土直下で礫層が露出した。F 区の数箇所で大きな風倒木の痕跡が見られ、層順の逆転が見られた。

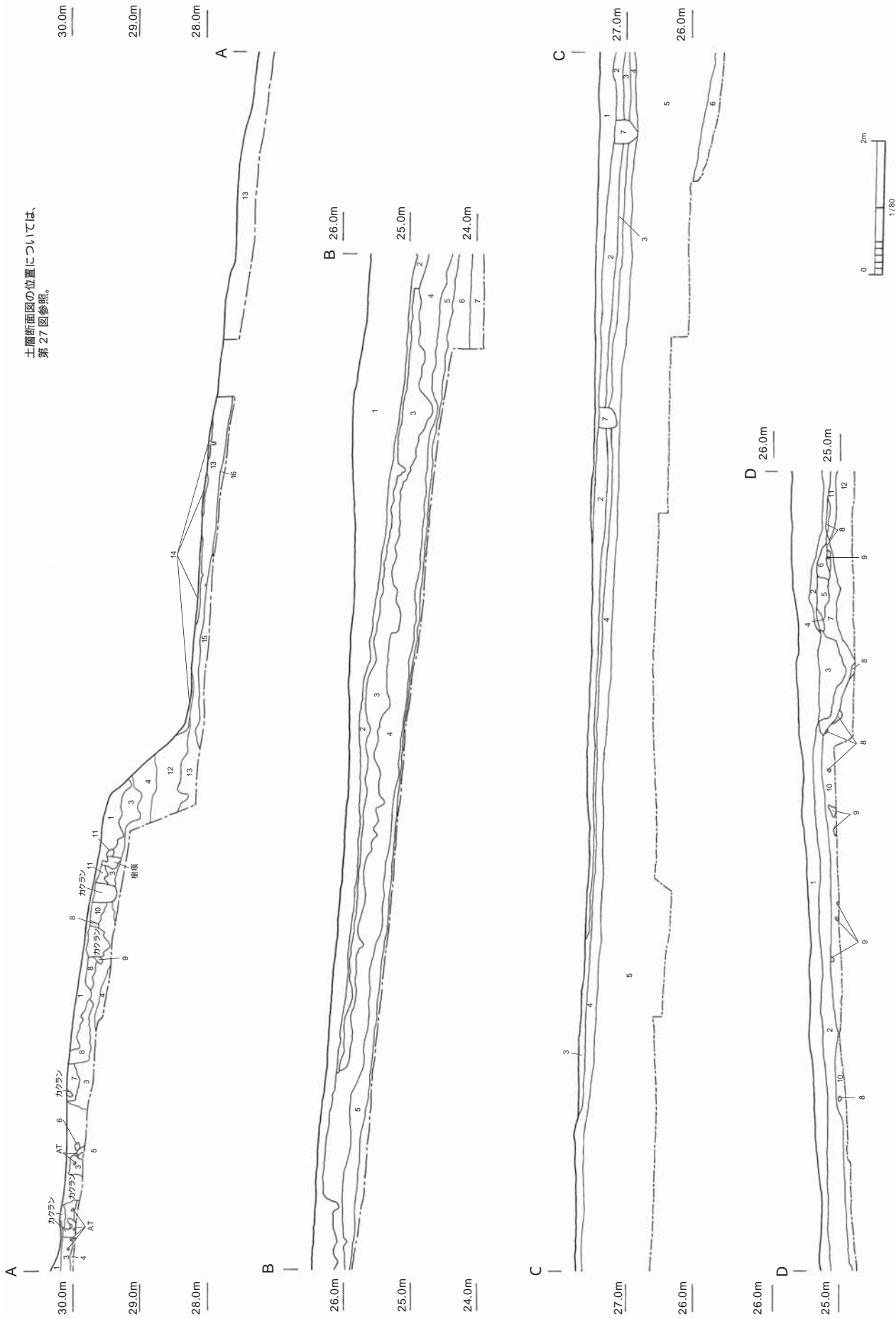
第 11 表 基本層序

層	層名	特徴
	表土	10YR3/4 暗褐色土。粘性はない。固くしまる。5mm 程度の角礫を多く含む。現在の耕作土。
	二次堆積アカホヤ火山灰土	7.5YR7/8 黄橙色土。粘性はない。しまりはややある。10YR3/3 暗褐色土が混ざる。アカホヤ火山灰土の二次的堆積物。
	暗褐色土層	10YR3/4 暗褐色土。粘性ややある。しまりがある。（縄文時代早期相当層）
	褐色土層	10YR4/6 褐色土。粘性は第 層に比べて強い。しまりがある。
	白斑ローム層	10YR3/2 黒褐色土。粘性なし。非常に硬くしまり、10cm 程度のブロック状の呈をなす。2mm 以下の白色のガラス質粒子を含む。
	始良 T n 火山灰層	10YR5/8 黄褐色土。粘性なし。しまりなし。
	小礫混じり褐色粘質土層	10YR4/6 褐色土。粘性ややあり比較的やわらかい。AT 粒子が混ざるためサクサクしている。第 層と第 層の漸移層にあたる。（後期旧石器時代相当層）
	褐色粘質土層	10YR4/6 褐色土。粘性が非常に強い。固くしまる。最大 4 ~ 5 cm の小角礫を多く含む。
	礫層	10YR4/4 褐色土。粘性非常に強い。固くしまる。0.5cm ~ 10cm 大の礫を多く含む。

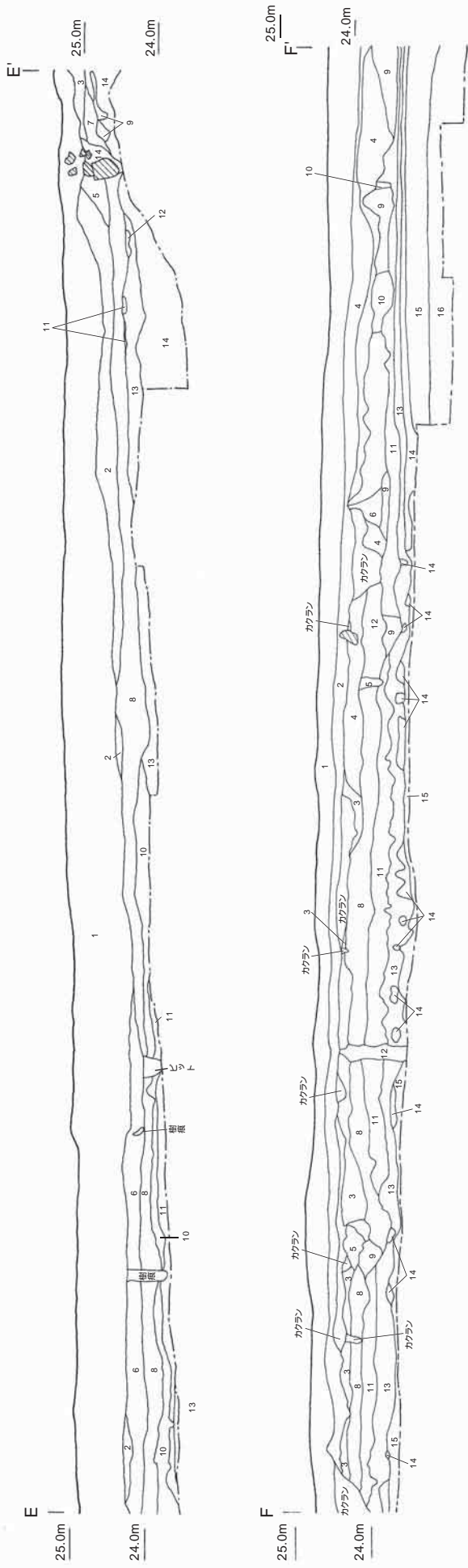


第27図 グリッド配置図

土層断面図の位置については、
第27図参照。



第28図 土層断面図(1)



A-A'

- 1 10YR3/4 暗褐色土、粘性、しまりともややあり、表土(第層)
- 2 10YR5/6 暗褐色土、粘性あり、しまりややあり、白塚ロームを含む(第層)
- 3 10YR6/6 暗褐色土、粘性非弱、しまりあり、2-3cmの小礫を少量含む(第層)
- 4 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 5 10YR4/6 褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 6 10YR4/6 褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 7 7.5YR4/4 暗褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 8 10YR4/6 褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 9 10YR4/6 褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 10 10YR4/6 褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 11 10YR5/4 暗褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 12 10YR5/6 暗褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 13 10YR4/6 褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 14 10YR5/6 暗褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 15 10YR5/6 暗褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 16 10YR5/6 暗褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が

B-B'

- 1 耕作層(第層)
- 2 10YR3/2 黒褐色土、粘性なし、しまりややあり、径5mm程度の角礫を多く含む
- 3 10YR4/6 褐色土、粘性なし、しまりややあり、径5mm程度の角礫を多く含む
- 4 7.5YR4/6 暗褐色土、粘性なし、しまりややあり、径5mm程度の角礫を多く含む
- 5 7.5YR4/6 暗褐色土、粘性なし、しまりややあり、径5mm程度の角礫を多く含む
- 6 10YR5/6 暗褐色土、粘性なし、しまりややあり、径5mm程度の角礫を多く含む
- 7 10YR5/6 暗褐色土、粘性なし、しまりややあり、径5mm程度の角礫を多く含む
- 8 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が

C-C'

- 1 10YR3/4 暗褐色土、粘性なし、固くしまる、径5mm程度の角礫を多く含む、耕作土(第層)
- 2 10YR4/6 褐色土、粘性あり、しまりあり、径5mm程度の角礫を多く含む
- 3 10YR3/2 暗褐色土、粘性なし、非常に固くしまる、約1cmのプロック状の礫をなす、径2mm以下の白色のガラス繊維粒子を含む
- 4 10YR5/6 暗褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 5 10YR7/6 暗褐色土、粘性あり、径5-10mmの小角礫を多く含む(第層)
- 6 10YR5/6 暗褐色土、粘性、径5-10mmの小角礫を多く含む(第層)
- 7 7.5YR3/2 暗褐色土、粘性、径5-10mmの小角礫を多く含む(第層)

D-D'

- 1 遊砂土(第層)
- 2 耕作土(第層)
- 3 赤みの強い褐色土、古い耕作土か(第層)
- 4 赤みの強い褐色土、古い耕作土か(第層)
- 5 赤みの強い褐色土、古い耕作土か(第層)
- 6 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりややあり、粗礫が
- 7 10YR3/4 暗褐色土、粘性ややある、しまり強い(第層)
- 8 白塚ローム(第層)
- 9 10YR4/6 褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 10 10YR4/6 褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 11 10YR4/6 褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が
- 12 10YR4/6 褐色土、粘性、しまりともややあり、粗礫が

E-E'

- 1 遊砂土
- 2 二次アカハヤをプロック状に含む
- 3 1層に褐色土をプロック状に含む
- 4 1層よりやや暗い、大まめの礫を含む、撈乱埋土か
- 5 二次アカハヤ(第層)
- 6 10YR4/6 暗褐色土、粘性、しまりややあり、粗礫が
- 7 10YR4/6 暗褐色土、粘性、しまりややあり、粗礫が
- 8 10YR4/6 暗褐色土、粘性、しまりややあり、粗礫が
- 9 白塚ロームに褐色土を含む、8層と10層の移行層か
- 10 白塚ローム(第層)
- 11 褐色土にATをプロック状に含む
- 12 10YR4/6 褐色土、粘性が強い、硬くしまる、小礫を含む(第層)
- 13 10YR4/6 褐色土、粘性がさらに強い(第層)
- 14 10YR4/6 褐色土、粘性がさらに強い(第層)

F-F'

- 1 遊砂土
- 2 10YR3/2 黒褐色土、粘性なし、しまり弱い、小礫を含む(第層)
- 3 二次アカハヤ(第層)
- 4 3層と8層の移行層、3層よりやや暗い
- 5 3層と8層の移行層、3層よりやや暗い
- 6 3層と8層の移行層、3層よりやや暗い
- 7 8層に二次アカハヤをプロック状に含む
- 8 10YR3/4 暗褐色土、粘性ややある、しまりがある(第層)
- 9 8層と11層の移行層、8層よりやや暗い
- 10 10YR4/6 暗褐色土、粘性、しまりややあり、粗礫が
- 11 暗褐色土に二次アカハヤを粒状に含む、上部は明るく、褐色である、モグラ穴か
- 12 白塚ローム(第層)
- 13 10YR4/6 暗褐色土、粘性が強い、固くしまる、小礫を多く含む(第層)
- 14 10YR4/4 褐色土、粘性がさらに強い(第層)
- 15 10YR4/4 褐色土、粘性がさらに強い(第層)

第29図 土層断面図(2)

第2節 調査の方法及び経過

平成21年5月18日から調査に着手する。調査対象面積は8,500㎡である。

調査の便宜上、第1～3次調査区に引き続き、調査区をE区(4,330㎡)・F区(4,170㎡)に区分した。

グリッド杭は、国土座標を基準とし10m間隔で設置した(第27図)

表土を重機で除去後、二次アカホヤ(第層)～褐色土層(第層)で遺構検出を行い、その後第～層を掘り下げ、縄文時代以降の調査を行った。調査区は以前、果樹園や畑であり、樹根や耕作に伴う溝など、至る所にて攪乱を受けていた。

その後、トレンチを設定し、第層を掘り下げ、旧石器時代の調査を行った。F-1区では、第層から旧石器が多く出土したため、ほぼ全域において第層の掘り下げを行い、改めてトレンチを設定し、第層の掘り下げを行った。

遺物包含層中の遺物は、平板実測により位置を記録して取り上げたほか、グリッド一括等により取り上げた。遺構内の遺物は遺物出土状況図として記録して取り上げたほか、埋土一括で取り上げた。

遺構実測図は集石遺構については1/10で、その他の遺構は原則として1/20で記録した。写真記録は主として35mmモノクローム・リバーサル写真及びデジタルカメラを併用し記録した。

調査日誌抄

H21.05.18 第4次調査開始。

05.19 草・竹木伐採作業(～05.20)

05.21 重機による表土除去(E-1・2区、F-2区の一部:1回目)開始(～05.26) E-1区においてトレンチ調査。駐車場の整地。

05.22 事務所等の設置完了。

05.28 測量杭設置(1回目)

05.26 E-1区で土師器片が複数出土した地点で竪穴建物跡(SA1)検出。

06.01 作業員(26名)によるF-2区の掘削開始。

06.02 F-2区で遺構とみられる複数のしみ検出。

06.09 F-2区で縄文時代早期の土器片出土。

06.11 F-2区で4軒の竪穴建物跡(SA7～10)検出。

06.12 F-2区で切り合う炉穴群(SP15～20)検出。

SA7で土師器が集中して出土。

06.15 F-2区で単独の炉穴(SP4)検出。

06.16 F-2区で集石遺構(SI4)検出。

06.19 F-2区で掘立柱建物跡1棟(SB1)確認。

06.22 F-2区で杭痕とみられる深い穴をもつ陥し穴状遺構(SC50)検出。

06.25 F-2区炉穴群より縄文土器、石鏃出土。

07.04 空中撮影(1回目:遠景とF-2区を中心に撮影)

07.07 F-2区と並行して、作業員によるE-2区の掘削を開始。

07.14 F-2区で鋼材撤去用通路設置のため一部埋め戻し。

07.15 F-2区で陥し穴状遺構(SC25)検出。

07.22 F-2区、鋼材撤去作業(～07.25)

07.27 F-2区、工事用道路付替作業・表土除去(2回目、～07.31)

07.28 F-2区で竪穴建物跡(SA12)検出。

08.04 F-2区で炉穴(SP6・7)検出。

08.05 F-2区で集石遺構(SI1・2)検出。

08.11 表土除去(E区:3回目)開始(～08.13) F-2区の土器片が集中して出土した地点で竪穴建物跡(SA13)検出。SA12より小型丸底壺出土。

08.17 E-2区の土器片が複数出土した地点で竪穴建物跡(SA3)検出。

08.19 測量杭設置(2回目) F-2区で炉穴(SP5・8～10)集石遺構(SI5)検出。

08.26 天候に恵まれ、遺構掘削等が順調に進む。乾燥のため、水まきなどの対策を行う。

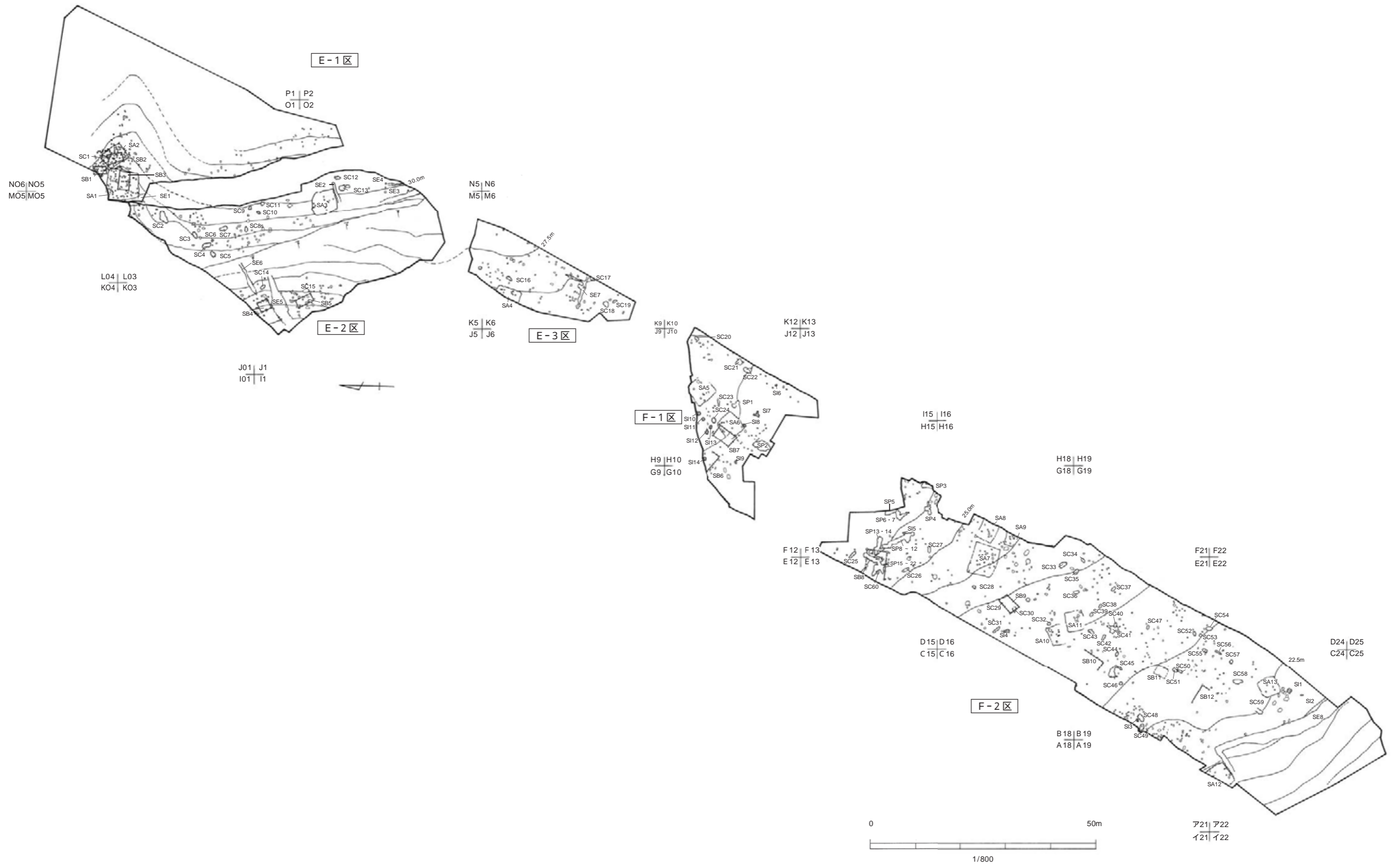
09.03 F-2区で集石遺構(SI3)検出。

09.06 発掘体験。参加者23名。

09.07 E-3区の掘削開始。竪穴建物跡(SA4)検出。

09.08 F区で表土除去(4回目)・工事用道路付け替え・駐車場整備作業開始(～09.17) E-3区で陥し穴状遺構(SC16・19)検出。

09.16 E-3区で旧石器調査終了、土層断面図作成。(E-3区調査終了。)



第 30 図 全体遺構配置図

- 09.17 測量杭設置（3回目）。F - 2区で竪穴建物跡（SA 11）遺構とみられる複数のしみ検出（～09.24）。うち3基は陥し穴状遺構と確認（SC 36・37・56）。
- 09.24 F - 1区の掘削開始。4基の集石遺構を検出。
- 10.07 台風18号接近。被害なし。
- 10.09 E - 1区の掘削開始。F - 1区第 層上面で多数の礫を検出。
- 10.10 F - 1区で竪穴建物跡（SA 5）土坑5基検出。うち1基は陥し穴状遺構（SC 23）。
- 10.14 F - 1区で竪穴建物跡（SA 6）検出、SA 5からガラス小玉出土。集石遺構の検出が続き、F - 1区で合計9基検出（～11.16）。
- 10.15 F - 2区で旧石器調査終了、土層断面図作成。（F - 2区調査終了。）
- 10.16 F - 1区で炉穴（SP 1）検出。
- 10.27 空中撮影（2回目：F - 1区・E - 2区）。
- 10.29 F - 1区で旧石器調査（AT上面まで）開始。
- 11.04 F - 1区で旧石器剥片出土。
- 11.11 E - 1区で竪穴建物跡（SA 2）検出、攪乱より銭貨（洪武通宝）出土。
- 11.16 E - 1区、道路の一部付け替え作業。
- 11.18 F - 1区、重機によるAT除去。E - 2区で旧石器調査終了。（E - 2区調査終了。）
- 11.19 F - 1区で旧石器調査（AT下位層）トレンチより多数の旧石器剥片が出土、全面掘削に切り替え。
- 11.20 SA 1床面付近で土師器高坏5点・甕2点・焼土・炭化材検出。
- 11.30 F区の調査終了区域で工事開始、駐車場を本線上に移動。
- 12.18 F - 1区の旧石器調査終了、埋め戻し。（F - 1区調査終了。）E - 1区、道路復旧作業。
- 12.21 E - 1区の旧石器調査終了。
- 12.22 器材搬出。作業員による作業を終了。
- 12.25 平面図、土層断面図作成終了。（E - 1区調査終了。）
- H22.01.13 事務所等撤去完了確認、安全対策を行い、板平遺跡（第4次）の調査終了。

第3節 整理作業及び報告書作成

整理作業は、平成22年2月～11月の期間で行った。遺物の洗浄・注記を2・3月に、接合を4～6月に、実測・拓本・計測を7～8月に、トレースを9・10月に行った。

整理作業と併行して、図面レイアウト、文章作成、写真撮影を行った。

第4節 教育普及活動

現地調査での教育普及活動として、平成21年9月6日（日）発掘体験を実施した。参加者は日向市を中心に23名で、遺構・遺物の説明の後、水洗作業・掘削作業の体験を行った。

また、平成22年8月21日（土）に行われた「ひむかの歴史2010～遺跡発掘速報会～」の中で、「炎がもたらしたもの」をテーマに、炉穴と焼失した竪穴建物を中心に紹介した。



発掘体験の様子

第5節 調査の記録

1 旧石器時代の遺物

(1) 概要

第層までの調査を終えた後、トレンチを設定(第31図)し、第層(A T)下位の第層の調査を行った。F-1区の東側のトレンチにおいて、遺物が多く出土したため、F-1区のほぼ全域にわたり第層を掘り下げ、第層で遺物が多数出土した地点については、第層上面までの掘り下げを行った。E-3区は、第2次調査で旧石器時代の遺物がまとまって出土した区域に近いため、広めにトレンチを設定し、第層上面まで掘り下げたが、遺物の出土はなかった。

調査の結果、礫群などの遺構は全く確認できなかったが、遺物は合計253点出土した。

(2) 遺物

出土遺物253点のうち252点は、F-1区東側から出土したものであり、そのうち第層上面で4点、第層上面で3点、第層中で245点が出土した。F-1区の第層は平均0.4m程度の厚さであったが、上面から0.2mまでの浅い面から集中して出土し、第層を掘り下げるにつれて、遺物はほとんど見られなくなり、第層では全く出土しなかった。

グリッドごとに見ると、I 11・I 12・J 11の3グリッドで特に集中して出土し、点上げた遺物の出土状況から考察すると、遺物は、第2次調査区との境に近いJ 12グリッド杭付近を中心とした直径約15mの半円を描くように集中して出土していることがわかる(第32図)。

253点の遺物を石材別に分類すると、珪質頁岩が241点、チャートが5点、流紋岩が4点、黒曜石・砂岩・頁岩が各1点である。

珪質頁岩は光沢のある黒色のものが半分程度であり、残りは部分的、全体的に茶色や淡黄色である。これは、もとは黒色であったものが主に風化の影響を受けたものと考えられるが、茶色のものの中で、

被熱によるとみられる剥落があるものについては、熱を受けて色が変わったものと考えられ、礫群で使用されたものである可能性もある。チャートは灰色であり、やや透明感があるものである。流紋岩は淡黄色で、第2次調査で出土しているものと同様であり、五ヶ瀬川流域で見られる石材と同種であろう。

また、器種ごとに分類すると、製品は計2点と少なく、剥片181点(うち二次加工剥片3点)、石核70点である。剥片は、ほとんどが珪質頁岩であり、流紋岩、チャート等も使用されている。石核はすべて珪質頁岩である。

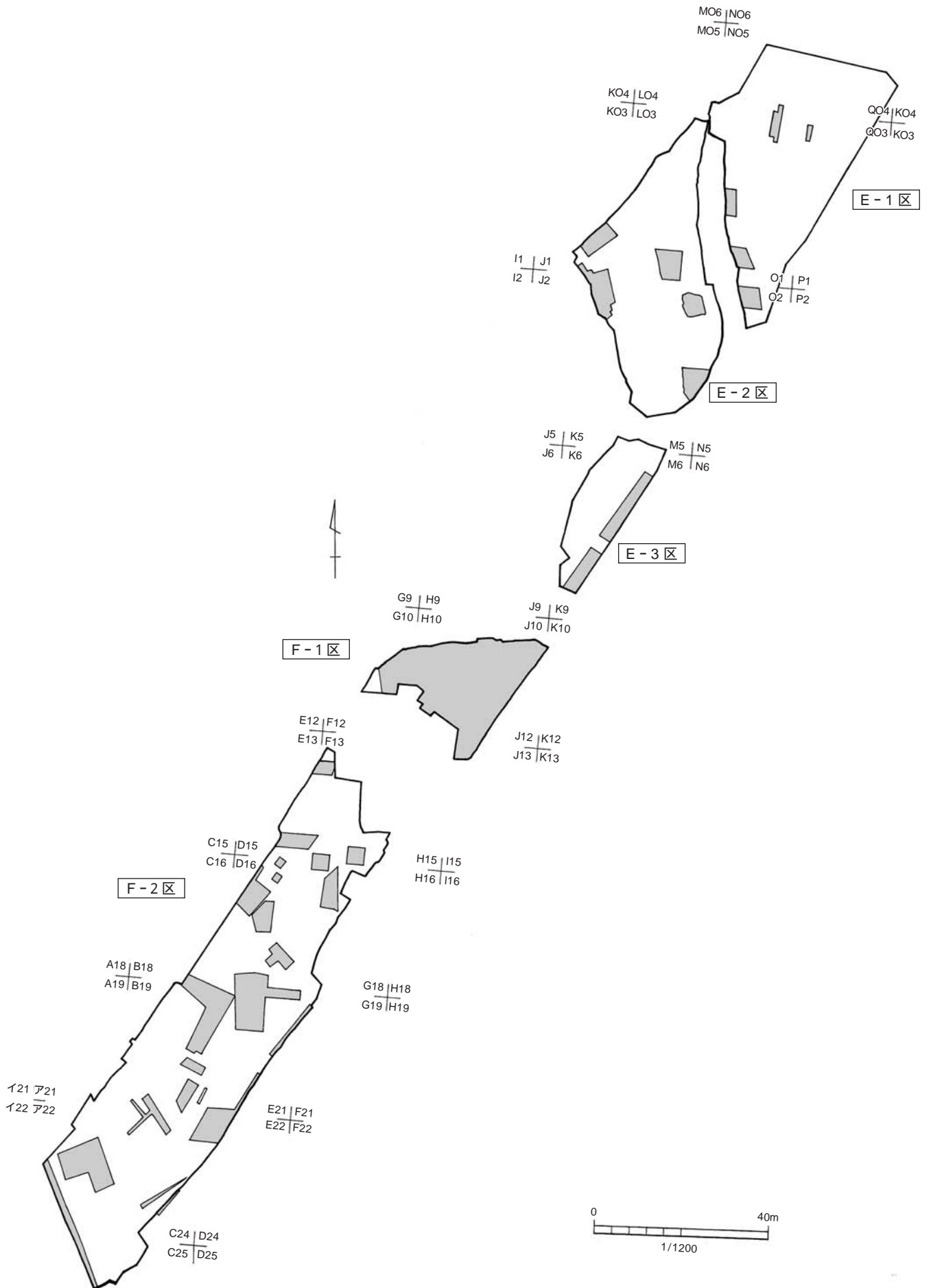
これらの遺物について接合を試みたが、剥片2点が接合したのみで、石核との接合は認められない。次に、図化した遺物について述べる。

67(第33図)は今峠型とみられるナイフ形石器である。この時代の遺物が集中して出土した区域から離れた、F-2区中央部のS A 11の埋土下部から出土したが、その形状などから旧石器時代のものであると判断した。淡黄色の頁岩製で、基部の両側に多数の剥離が見られる。刃部に節理とみられる線が複数見られる。上部は欠損しており、もとの長さは約6cmと推定される。

68はチャート製の楔形石器である。縦長の形状で長さが12cmと、図化した旧石器の中では最も小さい。縦方向の剥離がみられ、特に裏面の上部では形の調整を行ったと考えられる細かな剥離が見られる。

69~71は珪質頁岩製の二次加工剥片である。69は第層の浅い層、70・71は第層上面の出土であり、比較的上位の層からの出土であるといえる。69は表面に自然面のある三角形の形状で、そのうち二辺には裏側からの剥離が見られる。70は五角形の形状で、うち三辺に微細剥離が見られ、上面には打面調整が見られる。71は横長剥片素材で、表面に広く自然面が見られ、下部に微細剥離が見られる。

72~78は珪質頁岩製の石核である。72~76には上部に打面調整が見られる。また、74・77・78には自然面が見られる。全体的に縦方向からの剥離が多いが、面によって横からの剥離が多いものもある。また、比較的大きな石核である74・77・78には大きめ



第 31 図 旧石器時代調査トレンチ配置図

の剥片を採取したと見られる剥離が見られるが、どの石核にも大小の剥離が多数見られる。

79～115は剥片で、79～110は珪質頁岩製である(第34図～第36図)。縦横の長さによる分類では、79～90が縦長剥片(12点)、91～104が横長剥片(14点)、105～110が幅広剥片(縦横の比率がほぼ同じのもの:6点)で、縦長剥片と横長剥片はほぼ同数であるといえる。また、32点中18点には自然面が見られるが、比較的大きい剥片にその傾向が見られ、小さい剥片には自然面が見られない。95～97には剥落が見られ、その周囲が茶色になっている。111は灰色のチャー

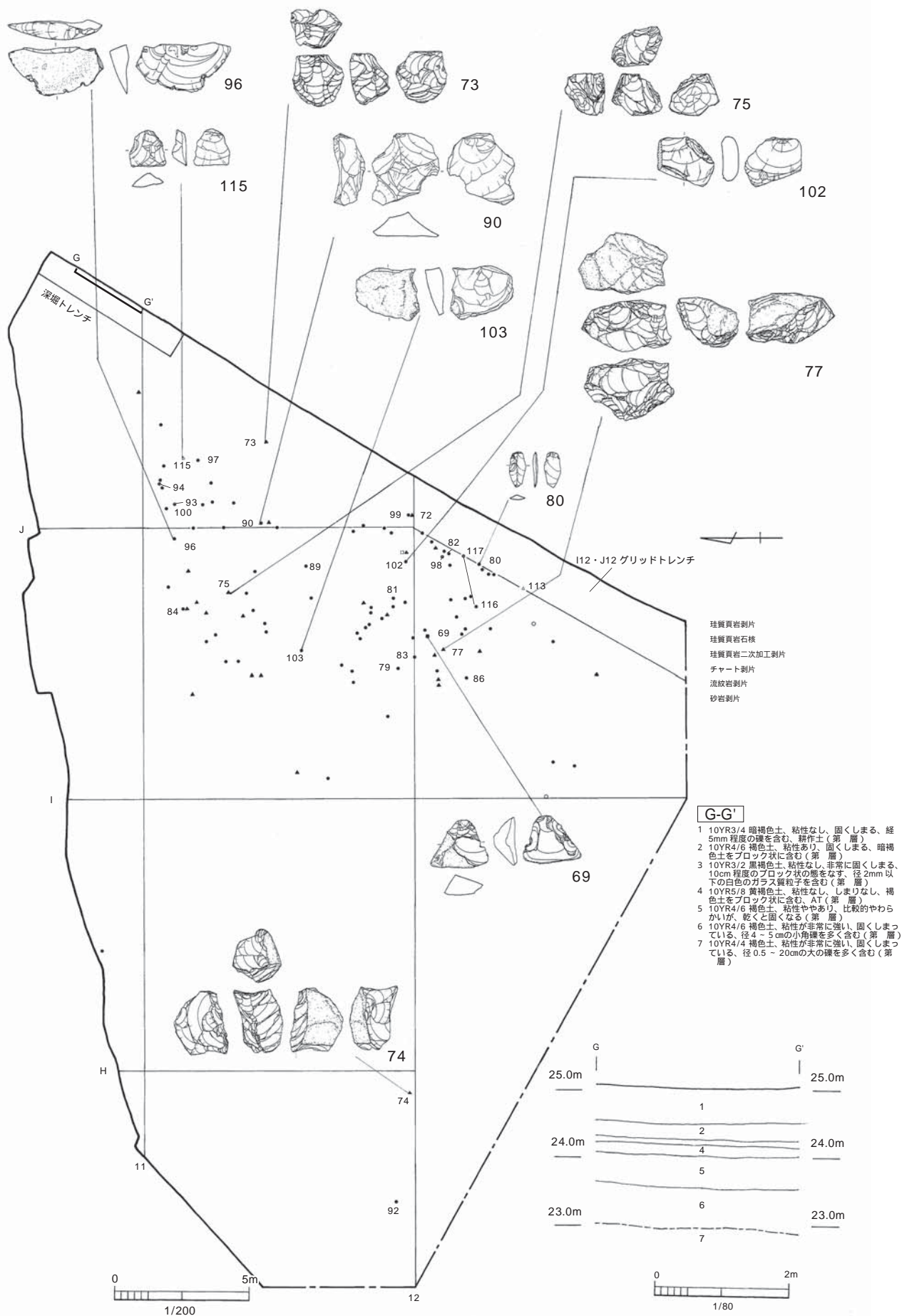
ト製、112は灰色から透明の桑ノ木津留産の黒曜石製であり、ともに縦長剥片である。113～115は流紋岩製である。自然面は見られず風化が進んでいるものとみられ、流理構造ははっきりしない。

接合資料1(第36図)は、上面、左面上部の剥離面が一致し、接合面のリングの向きが右上からであることから、まず上・左面で剥離がなされ、右上からの打撃で116と117に分割されたと考えられる。116と117はともに逆三角形の剥片であるが、右側面が一致しないことから、2つの剥片に分けられた後、意図せず割れたかさらに加工されたものと考えられる。

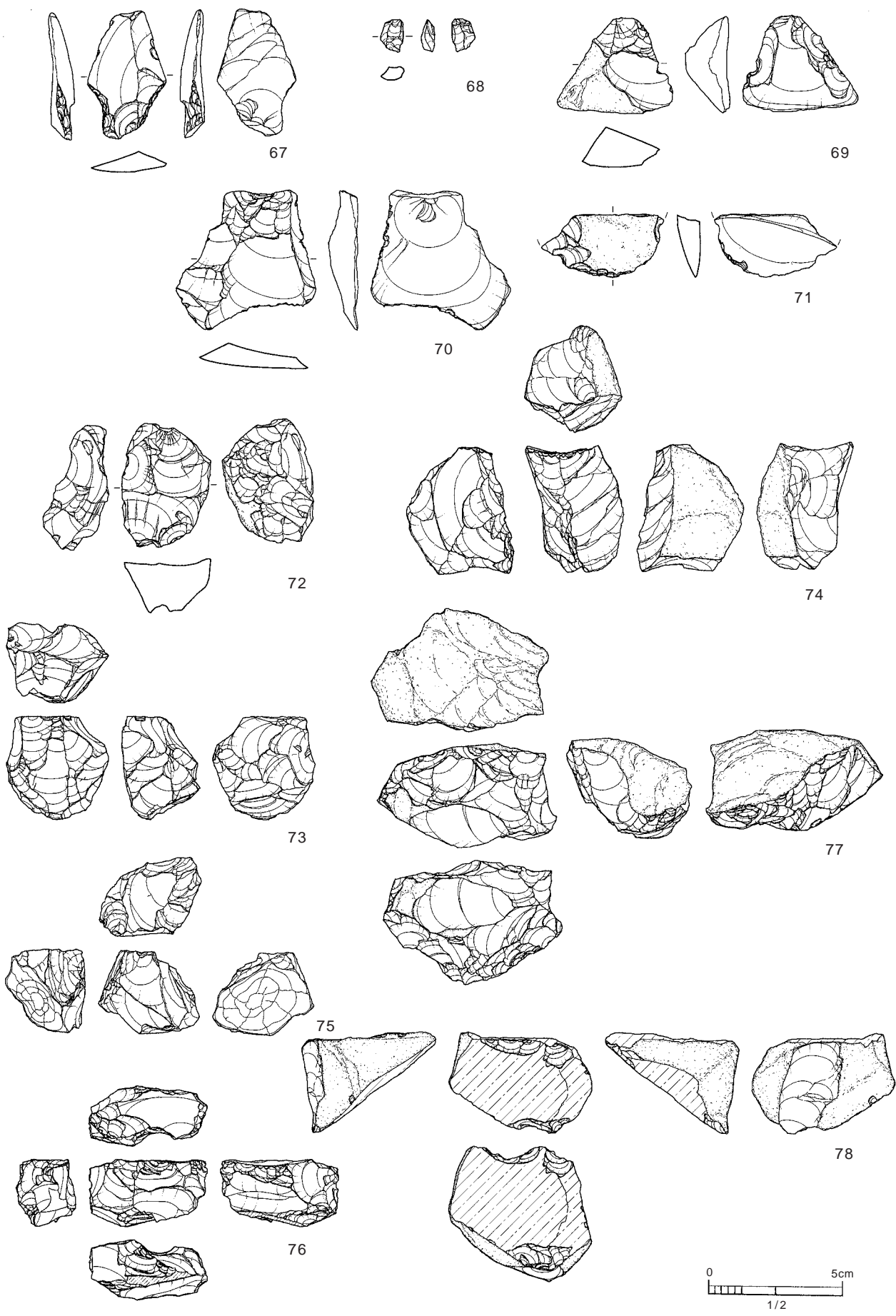
第12表 旧石器時代石器出土地点別器種・石材分類表

出土地点		楔形石器 チャート	二次加工 剥片 珪質頁岩	剥片					石核 珪質頁岩	合計
				珪質頁岩	チャート	流紋岩	黒曜石	砂岩		
F-1区	G 11 グリッド	0	0	1	0	0	0	0	1	2
F-1区	H 10 グリッド	0	0	1	0	0	0	0	0	1
F-1区	I 10 グリッド	0	0	8	0	0	0	0	6	14
F-1区	I 11 グリッド	0	0	43	0	1	0	1	12	57
F-1区	I 12 グリッド	0	1	27	2	1	0	0	7	38
F-1区	J 10 グリッド	0	0	16	0	1	0	0	11	28
F-1区	J 11 グリッド	1	0	29	1	1	0	0	11	43
F-1区	I 12・J 12 グリッドトレンチ	0	0	34	1	0	1	0	22	58
F-1区	壁沿い深掘りトレンチ	0	0	2	0	0	0	0	0	2
F-1区	第層	0	0	2	0	0	0	0	0	2
F-1区	第層上面	0	2	1	0	0	0	0	0	3
F-1区	第層上面	0	0	4	0	0	0	0	0	4
合計		1	3	168	4	4	1	1	70	252

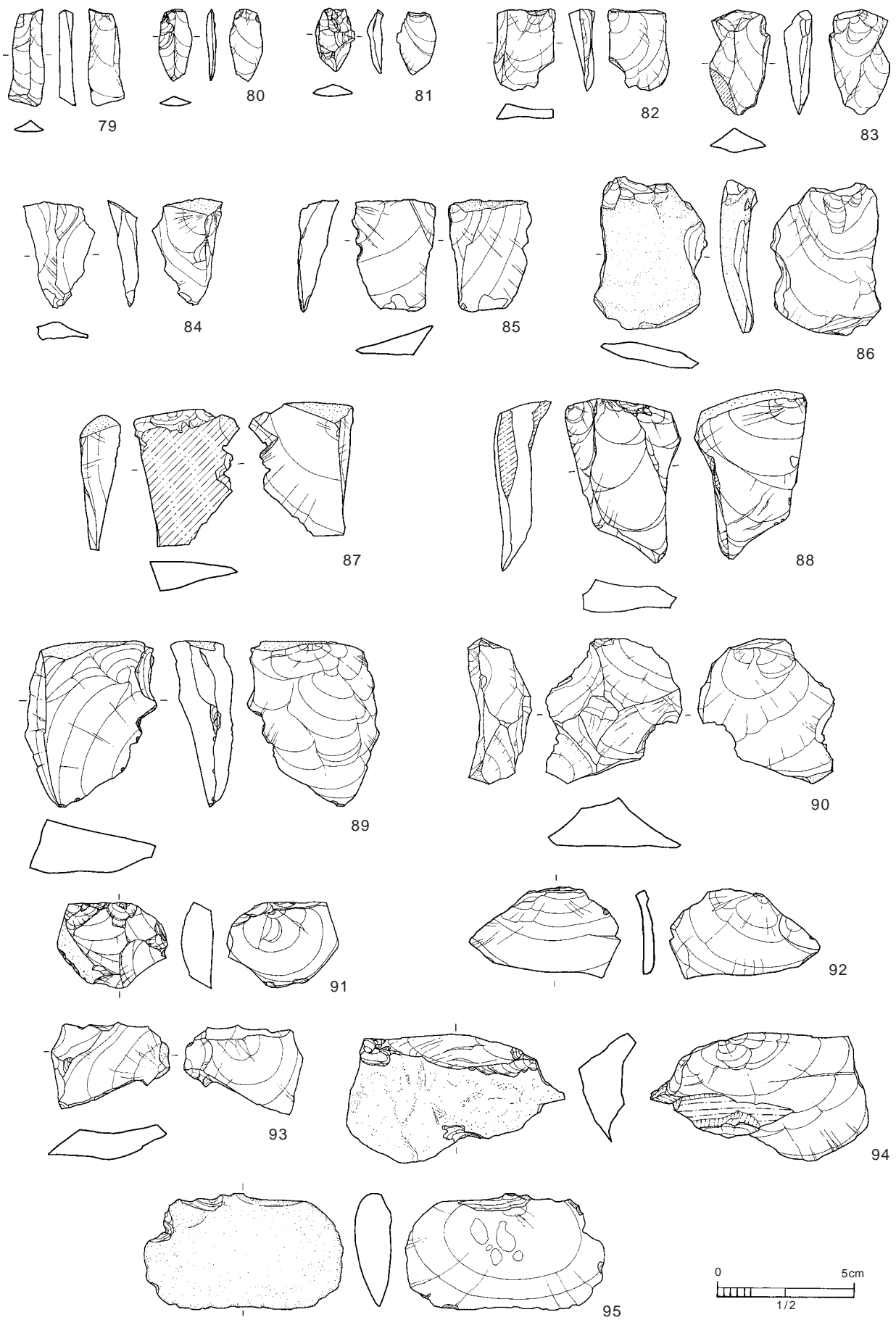
他に、F-2区SA11(竪穴建物跡)埋土中より1点(頁岩製ナイフ形石器)出土。



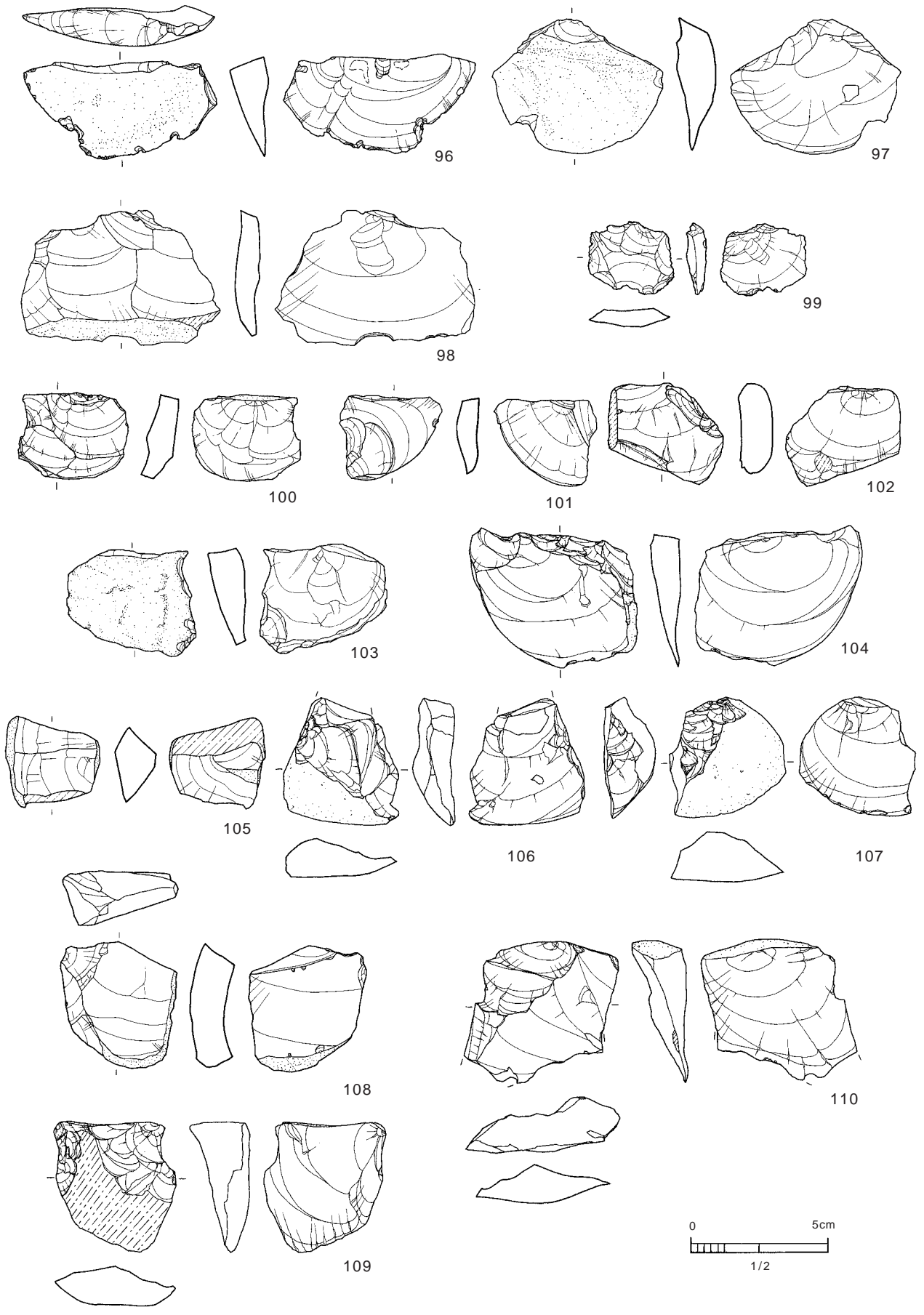
第 32 図 旧石器時代遺物分布図



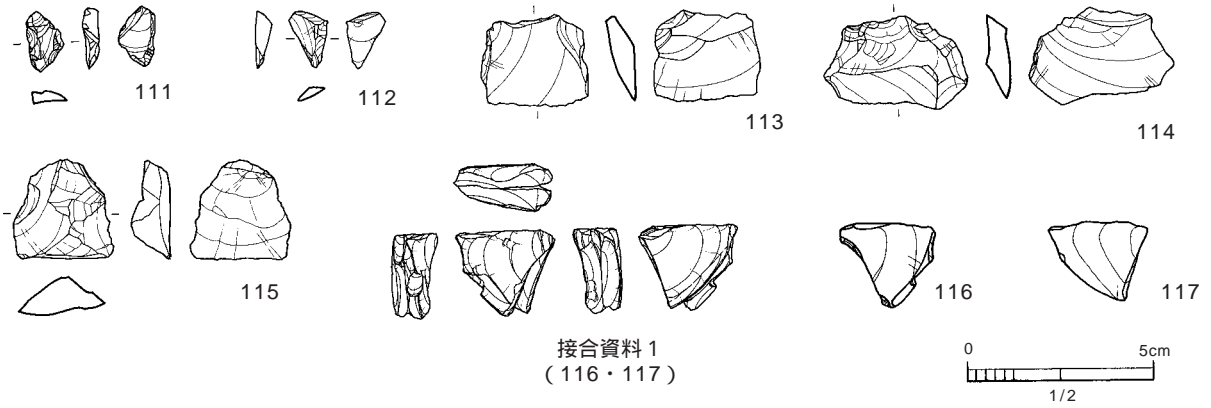
第 33 图 旧石器时代石器实测图 (1)



第 34 图 旧石器时代石器实测图 (2)



第 35 图 旧石器时代石器实测图 (3)



第 36 図 旧石器時代石器実測図 (4)

第 13 表 旧石器時代石器計測表

器種	石材	出土地点		計測値				取り上げ方法	備考
		(位置)	(層位)	長さ [cm]	幅 [cm]	厚さ [cm]	重量 [g]		
67 ナイフ形石器	頁岩	SA11	埋土	4.56	2.91	0.86	9.30	竪穴建物跡より点上げ	縦長剥片素材、今峠型、上方一部欠損
68 楔形石器	チャート	J11Gr		1.20	0.85	0.50	0.60	一括	縦長の形状、縦方向の剥離
69 二次加工剥片	珪質頁岩	I 12Gr		3.52	4.24	1.53	17.80	点上げ	やや横長三角形剥片素材 両側面に二次加工痕
70 二次加工剥片	珪質頁岩	F - 1 区	上面	4.61	5.16	1.04	18.50	一括	やや横長五角形剥片素材 右側面、下部に二次加工痕
71 二次加工剥片	珪質頁岩	F - 1 区	上面	2.30	4.24	1.12	9.40	一括	横長剥片素材 下部に二次加工痕
72 石核	珪質頁岩	J11Gr		4.54	3.25	2.10	31.20	点上げ	正面：上下からの縦長剥片剥離 裏面：小剥離多数 打面調整あり
73 石核	珪質頁岩	J11Gr		3.78	3.74	2.75	43.00	点上げ	正面：上からの縦長剥片剥離 裏面：横長剥片剥離 打面調整あり
74 石核	珪質頁岩	G11Gr		4.58	3.01	3.65	59.10	点上げ	正面：上からの縦長剥片剥離右 側面：自然面 打面調整あり
75 石核	珪質頁岩	I 11Gr		3.02	3.60	2.97	26.30	点上げ	正面：横長剥片剥離 打面調整あり
76 石核	珪質頁岩	J11Gr		2.46	4.35	2.12	25.50	一括	上下からの横長剥片剥離 打面調整あり
77 石核	珪質頁岩	I 12Gr		3.71	6.32	4.15	103.00	点上げ	正面：不定形剥離 下面：小剥離多数 上面：自然面 打面調整なし
78 石核	珪質頁岩	I 12・J12Gr T		3.48	5.30	4.80	73.00	一括	正面：摺理面、上から小剥片剥離 裏面：縦長剥片剥離 打面調整なし
79 剥片	珪質頁岩	I 11Gr		3.52	1.27	0.55	2.20	点上げ	縦長剥片
80 剥片	珪質頁岩	I 12Gr		2.60	1.21	0.35	0.90	点上げ	縦長剥片
81 剥片	珪質頁岩	I 11Gr		2.30	1.44	0.55	1.40	点上げ	縦長剥片
82 剥片	珪質頁岩	I 12Gr		3.00	2.20	1.00	4.50	点上げ	縦長剥片
83 剥片	珪質頁岩	I 12Gr		3.79	2.06	1.04	6.80	点上げ	縦長剥片
84 剥片	珪質頁岩	I 11Gr		3.88	2.60	1.05	6.00	点上げ	縦長剥片、上面に自然面
85 剥片	珪質頁岩	F - 1 区	上面	4.10	3.15	1.50	10.70	一括	縦長剥片、上面に自然面
86 剥片	珪質頁岩	I 12Gr		5.50	4.00	1.30	24.30	点上げ	縦長剥片、正面に自然面
87 剥片	珪質頁岩	J10Gr		5.00	3.80	1.55	17.10	一括	縦長剥片、上面に自然面
88 剥片	珪質頁岩	J10Gr		6.10	4.10	2.15	34.00	一括	縦長剥片、上面に自然面
89 剥片	珪質頁岩	I 11Gr		6.00	5.90	2.30	58.50	点上げ	縦長剥片、上面に自然面
90 剥片	珪質頁岩	J11Gr		5.30	5.00	2.33	44.40	点上げ	縦長剥片、正面下部に自然面
91 剥片	珪質頁岩	F - 1 区	上面	3.15	4.05	1.20	18.28	一括	横長剥片
92 剥片	珪質頁岩	G11Gr		3.30	5.50	0.90	10.80	点上げ	横長剥片
93 剥片	珪質頁岩	J11Gr		3.10	4.40	1.19	14.80	点上げ	横長剥片
94 剥片	珪質頁岩	J11Gr		4.60	8.00	2.10	64.10	点上げ	横長剥片、正面に自然面
95 剥片	珪質頁岩	I 12・J12Gr T		4.25	7.25	1.34	42.60	一括	横長剥片、剥落あり、正面に自然面
96 剥片	珪質頁岩	I 11Gr		3.60	7.00	1.40	29.20	点上げ	横長剥片、剥落あり、正面に自然面
97 剥片	珪質頁岩	J11Gr		4.91	6.21	1.45	39.30	点上げ	横長剥片、剥落あり、正面に自然面
98 剥片	珪質頁岩	I 12Gr		4.92	7.25	0.90	27.10	点上げ	横長剥片
99 剥片	珪質頁岩	J11Gr		2.61	3.12	0.70	5.90	点上げ	横長剥片
100 剥片	珪質頁岩	J11Gr		3.20	4.00	1.30	14.60	点上げ	横長剥片
101 剥片	珪質頁岩	I 12・J12Gr T		3.09	3.74	0.94	10.10	一括	横長剥片
102 剥片	珪質頁岩	I 11Gr		3.65	4.20	1.80	24.60	点上げ	横長剥片
103 剥片	珪質頁岩	I 11Gr		3.90	4.65	1.30	22.10	点上げ	横長剥片、正面に自然面
104 剥片	珪質頁岩	I 12・J12Gr T		5.15	6.10	1.10	31.82	一括	横長剥片、右面に自然面
105 剥片	珪質頁岩	I 12・J12Gr T		3.30	3.45	1.63	18.60	一括	幅広剥片、左面に自然面
106 剥片	珪質頁岩	J10Gr		4.60	4.20	1.55	29.52	一括	幅広剥片、正面に自然面
107 剥片	珪質頁岩	I 12・J12Gr T		4.35	4.30	1.90	33.74	一括	幅広剥片、正面に自然面
108 剥片	珪質頁岩	F - 1 区	上面	4.65	4.20	2.05	36.60	一括	幅広剥片、下面に自然面
109 剥片	珪質頁岩	J10Gr		4.75	4.45	2.20	36.08	一括	幅広剥片
110 剥片	珪質頁岩	J10Gr		5.15	5.65	2.00	33.02	一括	幅広剥片、上面に自然面
111 剥片	チャート	J11Gr		1.65	1.00	0.43	0.70	一括	縦長剥片
112 剥片	黒曜石	I 12・J12Gr T		1.50	1.05	0.50	0.30	一括	縦長剥片、桑ノ木津留産黒曜石
113 剥片	流紋岩	I 12Gr		2.45	2.88	0.75	4.90	点上げ	横長剥片
114 剥片	流紋岩	J10Gr		2.57	3.89	0.81	7.00	一括	横長剥片
115 剥片	流紋岩	J11Gr		2.67	2.69	1.07	6.40	点上げ	幅広剥片
接合資料 1	珪質頁岩	-	-	2.27	2.57	1.17	5.40	116 と 117 が接合したもの	上面は平らな剥離面 116・117 は右側面からの打撃で剥離か
116 剥片	珪質頁岩	I 12Gr		2.27	2.24	0.65	2.70	点上げ	幅広剥片
117 剥片	珪質頁岩	I 12Gr		2.15	2.57	0.52	2.70	点上げ	やや横長剥片

2 縄文時代早期の遺構と遺物

(1) 概要

主に第 1 層において、縄文時代早期の遺構・遺物が確認された(第 37 図)

F - 1 区では、表土直下の第 1 層(暗褐色土)において、多数の礫が出土した。この礫に混じって、縄文時代早期の土器片や石器が出土した。散礫中には、集石遺構も確認され、F - 1 区だけでも 9 基の集石遺構が検出された。第 1 層では、単独の炉穴 2 基が検出された。

F - 2 区では、散礫は見られず、5 基の集石遺構が検出された。F - 2 区北側の第 1 層では 20 基の炉穴が集中しており、うち 17 基は 5 群となり切り合っていた。炉穴中や周辺のピットを中心に、縄文時代早期の土器片や石器が出土した。F - 2 区中央部から南側にかけては、炉穴は検出されなかった。

E 区においては、縄文時代早期の遺構は検出されなかった。包含層や土坑の埋土から少数ながら土器片や石器が出土した。

(2) 遺構

散礫(第 38 図)

今回の調査でも第 2 次調査に倣い、「集石遺構」とは、礫が 1 ~ 1.5 m 以内ぐらいの範囲に、周辺より密に集まっている状態の遺構とし、比較的散らばった状態で広範囲に広がるものを「散礫」と定義した。

散礫を構成する礫の大半は砂岩である。富高川の河原でも見られることから、ここから持ち込まれたことも考えられる。ほとんどが破碎しており、赤化しているものも多く見られ、熱の影響を受けていると考えられる。散礫中の礫は合計 1,788 個、総重量 204.7kg である。F - 1 区の集石遺構 8 基を構成する礫の総重量は 238.0kg (S I 9 は検出当初土坑と考えていたため、礫の総重量は不明)であり、少なくとも合計 440kg あまりの礫が遺跡外より持ち込まれたと考えられる。

散礫が見られる範囲は 2 箇所みられ、第 2 次調査で確認された A・B 群に引き続き、第 4 次調査では C・D 群と呼ぶことにする(第 38 図)。C 群の礫は

約 150 個と少なく、比較的小さい礫が多い。その位置や、調査区境の壁でも多くの礫を検出したことから、第 2 次調査の A 群とつながるものであると考えられる。C 群の西には表土直下にアスファルト舗装道路跡があった。この道路によって第 1 層(AT)上面まで削平されていたが、この道路から調査区東端までは、第 1 層がほぼ削平されており、C 群はこの第 1 層の残っていた範囲で検出された。

D 群は南北 15 m、東西 10 m の範囲に広がっている。特に北側調査区境で礫が密集しており、この範囲から集石遺構が 4 基集中して検出された。中央部で S A 6 (竪穴建物跡)と切り合い、北側調査区沿いでは風倒木 1 の影響を受けており、そこにも散礫や集石遺構があったと考えられる。礫の分布の状況から、散礫の範囲は、調査区の北側に広がる可能性がある。

C 群と D 群の間には、礫はほとんど見られなかった。これは S A 5 や風倒木 2 の影響を受けたとも考えたが、S A 5 や風倒木 2 に近づくにつれて礫が見られなくなることや、S A 5 と風倒木 2 の間に第 1 層が残存しているにもかかわらず、礫がほとんど見られないことから、C 群と D 群はつながっておらず、D 群の東端でいったんとぎれたと考えられる。

集石遺構(第 14 表)

合計 14 基の集石遺構が検出された。すべて F 区からの検出で、特に F - 1 区の散礫の見られる範囲で多く検出されており、I 11 グリッド杭を中心とした半径 3 m の円の範囲内で 4 基検出された。F - 2 区の集石遺構 5 基は、集中せず散らばって検出された。礫はほとんどが砂岩で破碎しており、赤化しているものも多数見られた。半数以上で掘り込みがみられるが、配石を持つものは 1 基のみであった。

第 2 次調査に倣い、次のように分類した。ただし、S I 7 は風倒木の影響を受けているため、A ~ C の分類の対象から外し、D 類とした。

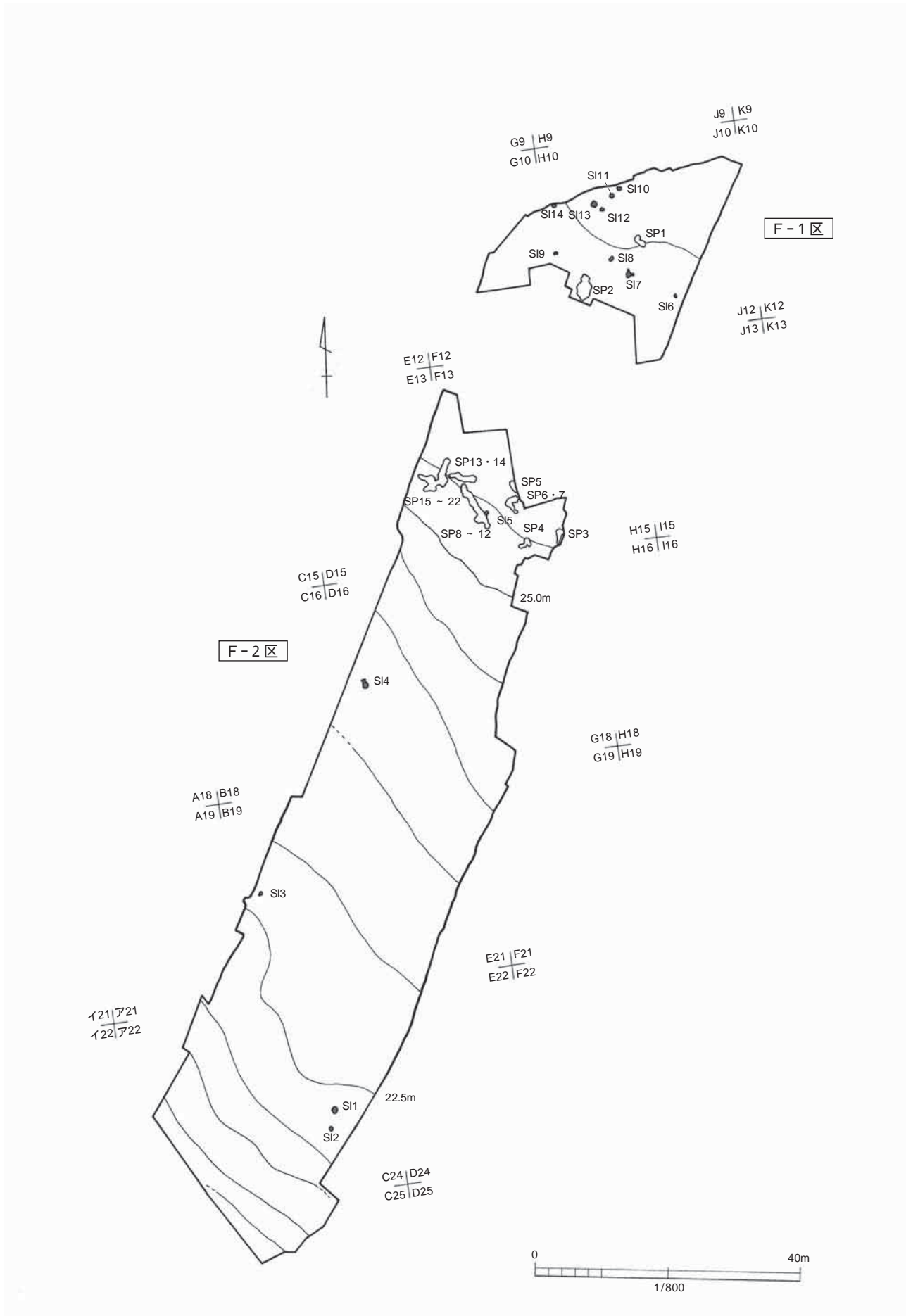
(集石遺構の分類)

A 類...掘り込みがあり、配石の有るもの(1 基)

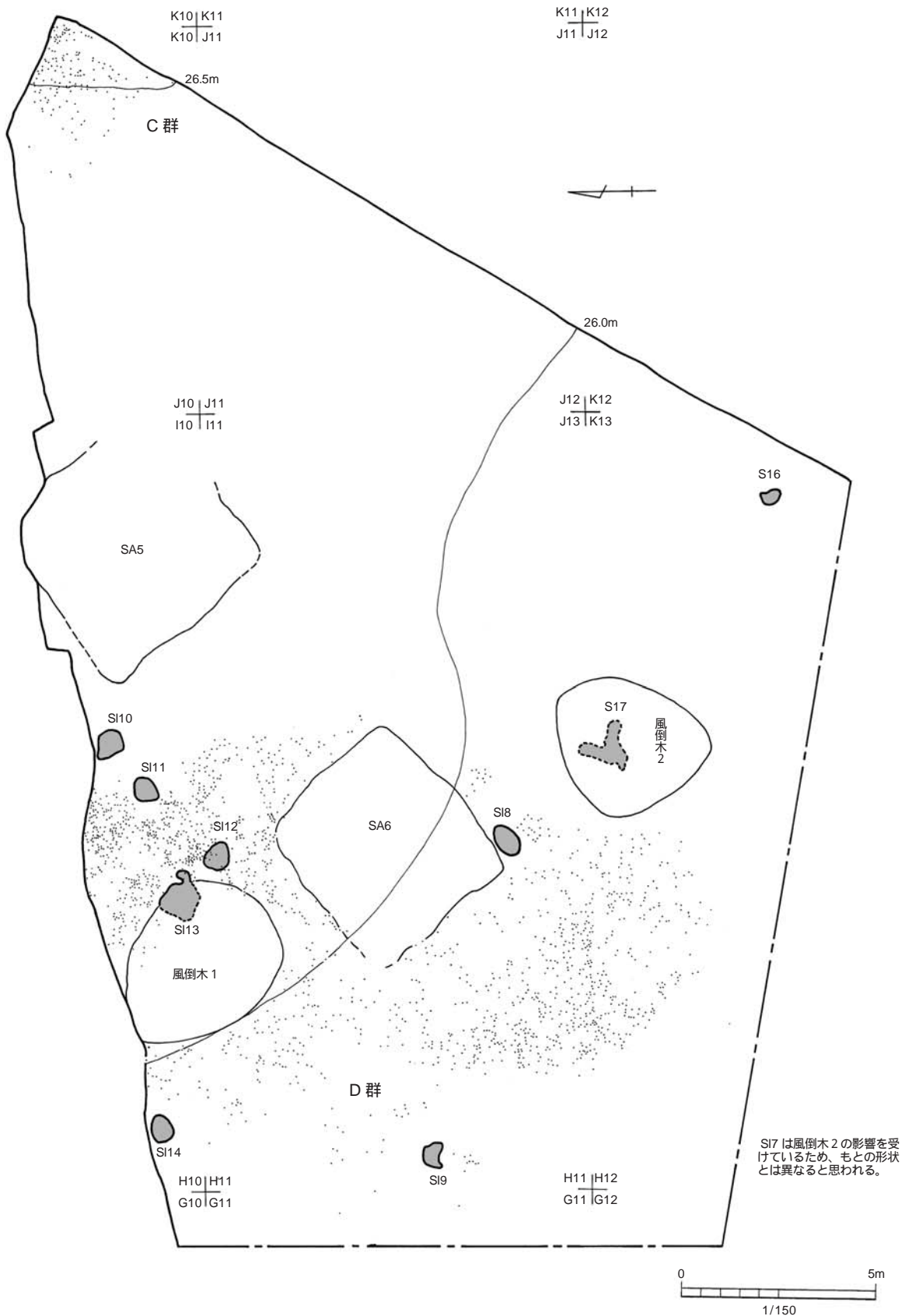
B 類...掘り込みがあり、配石の無いもの(6 基)

C 類...掘り込みが無いもの(6 基)

D 類...分類が困難なもの(1 基)



第 37 図 縄文時代早期遺構配置図



第 38 図 散礫分布図

A類

SI 8 (第 39 図)

表土直下の第 層で検出された。北東側は竪穴建物跡 (SA 6) と切り合っており、およそ 1/3 は消失している。上部礫は 5 ~ 20cm 大であり、中央部に大きな礫がある。大半の礫は破碎、赤化している。配石は、中央に 30cm 大の礫を 3 つ置き、その横に 10cm 大の礫が配置される構造である。

B類

SI 1 (第 39 図)

第 層上面で検出された。SI 2 と隣接しているが、他の集石遺構からかなり離れた位置にある。礫は破碎しており、赤化したものも散らばっている。やや疎である中央部分に、大きめの礫がみられる。礫の重量は約 90kg で、今回の調査では最大の重量である。礫の中から、敲石が 1 点出土した。埋土中の炭化材の樹種同定からアカガシ亜属との結果を得た。なお、この炭化材の ¹⁴C 年代測定の結果は、想定さ

れる遺構の年代とは齟齬をきたしている。

SI 3 (第 39 図)

第 層で検出された。SI 1 同様、他の集石遺構からかなり離れている。礫は 10cm 大のものが多く、赤化しているものも見られる。

SI 6 (第 39 図)

第 層で検出された。第 2 次調査で確認された集石遺構群と近い位置にある。礫は、10cm 大のものが多く、破碎や赤化が見られる。

SI 9 (第 39 図)

第 層で検出された。F - 1 区の集石遺構が集中しているところから、約 10 m 離れた地点にある。礫は 20cm 大のものが 3 個、5 ~ 10cm 大のものが 1 個あまりからなり、破碎し、赤化しているものも見られる。掘り込みは円形で、楕円形の落ち込みを切っている。

第 14 表 縄文時代早期集石遺構一覧表

遺構	出土位置 〔グリッド〕	検出面 〔層〕	集石範囲〔cm〕		掘り込み〔cm〕			上部礫 密度	配石 有無	分類	礫重量〔kg〕	
			長径	短径	長径	短径	深さ				上部礫	配石
SI 1	C23		111	104	85	76	10	密	×	B	90.0	-
SI 2	B24		43	19	-	-	-	疎	×	C	-	-
SI 3	B20		65	62	81	73	10	普	×	B	-	-
SI 4	D17		135	88	-	-	-	密	×	C	55.0	-
SI 5	F15		74	51	-	-	-	疎	×	C	-	-
SI 6	I12		57	45	61	43	19	疎	×	B	12.0	-
SI 7	I12		124	112	253	246	44	普	×	D	53.5	-
SI 8	H11		85	61	60	32	13	普		A	27.5	23.5
SI 9	H11		62	56	98	82	36	普	×	B	-	-
SI 10	I10		80	65	105	104	12	普	×	B	32.0	-
SI 11	I10		78	74	97	65	18	普	×	B	17.5	-
SI 12	H11		81	80	-	-	-	疎	×	C	10.0	-
SI 13	H10		111	102	-	-	-	密	×	C	46.5	-
SI 14	H10		72	58	-	-	-	普	×	C	15.5	-

SI 5 は、のちの何らかの影響を受けており石が飛び散っていたため、もとの範囲と思われる範囲で計測。

SI 7 は風倒木中で検出。その影響を大きく受けているため、もとの範囲とは大きく異なると考えられる。

SI 8 は竪穴建物跡 SA 6 と切り合っており、一部が消失したと考えられる。

S I 10 (第 39 図)

表土直下の第 層で検出された。集石遺構が集中している範囲内にあり、S I 11 と隣接している。中央に 30cm 大の、隣に 20cm 大の礫が、その周辺に 5cm 大程度の礫が散らばっている。礫は破碎・赤化している。

S I 11 (第 39 図)

表土直下の第 層で検出された。S I 10 と隣接している。礫は 5cm 大のものが多く、破碎しており、中央部のものは赤化している。

C 類

S I 2 (第 40 図)

第 層上面で検出された。掘り込みを持たない。礫の集中はあまり見られず、散らばったものも含め、30 個ほどの礫で構成されている。

なお、造成土直下で検出され、隣接する S I 1 より高い位置にあることから、人為的な活動の影響を受けたとも考えられる。

S I 4 (第 40 図)

第 層で検出された。他の集石遺構からかなり離れたところに位置する。長径が 1.3 m と比較的大きいものであるが、明確な掘り込みは見られない。礫はほとんど破碎、赤化しており、中央部がやや疎であるが、全体的に密集している。北側に延びるような形状をしているが、地山が局地的に北に約 0.3 m 下っており、それに沿って礫が流れた可能性がある。

S I 5 (第 40 図)

第 層で検出された。S P 9 (炉穴) と隣接している。S P 9 は、埋土に礫を多量に含んで検出されたが、礫を含むのは埋土上部に限られ、S I 5 の礫の下の高さよりやや低い程度であることから、S I 5 は S P 9 より後に作られ、S P 9 の埋没後、その上に礫が流れ、広がったと考えられる。S P 9 内の礫の方がかなり多いことから、もともとは規模の大きい集石遺構であったことが想定される。礫は破碎しているものが多く、赤化しているものもある。

S I 12 (第 41 図)

第 層の散礫中で検出された。周辺より密に集まっているため、集石遺構であると認定した。S I 13 と隣接している。礫は破碎しており、赤化の見られるものもある。他のものと比較すると疎であるといえる。

・ S I 12 出土遺物 (第 41 図)

縄文時代早期の深鉢の口縁部 (118) が出土した。立ち上がりは、やや内湾気味で外面と端部に貝殻腹縁による刺突文がある。

S I 13 (第 40 図)

S I 12 と隣接して、散礫中で検出された。S I 12 と比較すると、規模が大きいの。礫は 20cm 大のものが数個あるほかは、5 ~ 10cm 大のものが多く、密度が高い。礫は破碎し、赤化しているものもある。

S I 14 (第 41 図)

第 層で検出された。集石遺構が集中しているところから 5 m ほど離れた地点にある。礫は 5 ~ 10cm 大で、破碎しており、中央部のものは赤化している。

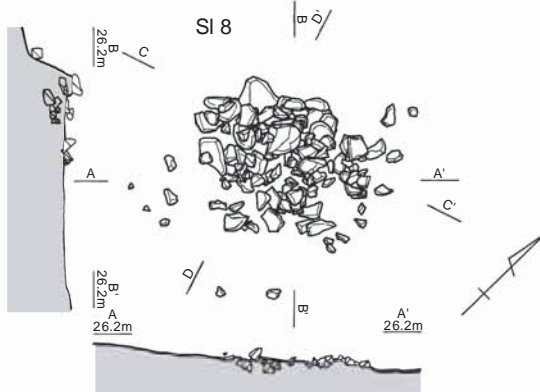
D 類

S I 7 (第 41 図)

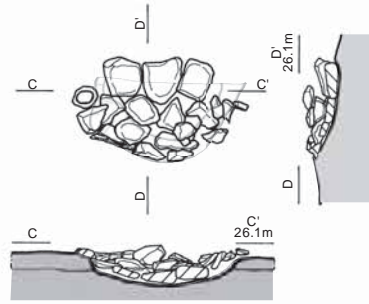
F - 1 区の風倒木内の第 層で検出。礫の集中範囲は、L 字型に曲がって、比較的大きく広がっている。掘り込みは礫の範囲と比べ、大きく広がり、深く、いびつな形をしている。礫は破碎し、赤化しているものが多いが、下部で見つかるものほどそうした傾向が見られる。また、礫は上部に大きめで平らなものが多く見られ、掘り下げるに従って、小さいものが多くなった。

このことから、本来は配石を伴った比較的大きい集石遺構で、風倒木の影響を受け、層ごとバックされたような状態で上下が逆転した可能性が高い。

< A類 >



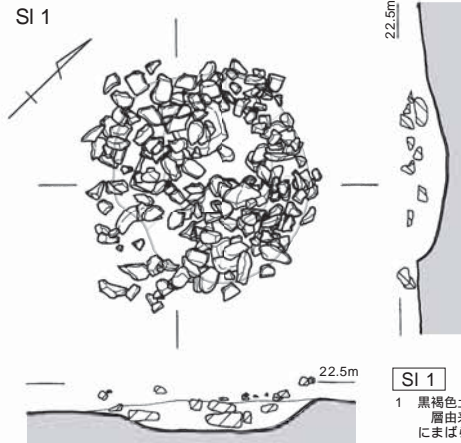
SI 8 配石



C-C', D-D' は
配石の断面線

< B類 >

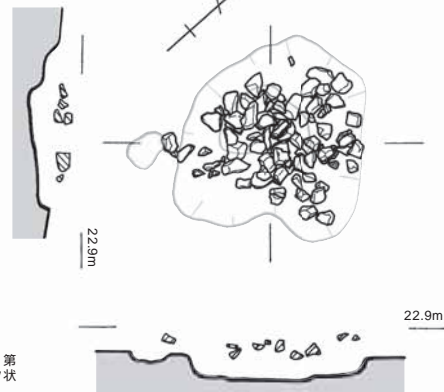
SI 1



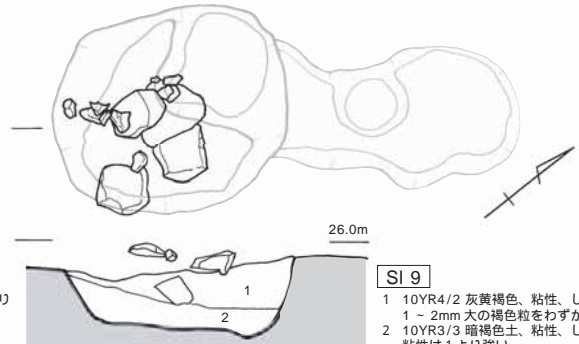
SI 1

1 黒褐色土、粘性、しまりともに弱い、第
層由来と思われる褐色土がブロック状
にまばらに含まれる

SI 3



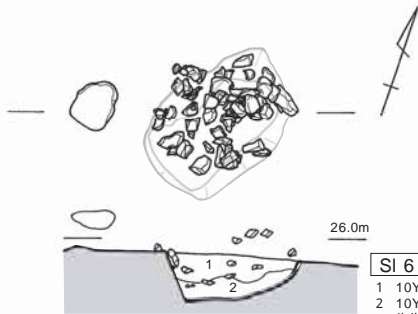
SI 9



SI 9

1 10YR4/2 灰黄褐色、粘性、しまりともに強い、
1 - 2mm 大の褐色粒をわずかに含む
2 10YR3/3 暗褐色土、粘性、しまりともに強い、
粘性は1より強い

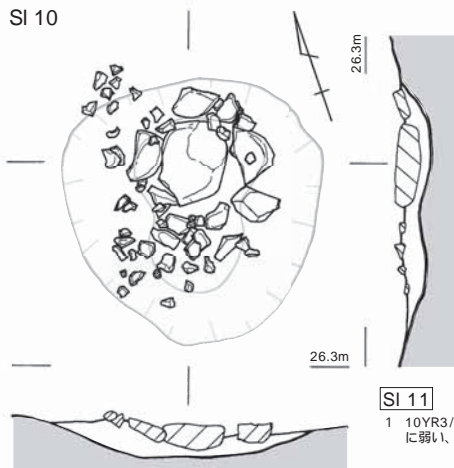
SI 6



SI 6

1 10YR4/4 暗褐色土、粘性、しまりあり
2 10YR4/4 暗褐色土、粘性は1層より
やや強い、しまりあり、A Tを粒状に
10%程度含む

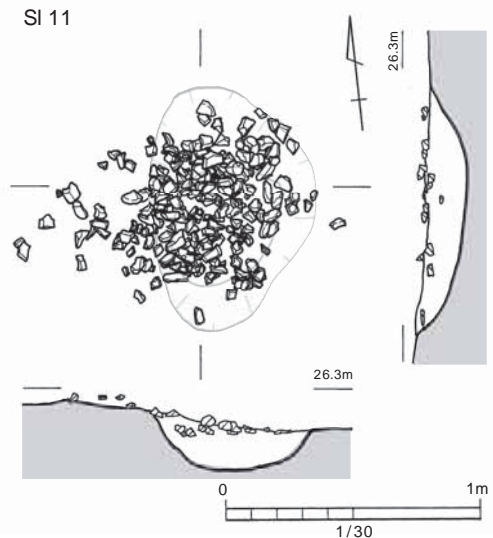
SI 10



SI 11

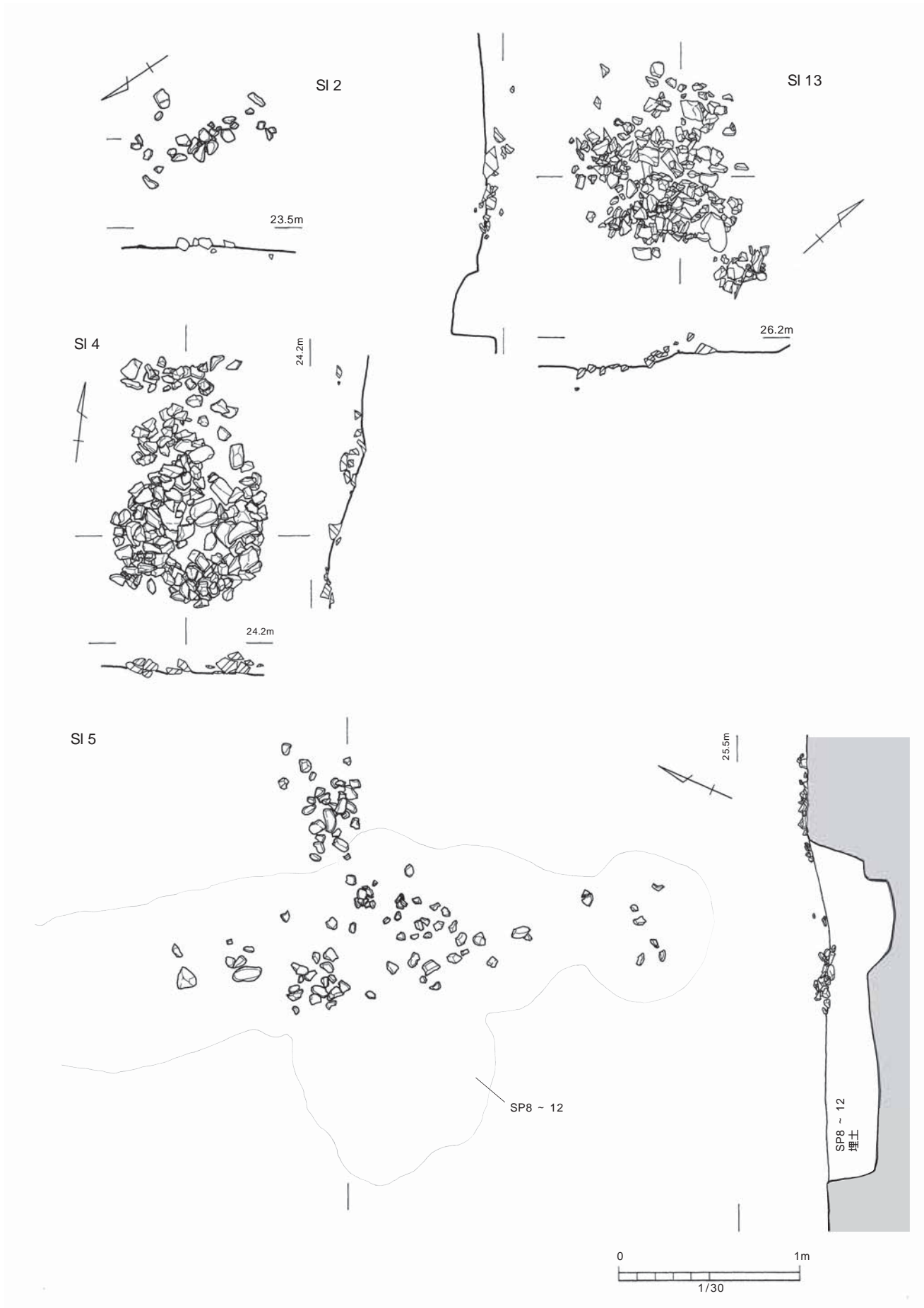
1 10YR3/3 暗褐色土、粘性、しまりとも
に弱い、褐色ブロックをまばらに含む

SI 11



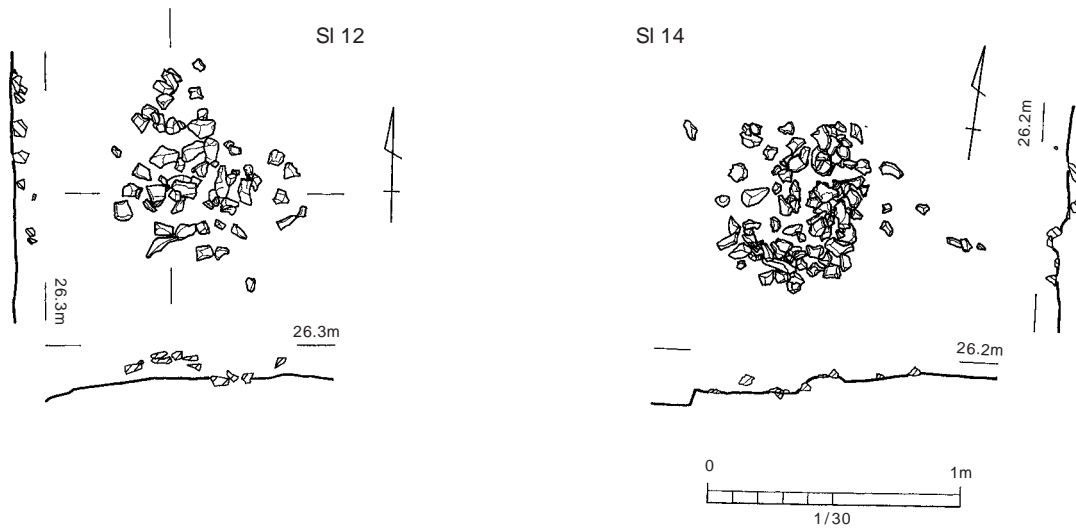
第 39 図 集石遺構実測図 (1)

< C類 >

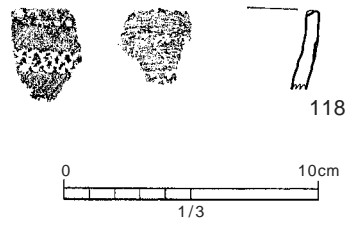


第 40 図 集石遺構実測図 (2)

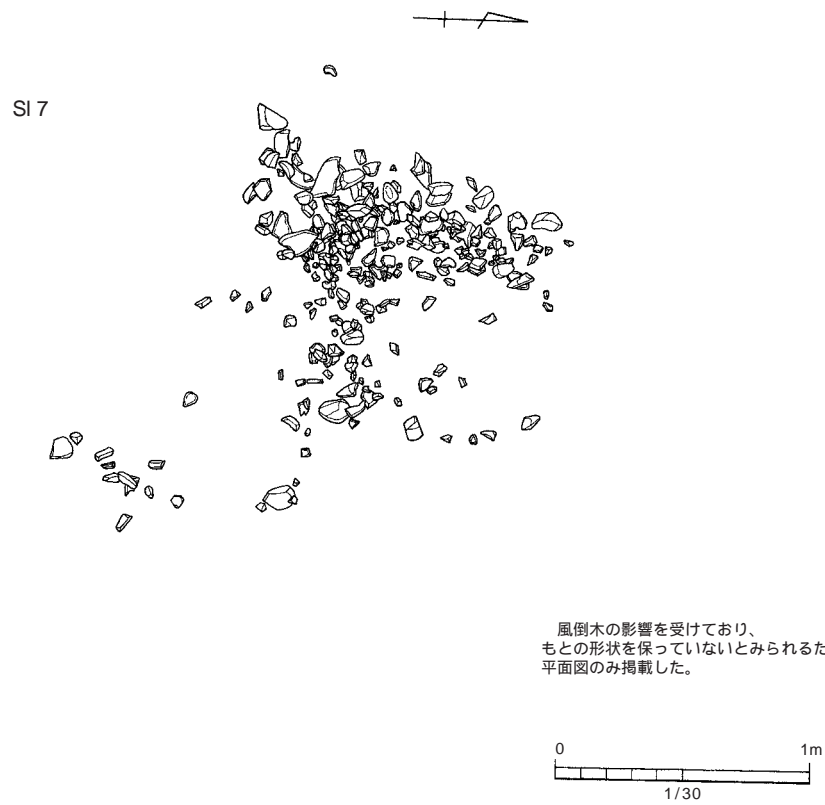
< C類 >



SI 12 出土遺物



< D類 >



第 41 図 集石遺構実測図 (3) 及び集石遺構出土遺物実測図

炉穴（第 15 表）

F 区の第 層にて、切り合った炉穴が 4 群（17 基）単独 5 基の計 22 基が検出された。炉穴の床面は、第 層（A T）または第 層上部であり、すべての炉穴で焼土が見られた。規模・形状は約 2 m × 約 1 m の楕円形のものが多く見られた。

第 2 次調査に倣い、炉穴同士が切り合っているものを A 類、単独のものを B 類とする。

A 類

S P 6・7（第 42 図）

表土直下の第 層で検出された。掘削を進めるに従って、両者は第 層の土を天井とするトンネル状の横穴で繋がっており、S P 6・7 とともに焼土部分があることが判明した。断面の状況などから、両者は同時に存在したか、S P 6 S P 7 の順に作られたと考えられる。床面は、ともに第 層（A T）である。S P 6 の平面の形状は直径約 0.5 m の円形である。焼土部分は中央よりやや S P 7 側に寄っている。

S P 7 は焼土部分から東に約 1.6 m、南に約 1.7 m 延びる、L 字形の形状である。東側の床面は A T ま

たは白斑ロームで、外側に向けて少しずつ高くなっている。2 方向の煙道を持つ炉穴であると思われるが、2 つの煙道が同時期にあったのか、煙道を作り直したのかは判断できなかった。S P 7 から、縄文時代早期の土器片が出土した。S P 7 の焼土中から出土した炭化材の ¹⁴C 年代測定では、9,230 ± 30 年 B P（B C 8,550 ~ 8,320 年）樹種同定では S P 6・S P 7 から出土したものについて、どちらもクリとの結果が出ている。

S P 8 ~ 12（第 42 図）

S P 8 ~ 12 の 5 基の炉穴が列状に切り合う形で検出された。S P 8・9・11 は第 層で、S P 10 は方形の攪乱掘削中に、S P 12 は S P 11 の掘削中、下部壁面から床面でそれぞれ検出された。

検出時、S P 9 の埋土正面に礫が多数検出していた状況は、前述 S I 5 の記述のとおりである。S P 9・10 と S P 11 の北半分の床面は A T がブロック状に多く見られるが、S P 8・12 と S P 11 の南半分の床面は A T がほとんど見られない小礫が混じった土で、第 層下部から第 層上部とみられる。断面の

第 15 表 縄文時代早期炉穴一覧表

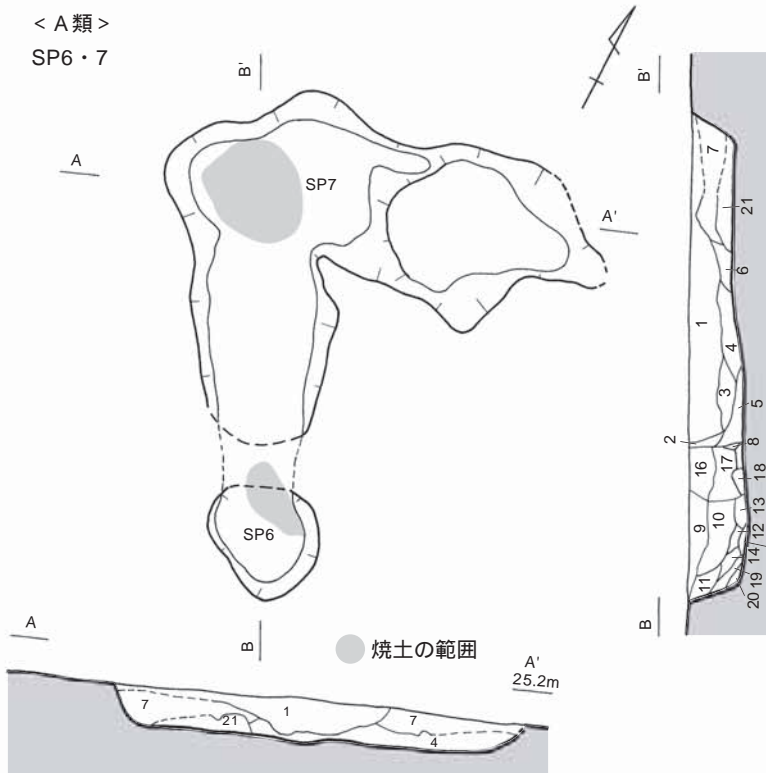
遺構	出土位置 〔グリッド〕	検出面 〔層〕	遺構規模〔m〕			床面 〔層〕	分類
			長径	短径	深さ		
S P 1	I 11		1.9	1.0	0.3		B
S P 2	H 12		(4.0)	2.2	0.2		B
S P 3	G 15	攪乱下	2.5	1.2	0.4		B
S P 4	G 15		2.0	1.5	0.3		B
S P 5	F 14	攪乱下	1.9	(0.8)	0.3		B
S P 6	F 15		0.6	0.5	0.3		A
S P 7	F 15		2.4	0.8	0.3		A
S P 8	F 15		0.8	0.8	0.5		A
S P 9	F 15		(3.4)	0.9	0.3		A
S P 10	F 15		1.1	1.1	0.3		A
S P 11	F 15		(3.5)	0.9	0.5		A
S P 12	F 14		2.1	0.9	0.4		A
S P 13	F 14		2.2	1.0	0.4		A
S P 14	F 14		(2.1)	1.0	0.4		A
S P 15	F 14		(2.0)	1.0	0.3		A
S P 16	E 14		(2.1)	1.0	0.4		A
S P 17	E 14				0.5		A
S P 18	E 14		2.3	0.7	0.5		A
S P 19	E 14		1.1	0.9	0.5		A
S P 20	E 14		(1.8)	0.7	0.4		A
S P 21	E 14		(2.1)	0.8	0.4		A
S P 22	E 14		(1.8)	0.8	0.4		A

グリッドをまたぐ場合は、焼土のあるグリッドを記載。

() は切り合いなどで正確な長さが測定できないため、推定した長さ。

S P 17・18 の境目ははっきりしないため、2 つを合わせた規模を記載。

< A類 >
SP6・7



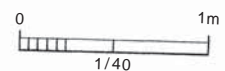
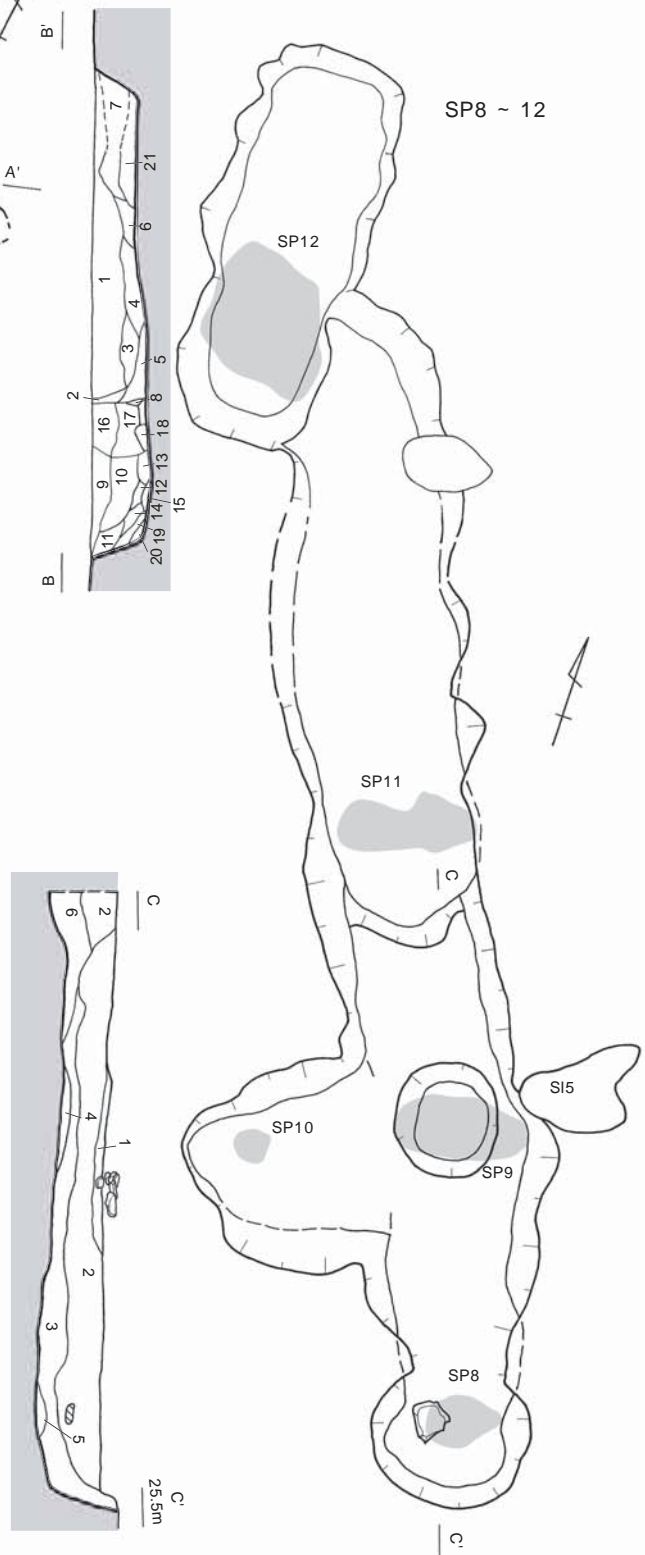
SP 6・7

- 1 10YR2/3 黒褐色土、粘性ややあり、しまり弱い、褐色土をブロック状に少し含む
- 2 10YR3/4 暗褐色土、1層よりしまりが強い
- 3 10YR3/3 暗褐色土、1層よりしまりがやや強く、砂状である
- 4 10YR3/4 暗褐色土、粘性弱い、しまりあり、褐色土をブロック状に30%含む
- 5 10YR4/4 褐色土、粘性あり、しまりやや強い、下部に向けやや黄色味が増す
- 6 10YR3/3 暗褐色土、粘性なし、しまり弱い、焼土を粒状に含む、1層より砂状である
- 7 10YR3/3 暗褐色土、固くしまっている、焼土を含み、全体に赤っぽい
- 8 10YR3/3 暗褐色土、粘性ややある、やわらかい、5層よりさらに暗い
- 9 10YR3/3 暗褐色土、1層とよく似ている
- 10 10YR3/3 暗褐色土、粘性なし、褐色土が入らず9層より暗い、下部に焼土を粒状に含む
- 11 10YR4/4 褐色土、粘性あり、しまり強い、第 層と思われる、崩れて入ったか
- 12 10YR3/3 暗褐色土、粘性弱い、しまり弱い、焼土を粒状にわずかに含む
- 13 10YR3/3 暗褐色土、しまりあり、焼土を粒状・ブロック状に40%程度含む、砂状でざらざらしている
- 14 10YR3/4 暗褐色土、粘性なし、しまり弱い、第 層が混ざったか
- 15 7.5YR5/8 明褐色土、しまり強い、凹状部分に暗褐色土を含む、砂状でざらざらしている
- 16 10YR4/4 褐色土、粘性あり、しまり強い、第 層に近いが、やや黒っぽい
- 17 10YR3/3 暗褐色土、10層より少し明るい、焼土粒はない
- 18 10YR4/4 褐色土、粘性強く、しまりはややある、ATのブロックがみられる、第 層か
- 19 10YR3/4 暗褐色土、1層よりやや明るい
- 20 10YR4/4 褐色土、白斑ローム、AT層の凹みに黒褐色土が混ざる
- 21 7.5YR5/8 明褐色土、しまり強い、焼土か

SP 8 ~ 11

- 1 10YR3/1 黒褐色土、粘性、しまりともに強い、クラックを生じる、礫はこの層の上面に出土する
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土、粘性強く、しまりは1層よりやや弱い、AT粒・ブロック、1mm大の炭化材を含む
- 3 10YR3/3 暗褐色土、粘性、しまりともにやや強い、1層より色調が明るい、AT粒、1mm大の炭化材を含む
- 4 10YR3/3 暗褐色土、粘性強く、しまりやや強い、1~2mm大の焼土粒(明赤褐色土2.5YR5/6)を多量に含む
- 5 10YR3/2 黒褐色土、粘性弱く、しまりやや強い、1~2mm大の焼土粒(明赤褐色土2.5YR5/6)をまばらに含む
- 6 10YR3/3 暗褐色土、3層に似た土、AT粒、1mm大の炭化材を含む
- 7 粘性、しまりともに弱い、1mm大の炭化材を多量に含む、焼土粒をまばらに含む

SP8 ~ 12



第 42 図 炉穴実測図 (1)

状況などから、S P 12 S P 11 S P 9の順に作られたことが判明した。S P 10はS P 9に切られており、S P 9以前のものであることが分かる。

S P 8は断面からS P 9との先後関係を明らかにすることはできないが、両者の間に壁面の張り出しがあることから、同時期に存在し、トンネル状に繋がっていた可能性がある。

S P 10は上部で攪乱の影響を受けており、床面にわずかに焼土が残る程度である。

S P 11はS P 9とほぼ同規模の大きな楕円形であり、その床面は焼土のある南半分より北半分の方が高いことから、焼土から北の方向に煙道が延びていたと思われる。

S P 12も、焼土部分より床面が高くなりながら北に延びていることから、この方向に煙道が延びていたと考えられる。

・S P 9出土遺物(第43図)

深鉢の胴部(119)が出土した。底部に近い部位である。外面は貝殻条痕文である。

・S P 11出土遺物(第43図)

深鉢の口縁部(120)がある。端部は平坦に面取りされる。内外面はナデ調整される。胴部(121)の内外面はナデ調整される。122の外面は貝殻条痕文である。

砂岩製の石皿(123)は平面方形で、断面は矩形である。短辺部は欠損する。磨面は上面全体にひろがる。

・S P 12出土遺物(第43図)

砂岩製の石皿(124)は平面五角形状だが、短辺矩形の扁平な転石を利用する。磨面は上下面にある。

S P 15 ~ 22(第44図)

第層で検出された。南北方向約6m、東西方向約45mの規模の大きい炉穴群である。S P 15 ~ 22の8基の炉穴が切り合う。土層断面の状況などから、S P 15 S P 16 S P 17・18 S P 21 S P 22の順に作られ、S P 19はS P 20・S P 21よりも後に作られたことがわかった。よって、S P 15またはS P 20が最初に作られたのち、南方向に繰り返し利用され、最後に作られたのはS P 22またはS P 19であると思われる。ほとんどが約2m×約1mの楕円形であるが、S P 19だけが直径約1mの円形をしている。

S P 17はS P 18の掘削中、礫の下から焼土が検出されたもので、S P 17とS P 18の境目や先後関係ははっきりしない。周囲の炉穴が1つの焼土を持つものであることから別遺構と考えたが、2つの焼土を持つ炉穴である可能性は残る。S P 20は風倒木の影響を受け、北側の壁面の上部が張り出している。

S P 21・22は、検出時土坑またはピットと思われたが、焼土が検出されたため、炉穴と確認した。S P 21は焼土部分から北へ、S P 22は東へ延びており、この方向に煙道が作られたと思われる。S P 21の焼土はS P 22に切られている。さらにS P 21はS P 19とも切り合っているが、S P 19の壁面はS P 21と接するところでも残っており、S P 21はS P 19・22以前に作られたと推定される。

・S P 16出土遺物(第43図)

チャートの打製石鏃(125)が出土した。平面略三角形で、基部は凹基となる。

・S P 17出土遺物(第43図)

126は尾鈴山酸性岩類製の磨石である。一部欠損する。使用痕は上下両側面に認められる。

・S P 18出土遺物(第45図)

砂岩製の石核(127)がある。略方形の礫を周縁より打撃を加えて剥片の獲得を行う。

・S P 22出土遺物(第45図)

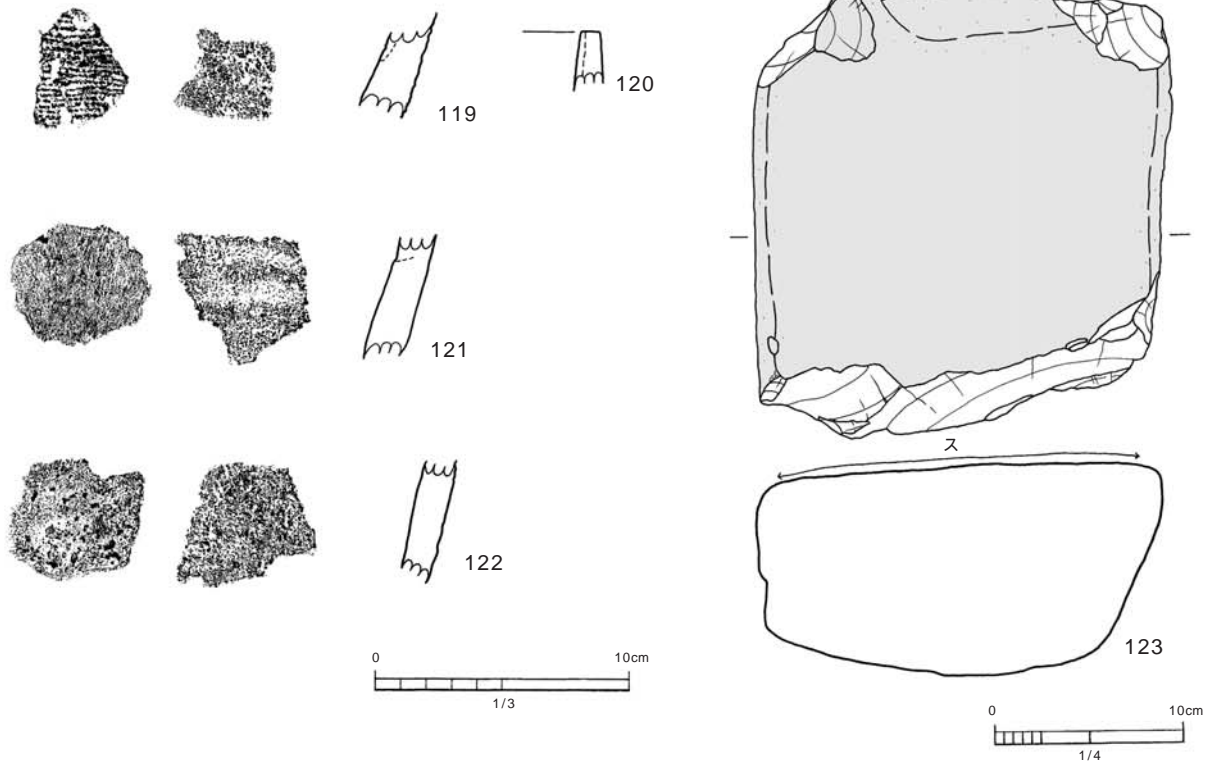
深鉢の口縁部(128)、磨石(129)、台石(130)と石皿(131)が出土した。128の端部は平坦で、肥厚気味である。129の両側面は磨耗が進み直線的となる。ホルンフェルス石材とする。130・131の石材は砂岩である。ともに上面に潰打痕があばた状に点在する。

その他、S P 20から縄文時代早期の土器片が、S P 19から石皿が出土した。

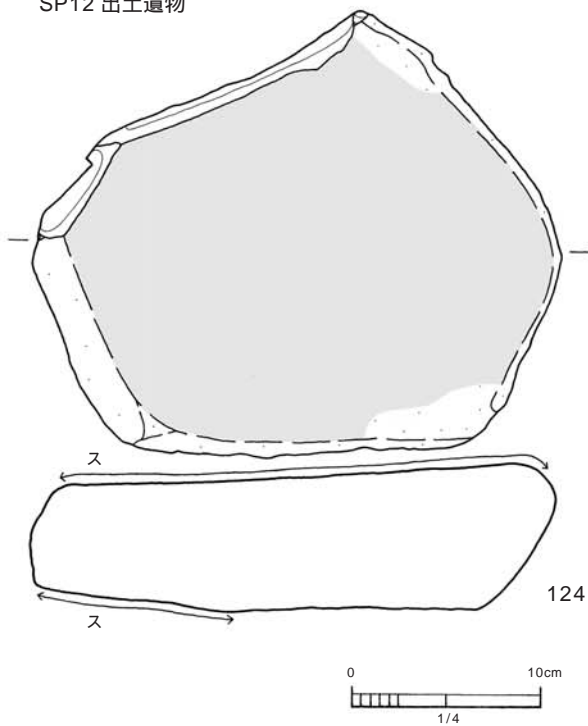
S P 13・14(第44図)

第層で検出された。床面はともに第層であり、埋土にA Tを粒状に含んでいる。最深部はS P 13がS P 14より約0.3m深い。断面の状況から、S P 13の方が後に作られたことがわかる。ともに約2m×約1mの楕円形であり、焼土中に炭が粒状に見られる。焼土部分は、S P 14ではほぼ中央にあるのに対して、S P 13では東に寄ったところで見られた。

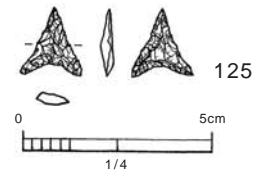
SP9・11 出土遺物



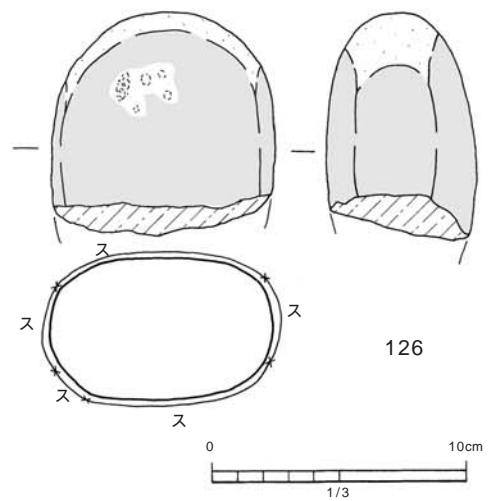
SP12 出土遺物



SP16 出土遺物

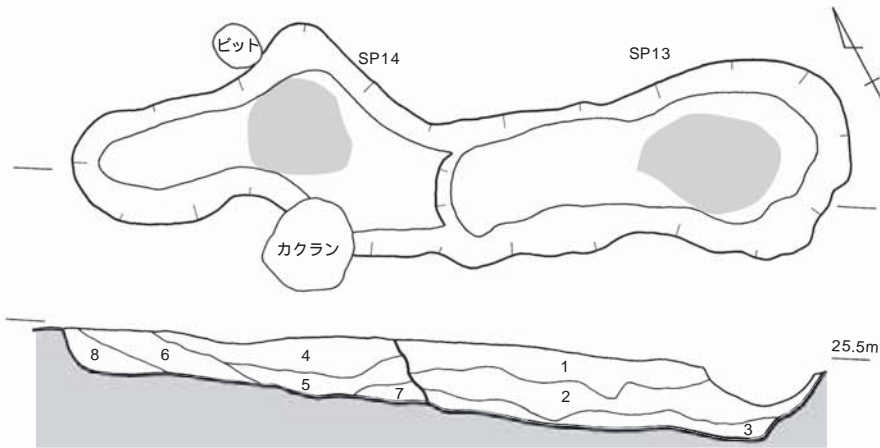


SP17 出土遺物



第 43 図 炉穴出土遺物実測図 (1)

SP13・14



SP 13・14

- 1 10YR4/4 褐色土、粘性あり、しまりあり、大小の礫を含む、ATを粒状にわずかに含む
- 2 10YR3/4 暗褐色土、粘性は1層より弱い、1層より少し強い、1層より大きいAT程を少し含む、赤化した土を粒状にわずかに含む
- 3 10YR4/6 褐色土、粘性ややあり、しまり少し強い、赤化した土を5%程度含む、2層をブロック状に40%含む、炭を粒状にわずかに含む
- 4 10YR4/4 褐色土、粘性はやや弱い、しまり弱い、小礫を少し含む
- 5 10YR4/4 褐色土、粘性は4層よりやや強い、しまりやや強い、小礫を少し含む、赤化した土を粒状に少し含む
- 6 10YR4/4 褐色土、粘性ややあり、しまりあり、小礫を少し含む（4層より少ない）、ATをブロック状に少し含む
- 7 3層と同様だが、暗褐色土の割合がやや少なく（20%程度）こなれている
- 8 10YR4/6 褐色土、粘性あり、しまりあり、第1層（地山）に近いが底面よりやや暗い、小礫を少し含む

SP 15・16・18・21

- 1 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりは8層より強い
- 2 10YR3/4 暗褐色土、粘性ややあり、しまりあり、焼土を粒状に少し含む
- 3 10YR4/4 褐色土、粘性ややあり、しまりあり、1層よりやや暗い
- 4 10YR4/6 褐色土、粘性ややあり、しまり弱い、第1層よりやや暗い、ATをブロック状に10%程度含む
- 5 10YR3/4 暗褐色土、粘性ややあり、しまりは3層より弱い、褐色土（第1層）をブロック状に含む
- 6 10YR4/4 褐色土、粘性あり、しまり弱い、焼土をブロック状に10%程度含む
- 7 10YR4/4 褐色土、粘性は5層より強い、しまりややあり、床面（第1層）よりやや暗い、焼土粒・ブロック、小礫を少し含む
- 8 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともにやや弱い、北に行くと黄色が増す
- 9 10YR3/4 暗褐色土、粘性ややあり、しまり弱い、灰色の土（被熱土）を少し含む、炭を粒状に含む
- 10 10YR4/4 褐色土、粘性あり、しまりあり、8層よりやや暗い、炭を粒状に含む
- 11 10YR3/4 暗褐色土、粘性は10層より弱い、しまりあり、第1層に近い、炭を粒状に少し含む
- 12 10YR4/4 褐色土、粘性あり、しまり弱い、11層よりやや暗い
- 13 10YR4/6 褐色土、粘性ややあり、しまりあり、ATをブロック状にわずかに含む
- 14 10YR3/4 暗褐色土、粘性ややあり、しまりは13層より強い、黄色の粒をわずかに含む
- 15 10YR3/4 暗褐色土、14層に炭を粒状にわずかに含む
- 16 10YR4/6 褐色土、粘性ややあり、しまりあり、ATをブロック状に50%程度含む、底の方には焼土がみられる
- 17 10YR2/3 黒褐色土、粘性は15層より強い、しまりあり、炭を粒状に少し含む、焼土を粒状にわずかに含む
- 18 10YR3/3 暗褐色土、17層に第1層が50%程度混じる、小礫を少し含む、ATをブロック状に少し含む
- 19 10YR3/4 暗褐色土、粘性は14層より弱い、14層よりわずかに明るい
- 20 10YR4/4 褐色土、粘性あり、しまりあり、ATをブロック状に10%程度含む
- 21 10YR4/4 褐色土、粘性ややあり、しまりあり、第1層由来か
- 22 10YR3/4 暗褐色土、粘性弱い、しまりあり
- 23 10YR3/4 暗褐色土、粘性は22層より少し強い、22層より少し暗い
- 24 10YR4/4 褐色土、粘性は23層より少し弱い、しまりあり
- 25 10YR4/6 褐色土、粘性やや強い、しまりあり、褐色土（10YR4/4）を40%程度含む、明黄褐色土（10YR6/0）をブロック状に少し含む
- 26 10YR4/4 褐色土、粘性は22層よりやや弱い、しまりあり、第1層由来か

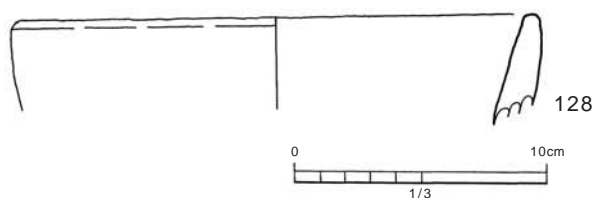
SP15・22



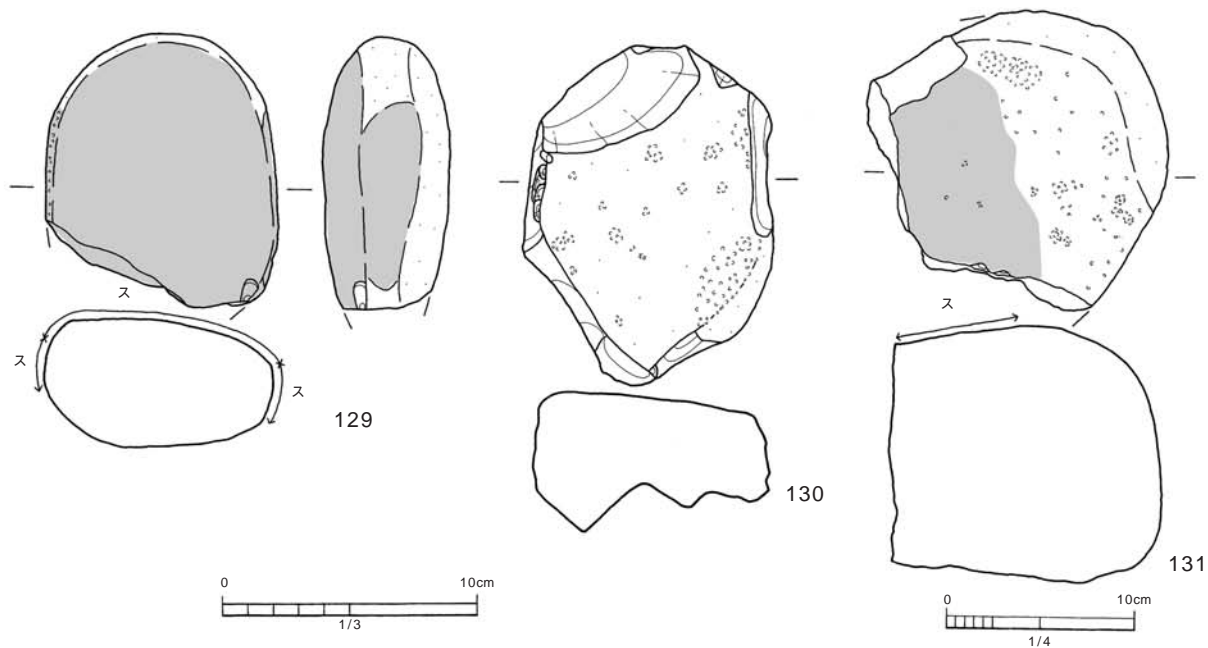
SP 19・20

- 1 10YR3/4 暗褐色土、粘性ややあり、しまりあり、炭が粒状に混じる、褐色土がわずかに混じる、第1層由来か
- 2 10YR4/4 暗褐色土、粘性は1層より弱い、しまりあり、炭が粒状に混じる、第1層よりやや暗い
- 3 10YR3/4 暗褐色土、粘性ややある、しまりは2層より弱い、2.5YR5/8 明赤褐色土と炭を粒状にわずかに含む
- 4 10YR4/4 褐色土、粘性はやや弱い、しまりあり、2.5YR5/8 明赤褐色土（5:5）を含む
- 5 10YR4/4 褐色土、粘性は2層より弱い、2層よりやや暗い
- 6 10YR3/4 暗褐色土、粘性は弱い、しまりは3層より弱い、2.5YR5/8 明赤褐色土（焼土）をブロック状に含む、全体がやや赤っぽく見える
- 7 10YR3/4 暗褐色土、粘性ややあり、しまりあり、1層より黄色っぽい
- 8 10YR3/4 暗褐色土、粘性は7層より強い、しまりあり、2.5YR5/8 明赤褐色土をわずかに粒状に含む、1層と同じような色
- 9 10YR3/4 暗褐色土、8層と同様だが、粘性は8層より弱い、焼土はみられない
- 10 10YR4/4 褐色土、5と同様
- 11 10YR4/6 褐色土、粘性ややあり、しまり弱い、10層よりやや明るい
- 12 5YR5/4 にぶい赤褐色土、粘性弱い、しまりは11層より強い、焼土層か

第44図 炉穴実測図(2)

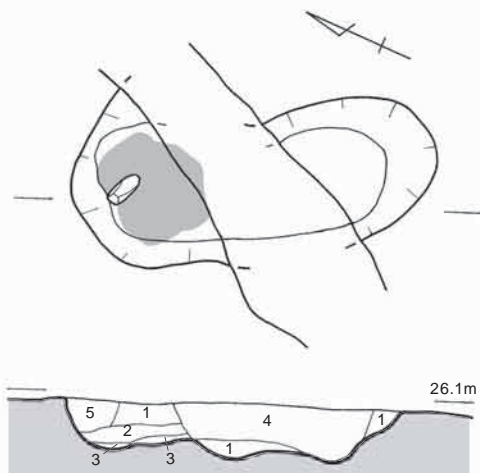


SP22 出土遺物



第 45 図 炉穴出土遺物実測図 (2)

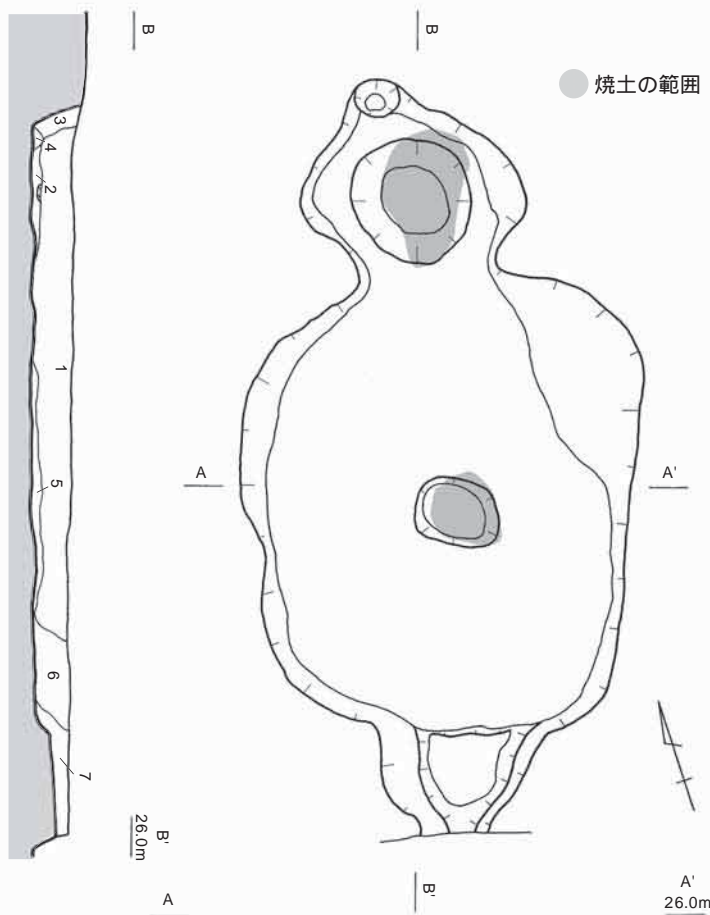
< B 類 >
SP1



SP 1

- 1 10YR4/3 に近い黄褐色土、粘性弱い、しまりやや強い、0.5 - 1mm 大の褐色粒を多く含む
- 1' 1層に色調や特長が非常に類似した土
- 2 10YR3/2 黒褐色土、粘性、しまりともに強い、0.5 - 1mm 大の褐色粒を多く、1 - 2mm 大の焼土粒をまばらに含む、焼土上の黒色面か
- 3 10YR3/3 暗褐色土、焼土粒、粘性、しまりともに強く、を多く含む
- 4 10YR3/1 黒褐色土、粘性、しまりともに弱い、攪乱埋土
- 5 10YR3/1 黒褐色土、粘性、しまりともに弱い、攪乱埋土

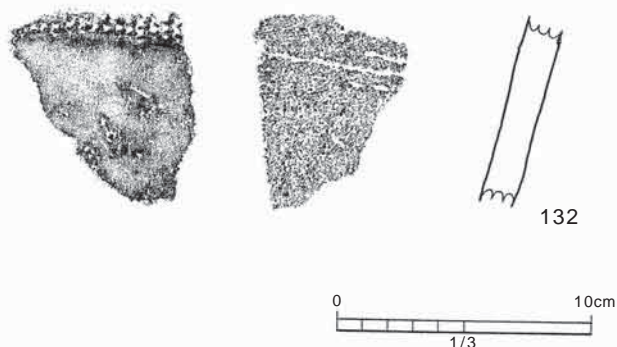
SP2



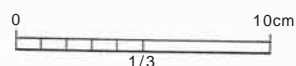
SP 2

- 1 10YR3/1 黒褐色土、粘性、しまりともに強い、1 - 2mm 大の焼土粒をわずかに含む
- 2 10YR3/2 黒褐色土、非常に固くしまる、1 - 2mm 大の焼土粒を多く含む
- 3 10YR4/3 暗褐色土、粘性、しまりともに弱い
- 4 10YR3/3 暗褐色土、粘りは弱い、しまり強い、1 - 2mm 大の焼土粒、褐色ブロックをまばらに含む
- 5 10YR5/4 に近い黄褐色土、粘りは強い、しまり弱い、第 1 層に類似、アカホヤのブロックをまばらに含む
- 6 10YR4/4 褐色土、粘りは弱い、しまり強い、1 - 2mm 大の焼土粒と褐色ブロックをわずかに含む
- 7 10YR4/2 灰黄褐色土、粘りは弱い、しまり強い、褐色ブロックをまばらに含む、基本層序の第 1 層に類似する土

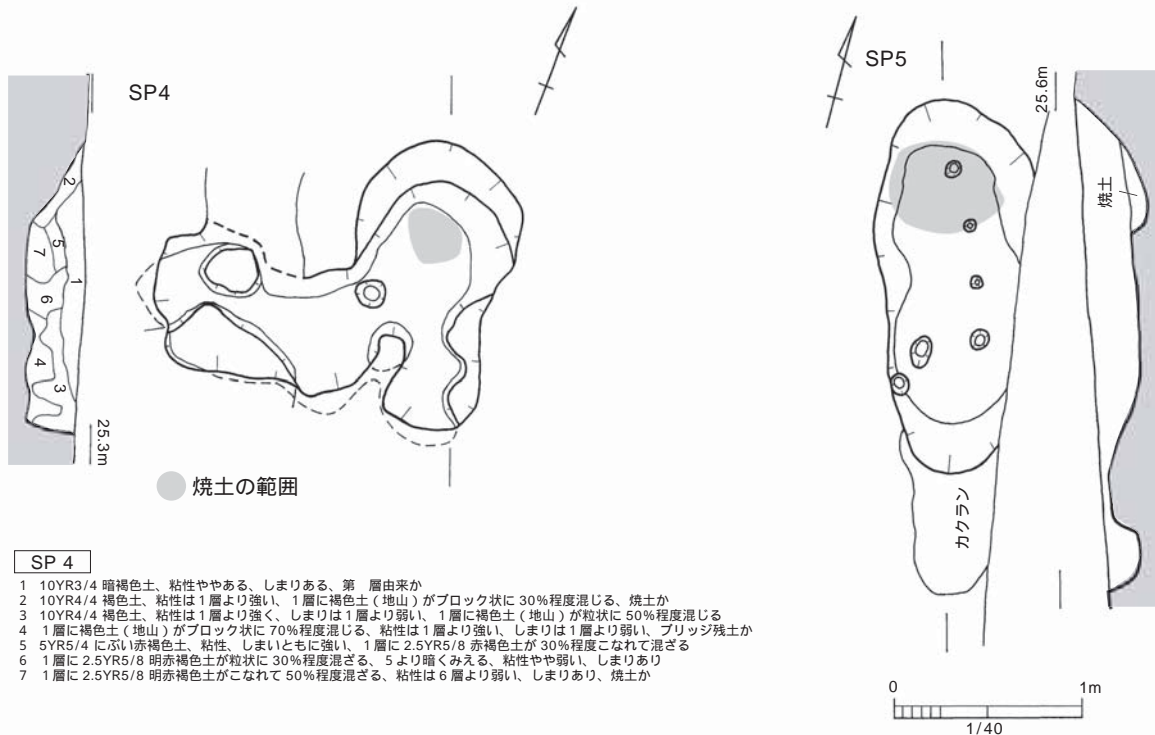
SP2 出土遺物



SP3



第 46 図 炉穴実測図 (3) 及び炉穴出土遺物実測図 (3)



SP 4

- 1 10YR3/4 暗褐色土、粘性ややある、しまりある、第 層由来か
- 2 10YR4/4 褐色土、粘性は1層より強い、1層に褐色土(地山)がブロック状に30%程度混じる、焼土か
- 3 10YR4/4 褐色土、粘性は1層より強く、しまりは1層より弱い、1層に褐色土(地山)が粒状に50%程度混じる
- 4 1層に褐色土(地山)がブロック状に70%程度混じる、粘性は1層より強い、しまりは1層より弱い、ブリッジ残土か
- 5 5YR5/4 に近い赤褐色土、粘性、しまいともに強い、1層に2.5YR5/8 赤褐色土が30%程度こなれて混ざる
- 6 1層に2.5YR5/8 明赤褐色土が粒状に30%程度混ざる、5より暗くみえる、粘性やや弱い、しまりあり
- 7 1層に2.5YR5/8 明赤褐色土がこなれて50%程度混ざる、粘性は6層より弱い、しまりあり、焼土か

第 47 図 炉穴実測図 (4)

B 類

SP 1 (第 46 図)

第 層上面で検出された。約 2 m × 約 1 m の楕円形である。中央部を農業用の溝とみられる攪乱に切られている。床面のうち、焼土とみられる範囲には AT がブロック状に含まれており、焼土のない西側の床面は固い白斑ローム層であった。

SP 2 (第 46 図)

第 層で検出された。直径 1 m ほどの円形の部分と、約 3 m × 約 2 m の方形の部分からなる。長径が約 4 m と大きいことと、くびれた形状、2 つの焼土部分を持つことから、検出当初は 2 つの炉穴の切り合いとを考えていたが、断面の土層からは切り合い関係が確認できなかった。2 箇所まで火を用いていた規模の大きい 1 つの炉穴であるのか、2 つの独立した炉穴が同時期に埋まったものなのかは断定できない。床面には AT がブロック状に多く含まれる。円形の部分と方形の部分で、床面の高さには差はほとんど見られない。床面付近の埋土中から出土した炭化材の ¹⁴C 年代測定では 9,260 ± 30 年 B P (B C 8,610 ~ 8,340 年) 樹種同定ではクリとの結果が出ている。

・ SP 2 出土遺物 (第 46 図)

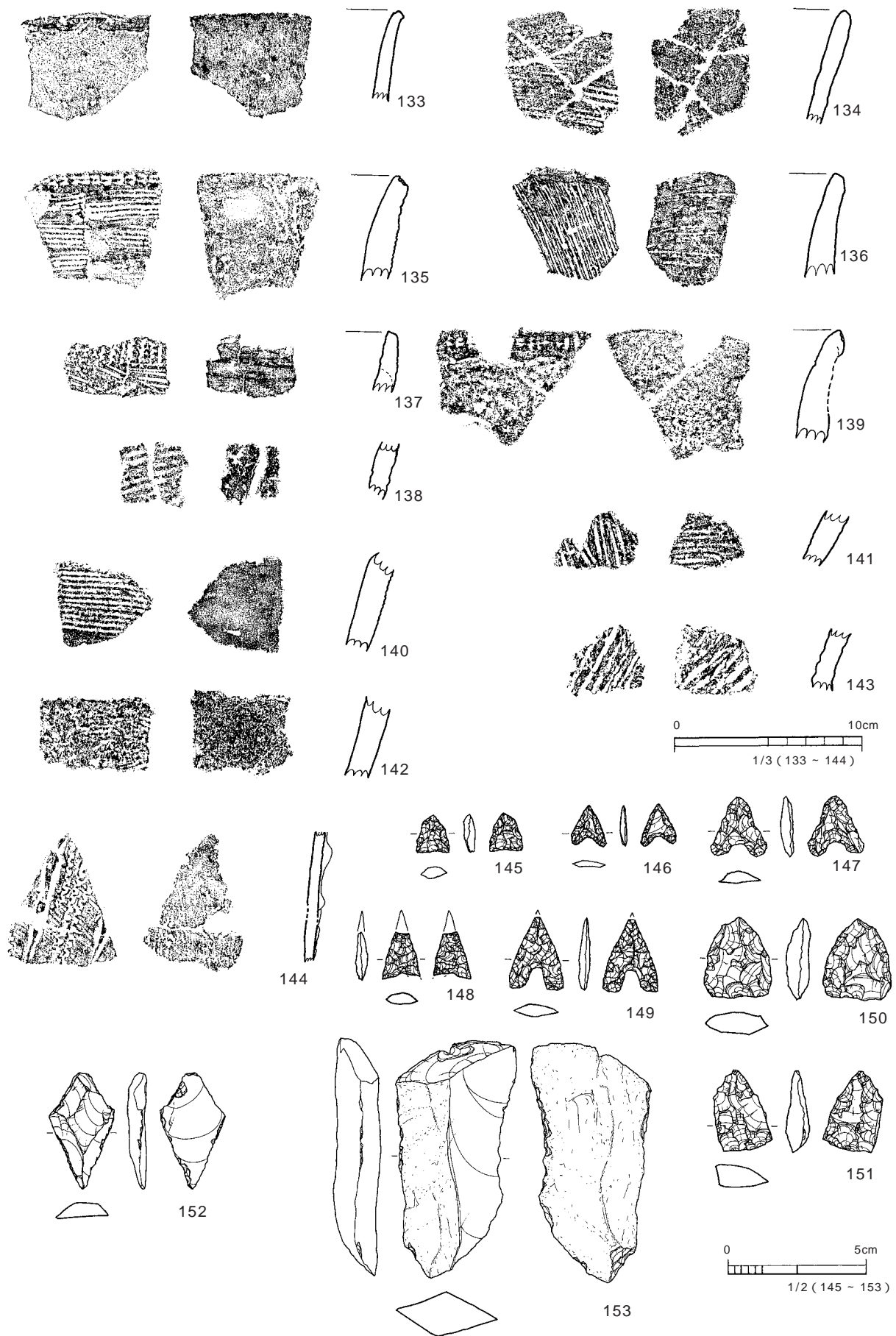
深鉢の胴部片 (132) が出土した。風化が著しく、器面は磨耗している。

SP 3 (第 46 図)

F 区の調査区境付近で、第 層で検出した農業用の溝とみられる攪乱を掘削していたところ、床面で焼土が検出されたため、炉穴であると確認した。焼土部分を持つ 2 つの落ち込みからなり、その間には第 層 (白斑ローム) がテラス状に高く残っている。南側の落ち込みは直径 0.6 m ほどの円形とみられるが、東半分は調査区外である。北側の落ち込みは直径約 1.2 m である。2 つの落ち込みがそれぞれ独立した遺構であった可能性もある。小礫の見られる層まで掘り込まれており、床面は第 層と判断した。

SP 4 (第 47 図)

第 層で検出された。焼土の見られる範囲から、南西方向 (弓状に 1.5 m) と、南方向 (1 m) の 2 方向に延びており、延びた先端部分は壁面が張り出している。2 つの煙道が同時期にあったのか、煙道を作り直したのかは確認できなかった。壁には白斑ロームや AT がテラス状に残っており、床面には AT がブロック状に残っている。



第 48 図 縄文時代早期包含層等出土遺物実測図 (1)

S P 5 (第 47 図)

農業用の溝とみられる攪乱を掘削したところ、床面で焼土が検出されたため、炉穴であると確認した。そのため、土層断面及び埋土の詳細の記録はとれなかった。床面は A T が少し残る第 層下部である。焼土は他の炉穴より炭を多く含むため黒みを帯びており、厚さは約 0.1 m である。縄文時代早期の土器片が出土した。

(3) 遺物

ここでは縄文時代早期の包含層や他時期の遺構埋土に混入した遺物を掲載した。

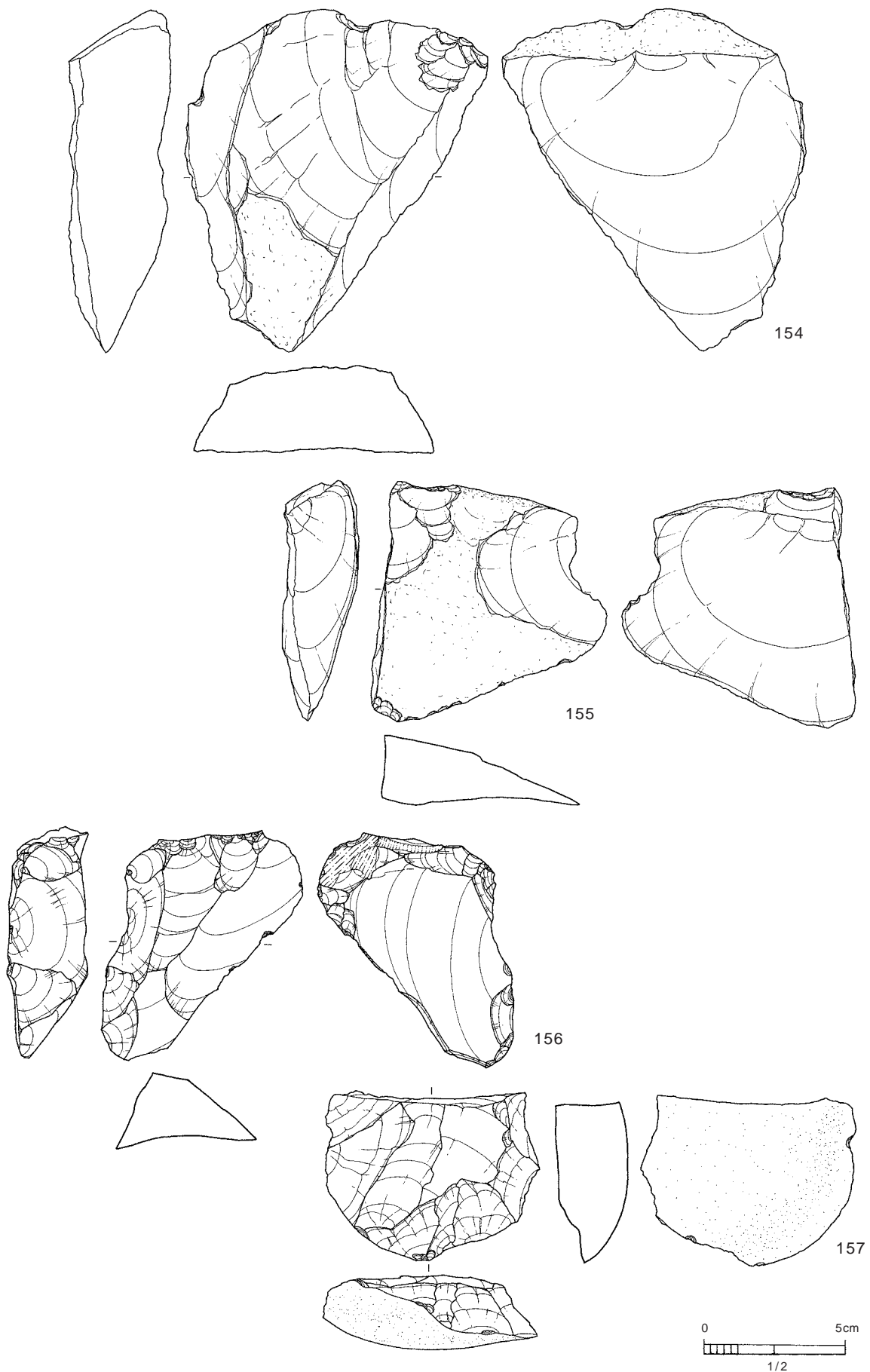
土器は深鉢の口縁部や胴部資料のうち 12 点を図化・掲載した(第 48 図)。133 ~ 137・139 は口縁部、それ以外は胴部である。133 は内外面をナデ調整する。134・135・137・139 の外面は貝殻条痕文、内面はナデ調整である。端部外面には貝殻腹縁による連続刺突文がある。これらは中原式土器に相当すると考えられる。136 の外面は櫛歯状工具による条線が認

められる。138・140 ~ 144 は胴部で、142 は押型文土器(山形文) 143 は手向山式土器、144 は天道ヶ尾(妙見)式土器に相当しよう。

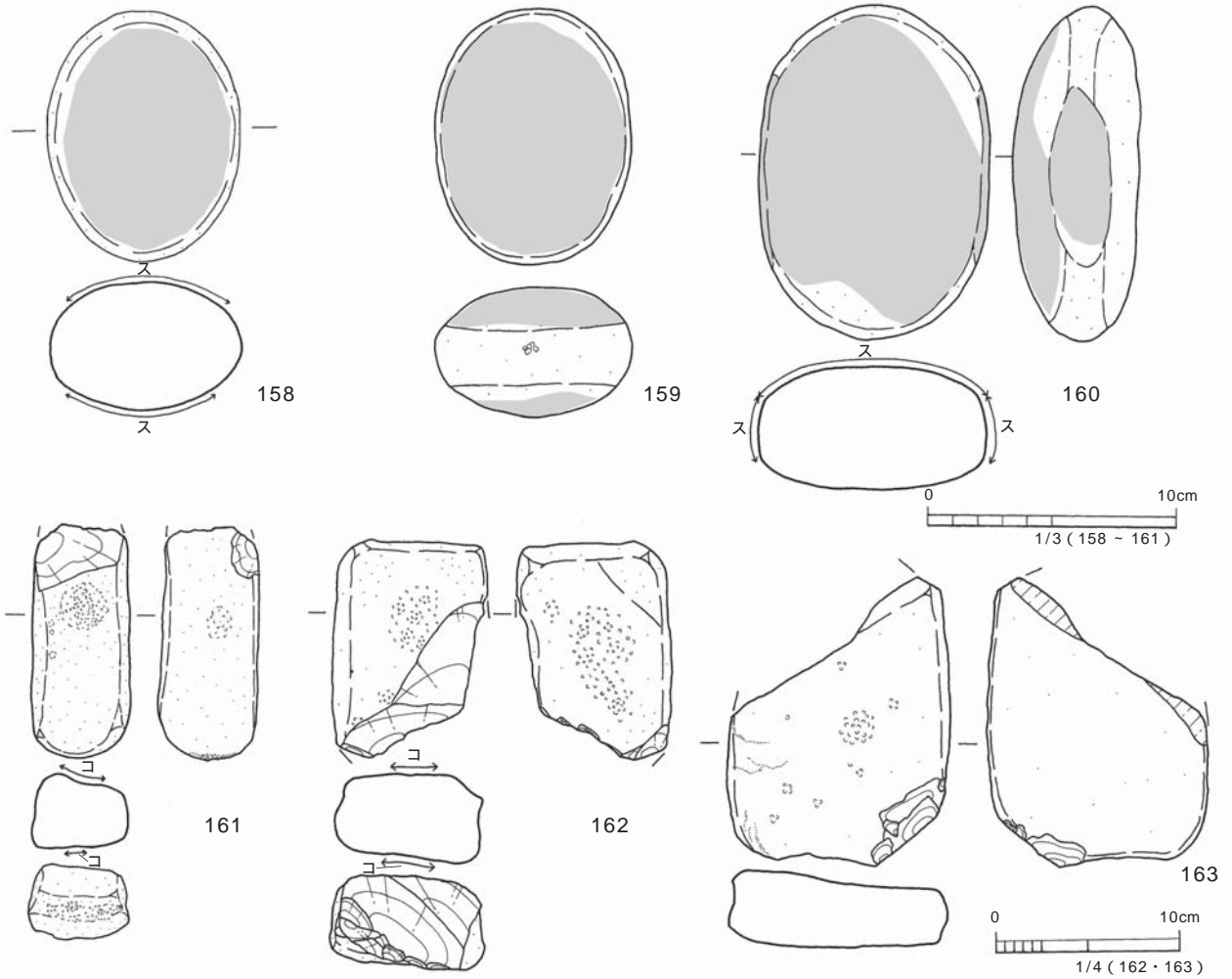
石器は打製石器類と磨石や台石類など 18 点を図化・掲載した(第 48 ~ 50 図)。打製石鏃(145 ~ 149) は平基や凹基、抉りを有する基部となる。150・151 はチャート製の尖頭形石器である。平面三角形で見た目は石鏃に近い。152 は微細剥離ある剥片である。珪質頁岩製で平面剣菱形を呈する。153 は二次加工剥片で石材は珪質頁岩である。154・155 は剥片で、石材は砂岩である。礫面を一部残す不定形を呈す。石核は珪質頁岩(156) 尾鈴山酸性岩類(157) がある。157 は礫面を裏面として周縁から打撃を加えている。158 ~ 160 は磨石で尾鈴山酸性岩類を石材とする。160 は側縁部も使用している。161 は敲石で棒状の砂岩を礫器とする。表裏中央と端部に使用痕が明瞭に残る。162・163 は台石である。扁平な砂岩の転石を利用する。上面中央には集中的な潰打痕が認められる。

第 16 表 縄文時代早期土器観察表

器種	部位	出土地点		手法・調整・文様		色調		胎土の特徴	備考 (法量: cm)
		[位置]	[層位]	外面	内面	外面	内面		
118	深鉢 口縁	SI12	埋土	貝殻腹縁文 端部: 貝殻刺突文	貝殻条痕文	橙 5 Y R 6/8	橙 5 Y R 6/8	2mm 以下の光沢粒を多く含む	
119	深鉢 胴	SP9	埋土	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙 7.5 Y R 6/4	黒褐 7.5 Y R 3/2	2mm 以下の透明な光沢粒・黒色の光沢粒、5mm 以下の橙色の粒、3mm 以下の灰色の粒を含む	
120	深鉢 口縁	SP11	床面	ナデ	ナデ	浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	1mm 以下の灰白・灰色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	
121	深鉢 胴	SP11	埋土	ナデ	ナデ 上部貝殻条痕文	明黄褐 10 Y R 7/6	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	7mm 以下の灰色の粒、5mm 以下の暗褐色の粒、2mm 以下の黒色の光沢粒を含む	
122	深鉢 胴	SP11	床面	貝殻条痕文	ナデ	黒褐 7.5 Y R 3/2	にぶい褐 7.5 Y R 6/3	5mm 以下の明褐灰色の粒を多く含み、2mm 以下の黒色の光沢粒を含む	風化が著しい
128	深鉢 口縁	SP22	埋土	端~上部: 横ナデ 下部: 縦方向のナデ	ナデ	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	1 ~ 3mm の灰白・灰色の粒、1mm 程の褐色の粒を含み、2mm 程の角閃石をまばらに含む	外面にスス付着 口径(202)
132	深鉢 胴	SP2	床面	上部: 貝殻刺突文全体 ナデ	風化が著しく不明	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	にぶい黄褐 10 Y R 4/3	7mm 以下の灰白色の粒、3mm 以下の黒色の光沢粒を多く含み、2mm 以下の黒褐色の粒を含む	
133	深鉢 口縁	SA5	埋土	斜め方向ナデ	ナデ	橙 5 Y R 6/8	橙 7.5 Y R 7/6	2mm 以下の褐灰色の粒を含む	
134	深鉢 口縁	H12Gr		貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	橙 7.5 Y R 7/6	2mm 以下の透明な光沢粒・黒色の粒を多く含み、2mm 以下の浅黄色の粒を含む	
135	深鉢 口縁	I 11Gr		貝殻条痕文端部: 貝殻刺突文	ナデ一部指頭痕	にぶい黄橙 10 Y R 6/3	にぶい褐 7.5 Y R 5/4	6mm 以下の灰白色の粒を多く含み、3mm 以下の黒色・透明の光沢粒を含み、2mm 以下の黒色の粒をわずかに含む	外面口縁部黒変
136	深鉢 口縁	F14Gr	攪乱埋土	工具による条線文	貝殻条痕文	にぶい黄橙 10 Y R 6/6	にぶい黄橙 10 Y R 6/6	3mm 以下の褐色・橙色の粒、2mm 以下の灰白の粒・透明の光沢粒を含む	
137	深鉢 口縁	SH612	埋土	上部: 貝殻腹縁文 下部: 貝殻条痕文	ナデ	橙 7.5 Y R 6/6	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	2mm 以下の透明な光沢粒を多く含む	
138	深鉢 胴	J11Gr		洗線文	ナデ	橙 5 Y R 7/8	橙 2.5 Y R 6/8	2mm 以下の灰白色の粒を含む	
139	深鉢 口縁	H11Gr		ナデ	風化が著しく不明	暗褐 10 Y R 3/3	黒褐 10 Y R 3/2	4mm 以下の灰白色・黒色の粒、2mm 以下の黒色・透明の光沢粒を含む	
140	深鉢 胴	F16Gr		貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐 7.5 Y R 6/4	橙 5 Y R 6/6	3mm 以下の黒色の光沢粒、5mm 以下の透明の光沢粒・灰白色の粒を多く含む	
141	深鉢 胴	F14Gr	攪乱埋土	貝殻条痕文	貝殻条痕文	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	4mm 以下のにぶい黄橙色の粒、2mm 以下の黒褐色の粒を含む	
142	深鉢 胴	SH609	埋土	貝殻条痕文	ナデ	明黄褐 10 Y R 6/6	にぶい黄褐 10 Y R 5/3	5mm 以下の赤褐色の粒、4mm 以下のにぶい赤褐色の粒、2mm 以下の黒色・透明の光沢粒・灰白色の粒を含む	
143	深鉢 胴	J10Gr		撚糸文	撚糸文	明赤褐 5 Y R 5/6	明赤褐 2.5 Y R 5/6	10mm 以下の灰白色の干枚岩小片をわずかに含み、6mm 以下の明赤褐色の粒、4mm 以下の黒色の粒を含む	
144	深鉢 胴	H10Gr		縦に貝殻腹縁文、突帯	縦方向のナデ	橙 2.5 Y R 6/8	橙 2.5 Y R 6/8	2mm 以下の透明な光沢粒を多く含み、2mm 以下の灰白色の粒を含む	



第 49 図 縄文時代早期包含層等出土遺物実測図 (2)



第 50 図 縄文時代早期包含層等出土遺物実測図 (3)

第 17 表 縄文時代早期石器計測表

器種	石材	出土地点		計測値				備考	
		〔位置〕	〔層位〕	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕		
123	石皿	砂岩	SP11	埋土	23.75	22.20	11.50	10000.0	磨面は正面全体、一部欠損
124	石皿	砂岩	SP12	埋土	23.60	27.70	7.80	7580.0	磨面は正面全体と裏面の一部、一部欠損
125	打製石鏃	チャート	SP16	埋土	1.80	1.60	0.30	0.55	正三角形、凹基
126	磨石	尾鈴山酸性岩類	SP17	埋土	8.80	5.95	5.60	708.7	全面に磨面・特に左右側面の使用頻度が高い、半分程度欠損
127	石核	砂岩	SP18	埋土	13.26	11.87	5.72	1225.9	上下側面から横長剥片剥離、打面調整なし
129	磨石	ホルンフェルス	SP22	埋土	10.80	9.20	5.10	778.3	磨面は正面と両側面、左側面は敲打痕もみられる、1/4 程度欠損
130	台石	砂岩	SP22	埋土	18.05	13.30	7.30	2295.0	正面にまばらに敲打痕、一部欠損
131	石皿	砂岩	SP22	埋土	15.50	15.90	14.70	4980.0	正面の一部に磨面とまばらな敲打痕、台石としても使用か、一部欠損
145	打製石鏃	チャート	L 2 G r		1.40	1.20	0.40	0.68	先端部に丸みのある二等辺三角形、平基
146	打製石鏃	チャート	H 11 G r		1.50	1.25	0.25	0.37	正三角形、凹基
147	打製石鏃	チャート(赤)	N 4 G r		2.15	2.05	0.45	1.35	先端部に丸みのある二等辺三角形、凹基、脚部端は平らに加工
148	打製石鏃	黒曜石(菱刈系)	F - 2 区		1.70	1.40	0.40	0.84	二等辺三角形、先端部と脚部の一部欠損、凹基で挟りは小さい
149	打製石鏃	チャート	S A 1	埋土	2.65	2.00	0.40	1.60	二等辺三角形、凹基で挟りは大きい、脚部端は平らに加工
150	尖頭形石器	チャート	H 11 G r		2.90	2.40	0.90	6.30	丸みのある二等辺三角形、平基
151	尖頭形石器	チャート	S A 6	埋土	2.90	2.10	0.80	4.45	二等辺三角形、平基、一部欠損
152	微細剥離剥片	珩質頁岩	L 1 G r		4.14	2.31	0.63	4.90	縦長剥片、両側面下部に多数の微細剥離、形状はナイフ形石器に似ている、上部打面調整あり
153	二次加工剥片	珩質頁岩	H 10 G r		8.13	4.18	1.58	55.30	両側面に微細な二次加工痕、裏面は自然面、上部打面調整あり
154	剥片	砂岩	L 1 G r		11.76	9.90	3.56	391.80	縦長剥片、上面は自然面
155	剥片	砂岩	F - 1 区		8.40	8.01	2.53	140.20	幅広剥片、正面に自然面
156	石核	珩質頁岩	I 10 G r		8.20	7.00	2.90	106.80	正面：上からの縦長剥片剥離 裏面：横長剥片剥離 打面調整あり
157	石核	尾鈴山酸性岩類	F - 1 区		5.90	7.60	2.60	136.40	正面：下からの縦長剥片剥離 裏面：自然面 磨石からの転用か
158	磨石	尾鈴山酸性岩類	H 11 G r		10.20	7.80	5.20	608.1	正面・裏面全体に磨面
159	磨石	尾鈴山酸性岩類	H 11 G r		10.30	8.00	5.30	623.7	正面・裏面全体に磨面、下部に敲打痕
160	磨石	尾鈴山酸性岩類	H 11 G r		13.45	9.40	5.00	992.7	正面全体・両側面に磨面
161	敲石	砂岩	F - 1 区		9.50	4.00	3.10	155.0	表面中央部と下部に敲打痕集中、裏面中央部にまばらな敲打痕、一部欠損
162	台石	砂岩	H 11 G r		11.70	8.40	4.80	750.0	表面中央部に敲打痕集中、裏面にまばらな敲打痕、下面に剥離あり
163	台石	砂岩	F - 1 区		15.60	11.85	3.40	525.0	表面にまばらな敲打痕、一部赤化、一部欠損

3 縄文時代後～晩期の遺物

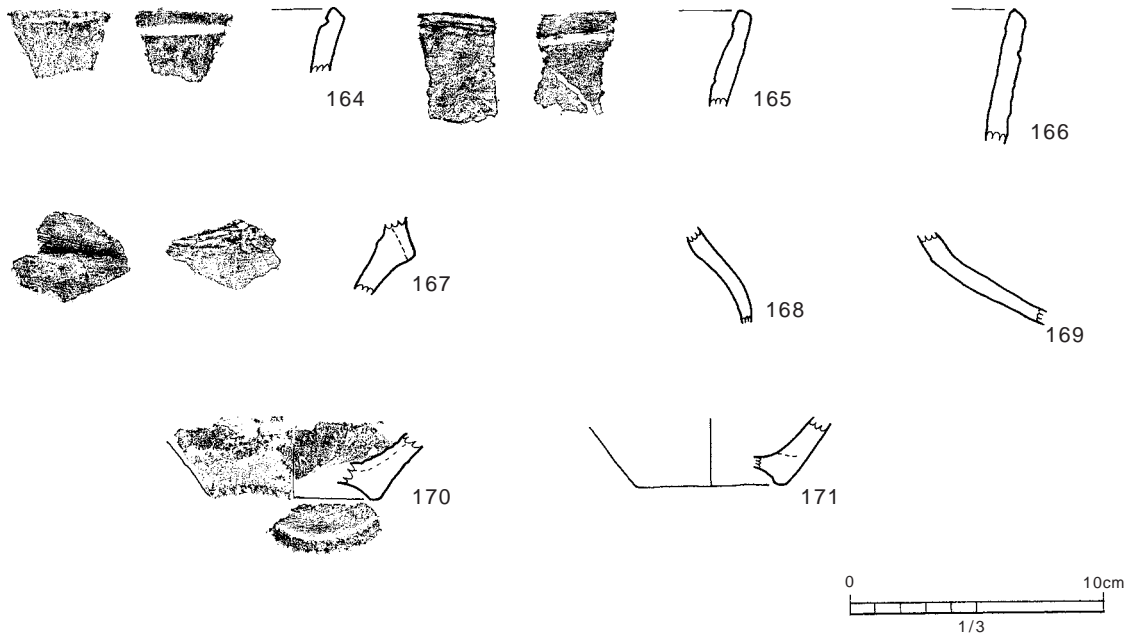
(1) 概要

縄文時代後期から晩期については、竪穴建物跡や土坑、包含層から少数ながら当時期の土器が出土したが、遺構埋土からの出土であったり、他の時期の遺物と同時に出土したりしたため、当時期のものであると思われる遺構は確認できなかった。石器については、出土状況から明らかに当時期のものである

ものは確認できなかった。

(2) 遺物

三万田式系の深鉢や浅鉢が出土した(第51図)、色調や胎土は第2・3次調査で出土したものと同様な傾向である。164～166は深鉢の口縁部で、端部の面取りは外傾し、内面には一条の沈線がめぐる。167～169は浅鉢の肩部付近である。170・171は底部で



第51図 縄文時代後～晩期土器実測図

第18表 縄文時代後～晩期土器観察表

器種	部位	出土地点		手法・調整・文様		色調		胎土	備考 (法量: cm)
		[位置]	[層位]	外面	内面	外面	内面		
164	深鉢 口縁	SA 6	埋土	ナデ	ナデ沈線	橙 2.5 Y R 6/6	にぶい黄橙 1.0 Y R 7/3	2mm以下の灰白色の粒、暗赤褐色の粒を含む	
165	深鉢 口縁	N 4 Gr		縦方向のミガキ	ミガキ沈線	明赤褐 5 Y R 4/6	明赤褐 5 Y R 4/6	2mm以下のにぶい橙色の粒をわずかに含む	
166	深鉢 口縁	SA 5	埋土	ミガキ	ナデ沈線	にぶい黄褐 1.0 Y R 5/3	にぶい赤褐 5 Y R 5/4	2mm以下の灰白色・赤褐色の粒を多く含む	
167	浅鉢 肩	SA 4	埋土	ナデ突帯	縦方向のミガキのちナデ	にぶい褐 7.5 Y R 5/4	褐 7.5 Y R 4/3	2mm以下の黒色の光沢粒を含み、3mm以下の暗褐の粒・灰白の粒をわずかに含む	
168	浅鉢 肩	SA 5	埋土	ミガキ	ナデ	橙 2.5 Y R 6/6	橙 2.5 Y R 6/8	2mm以下の灰白色の粒を多く含み、2mm以下の黒褐色の粒を含む	
169	浅鉢 肩	SA 5	埋土	ミガキ	ナデ	橙 5 Y R 6/6 にぶい赤褐 5 Y R 5/4	橙 5 Y R 6/6	2mm以下の明赤褐色・褐灰色の粒を多く含む	
170	深鉢 底	SA 5	埋土	風化が著しく不明	ナデ	明赤褐 2.5 Y R 5/6	にぶい黄橙 1.0 Y R 6/3	3mm以下の灰白色の粒を含み、2mm以下の暗褐色の粒・3mm以下の赤褐色の粒をわずかに含む	底径(6.8)
171	深鉢 底	SA 5	埋土	縦方向のミガキ	ナデ	にぶい黄橙 1.0 Y R 7/4	浅黄橙 1.0 Y R 8/4	2mm以下の暗灰黄色・にぶい黄橙色を多く含む	底径(5.8)

4 弥生時代の遺構と遺物

(1) 概要

弥生時代の遺構は、竪穴建物跡1軒がある。遺物については、竪穴建物跡や土坑、包含層から少数ながら当時期の土器が出土した。石器については、出土したものに当時期のものが含まれる可能性はあるが、出土状況から時期が不明確であることから、一括して別の節に掲載することとした。

(2) 遺構

竪穴建物跡1軒(SA3)のみが検出された。

SA3 (第52図)

E-2区東側の緩斜面、表土直下の第層で検出された。削平の影響を大きく受けているとみられ、検出当初は東側と南側の壁付近を除き形状がはっきりしなかったが、トレンチを設定し掘削した結果、長辺(東西方向)4.1m、短辺(南北方向)4.0mの方形であることが確認された。埋土は黒褐色土のブロックを含む褐色土であるが、0.2mほどの厚さであるため、下部埋土であったと考えられる。

また、第層(白斑ローム)を含む貼床面はとも薄いため、床を作るため土を盛り固めたというより、使用しているうちに硬化した面である可能性が高い。東から西に0.5mほど下る傾斜に沿って床面が形成されており、南東側の角付近は0.2mほどの掘り込みが見られる。

柱穴は東西に同程度の深さのピットがあり、2本柱の建物であった可能性が高い。竪穴部中央付近で集中して出土した土器片の特徴から、弥生時代でも後期の竪穴建物跡であると考えられる。

・SA3出土遺物(第52図)

172は甕の口縁部である。頸部との接合面が残っている。173は壺の胴部～底部である。色調は浅黄橙色(10YR系)で、胎土は1mm以下の黒色粒が多く含む。胴部中位は屈曲して、底部が平底の「ソロバン玉」状の胴部である。外面の調整はヘラ状工具によるミガキである。

(3) 遺物

ここでは他時期の遺構埋土等に混入した遺物のうち、当時期のものと確認された土器を10点を掲載した(第53図)

174～178は下城式や亀の甲タイプの甕である。色調と胎土の関係から、浅黄橙色(10YR系)できめの細かい粘土に1～3mm大の円磨度の高い砂粒を含むもの(174・175) 明褐色・にぶい赤褐色(5YR系)で粒子の粗い粘土に1mm以下ないし1～2mmの石英や長石、結晶片岩などを含む(176～178)の2者に区分される。口縁部端部の外面に刻目突帯を貼り付けたタイプ(174～176)である。突帯の断面は三角形となる。口縁部端部の外面ないし胴部に数条の刻目突帯を貼り付けたタイプ(177・178)もある。

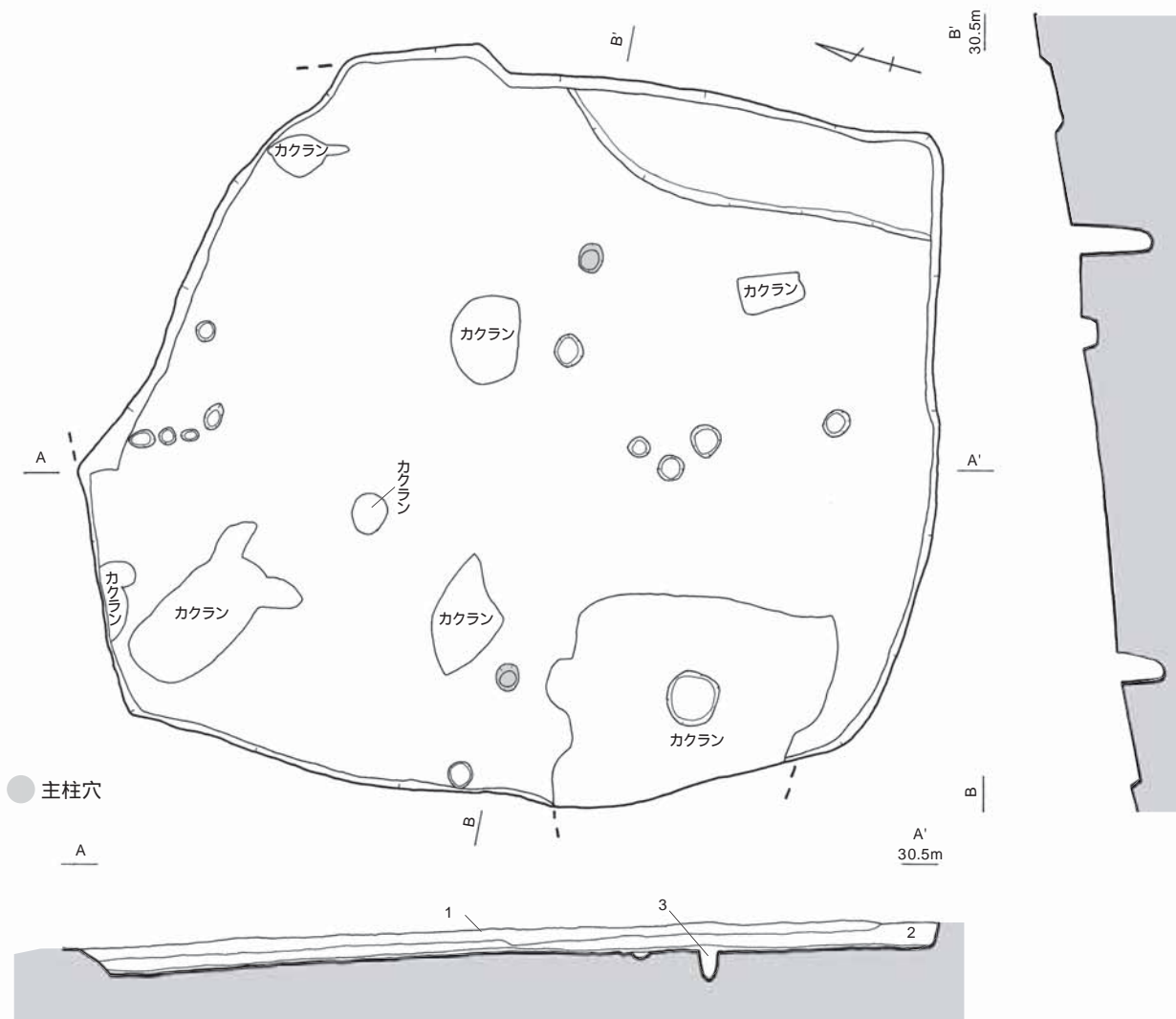
179・180は甕または壺の底部である。色調と胎土の関係から179は、180はと分類できるので、これらも下城式系の土器と考えられる。

181は須玖式系の壺口縁部である。色調はにぶい黄橙色で、胎土は1mm以下の黒色粒が多く含まれる。口縁部外面には刺突列点文が、上面には円形浮文が付加される。

第19表 弥生時代竪穴建物跡一覧表

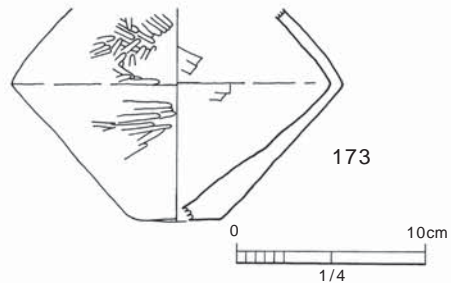
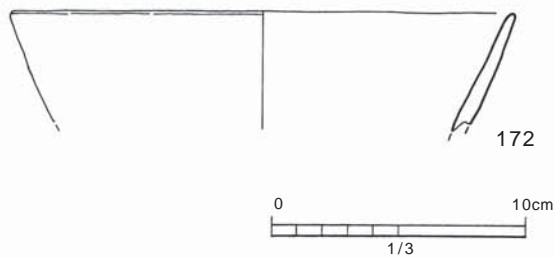
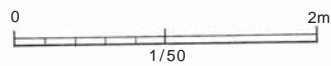
遺構	位置 〔区〕	検出面 〔層〕	主軸方位	形状	規模〔m〕		構造 〔本柱〕	備考
					長辺	短辺		
SA3	E-2		N-78°-W	方形	4.1	4.0	2	弥生土器 甕・壺

SA3

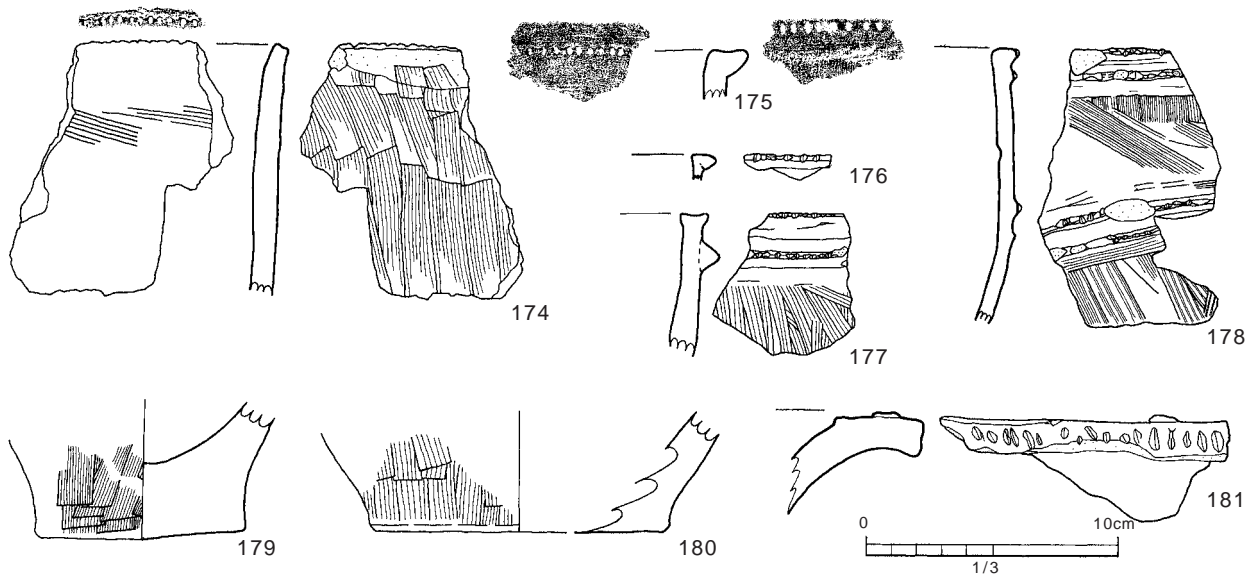


SA3

- 1 7.5YR4/6 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、黒褐色土をブロック状にわずかに含む
- 2 7.5YR5/8 明褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、白斑ロームをブロック状にわずかに含む
- 3 7.5YR5/8 明褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり(貼床)



第 52 図 弥生時代竪穴建物跡 (S A 3) 及び出土土器実測図



第 53 図 弥生時代包含層等出土土器実測図

第 20 表 弥生時代土器観察表

器種	部位	出土地点		手法・調整・文様		色調		胎土	備考 (法量: cm)
		(位置)	(層位)	外面	内面	外面	内面		
甕	口縁	SA3	埋土	横ナデか?	横ナデ	浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	1mm 程の灰色・灰白色・灰褐色の粒を多く含み、5mm 程の灰黄色の粒を含む	口径 (19.8)
壺	胴~底	SA3	埋土	上部: 斜方向のミガキ下部: 縦・斜め方向のナデの後まばらなミガキ	工具によるナデか?	浅黄橙 10 Y R 8/4	褐灰 7.5 Y R 6/1	3mm 以下の暗褐色・1mm 以下の黒色の粒を多く含み、1mm 程の灰白色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	一部黒斑、赤化あり 底径 (4.6)
甕	口縁~胴	SA13	床面	縦方向のハケ目 上部: 突帯の剥げた痕	横ナデ、一部工具による横ナデ	浅黄橙 10 Y R 8/4	にぶい橙 7.5 Y R 6/4	3mm 以下の灰白色の粒を多く含む	端部: 連続した刻目
甕	口縁	SA13	床面	端部: 刻目突帯 縦方向のハケ目	横ナデ	黒褐 10 Y R 3/1	浅黄橙 10 Y R 8/3	3mm 以下の灰白色の粒を多く含み、2mm 以下の淡橙色の粒を含む	端部: 連続した刻目
甕	口縁	SA12	埋土	端部: 刻目突帯横ナデ	横ナデ	橙 7.5 Y R 7/6	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	2mm 以下の灰白色・黒色・褐灰色の粒を含む	
甕	口縁	SA4	埋土	端部: 2 条の刻目突帯、横ナデ 下部: ハケ目	端部: 突帯ナデ	橙 5 Y R 6/6	橙 7.5 Y R 6/6	3mm 以下の乳白色・赤褐色の粒を含む	
甕	口縁~頸	C22Gr		端部・胴部: 2 条の刻目突帯縦・斜方向のハケ目、一部横ナデ	ナデ	暗赤灰 2.5 Y R 3/1	橙 5 Y R 6/6	2mm 以下の灰白色・赤褐色・黒色の粒を含む	外面にスス附着
甕または壺	底	SA13	埋土	縦方向のハケ目	ナデ? 風化が著しく不明	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	橙 7.5 Y R 6/6	3mm 以下の黒褐色・5mm 以下の灰白色の粒を多く含む	
甕または壺	底	SA12	埋土	縦方向のハケ目	一部ナデ 風化が著しく不明	にぶい赤褐 5 Y R 5/4	明赤褐 2.5 Y R 5/8	6mm 以下の乳白色・3mm 以下の灰白色の粒を多く含む	
壺	口縁	SA	埋土	端部: 連続した刺突文ナデ?	風化が著しく不明	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	1mm 以下の黒色の粒を多く含み、5mm 以下の乳白色の粒を含み、6mm 以下のにぶい黄褐色の粒を含む	上面: 円形浮文

5 古墳時代の遺構と遺物

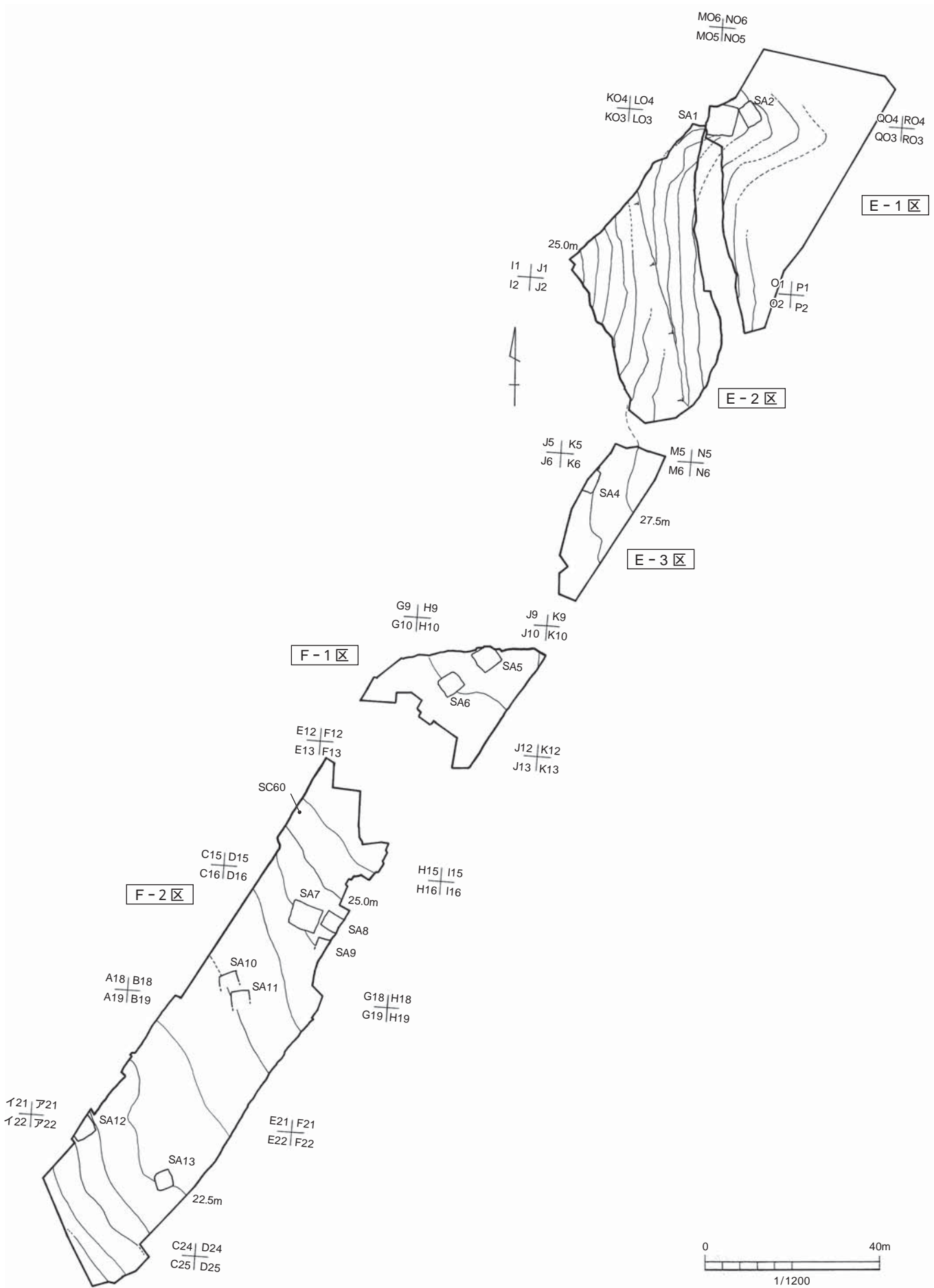
(1) 概要

表土除去後、第層~第層で、竪穴建物跡 12 軒、土坑 1 基が検出された(第 54 図)。また、遺構内や攪乱、包含層から、多くの土器や、敲石や台石、石皿等の石器が出土した。土器の大半は土師器であり、特に竪穴建物跡から集中して出土した。

(2) 遺構

竪穴建物跡(第 21 表)

竪穴建物跡は、E-1 区に 2 軒、E-4 区に 1 軒、F-1 区に 2 軒、F-2 区に 7 軒検出され、調査区全体に分布していることを確認した。竪穴建物跡同士の切り合いはないが、SA1・2、SA5・6、SA7~9、SA10・11 はそれぞれ隣接している。削平や攪乱の影響で、全体の形状などが確認できないものもあったが、残存状況の良い竪穴建物跡からは、多くの土器片や石器類が出土した。



第 54 図 古墳時代遺構配置図

S A 1 (第 55・56 図)

E - 1 区北側の、西へ下る谷部に位置する。表土除去作業中に、第 層において土師器片が集中して出土し、やや土が黒ずんで見えたものの、直上に攪乱が集中してあったこともあり、竪穴建物跡が流れ込みによるものか判断できなかった。そこでトレンチを設定し、掘削を行ったところ、埋土 2・3 層と地山の第 層の間で明確な立ち上がりがあり、長辺(南北方向) 6.8 m の方形の竪穴建物跡と判断した。

西側は S E 1 (溝状遺構) に切られており、短辺(東西方向) は 4.8 m までしか確認できないが、支柱穴の位置から、正方形に近い形態であったと考えられる。谷の落ち込む方向に主軸が直交する。検出面から貼床面までは約 0.9 m で、今回検出された竪穴建物跡では最も深いものである。埋土は暗褐色土であり、土師器の小片や炭化材を含んでいる。埋土 3 は褐色のブロックを含んでいる。

貼床は、東側では 0.05 m ほど、西側では 0.3 m ほどの厚さであり、掘り方による凸凹や谷の傾斜による地山の傾きを平らにしたものと考えられる。

壁帯溝は幅 0.1 ~ 0.3 m、深さ 0.2 m ほどであり、ほぼ全体に巡っている。

貼床面で焼土と炭化材が多量に検出されたことから、上屋構造が焼失したものと考えられる。焼土は中央付近に広がっているほか、北側壁寄りにもみられた。厚さは 0.03 ~ 0.05 m ほどであるが、西側の焼土は 0.1 m ほどの厚みであった。

また、中央付近に焼土の上に直径 5 ~ 10cm の炭化材が多量出土したほか、南側壁寄りにも垂木とみられる直径 15cm の炭化材が出土した。炭化材は、

主軸に並行のものと直交するものが折り重なって検出された。¹⁴C 年代測定では炭化材 1 において 1,670 ± 20 年 B P (A D 330 ~ 430 年) 樹種同定では炭化材 1・2・4・5・6 はツブラジイ、炭化材 3 はクリとの結果が出ている。

建物に伴う炉と土坑は、それぞれ 1 基検出された。埋土はどちらも暗褐色土で炭化物を多量に含んでいる。炉は長軸 0.5 m、短軸 0.3 m の不整な楕円形で、深さは 0.4 m である。東側壁上方に焼土化した粘土がみられ、細長く掘られた底はとても硬くしまっている。土坑は長軸 0.8 m、短軸 0.6 m の楕円形である。

支柱穴は 4 本認められるが、ピットが多数みられるので、建て替えの可能性もある。また、建物中央部を S B 3 (掘立柱建物跡) に切られており、他のピットにも後世のものが含まれる可能性がある。

・ S A 1 出土遺物 (第 57 ~ 59 図)

遺物は、床面直上とやや浮いた位置 (埋土 3 層の下部) より出土した。遺物は支柱穴に囲まれた範囲で散在して出土する分布で、原位置を保つものや二次的移動を受けたものが混在する。第 56 図は床面の遺物出土状況を示した。

土師器甕 (184・185) は炉の両端付近で出土しており、184 は出土状況から建物廃絶時に正立した状態と考えられる。土師器高坏の脚部を転用したフイゴの羽口は、炉の周辺に出土する傾向がある。

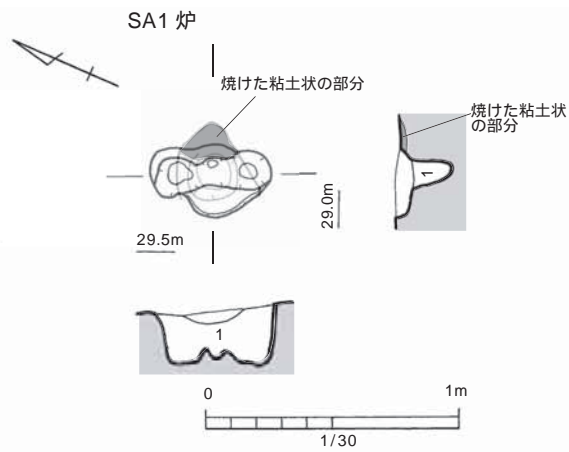
ここで図化・掲載した遺物は 43 点である。土師器甕の口縁部は直立気味 (184) で、内湾気味 (182) もある。底部は接地面の小さい平底 (189) である。甕の多くは胴部下位から口縁部の外面にかけてススの付着が認められる。184・186・189 の外面は、板状

第 21 表 古墳時代竪穴建物跡一覧表

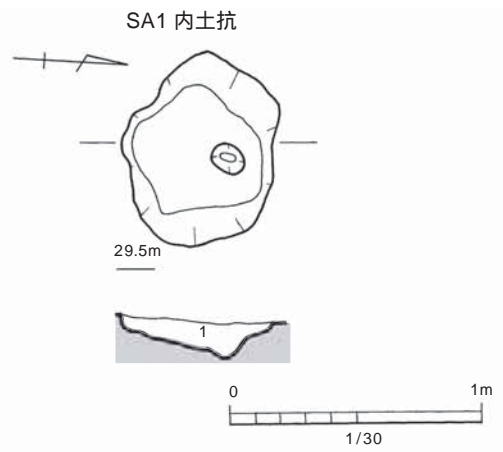
遺構	位置 〔区〕	検出面 〔層〕	主軸方位	形状	規模〔m〕		構造 〔本柱〕	備考
					長辺	短辺		
S A 1	E - 1	~	N - 11° - W	方形	6.8	4.8 +	4	焼失住居、鍛冶関連遺物、壁帯溝
S A 2	E - 1		N - 40° - E	長方形	4.7	3.3	4	
S A 4	E - 3		N - 22° - W	(長方形)	5.0	2.1 +	(4)	炉、壁帯溝
S A 5	F - 1	~	N - 49° - W	方形	5.3	4.6	4	
S A 6	F - 1	~	N - 52° - W	方形	4.8	4.0	2	2 辺壁際に掘り込み、床面焼土
S A 7	F - 2		N - 79° - E	長方形	7.1	5.4	4	床面焼土
S A 8	F - 2		N - 27° - W	方形	4.2 +	3.8	4	
S A 9	F - 2		N - 10° - W	(方形)	-	-	(4)	
S A 10	F - 2		N - 83° - W	(方形)	4.2	3.0 +	(4)	
S A 11	F - 2		N - 74° - W	方形	4.2	3.7	2	炉
S A 12	F - 2		N - 36° - E	方形	5.0	4.5 +	-	
S A 13	F - 2		N - 4° - E	方形	4.2	4.1	(4)	須恵器、炉



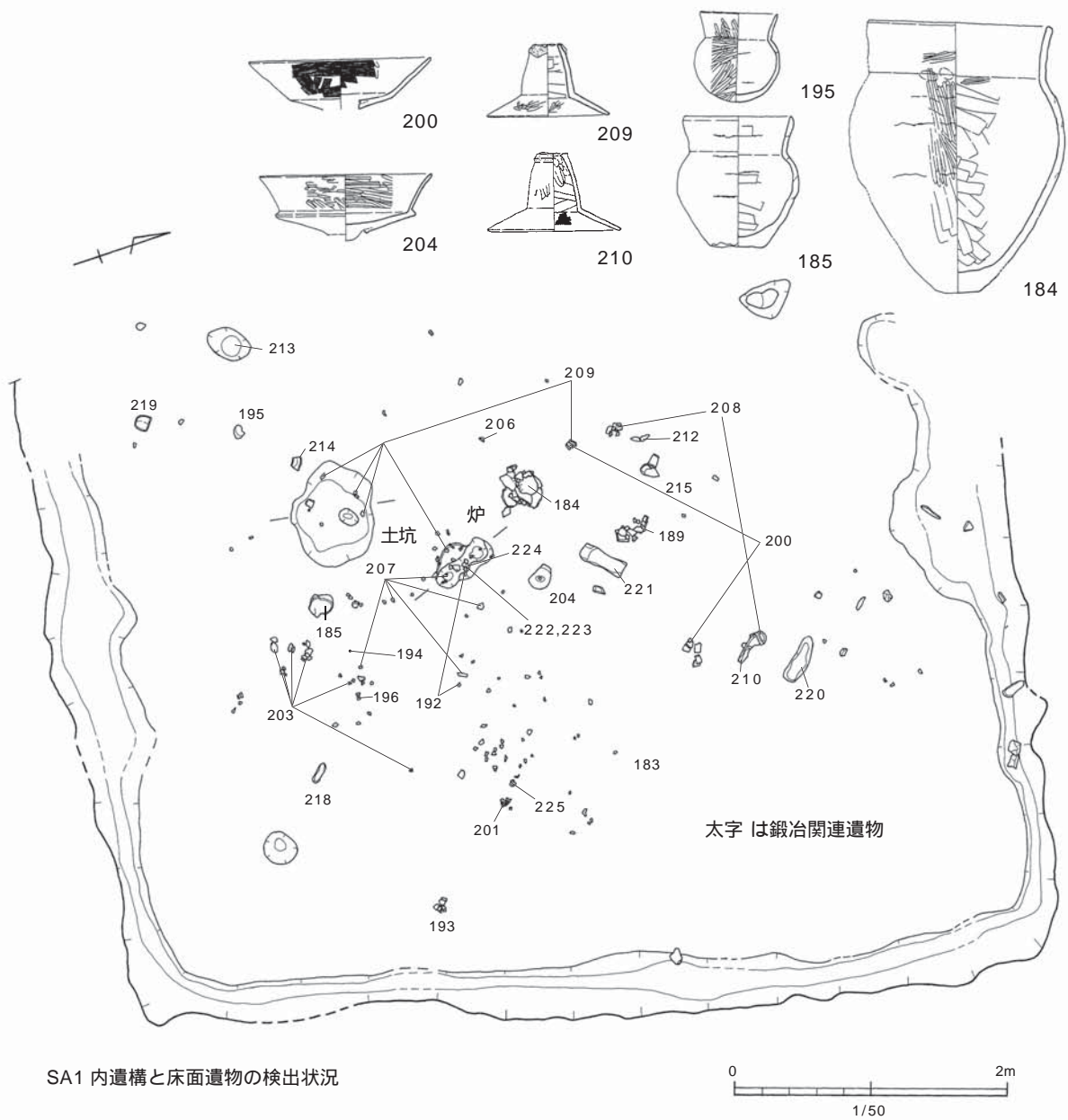
第 55 図 古墳時代竪穴建物跡 (S A 1) 実測図



SA1 炉
1 10YR3/3 暗褐色土、粘性弱い、しまりなし、炭を粒状に多く含む



SA1 内土坑
1 10YR3/3 暗褐色土、粘性弱い、しまりなし、炭を粒状に非常に多く含む



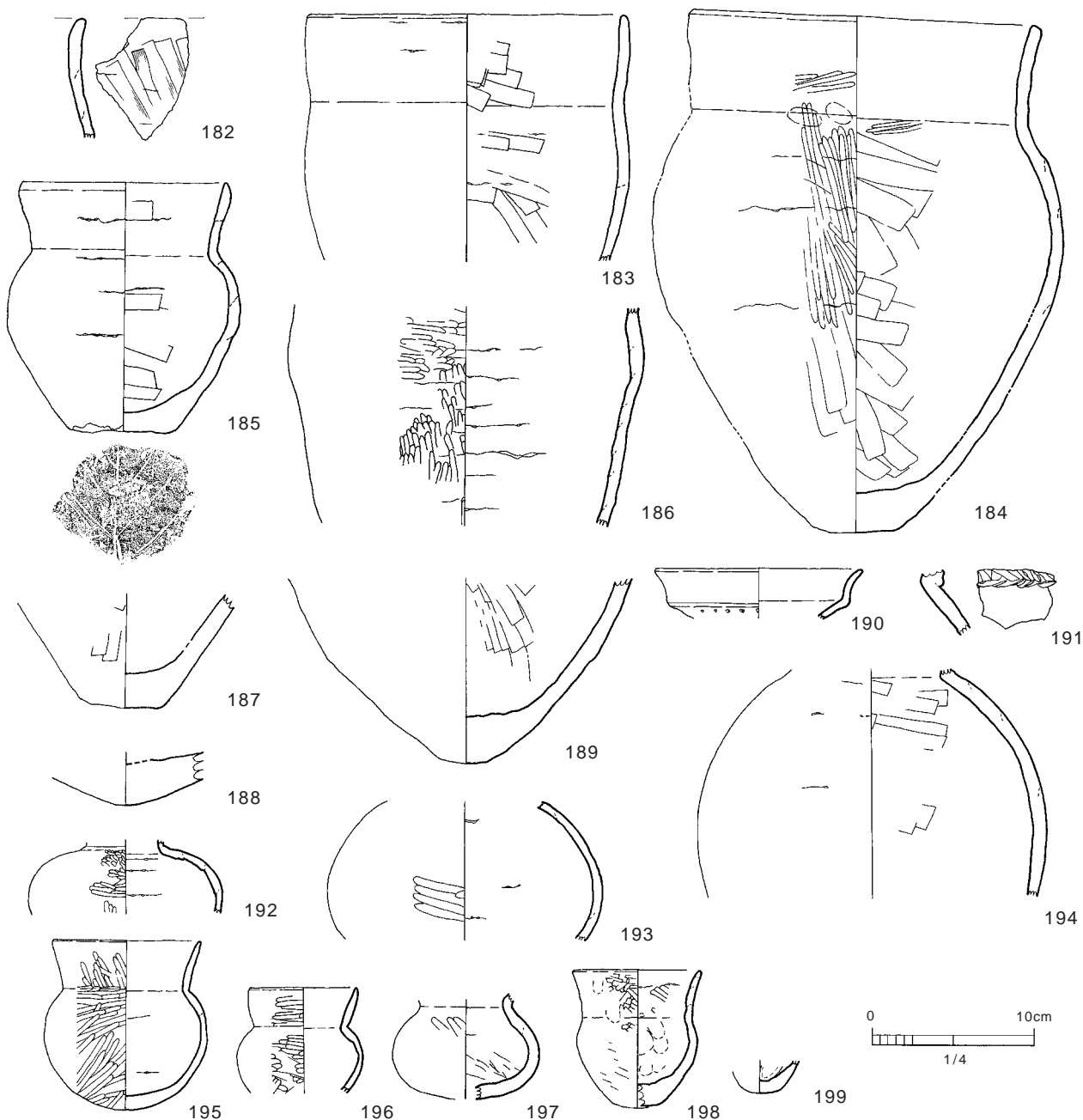
SA1 内遺構と床面遺物の検出状況

第 56 図 古墳時代竪穴建物跡 (S A 1) 内炉・土坑実測図及び遺物出土状況図

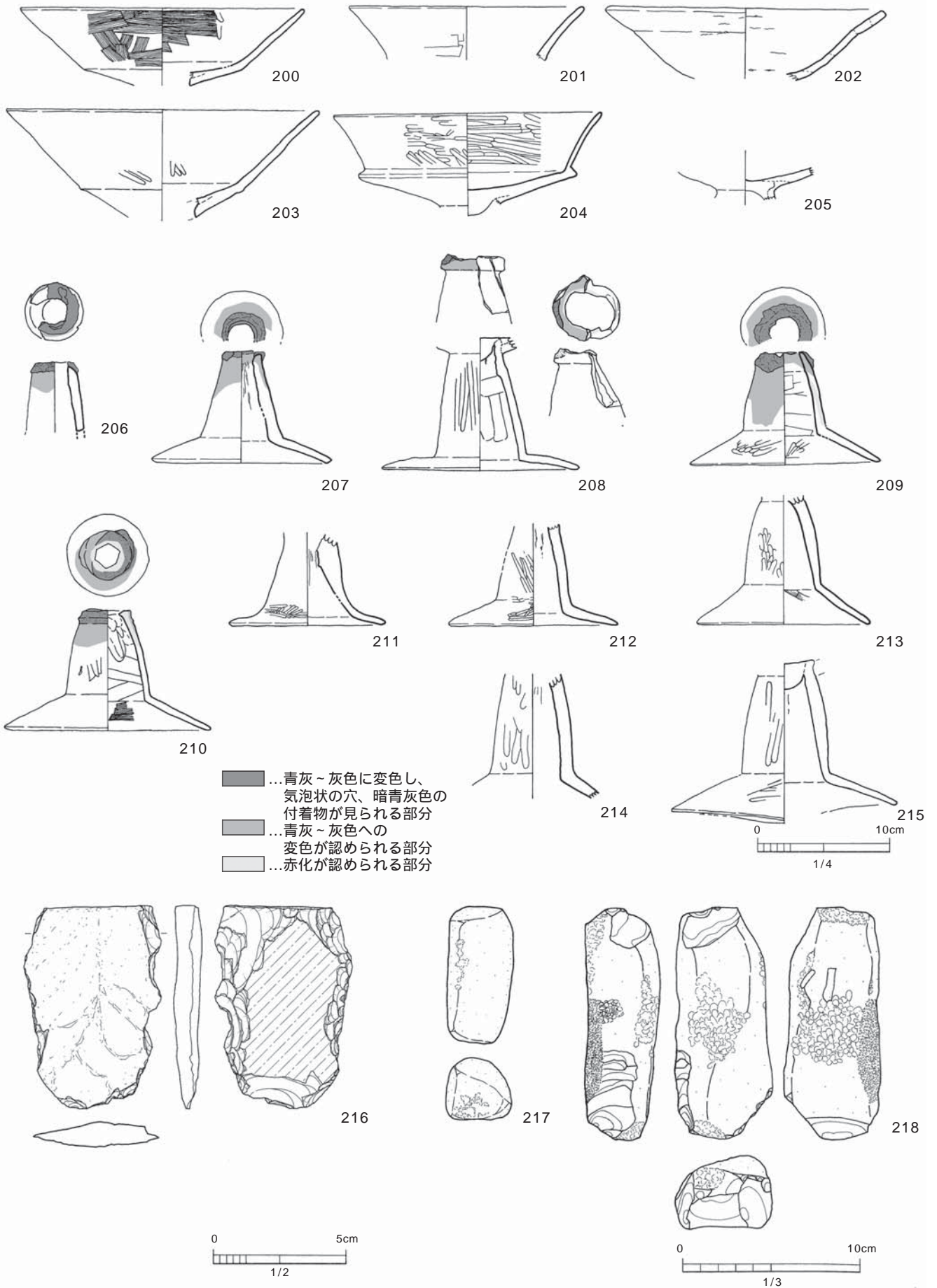
工具のナデ調整のうえにヘラ状工具による粗雑なミガキ施される。なお、183と189は色調と胎土の比較から同一個体の可能性が高い。190は二重口縁壺の口縁部で一次口縁部外面に連続刺突文がある。191は壺の頸部で縄目を模した突帯がつく。196・197は小型丸底壺、199はミニチュアの鉢である。

200～215は土師器高坏の坏と脚部である。両者は接合できなかったが、200と209・210・213、203と207、202と205は色調と胎土が相互に類似する資料

である。坏部の一群は在地系(202) 外来系(庄内・布留式)の系譜をひく(200・201・203～205)形態を含む。後者は、坏底部が広いもの(200)と狭いもの(204)がある。204は口縁部と坏底部の接合部が外方へ突出する形態である。脚部は、脚柱部が直線的(207) エンタシス状(213・215等)にスカート状の脚裾部がつく形態である。206～210はフィゴの羽口として転用された脚部である。坏部と脚部の接合部分は不純物の付着やガラス化が著しく、脚柱部は



第57図 古墳時代竪穴建物跡(SA1)出土遺物実測図(1)



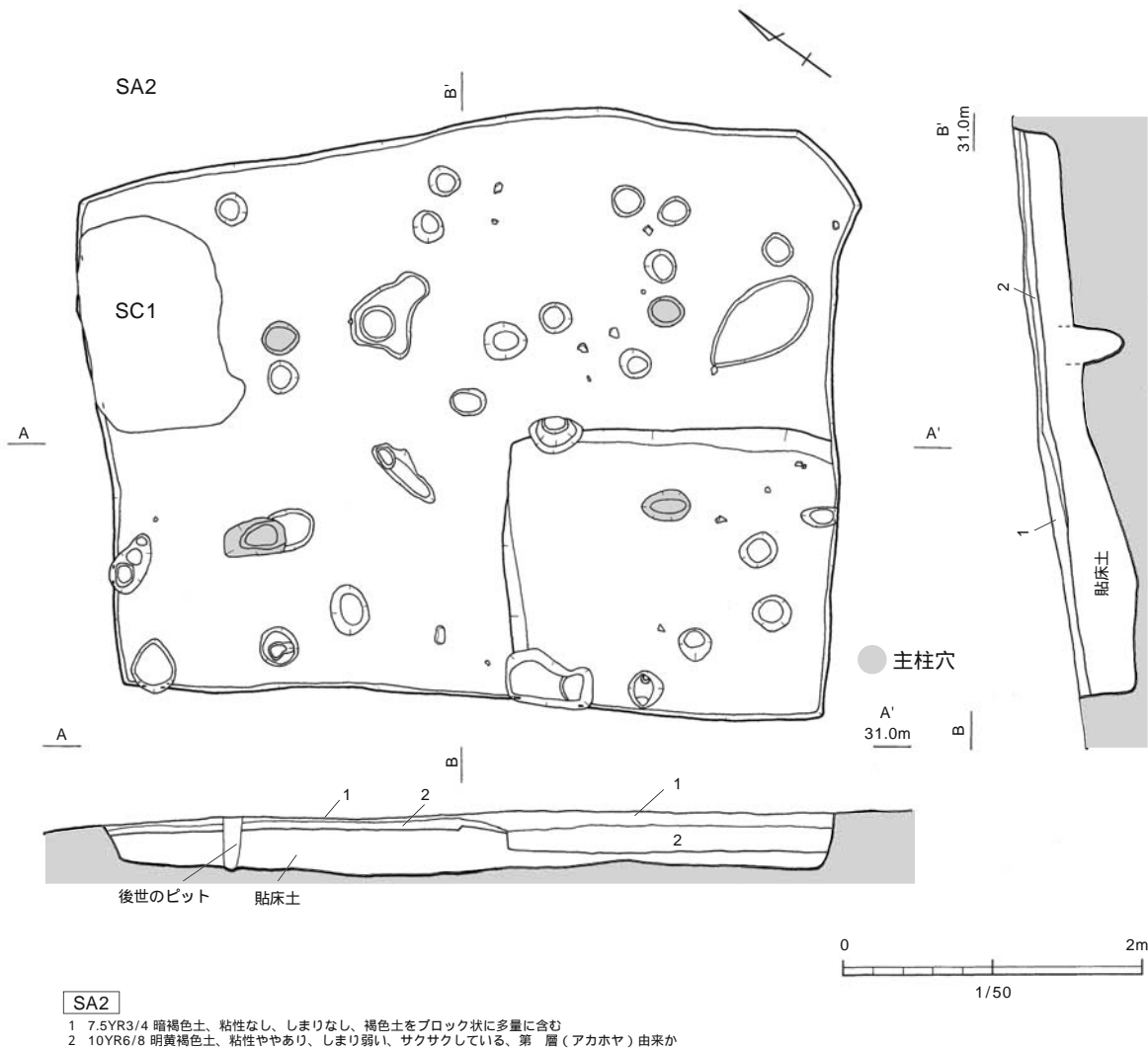
第 58 図 古墳時代竪穴建物跡 (S A 1) 出土遺物実測図 (2)

被熱による赤化や還元状態となる部分が認められる。このうち 208 は、羽口に転用するために接合部を打ち欠いた過程が読み取れる資料である。206 は金属分析の結果、素地は締まり緻密であるが、溶融している先端部以外は熱影響をあまり受けておらず、耐火度に有利な成分、不利な成分ともに含んでおり、耐火度は鍛冶炉用の羽口としては低め、炉壁並の 1,140 と測定された。

石器は 7 点を図化掲載した。216 は珪質頁岩製の打製石斧である。礫面の残る扁平な剥片に周縁部のみ剥離調整を施す。217・218 は砂岩製の敲石である。棒状の形態で側面中央と端部に潰打痕がある。219 は砥石である。石材は砂岩である。中心から側縁に

向けた鋭い線状痕が放射状に残る。磨面や潰打痕もあり、石皿や敲石としても使用されたようである。220・221 は石皿で、建物中心付近と北西方向の床面で出土した。円形ないし長方形の石皿で砂岩の転石を使用する。ともに磨面がよく残る。220 は茶色に変色、221 は茶色の粒状の付着物がみられ、錆着とみられる。221 の裏面は赤化している。

鍛冶関連に伴う鉄滓や生成物のうち 4 点を図化・掲載した(222 ~ 225)。鉄滓・生成物は炉の内部(222 ~ 224)と建物床面及び建物埋土中(225)で出土し、その総重量は 185.9g である。なお、鍛造鉄片の出土はない。222 ~ 225 については金属分析を行った。その結果、222・223 はほぼ粘土組織で、炉壁と反応し



第 60 図 古墳時代竪穴建物跡 (S A 2) 実測図

て生成した炉壁付着滓であると判定された。224 も炉壁付着滓であるが、表面に木炭痕が見られ、約半分は鉄滓部分であり、顕微鏡組織分析・化学成分分析の結果、始発原料は砂鉄であると判定された。225 はメタル反応を示し、化学組成分析の結果、鍛錬工程の初期に生成した椀形鍛冶滓と判定され、もともとは炉の下部で生成したが、不純物を多く含むため、そのまま廃棄されたものと推定される(金属分析結果の詳細は第6節参照)

また、炉壁と推定される焼土塊も建物床面及び埋土中より出土している。

S A 2 (第60図)

E - 1 区の北側の谷部の第 層上面で検出された。S A 1 の東側に隣接し、S A 1 より約 1 m 高い地点にある。谷の落ち込む方向に主軸が直交する長辺 4.7 m、短辺 3.3 m の長方形の形状である。北側の隅を S C 1 (土坑) に切られている。暗褐色土の埋土中に、土器片を確認できた。床面は南側がやや低く、2 段の構造であった可能性がある。その下に 0.2 ~ 0.4 m の貼床がみられる。主柱穴は 4 本認められる。

出土遺物は縄文土器、弥生土器や土師器があるが、図化に耐えない程の小片化が著しい。

S A 4 (第61図)

E - 3 区の平坦部、表土直下の第 層で検出された。南北方向に 5.0 m の規模の方形または長方形で、西側は調査区外である。埋土は 0.4 m ほどで、炭化材を多く含む褐色土である。その下にある貼床が壁際で切れ、深さ 0.1 m ほどの壁帯溝が巡っている。床面に焼土が 2 箇所見られ、そのうち北側の焼土は炭を多く含む、その上面を囲むように礫や石器類が確認でき、炉として利用されたと考えられる。また、炉から東側の壁に向けて溝状の掘り込みが見られる。

炉周辺の埋土中より、フローテーションにより採取した炭化種実がイネであると同定された。炉が建物の中心付近にあったとすれば、プランを確認できたのは東側の半分程度ということになり、主柱穴とみられるピットが 2 基認められることから、4 本柱の建物であったと考えられる。

・ S A 4 出土遺物 (第 62・63 図)

第 61 図に建物理土中及び床面上で出土した遺物の分布を示している。遺物の多くは建物理土の 2 層より出土し、特に手のひら大や人頭大の塊石が比較的多く出土した。炉の周囲には石器類 (246・248・250・251・252・253) がまとまって出土している。図化掲載した遺物は 28 点である。

土師器のうち甕は、口縁部が「く」の字 (227・230) と内湾気味で直立 (226) がある。226・230 の外面はタテ方向の、227 はヨコ方向への丁寧なヘラミガキが施される。他に高塚 (238 ~ 241)、広口壺 (236) やミニチュアの鉢 (243) などがある。

石器は打欠石錘 (244)、打製石斧 (245) や磨石 (246)、敲石 (247・248) と台石・石皿類 (249 ~ 254) がある。磨石は尾鈴山酸性岩類で、その他は砂岩である。台石 (252) は上面中央に潰打痕が明瞭に残り、磨面も認められる。台石 (250)・石皿 (254) には錆着とみられる付着物があり、250 は一部赤化している。

建物床面には形や大きさの揃う棒状の礫が 4 個出土した (第 31 表)。法量は平均値で長辺 16.5 cm、短辺 7.4 cm で重さ 806.3 g となる。使用痕は認められず、搬入礫または錘具等と推測される。

S A 5 (第64図)

F - 1 区の平坦部、表土直下の第 ~ 層で検出された。北側の隅は調査区外、東側の一部は攪乱 (道路跡) に切られており、中央部分も大きな攪乱の影響を受けている。等高線に主軸が直交する 1 辺約 5 m の方形である。埋土はアカホヤを含む暗褐色土であるが、床面近くまで削平を受けて数 cm しか残存しておらず、また、明確な貼床は確認できなかった。主柱穴は約 0.5 m の深さを持つ 4 本が認められる。

・ S A 5 出土遺物 (第 64 図)

建物東側の床面より土師器甕の小破片 (255) がまとまって出土したが、接合は困難であった。255 の外面には線刻があり絵画文の一部と考えられる。内面には種子 (イネ?) 圧痕が認められる。また、コバルトグリーン色のガラス小玉 (256) や台石 (257) も床面から出土した。257 は磨面と集中的な潰打痕が両方残る。

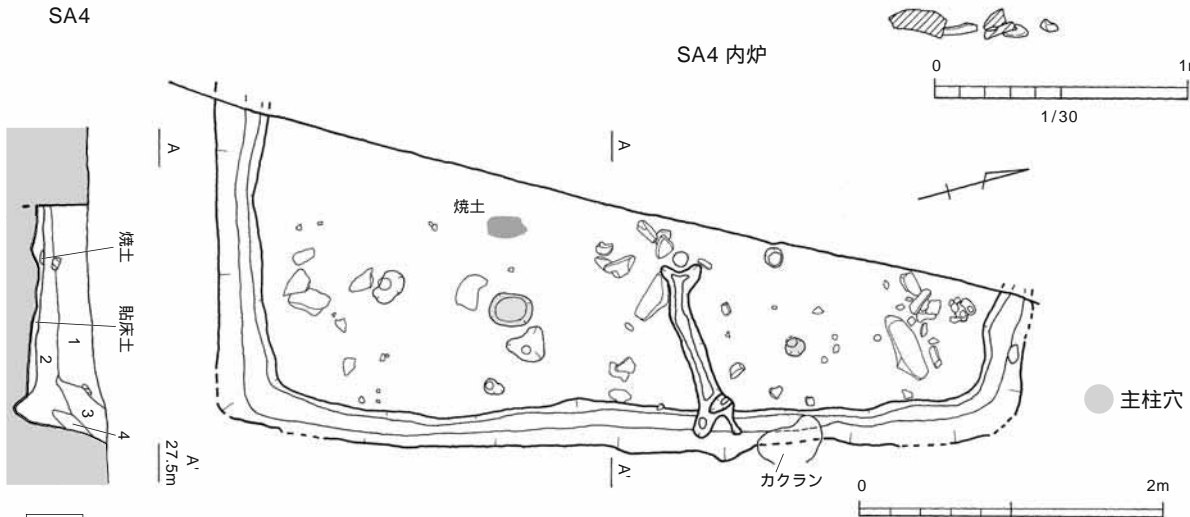
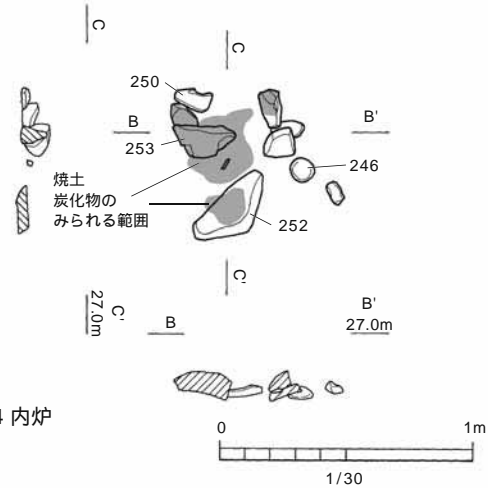
S A 6 (第 65 図)

F - 1 区の平坦部、表土直下の第 ~ 層で検出された。S A 5 から南西方向へ 5 m の距離がある。主軸方向の向きは S A 5 とほぼ同じである。埋土は粒状の炭を含む褐色土であり、貼床面が認められる。建物中央部床面に 20 m × 1.1 m の焼土面があり、その上面から石器や土器が集中して出土した。また、東側の 2 辺の壁際に溝状の掘り込みがみられる。主柱穴は中央付近に 2 本存在している。

・ S A 6 出土遺物 (第 65 図)

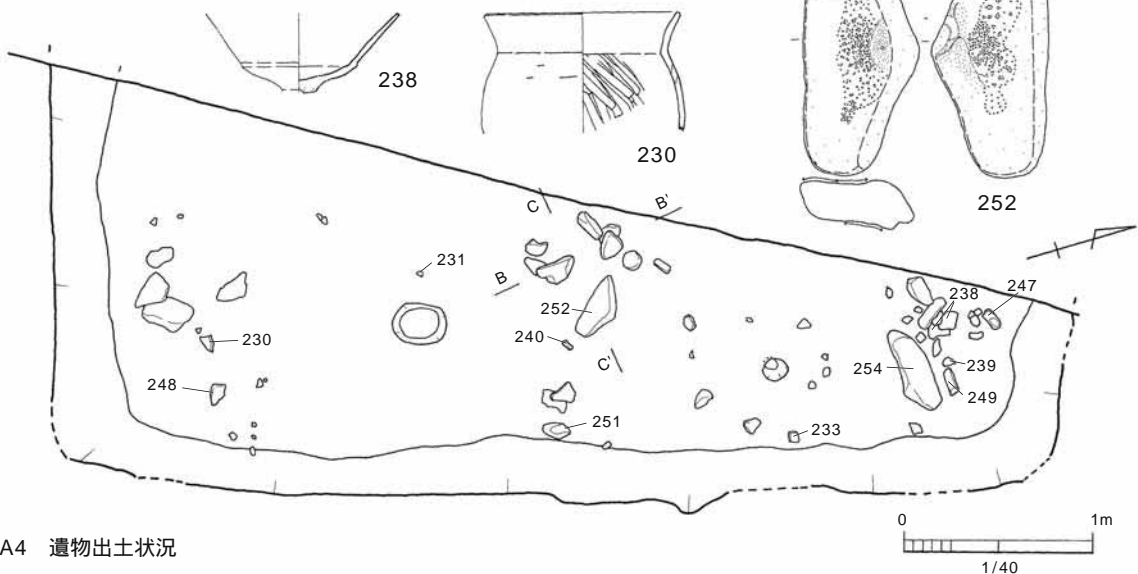
遺物は建物埋土中から床面上にかけて出土した。S A 4 同様に拳大や手のひら大の転石が数多い (第

65 図)、259 は土師器甕の底部でわずかな平底である。260 は壺の頸部で絡縄突帯がつく。261・262 は砂岩由来の台石である。261 は上面中央と側縁に集中的な漬打痕があり、端部に粒状の錆着が見られる。262 は磨面も認められる。また、鍛冶関連の遺物として、親指大焼土塊 (炉壁) が埋土より少量出土している。



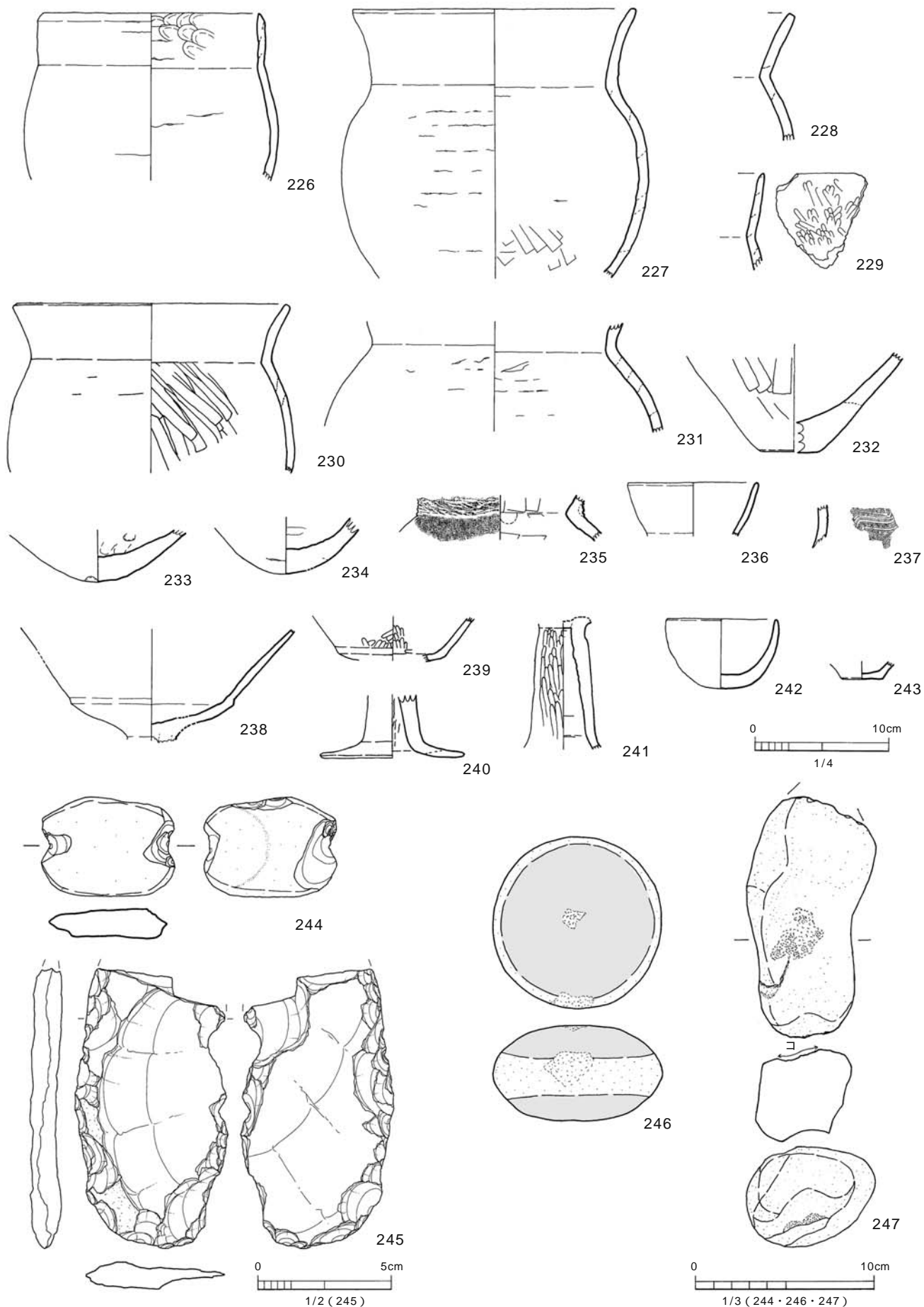
SA4

- 1 10YR4/6 褐色土、粘性、しまりともにやや弱い、褐色土ブロック、1 - 2 mm の炭化材をわずかに含む
- 2 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともに 1 層より弱い、1 - 2 mm 大の炭化材をわずかに含む
- 3 10YR4/3 に近い黄褐色土、粘性、しまりともに 2 層より弱い、アカホヤを粒状にわずかに含む
- 4 粘性、しまりともに強い、アカホヤを粒状にわずかに含む、第 層に似ている

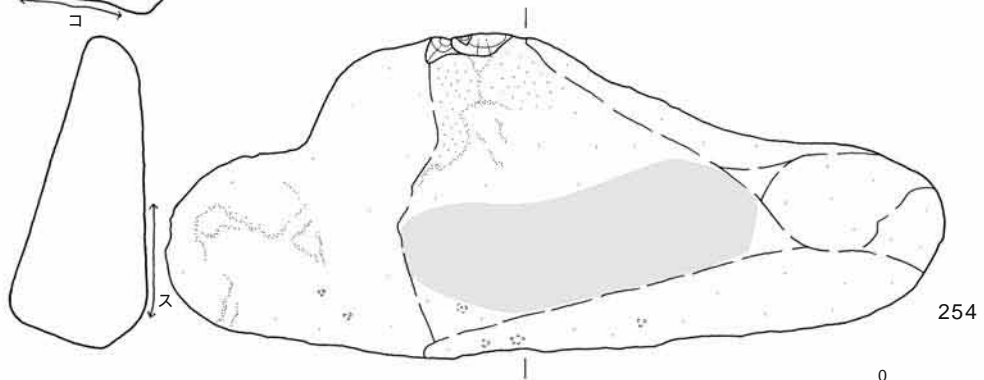
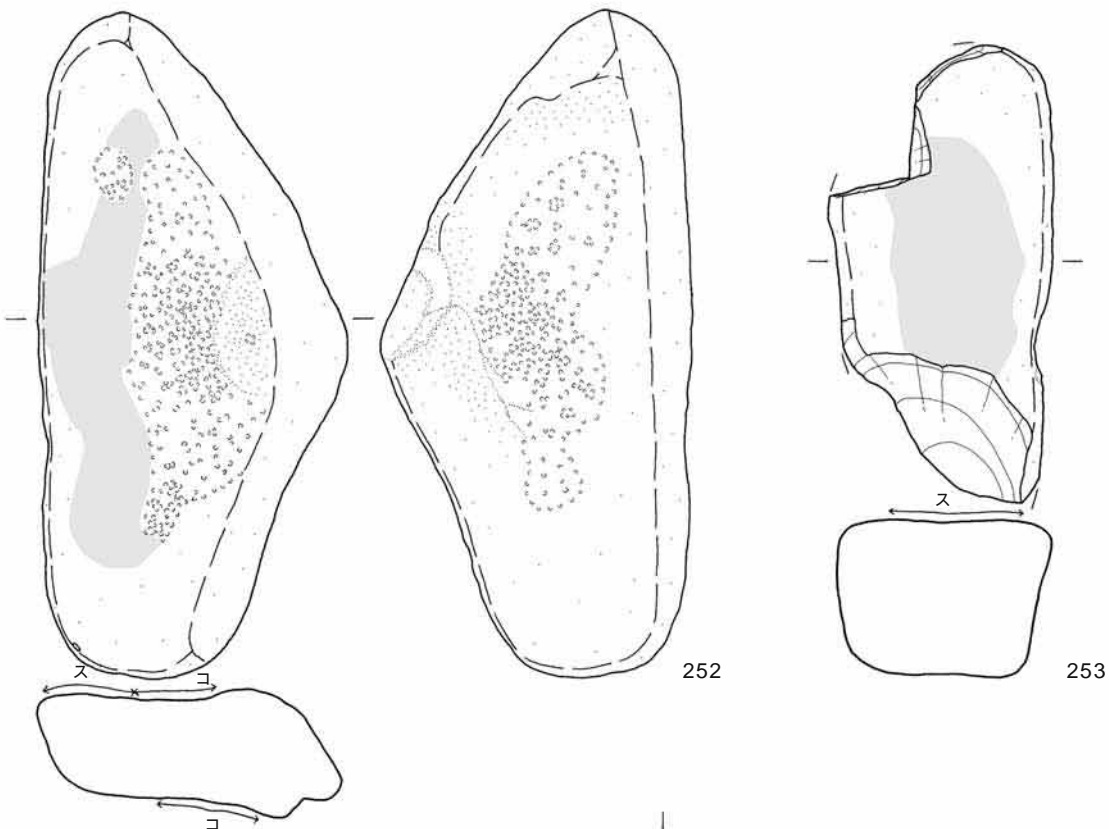
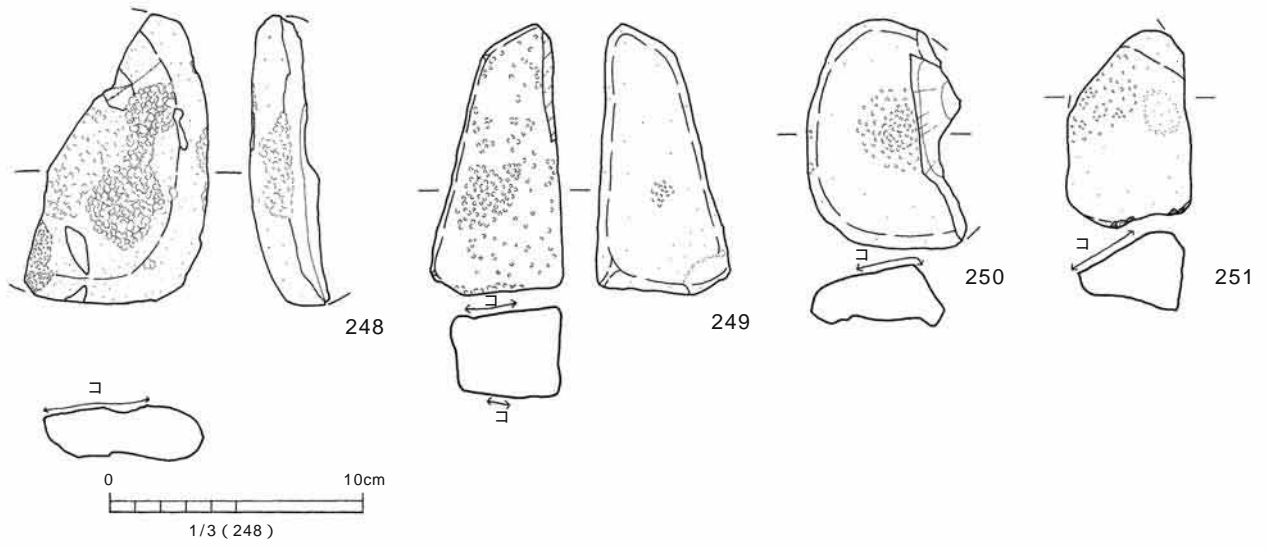


SA4 遺物出土状況

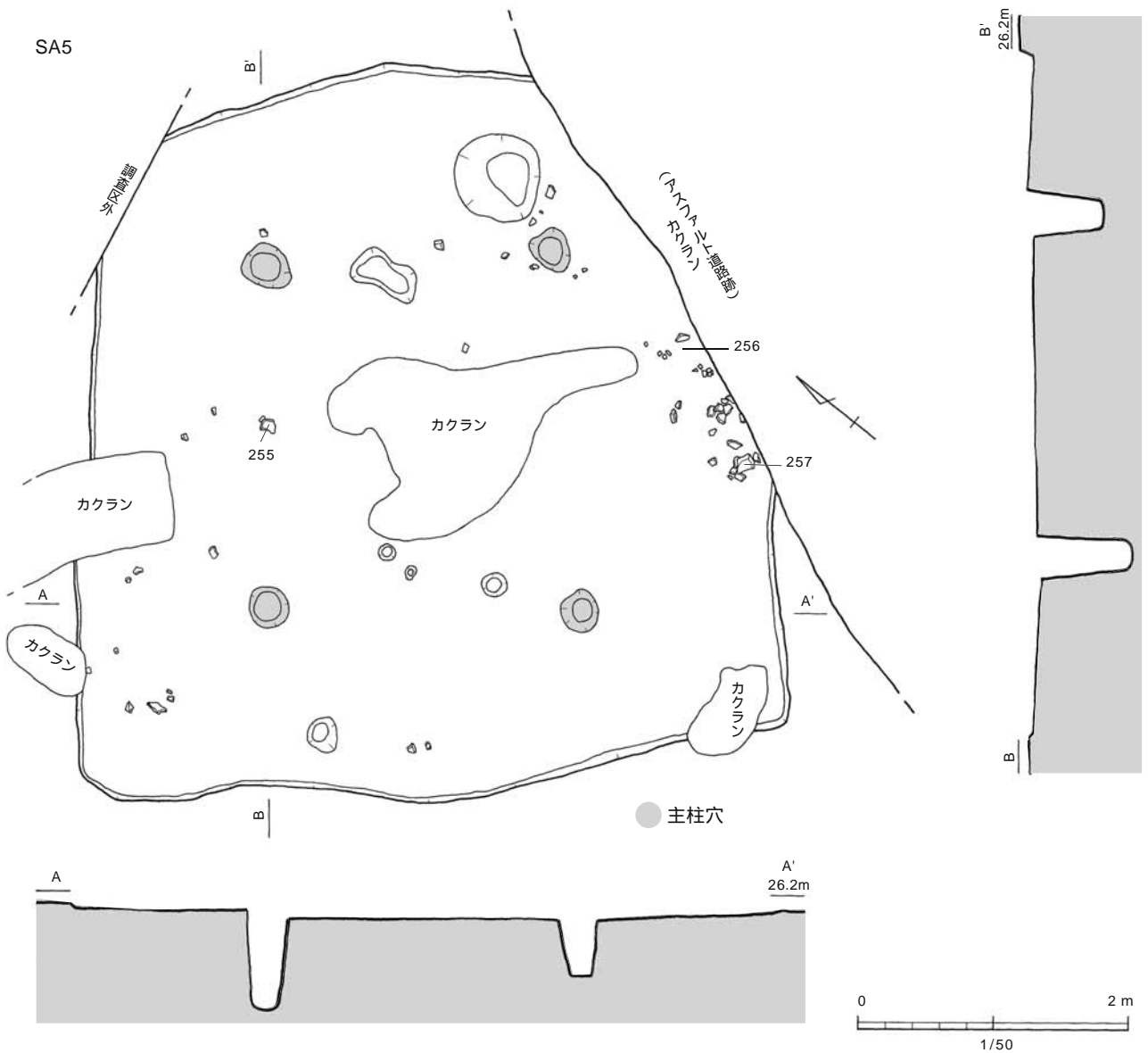
第 61 図 古墳時代竪穴建物跡 (S A 4) 実測図



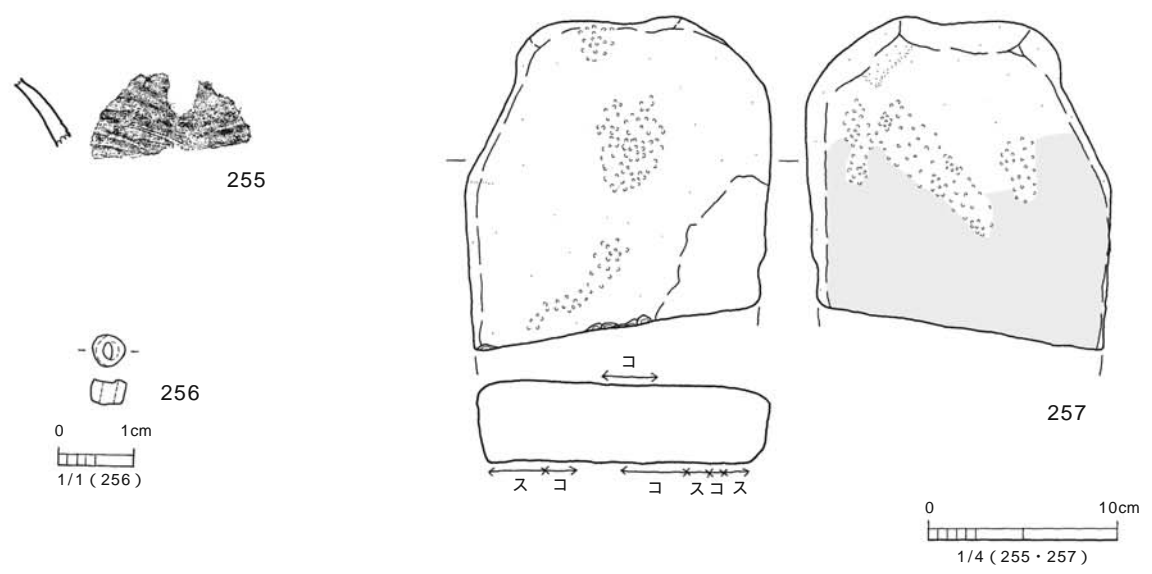
第 62 図 古墳時代豎穴建物跡 (S A 4) 出土遺物実測図 (1)



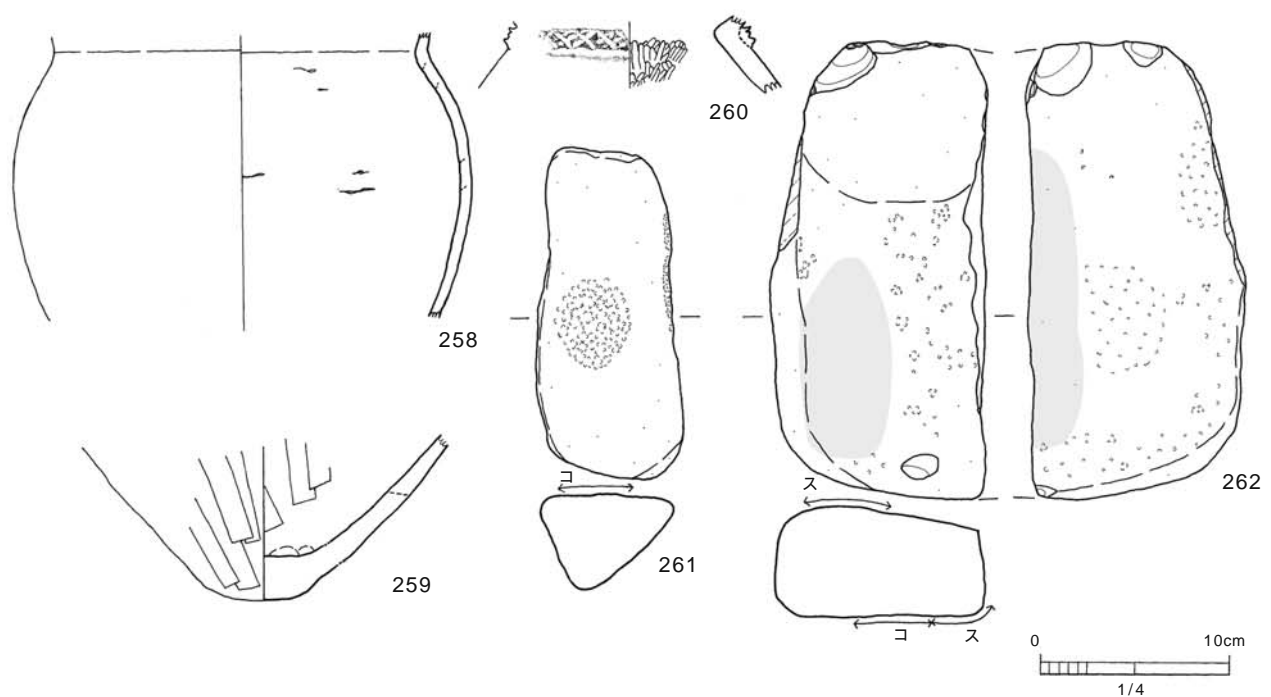
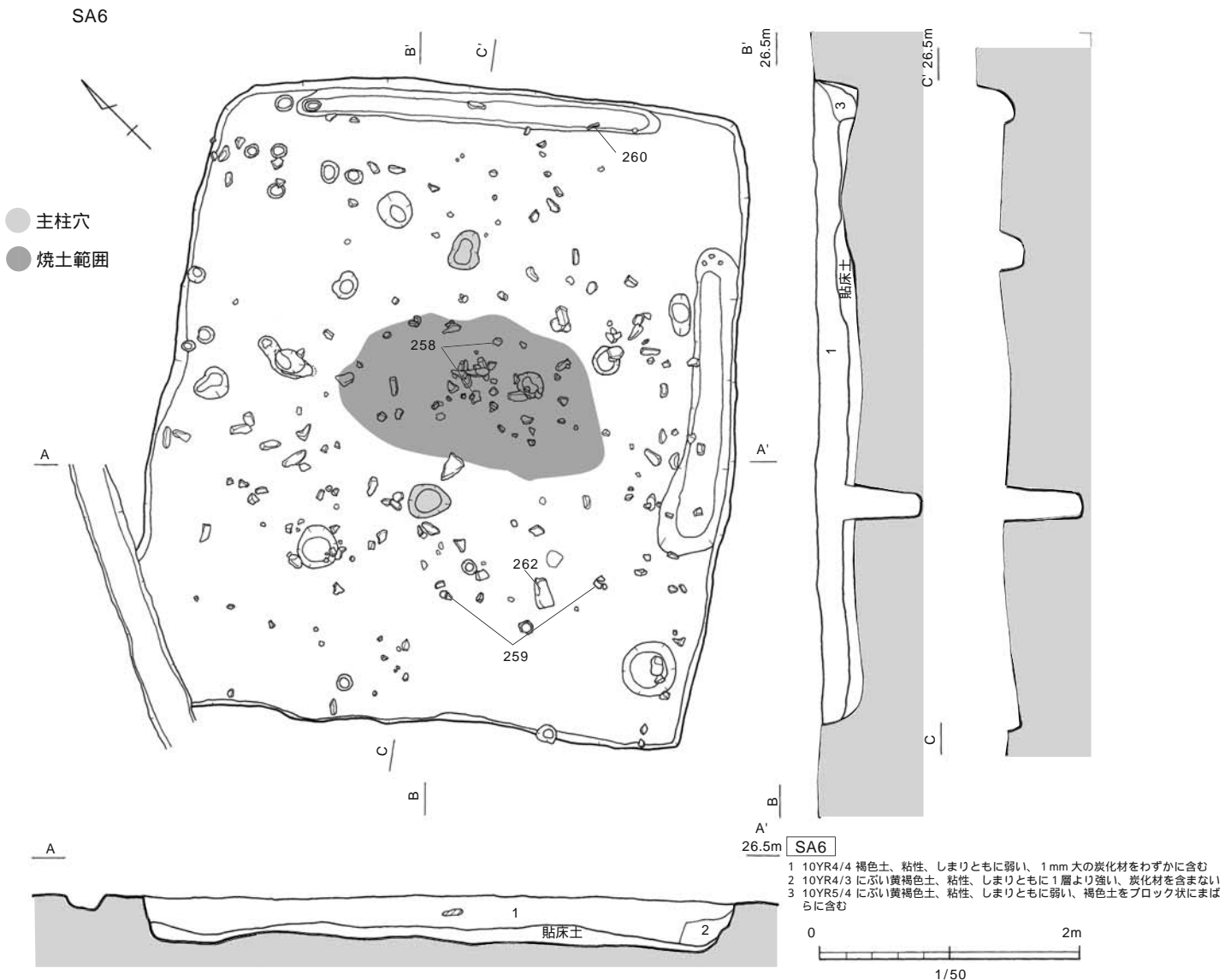
第 63 図 古墳時代竪穴建物跡 (S A 4) 出土遺物実測図 (2)



SA5 出土遺物



第 64 図 古墳時代竪穴建物跡 (S A 5) 及び出土遺物実測図



第 65 図 古墳時代竪穴建物跡 (S A 6) 及び出土遺物実測図

S A 7 (第 66 図)

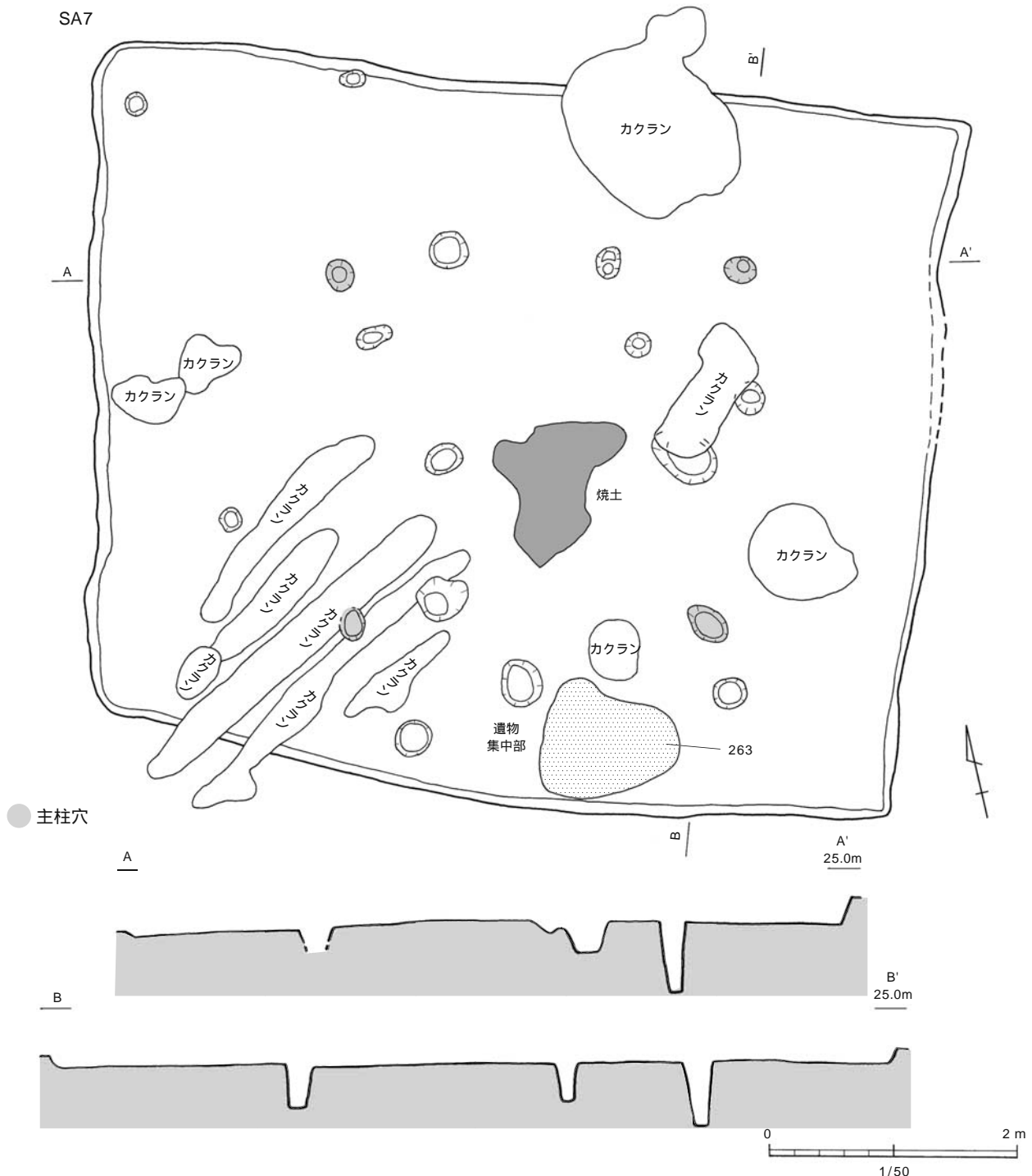
F - 2 区北側の平坦部の第 層で検出された。工程の関係で、先に東側の 3/4 の範囲が、後に残りの範囲が検出された。長辺 7.1 m、短辺 5.4 m の長方形で、第 4 次調査で確認された最大規模の竪穴建物跡である。耕作に伴う穴や溝とみられる攪乱が多く見られる。埋土は黒褐色土をブロック状に含むにぶい黄褐色土で、削平の影響で 0.05 m ほどしか残存していな

かった。その下に同様の土で硬い貼床面が確認された。建物中央部の貼床面で幅 1.0 m の不整形の焼土面が見られ、南側の壁際の床面から土師器片が集中して出土した。主柱穴は 4 本認められる。

・ S A 7 出土遺物 (第 67 図)

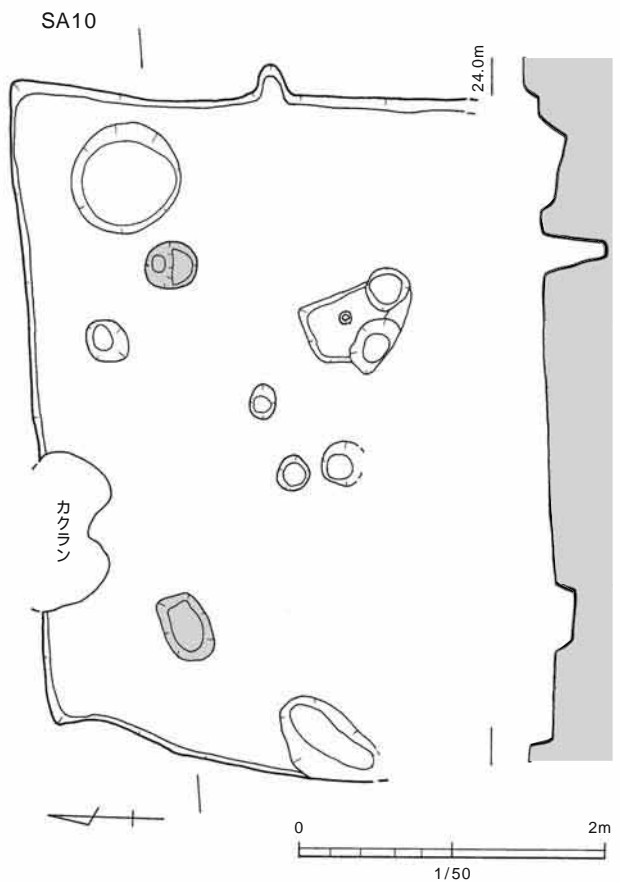
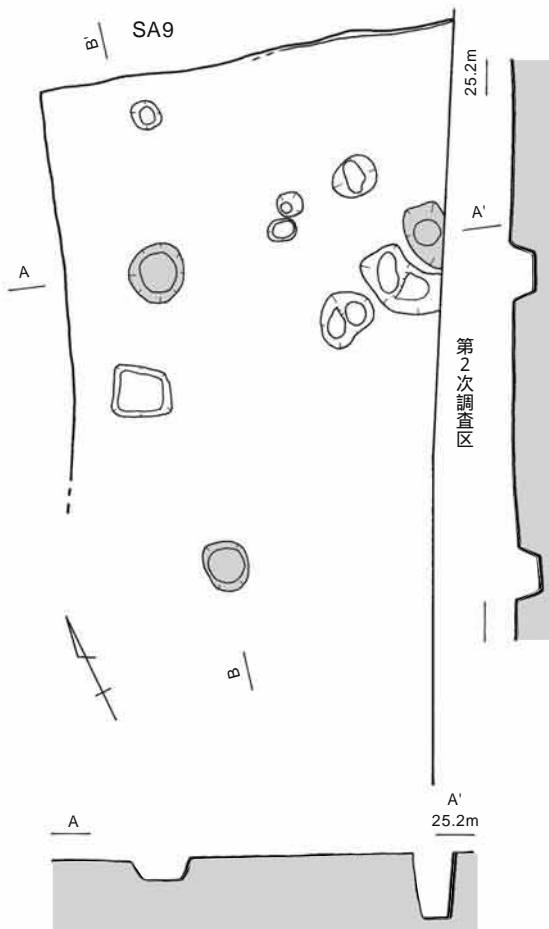
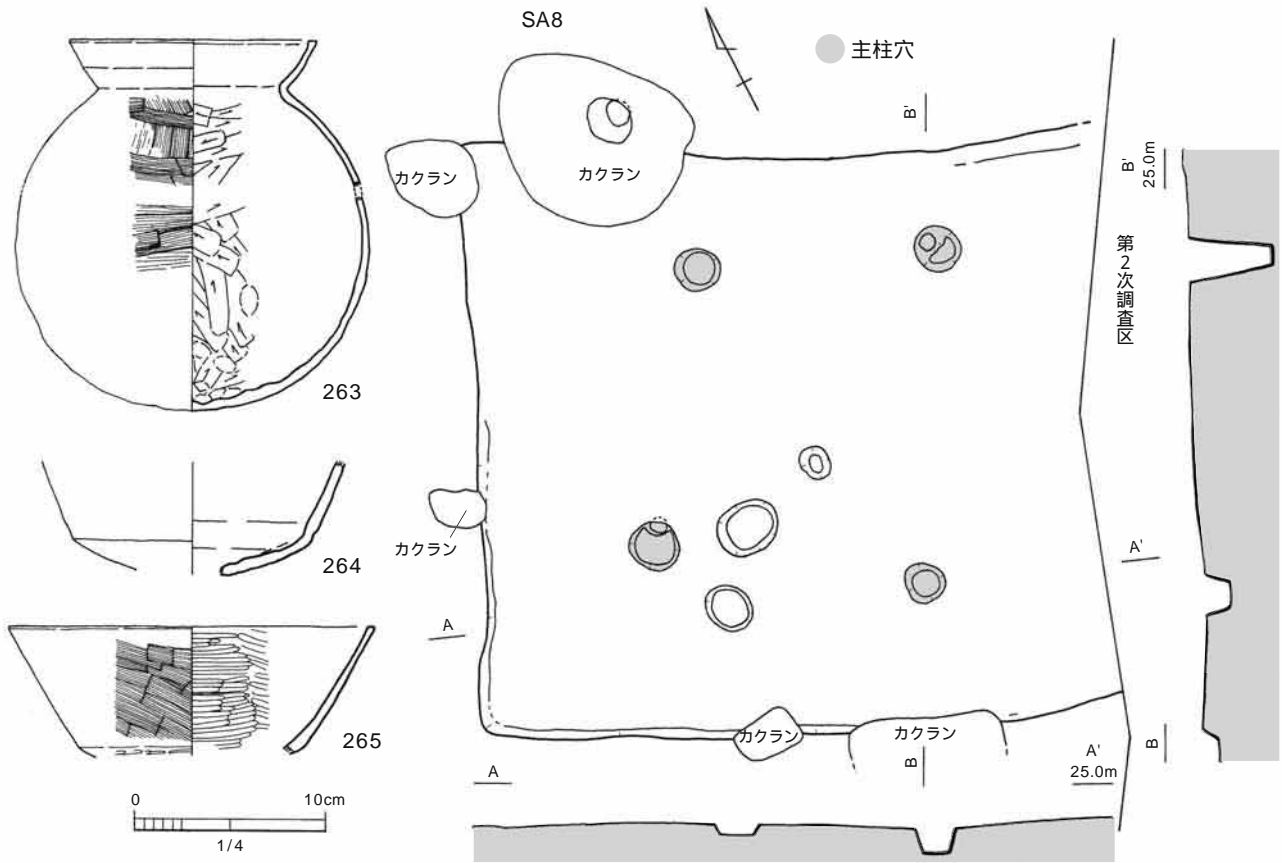
遺物は、建物南側の壁面付近から土師器甕 (263)、建物西側の床面から高坏 (264・265) が出土した。

263 は「布留式」系譜の甕である。内湾する口縁部



第 66 図 古墳時代竪穴建物跡 (S A 7) 実測図

SA7 出土遺物



第 67 図 古墳時代竪穴建物跡 (S A 7) 出土遺物及び竪穴建物跡 (S A 8 ~ 10) 実測図

で端部は内側に突出する。外面は条線の細かい板状工具でタテ方向のちヨコ方向へとハケ調整される。内面はヘラケズリが施されて器壁は極めて薄い。外来（庄内・布留式）系の高坏の坏部（264・265）は口径に比して深いタイプである。

S A 8（第 67 図）

F - 2 区北側の平坦部の第 層で検出された。東側の一部は第 2 次調査の範囲である。建物床面まで削平が及んでいたため、遺物の出土はなかったが、とても浅いながらも方形の暗褐色土の範囲が検出されたことと、支柱穴とみられる 4 本のピットを検出したことから、竪穴建物跡であると判断した。

S A 9（第 67 図）

F - 2 区北側の平坦部の第 層で検出された。東側は第 2 次調査の範囲であり、形状は北側の一辺のみを確認した。S A 7 まで約 1 m、S A 9 まで約 3 m と隣接している。建物床面まで削平された関係で遺物は出土しなかったが、北側の一辺から暗褐色土の範囲がグラデーション状に方形に延び、支柱穴とみられるピットを 3 本検出したことから、4 本柱構造とみられる竪穴建物跡であると判断した。

S A 10（第 67 図）

F - 2 区中央部の平坦部の表土直下第 層で検出された。既にアカホヤブロックを含む黒褐色土の貼床面が露出していた。南側は広がりを確認できなかった。中央部の貼床面に焼土面がある。支柱穴が 2 本認められ、配置から 4 本柱構造であった可能性が高い。遺物は出土しなかった。

S A 11（第 68 図）

F - 2 区中央部の平坦部の表土直下第 層で検出された。南側の一部に重機によるとみられる攪乱の影響を受けている。一辺約 4 m の方形で、隣接する S A 10 とほぼ同規模である。埋土は厚さ 0.1 m で、A T、炭化材を含む。その下に貼床が確認できた。

中央付近に直径 0.6 m、深さ 0.1 m の焼土範囲があり、炉であるとみられる。炉内埋土中の炭化材の樹

種同定ではサカキとの結果が出ている。支柱穴は 2 本確認している。

・ S A 11 出土遺物（第 68 図）

建物床面から土師器甕（266）と高坏（267）および砂岩由来の敲石（268）がある。266 の口縁部は直立気味でやや内湾傾向である。接合痕の明瞭な粗雑なつくりである。

S A 12（第 69 図）

F - 2 区南側の平坦部の表土直下第 層で検出。西側の半分程度は調査区外である。長辺 5 m の方形と推定される。埋土は明褐色土や炭を含む褐色土で、その下に貼床がみられ、掘り方でできた凸凹を平らにしていると考えられる。ピットはいくつか検出したが、支柱穴は見だしにくい。

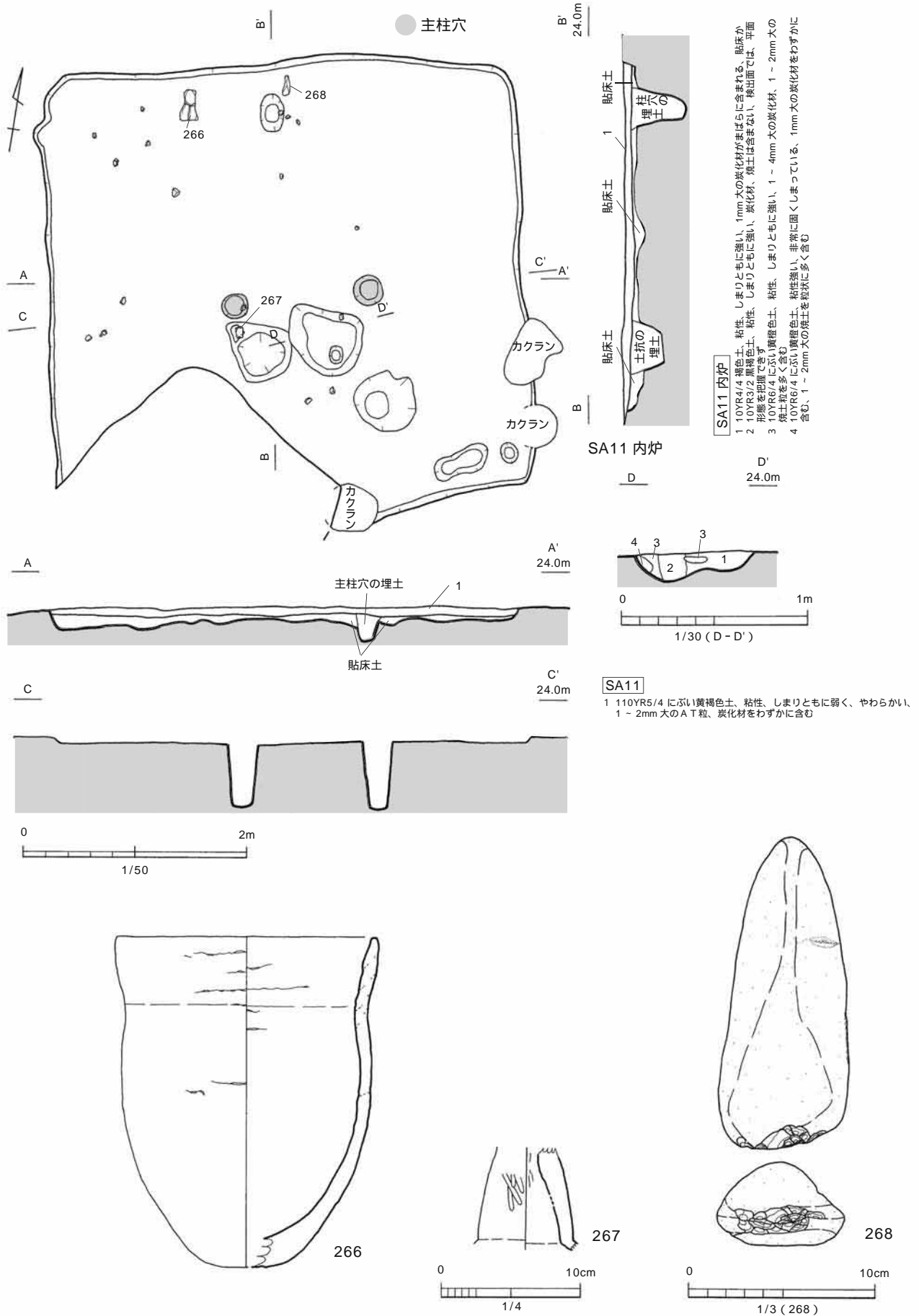
・ S A 12 出土遺物（第 69 図）

遺物は建物埋土中から床面にかけてまとまって出土した。第 69 図では床面出土遺物の位置と接合関係を示している。図化掲載した遺物は 11 点である。土師器甕の底部は丸みを帯びた尖底（270・271）がある。272 は平底で、その中心部は上げ底状となる。底部を内部から充填して成形する技法である。275 は在地系の高坏と考えられる。274・276 は広口壺で内湾する口縁部を有する。小型丸底壺（277）は二重口縁の口縁部をもつ。

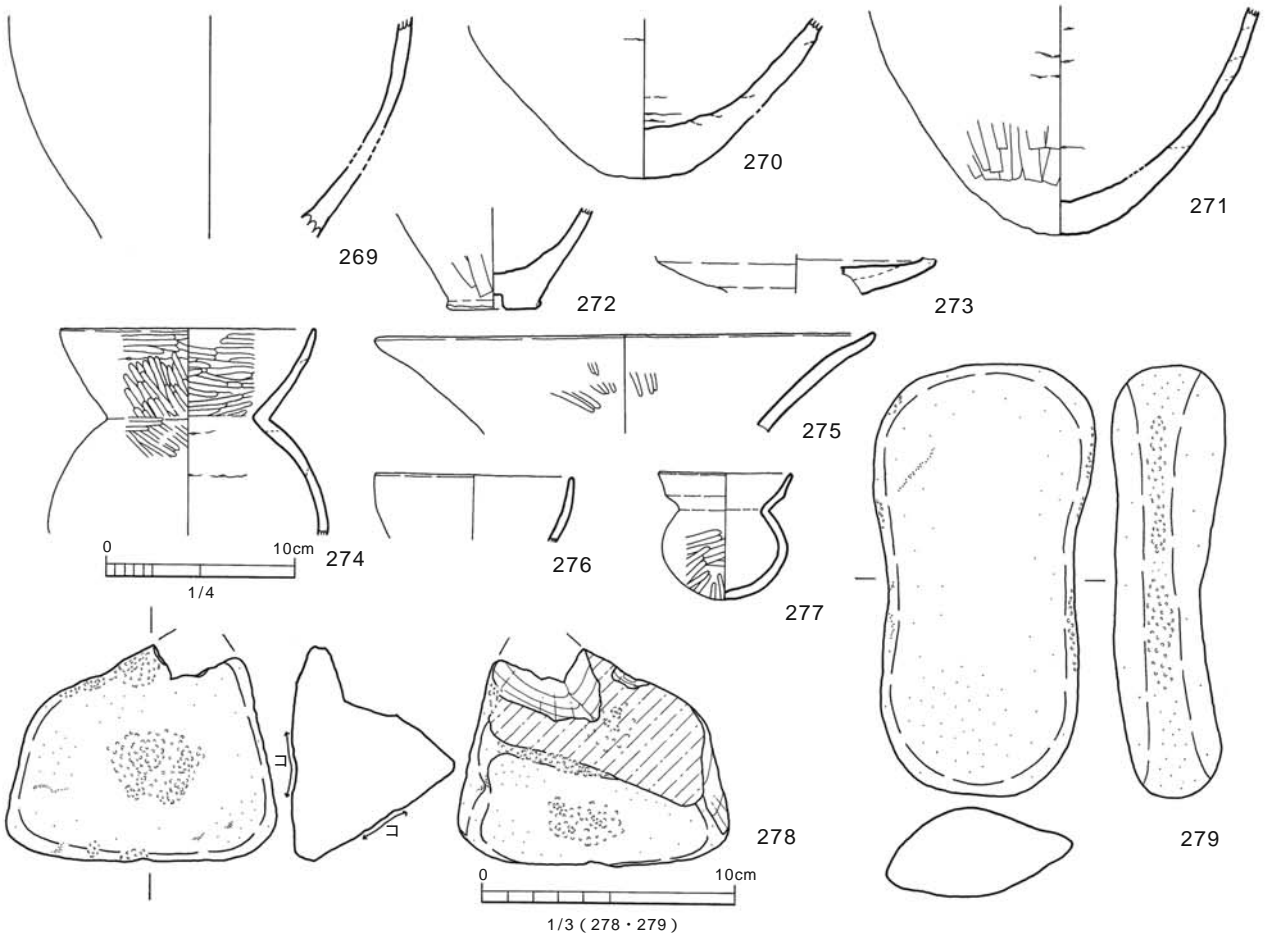
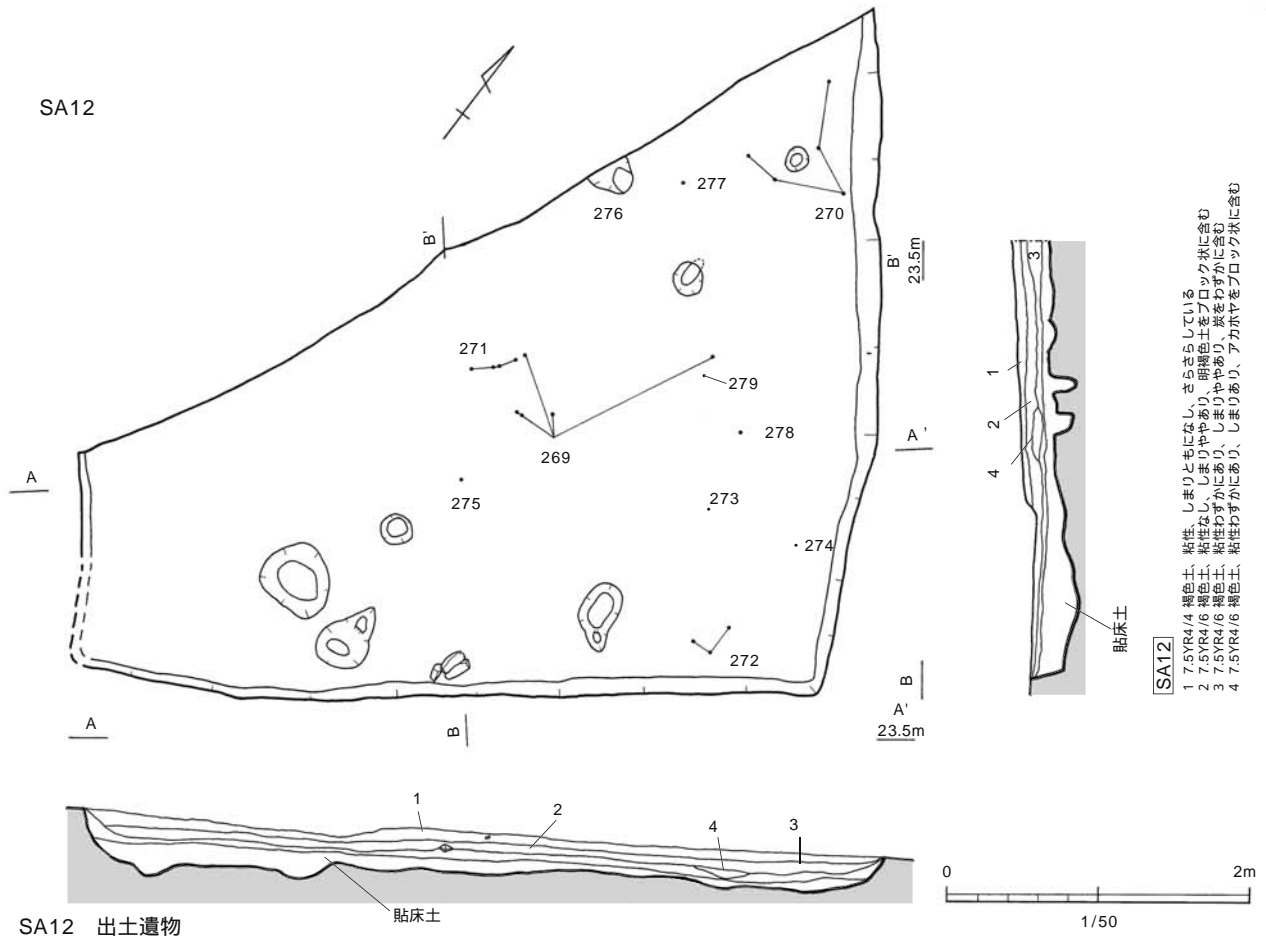
石器は凹石（278）・敲石（279）がある。ともに石材は砂岩である。中央と側縁に集約的な潰打痕を残している。279 の側面の潰打痕の周辺は赤化している。

S A 13（第 70 図）

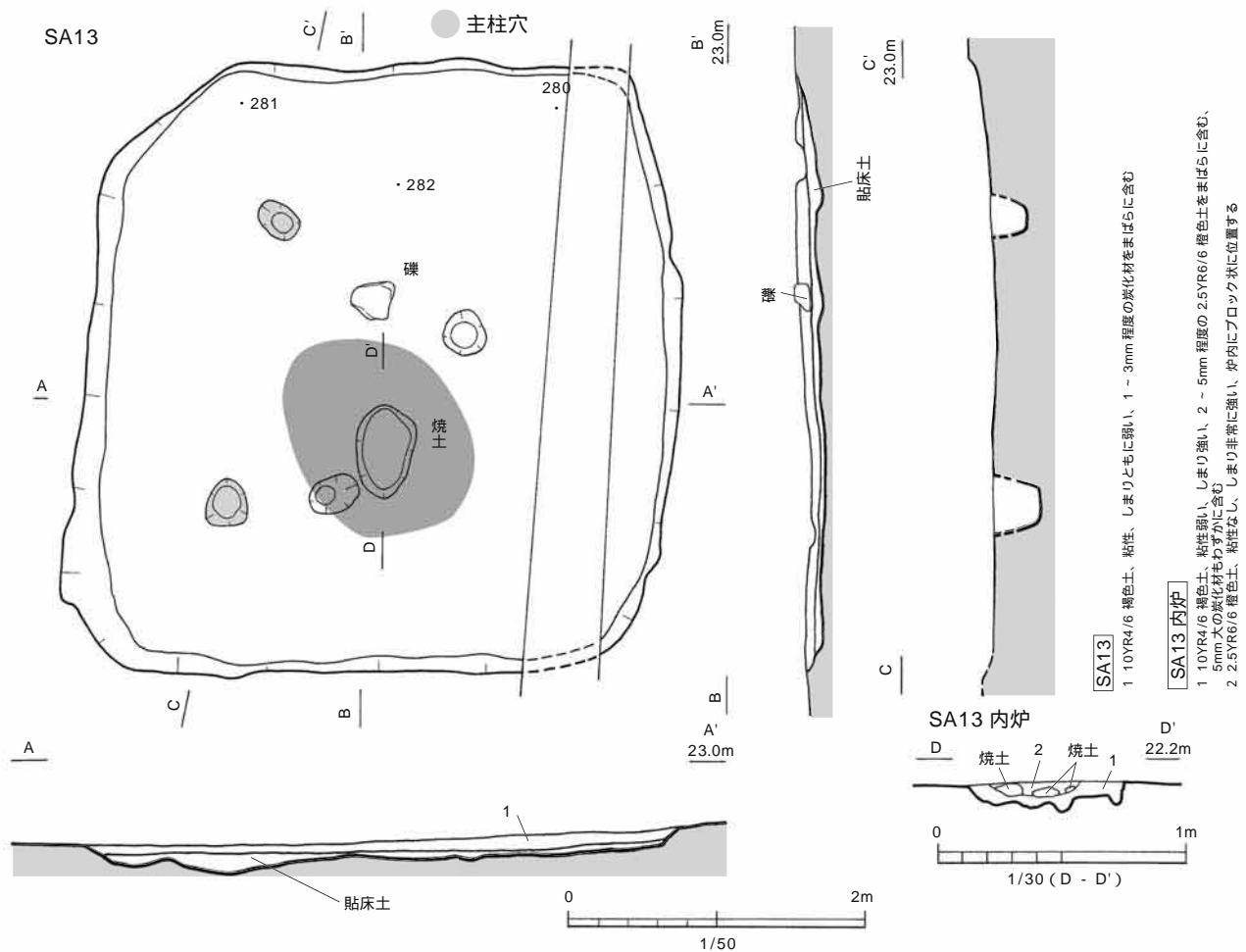
F - 2 区南側の平坦部の表土直下第 層で検出された。全体において農業用の溝とみられる攪乱の影響を受けている。埋土は第 層、炭を含む褐色土である。その下に貼床が確認できた。中央付近に直径 1.3 m、深さ 0.2 m の焼土範囲があり、炉であるとみられる。焼土範囲は、中ほどにしまりの強い焼土ブロックを含んでおり、この層を境に 2 層になっている。支柱穴は 2 本確認したが、配置から 4 本柱の構造であると考えられる。



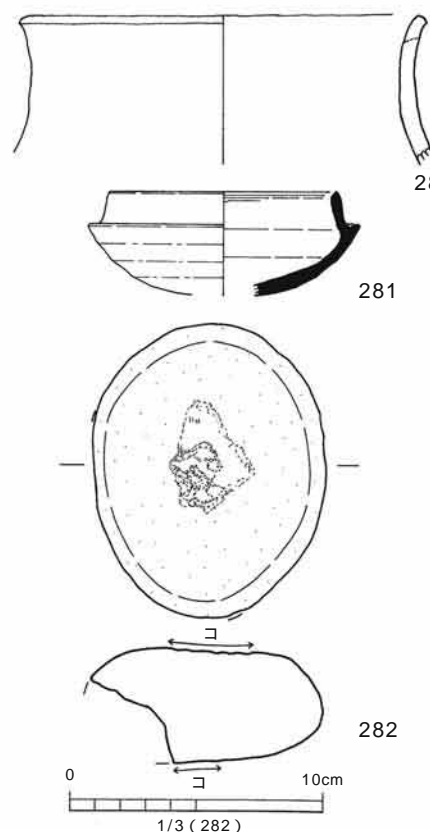
第 68 図 古墳時代竪穴建物跡 (S A 11) 及び出土遺物実測図



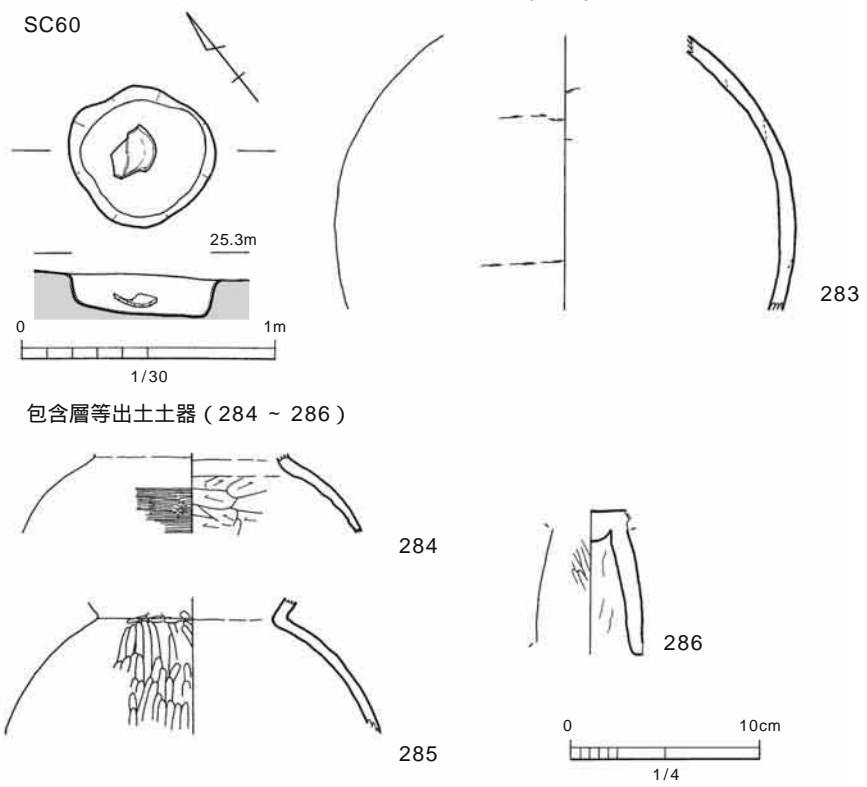
第 69 図 古墳時代竪穴建物跡 (S A 12) 及び出土遺物実測図



SA13 出土遺物 (280 ~ 282)



SC60 出土遺物 (283)



包含層等出土土器 (284 ~ 286)

第70図 古墳時代竪穴建物跡 (SA13)・土坑及び出土遺物、古墳時代包含層等出土土器実測図

・ S A 13 出土遺物 (第 70 図)

遺物は主に建物床面中央の焼土面より出土した。土師器甕 (280) の口縁部は、緩やかに立ち上がり端部は外反する形態である。須恵器坏 (281) は焼成不良で土師質に近い。口縁端部内面には凹線がめぐる。形態的には陶邑窯跡編年の M T 15 型式に類似する。

石器は凹石 (282) がある。石材は尾鈴山酸性岩類で中央に潰打痕によるくぼみがあり、裏面割れ口に錆着が見られる。

土坑

出土遺物から、土坑 1 基は当時期のものであると確認した。

S C 60 (第 70 図)

F - 2 区北側の平坦部、表土直下の第 層で検出

された。炉穴と隣接して検出されたため、炉穴の可能性も考えたが、底面に焼土が見られなかった。直径 0.6 m の円形で、深さは 0.2 m である。埋土は暗褐色土である。

・ S C 60 出土遺物

283 は土師器壺の胴部である。大型品の部類にはいる。外面には煮炊きの痕跡を示すススや赤変が認められる。

(3) 遺物

包含層等から出土した土器のうち、当時期のものと思われるものを掲載した (第 70 図)

284 は布留式系の甕である。外面にヨコ方向への八ケ目、内面はヘラ削り調整される。285 は壺の胴部、286 は高坏の脚部である。

第 22 表 古墳時代土坑一覧表

遺構	出土位置 〔グリッド〕	検出面 〔層〕	遺構規模〔m〕			等高線との位置	グループ	断面形態長軸方向	備考
			長径	短径	深さ				
S C 60	E 14		0.6	0.5	0.2	-	C	長方形	古墳時代の土師器出土

第 23 表 古墳時代土器観察表 (1)

種別	器種	部位	出土地点 〔位置〕〔層位〕	手法・調整・文様		色調		胎土	備考 (法量: cm)		
				外面	内面	外面	内面				
182	土師器	甕	口縁~頸	SA1	埋土	縦方向の工具ナデ	横ナデ	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	にぶい橙 7.5 Y R 7/4	2mm 以下の灰色・灰白色・褐色の粒を含み、角閃石をわずかに含む	外面にスス付着
183	土師器	甕	口縁~胴	SA1	床面	口縁~肩部: 横・斜方向の粗い横ナデ 胴部: 縦方向のナデ	板状工具による横・斜方向のナデ	黒 7.5 Y R 1.7/1	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	3mm 以下の灰色・暗褐色・赤褐色の粒を含み、2mm 程の灰色の光沢粒をわずかに含む	外面全体にスス付着 口径 (19.2)
184	土師器	甕	口縁~底	SA1	床面	口縁~頸部: 板状工具による粗い横ナデ 肩~胴部: 縦方向のヘラミガキ	口縁~頸部: 横ナデ 肩~横・斜方向の工具ナデ	明赤褐 2.5 Y R 5/6 にぶい黄橙 10 Y R 7/3	浅黄 2.5 Y R 7/3	8mm 以下の灰色・6mm 以下のにぶい赤褐色の粒を多く含む	外面上部にスス付着 器高 32.2 口径 (20.1)
185	土師器	甕	口縁~底	SA1	床面	口縁~肩部: 横・斜方向の粗い工具ナデ 胴部: ナデ 底部: 木の葉の痕	板状工具による横・斜め方向のナデ	淡黄 2.5 Y 8/4	にぶい黄 2.5 Y 6/3	1~5mm 程の暗褐色・褐色の粒、1mm 程の赤褐色の粒を含み、角閃石をわずかに含む	外面にスス付着、内面全体に黒変 器高 15.3 口径 (12.6)
186	土師器	甕	肩~胴	SA1	埋土	肩部: 横方向のヘラミガキ 胴部: 縦方向のヘラミガキ	横・斜方向の粗い工具ナデ	にぶい黄橙 10 Y R 6/3	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	2~8mm 程の灰色の粒、5mm 以下の褐色・暗褐色の粒、3mm 以下の赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	内・外面にスス付着 胴部最大径 (22.0)
187	土師器	甕	底	SA1	埋土	ケズリ後、縦・斜方向のナデ	ナデ	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	黒 10 Y R 1.7/1	5mm 以下の灰色・灰白色・暗褐色・赤褐色の粒を含み、角閃石をわずかに含む。	内・外面にスス付着 底径 4.9
188	土師器	甕	底	SA1	埋土	丁寧なナデ	ナデ	にぶい黄橙 10 Y R 7/3	にぶい黄橙 10 Y R 7/2	1~5mm 程の灰色・褐色・暗褐色の粒、1~2mm 程の赤褐色の粒を含み、2mm 程の白色光沢粒・角閃石をわずかに含む	
189	土師器	甕	胴~底	SA1	床面	縦方向のヘラミガキ	板状工具による縦・斜方向のナデ 底部: ナデ	にぶい黄橙 10 Y R 6/3	にぶい黄橙 10 Y R 7/3	1~8mm 程の灰色・褐色・暗褐色の粒を多く含む、2~5mm 程の赤褐色の粒を含む	1 8 3 と同一個体か 底径 3.1
190	土師器	壺	口縁	SA1	埋土	横ナデ下部に連続刺突文	横ナデ	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	1~2mm 程の白色光沢粒をまばらに含む	二重口縁口径 (12.8)
191	土師器	壺	頸	SA1	埋土	縄目状の突帯横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙 7.5 Y R 7/4	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	2mm 以下のにぶい赤褐色・橙色の粒を含む	
192	土師器	壺	頸~胴	SA1	床面	頸部: 丁寧な横ナデ 肩~胴部: 横方向のミガキ	頸部: 横ナデ 肩~胴部: ナデ	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	にぶい黄橙 10 Y R 6/3	1mm 以下の灰白色と褐色の粒を含む	胴部最大径 (12.0)
193	土師器	壺	胴	SA1	床面	斜・横方向のミガキ	丁寧なナデ	橙 5 Y R 6/8	橙 5 Y R 6/8	1mm 以下の黒色・灰色・灰白色の粒を含む	胴部最大径 (17.0)
194	土師器	壺	胴	SA1	ビット埋土	工具ナデ	板状工具による横ナデ	にぶい黄褐 10 Y R 5/3	橙 7.5 Y R 6/6	2~7mm 程の灰色・灰白色・淡黄色の粒、3mm 以下の暗褐色・赤褐色の粒を含み、角閃石、1~4mm 程の白色・灰白色・灰色の光沢粒をまばらに含む。	頸部径 (9.8) 胴部最大径 (21.4)
195	土師器	壺	口縁~底	SA1	床面	口縁~頸部: 横ナデ 後まばらな斜方向のミガキ 肩~底部: 横・斜方向のミガキ	口縁~頸部: 横ナデ 胴部: 横・斜方向の丁寧なナデ 底部: ナデ	浅黄 2.5 Y 7/3	浅黄 2.5 Y 7/3	3mm 以下の褐色、2mm 以下の赤褐色の粒を含み、2mm 程の灰色の粒、1mm 程の白色光沢粒・角閃石をわずかに含む	外面底部一部黒変 口径 (9.0) 器高 10.4

第 24 表 古墳時代土器観察表 (2)

種別	器種	部位	出土地点		手法・調整・文様		色調		胎土	備考 (法量: cm)	
			(位置)	(層位)	外面	内面	外面	内面			
196	土師器	小型丸底壺	口縁~胴	SA1	土坑埋土	口縁~肩部: 横方向のミガキ 胴部: 横・斜方向のミガキ	口縁~頸部: 丁寧な横ナデ 頸部~胴部: ナデ	浅黄橙 7.5 Y R 8/6	浅黄橙 7.5 Y R 8/6	1mm 程の赤褐色・黒色の粒を含む	口径 6.6
197	土師器	小型丸底壺	頸~底	SA1	埋土	頸部: 横ナデ 胴~斜方向のナデの後まばらなミガキ 底部: ナデ	頸部: 横ナデ 胴~底部: 斜方向の工具ナデ	浅黄橙 7.5 Y R 8/4 にぶい橙 5 Y R 7/4	にぶい橙 5 Y R 7/4	1mm 以下の透明粒を多く含み、1mm 程の灰白色・褐色・赤褐色の粒を含む	外面底部黒変あり 胴部最大径 (9.0)
198	土師器	壺	口縁~底	SA1	埋土	口縁: 横ナデ 口縁~頸部: 横・斜方向のミガキ、指押さえ 胴部: 縦・斜方向のナデ後粗いミガキ 底部: ナデ	口縁: 横ナデ 頸部: 斜方向の工具ナデ 胴~底部: ナデ、指押さえ	灰白 2.5 Y 8/2	淡黄 2.5 Y 8/3	4mm 以下の褐色の粒を多く含み、2mm 以下の灰色、灰白色の粒を含み、角閃石をわずかに含む	外面口縁~頸部に黒斑あり 口径 (7.8) 底径 (2.2)
199	土師器	小型鉢	底	SA1	埋土	ナデ	指押さえ・指ナデ	褐灰 10 Y R 4/1	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	1mm 以下の透明粒を多く含み、1mm 程の褐色の粒をわずかに含む	外面全体黒変底径 2.2
200	土師器	高坏	坏	SA1	床面	口縁部: 横方向のハゲ目 口縁~底部: 横・斜方向のハゲ目	横方向のハゲ目後まばらなミガキ	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	にぶい橙 7.5 Y R 7/4	2 ~ 3mm 程の褐色・赤褐色の粒を含む	内面にスス付着 口径 (21.4)
201	土師器	高坏	坏	SA1	埋土	板状工具による横ナデ	横・斜方向のナデ	橙 7.5 Y R 7/6	浅黄橙 10 Y R 8/4	4mm 以下の灰色・褐色・暗褐色、1mm 程の赤褐色の粒を多く含み、1 ~ 3mm 程の白色・灰白色光沢粒、角閃石をまばらに含む	外面上部にスス付着 口径 (17.8)
202	土師器	高坏	坏	SA1	埋土	口縁部: 横・斜方向のナデ 口縁~底部: 縦・斜方向のナデ	ナデ	灰白 10 Y R 8/2	灰白 10 Y R 8/2	1 ~ 6mm 程の灰色・灰白色・褐色・赤褐色、1mm 程の黒色の粒を多く含み、角閃石と 1mm 以下の透明粒をまばらに含む	口径 (20.6)
203	土師器	高坏	坏	SA1	床面	横ナデ後まばらなミガキ	横ナデ後まばらなミガキ	浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	3mm 以下の黒色・灰色・灰白色・褐色の粒を多く含み、1mm 程の赤褐色の粒を含み、角閃石・金雲母をまばらに含む	内・外面にスス付着 口径 (23.7)
204	土師器	高坏	坏	SA1	床焼土面	端部: 横方向のミガキ 口縁: 縦・斜方向のミガキ 底部: 横・斜方向のナデ	横・斜方向のミガキ	橙 7.5 Y R 6/6	にぶい橙 7.5 Y R 6/4	1mm 以下の黒色・透明の光沢粒を多く含み、2mm 以下の褐灰色・褐色の粒をわずかに含む	内面に部分的黒変 口径 (20.3)
205	土師器	高坏	坏底部	SA1	埋土	底部: 横・斜方向のミガキ 脚部との接合部: 縦方向のミガキ	ミガキ	にぶい橙 7.5 Y R 7/4	にぶい黄橙 10 Y R 7/3	1 ~ 2mm 程の灰色・灰白色・褐色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	内面全体黒変 脚部との接合部が黄灰色に変色
206	土師器	高坏(フイゴの羽口として転用)	脚柱	SA1	床面	横ナデ	ナデ	橙 5 Y R 7/6	橙 2.5 Y R 6/6	1mm 以下の白色光沢粒を含む きめ細か	
207	土師器	高坏(フイゴの羽口として転用)	脚	SA1	床面	脚柱部: 不明瞭だがミガキか 裾部: 横ナデ	脚柱部: 縦方向のナデ 裾部: 横ナデ	橙 7.5 Y R 7/6	橙 7.5 Y R 7/6	5mm 以下の灰白色、2mm 以下の灰色・褐色の粒を多く含み、角閃石・金雲母をまばらに含む	裾部径 (13.7)
208	土師器	高坏(フイゴの羽口として転用)	脚	SA1	床焼土面	接合部: ミガキ 脚柱部: 縦方向のミガキ 裾部: 横方向のナデ	接合部: ナデ、しぼり痕あり 脚柱部: ナデ	橙 7.5 Y R 7/6	橙 7.5 Y R 7/6	2mm 以下の灰白色・白色の粒を含み、1mm 程の赤褐色の粒と角閃石をまばらに含む	裾部内面黒変 裾部径 (15.0)
209	土師器	高坏(フイゴの羽口として転用)	脚	SA1	床面	脚柱部: 横ナデ 裾部: 横・斜方向のミガキ 裾部端部: 横ナデ	坏部との接合部: 横ナデ 脚柱部: 横方向のケスリ 裾部: ナデ後、横・斜方向のミガキ 裾部端部: 横ナデ	にぶい黄橙 10 Y R 7/4 にぶい橙 7.5 Y R 7/4	にぶい橙 7.5 Y R 7/4	3mm 以下の赤褐色、1mm 以下の黒色の粒を含む	裾部径 (14.4)
210	土師器	高坏(フイゴの羽口として転用)	脚	SA1	床焼土面	脚柱部: 上部は調整不明瞭、下部は縦・斜方向のミガキ、裾部付近は横ナデ 裾部: 横ナデ後まばらなミガキ	脚柱部: 横ナデ、上部に指押さえ痕 裾部: 上部は横方向のハゲ目、下部は横ナデ	黄橙 10 Y R 8/6	橙 7.5 Y R 7/6	3mm 以下の赤褐色、1mm 以下の黒色の粒を含む	裾部径 15.6
211	土師器	高坏	脚	SA1	埋土	脚柱部: 縦・斜方向のナデ 裾部: 横・斜方向のミガキ、端部は横ナデ	脚柱部: 粗いナデ 裾部: 横ナデ	明黄褐 10 Y R 7/6	にぶい黄橙 10 Y R 7/3 褐灰	3mm 以下の褐色・赤褐色の粒の多く含む	裾部外面黒斑 底径 (11.9)
212	土師器	高坏	脚	SA1	床面	坏部との接合部: 横ナデ 脚柱部: ナデ後縦・斜方向のミガキ 裾部: 横・斜方向のミガキ	脚柱部: 斜方向のナデ 坏部: 横ナデ	橙 5 Y R 7/6	にぶい橙 5 Y R 7/4	1mm 以下の黒色・灰色・灰白色・白色・赤褐色の粒を含む	裾部一部黒変 底径 12.8
213	土師器	高坏	脚	SA1	床面	脚柱部: 縦方向のミガキ 裾部: 上部横ナデ、下部横方向のハゲ目後横ナデ	脚柱部: 横ナデ 裾部: 上部は横方向のハゲ目、下部は横ナデ	にぶい橙 7.5 Y R 7/4	にぶい橙 7.5 Y R 7/4	5mm 以下の赤褐色、1mm 以下の黒色の粒を含む	裾部径 13.2
214	土師器	高坏	脚	SA1	床面	脚柱部: 横方向の指ナデ後縦方向のミガキ 裾部: 横ナデ	脚柱部: 粗いナデ 裾部: 丁寧なナデ	浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 7.5 Y R 8/4	1mm 程度の褐色・灰色・灰白の粒を多く含む	

第 25 表 古墳時代土器観察表 (3)

種別	器種	部位	出土地点		手法・調整・文様		色調		胎土	備考 (法量: cm)	
			(位置)	(層位)	外面	内面	外面	内面			
215	土師器	高坏	脚	SA1	床面	脚柱部: 縦方向のミガキ 裾部: 横・斜方向のミガキ、端部は横ナデ	脚柱部: 縦・横方向のナデ 裾部: 横ナデ	橙 2.5 Y R 6/6	橙 5 Y R 6/6	1mm 以下の灰白色・白色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	
226	土師器	甕	口縁~胴	SA4	埋土	口縁部: 指押さえ後ナデ 胴部: 縦方向のヘラミガキ	口縁部: 斜方向のナデ 胴部: 横・斜方向の工具ナデ	黒 5 Y R 1.7/1	にぶい褐 7.5 Y R 5/4	3mm 以下の灰色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面全体スス付着 口径 (16.2)
227	土師器	甕	口縁~胴	SA4	床面	口縁部: 横ナデ肩部: 縦方向のナデ 胴部: 横方向のヘラミガキ 下部: 縦・斜方向のナデ	口縁部: 上部は横ナデ、下部は斜方向のナデ 胴部: 板状工具による斜方向のナデ	橙 5 Y R 6/6	明赤褐 5 Y R 5/6	5mm 以下の灰色・灰白色、3mm 以下の暗褐色・褐色、1mm 程の赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面口縁部~胴部、内面胴部にスス付着 口径 (21.0)
228	土師器	甕	口縁~肩	SA4	床面	口唇部: 横ナデ 口縁部: 横・斜方向のナデ 肩部: 縦方向のナデ	口縁部: 上部は横ナデ、下部は斜方向のナデ 肩部: 斜方向のナデ	黒褐 10 Y R 3/1	にぶい黄褐 10 Y R 5/3	3mm 以下の灰色・暗褐色、2mm 以下の赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	内外面スス付着
229	土師器	甕	口縁~頸	SA4	埋土	口唇部: 横ナデ口縁~頸部: 横・斜方向のナデ	斜方向のナデ	黒 2.5 Y 2/1	にぶい黄橙 10 Y R 6/3	6mm 以下の灰色、4mm 以下の黒色、3mm 以下の暗褐色・赤褐色・灰白色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面スス付着
230	土師器	甕	口縁~胴	SA4	床面	口縁部: 横ナデ 胴部: 縦方向のヘラミガキ	口縁部: 横ナデ 胴部: 板状工具による粗い斜方向のナデ	にぶい黄橙 10 Y R 7/3	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	4mm 以下のにぶい褐色、3mm 以下の灰色・灰白色・褐色、2mm 以下の暗褐色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	内外面スス付着 口径 (20.0)
231	土師器	甕	頸~胴	SA4	床面	頸部: 斜方向のナデ 胴部: 横・斜方向のナデ	頸部: 横ナデ 胴部: 横・斜方向のナデ	橙 5 Y R 6/6	橙 5 Y R 6/6	5mm 以下の灰色、3mm 以下の暗褐色・褐色、2mm 以下の赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	胴部外面スス付着
232	土師器	甕	底	SA4	埋土	縦方向の工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	にぶい黄橙 10 Y R 7/3	4mm 以下の赤褐色、3mm 以下の灰色・褐色・暗褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	内外面一部黒変 底径 (4.2)
233	土師器	甕	底	SA4	床面	不定方向のナデ、底に指押さえ痕	縦方向の指ナデ、底に指押さえ痕	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	黒褐 10 Y R 3/1	5mm 以下の灰色・暗灰色、2mm 以下の灰白色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	内外面スス付着 底径 (1.0)
234	土師器	甕	底	SA4	埋土	ナデ	不定方向のナデ	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	にぶい橙 10 Y R 6/4	5mm 以下の灰白色、3mm 以下の灰色・暗褐色・褐色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	内面全体黒変
235	土師器	壺	頸	SA4	埋土	不整方向に刻みのある突帯、横・斜方向のナデ	板状工具による横ナデ、指押さえ痕あり	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	明黄褐 10 Y R 6/6	5mm 以下の灰色・灰白色・褐色、3mm 以下の赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面全体スス付着
236	土師器	壺	口縁	SA4	埋土	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 7.5 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	4mm 以下の灰色・灰白色、2mm 以下の赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	内面一部黒変 口径 (9.6)
237	土師器	壺	口縁他	SA4	埋土	ヘラ描き波状文、斜方向のナデ	縦方向のナデ	黒褐 10 Y R 3/2	にぶい黄褐 10 Y R 5/3	3mm 以下の灰白色・暗褐色・褐色、1mm 程の赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面全体スス付着
238	土師器	高坏	坏	SA4	床面	風化が著しいが、ミガキか	風化が著しいが、ミガキか	黄橙 10 Y R 8/8	黄橙 10 Y R 8/6	白色光沢粒、2mm 以下の褐色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	
239	土師器	高坏	坏	SA4	床面	口縁部: ナデ後斜方向のミガキ 底部: 横ナデ	口縁部: ナデ後ミガキ 底部: ナデ	浅黄橙 7.5 Y R 8/4	浅黄橙 7.5 Y R 8/4	2mm 以下の褐色・暗褐色・灰色の粒を多く含み、1mm 程の赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	
240	土師器	高坏	脚	SA4	床面	脚柱部: 斜方向のナデ 裾部: 横ナデ	脚柱部: 横方向の粗いナデ 裾部: 横ナデ	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	5mm 以下の灰白色、2mm 以下の褐色・暗褐色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	内外面一部黒変 裾部径 (10.8)
241	土師器	高坏	脚柱	SA4	埋土	坏部との接合部: 横ナデ 脚柱部: 縦方向のミガキ	縦・横方向のナデ	浅黄橙 10 Y R 8/4	浅黄橙 10 Y R 8/4	2mm 以下の褐色・暗褐色・灰色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	
242	土師器	小型鉢	口縁~底	SA4	埋土	ナデ	口縁~胴部: 横ナデ 底部: 不定方向のナデ	橙 7.5 Y R 7/6	明黄褐 10 Y R 7/6	4mm 以下の灰白色、3mm 以下の褐色・暗褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面全体、内面一部黒変 器高 5.1 口径 (8.1) 底径 1.8
243	土師器	小型鉢	底	SA4	埋土	ナデ	不定方向のナデ	黄灰 2.5 Y 6/1	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	3mm 以下の赤褐色、2mm 以下の褐色の粒を含む	底径 (3.0)
255	土師器	甕	胴	SA5	床面	調整は不明 絵画状の線刻	丁寧なナデ	灰黄褐 10 Y R 5/2 黒 10 Y R 1.7/1	橙 7.5 Y R 6/6	1 ~ 2mm の褐色の粒を含む	外面全体スス付着、内面に種子とみられる圧痕
258	土師器	甕	頸~胴	SA6	床面	縦方向のナデ	頸部: 斜方向のナデ 胴部: 縦・斜方向のナデ	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	3mm 以下の褐色・暗褐色・赤褐色の粒を含み、2 ~ 6mm 程の灰白色の粒、角閃石をまばらに含む	外面全体スス付着
259	土師器	甕	胴~底	SA6	埋土	板状工具による縦・斜方向のナデ	板状工具による縦・斜方向のナデ、底部: 指押さえ痕	黒褐 10 Y R 3/1	にぶい黄橙 10 Y R 6/3	7mm 以下の灰白色、3mm 以下の灰色・褐色・暗褐色、1mm 程の赤褐色の粒を含み、角閃石をわずかに含む	胴部外面スス付着 底径 4.3
260	土師器	壺	頸	SA6	埋土	縄目状の突帯横ナデ	縦方向のミガキ	にぶい赤褐 5 Y R 4/3	灰褐 5 Y R 4/2	1 ~ 2mm 程の灰色・灰白色・褐色・暗褐色・赤褐色の粒を含み、1mm 以下の黒色光沢粒をわずかに含む	
263	土師器	甕	口縁~底	SA7	床面	口縁部: 横ナデ 肩~胴部: 縦・横方向のハケ目 胴~底部: 丁寧なナデ	口縁部: 横ナデ 頸部: 縦方向のナデ 肩~胴部: 横方向のヘラケズリ 胴~底部: 指押さえ後縦方向のヘラケズリ	橙 7.5 Y R 7/6	橙 5 Y R 6/6	2 ~ 5mm の白色の粒をまばらに含み、1mm 以下の灰色・灰白色の粒を多く含む	外面口縁~肩部スス付着、頸部・底部黒変 口径 (13.0)
264	土師器	高坏	坏	SA7	床面	丁寧なナデ	風化・剥離により不明瞭	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	にぶい橙 7.5 Y R 7/4	2mm 以下の灰褐色・灰色・黒色の粒を含む	
265	土師器	高坏	坏	SA7	床面	端部: 横ナデ 坏部: 斜方向のハケ目 底部: ミガキ	丁寧な横方向のミガキ	明赤褐 10 Y R 7/6	にぶい橙 7.5 Y R 6/4	2mm 以下の白色光沢粒を含む	口径 (19.2)
266	土師器	甕	口縁~底	SA11	床面	口縁部: 横・斜方向のナデ 頸部: 横ナデ 胴部: 不定方向のナデ 胴~底部: 縦方向のナデ	口縁部: 粗くまばらな縦方向のナデ 頸~底部: ナデ	にぶい黄橙 10 Y R 7/3	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	10mm 以下の灰色・灰褐色、7mm 以下の褐色・暗褐色の粒を多く含み、2mm 以下の赤褐色の粒を含み、角閃石をわずかに含む	口径 (18.8) 底径 (4.0)
267	土師器	高坏	脚	SA11	埋土	脚柱部: ナデ後まばらなミガキ 裾部との接合部: ナデ	脚柱部: 縦方向のナデ 裾部との接合部: 横ナデ	橙 7.5 Y R 7/4	にぶい橙 7.5 Y R 7/6	2mm 以下の灰色・暗褐色、1mm 以下の灰白色・赤褐色の粒を含む	

第 26 表 古墳時代土器観察表 (4)

種別	器種	部位	出土地点		手法・調整・文様		色調		胎土	備考 (質量 : cm)	
			(位置)	(層位)	外面	内面	外面	内面			
269	土師器	甕	胴	SA12	床面	縦方向のナデ	不定方向のナデ	にぶい褐 7.5 Y R 5/3 にぶい赤褐 7.5 Y R 5/4	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	2mm 以下の灰白色・灰色の粒を含む、角閃石をまばらに含む	内外面一部スス付着
270	土師器	甕	胴~底	SA12	埋土	胴部：縦方向のナデ 底部：ナデ	ナデ	浅黄 2.5 Y 7/4	浅黄 2.5 Y 7/3	5mm 以下の褐色・暗褐色の粒を多く含み、4mm 以下の灰色・灰白色の粒を含む	内外面スス付着 底径 (4.6)
271	土師器	甕	胴~底	SA12	ピット埋土	胴部：板状工具による縦方向のナデ 底部：ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10 Y R 6/4	橙 7.5 Y R 6/6	2 ~ 7mm の暗褐色・灰色の粒を多く含み、2mm 以下の灰白色・赤褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面底部、内面全体スス付着
272	土師器	甕	胴~底	SA12	床面	胴部：ケズリ後斜方向のナデ 底部：ナデ	ナデ 底部：指押さえ痕	黒 10 Y R 2/1	にぶい橙 7.5 Y R 7/3	2mm 以下の灰色・灰白色、2 ~ 5mm の褐色・暗褐色、1mm 程の赤褐色の粒を含む	上げ底 底径 4.95
273	土師器	高坏	坏	SA12	埋土	縦・横方向のナデ	横ナデ	にぶい橙 7.5 Y R 7/4	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	2mm 以下の灰色・灰白色、3mm 程の灰褐の粒を含む	
274	土師器	壺	口縁~胴	SA12	埋土	口縁上部：横方向のミガキ 口縁下部：縦方向のミガキ 頸部：横方向のミガキ 胴部：斜方向のミガキ	口縁部：横ナデ後横方向のミガキ 胴部：ナデ	橙 7.5 Y R 6/6	橙 7.5 Y R 6/6	2mm 以下の灰色・灰白色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	外面全体、内面口縁部スス付着 口径 (13.5)
275	土師器	高坏	坏	SA12	床面	横ナデ後まばらなミガキ	横ナデ後まばらなミガキ	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	3mm 以下の黒色・灰色・灰白色・褐色・暗褐色の粒を多く含み、角閃石をまばらに含む	内面一部黒変 口径 (26.6)
276	土師器	壺	口縁	SA12	埋土	横ナデ	横ナデ	橙 5 Y R 7/8	橙 7.5 Y R 7/6	1mm 以下の黒色・白色の粒を含み、2mm 程の黒色光沢粒をわずかに含む	口径 (10.2)
277	土師器	小型丸底壺	ほぼ完形	SA12	埋土	口縁~肩部：横ナデ 胴部：横方向のミガキ 底部：縦方向のミガキ	口縁~頸部：横ナデ 胴~底部：ナデ	明赤褐 10 Y R 7/6	明赤褐 10 Y R 7/6	1 ~ 2mm の赤褐色の粒を含み、1mm 以下の白色光沢粒を含む	二重口縁 器高 6.7 口径 (6.8) 底径 0.9
280	土師器	甕	口縁~胴	SA13	埋土	口縁部：横ナデ 胴部：斜方向のナデ	口縁部：横ナデ 胴部：斜方向のナデ	黒褐 2.5 Y R 3/1	浅黄 2.5 Y R 7/4	1 ~ 5mm の灰色・灰白色・暗褐色、1mm 程の褐色・赤褐色の粒を含む	
281	須恵器	坏身	口縁~底	SA13	埋土	口縁~受部：回転横ナデ 底部：回転ヘラケズリ	回転横ナデ 底部に凹線	灰白 5 Y 7/2	灰白 5 Y 7/2	精良、1mm 以下の灰白色の粒を含む	口径 12.0 胴部径 14.4
283	土師器	甕	胴	SC60	埋土	横・斜方向のナデ	横・斜方向の工具ナデ	浅黄 2.5 Y 7/4	にぶい黄橙 10 Y R 7/3	1 ~ 3mm の灰白色・灰褐色の粒を含む	外面全体スス付着、内面一部黒変 胴部径 (24.4)
284	土師器	甕	胴	F15 Gr		肩部：横ナデ 胴部：縦方向のハケ目 後横方向のハケ目	肩部：丁寧な横ナデ 胴部：横ナデ	にぶい黄橙 10 Y R 7/4	にぶい橙 7.5 Y R 7/4	2mm 以下の灰白色・灰色・褐色の粒を含む	
285	土師器	壺	頸~胴	B20Gr	上面	頸部：横方向のミガキ 胴部：縦方向のミガキ	横方向のナデ	橙 7.5 Y R 7/6	橙 7.5 Y R 7/6	1mm 以下の黒色・灰色・灰白色・褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	
286	土師器	高坏	脚	N04Gr	攪乱埋土	縦方向のミガキ	縦方向のナデ しぼり痕	橙 2.5 Y R 6/8 橙 5 Y R 6/6	橙 7.5 Y R 7/6	1mm 以下の灰白色の粒を多く含む	

第 27 表 古墳時代竪穴建物跡出土石器計測表 (1)

器種	石材	出土地点		計測値				備考	
		(位置)	(層位)	長さ [cm]	幅 [cm]	厚さ [cm]	重量 [g]		
216	石斧	珪質頁岩	SA1	埋土	7.58	4.92	0.94	42.10	正面は自然面、裏面は節理面で剥離、両側面と下部に剥離調整
217	敲石	砂岩	SA1	埋土	7.80	3.70	3.50	149.3	下部に敲打痕集中、左側面にまばらな敲打痕、一部赤化
218	敲石	砂岩	SA1	埋土	13.10	5.50	4.10	433.9	正面・裏面中央に敲打痕集中、左側面の敲打痕は細かく集中、下部に剥離痕
219	砥石	砂岩	SA1	床面	11.25	10.40	6.10	871.4	正面に放射状・線状の使用痕、正面全面に磨面、やや集中した敲打痕、右側面に剥離痕
220	石皿	砂岩	SA1	床焼土面	33.70	13.65	10.90	6770.0	正面の大部分が磨面、磨面の一部が茶色に変色 (錆着か?)
221	石皿	砂岩	SA1	床面	34.85	14.15	18.80	13500.0	3面に磨面、裏面は赤化・粒状の錆着、一部欠損
244	石錘	砂岩	SA4	埋土	5.55	7.45	1.60	93.7	長軸方向の両側面を打ち欠き、裏面上部に剥離痕
245	石斧	砂岩	SA4	埋土	10.12	5.62	1.11	73.00	正面・裏面とも左からの敲打で剥離、両側面・下部を剥離調整、正面に自然面残存
246	磨石	尾鈴山酸性岩類	SA4	床焼土面	9.60	9.45	5.40	711.8	正面・裏面に磨面、側面の一部に敲打痕
247	敲石	砂岩	SA4	床面	13.35	7.25	5.50	530.6	正面中央部・下部に敲打痕集中、一部欠損
248	敲石	砂岩	SA4	床面	11.40	7.30	2.20	221.8	正面に複数の敲打痕集中、右側面にも敲打痕、一部欠損
249	台石	砂岩	SA4	床面	14.40	7.00	4.60	718.5	正面中央部に敲打痕集中、裏面中央部にも敲打痕、
250	台石	砂岩	SA4	床焼土面	11.90	8.10	2.50	417.5	正面中央部に敲打痕集中、一部赤化、割れ口に錆着、一部欠損

第 28 表 古墳時代竪穴建物跡出土石器計測表 (2)

	器種	石材	出土地点		計測値				備考
			〔位置〕	〔層位〕	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	
251	台石	砂岩	SA4	床面	10.30	5.50	4.20	300.5	正面中央部にややまばらな敲打痕、一部欠損
252	台石	砂岩	SA4	床焼土面	33.90	16.30	5.80	4820.0	正面・裏面中央部にややまばらな敲打痕、正面左側に磨面、石皿からの転用か
253	石皿	砂岩	SA4	床焼土面	24.20	11.80	8.60	3120.0	正面中央部に磨面、一部赤化、一部欠損
254	石皿	砂岩	SA4	床面	41.10	17.20	7.30	5760.0	正面中央部に磨面・粒状の錆着
257	台石	砂岩	SA5	床面	18.00	16.00	4.30	2250.0	正面・裏面中央部にやや不明瞭な敲打痕集中、裏面に磨面残存、石皿からの転用か併用、一部欠損
261	台石	砂岩	SA6	埋土	17.50	7.90	5.10	973.4	正面中央部に敲打痕集中、両側面にも敲打痕、下面に粒状の錆着あり、敲石との併用か
262	台石	砂岩	SA6	埋土	24.20	11.30	5.80	2920.0	正面・裏面ともまばらな敲打痕と一部磨面、石皿からの転用か、一部欠損
268	敲石	砂岩	SA11	床面	16.70	7.00	4.50	557.3	下部に使用痕、左側面に敲打痕
278	凹石	砂岩	SA12	埋土	8.55	10.70	7.60	641.7	正面・裏面の中央部に敲打痕集中、ややまばらな敲打痕も数箇所
279	敲石	砂岩	SA12	埋土	17.00	8.75	4.45	876.7	両側面中央部にややまばらな敲打痕、右側面の一部が赤化
282	凹石	尾鈴山酸性岩類	SA13	埋土	11.60	9.30	4.60	621.9	正面・裏面中央部に敲打痕集中、裏面割れ口に粒状の錆着あり、一部欠損

第 29 表 古墳時代竪穴建物跡出土装飾品計測表

	器種	出土地点		計測値				色調	備考
		〔位置〕	〔層位〕	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕		
256	ガラス小玉	SA5	床面	0.4	0.45	0.35	0.08	コバルトグリーン	完形

第 30 表 古墳時代竪穴建物跡出土鉄滓計測表

	種類	出土地点		計測値				備考
		〔位置〕	〔層位〕	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	
222	鉄滓状の塊	SA1	遺構内炉 1 埋土	4.4	2.4	1.6	13.39	炉壁附着滓
223	鉄滓状の塊	SA1	遺構内炉 1 埋土	3.9	5.0	2.1	22.18	炉壁附着滓
224	鉄滓状の塊	SA1	遺構内炉 1 埋土	4.3	3.9	2.6	15.06	炉壁附着滓、木炭痕
225	椀形滓状の塊	SA1	遺構埋土	4.5	4.9	1.7	60.89	椀形鍛冶滓

第 31 表 古墳時代竪穴建物跡出土棒状礫計測表

	器種	石材	出土地点		計測値				備考
			〔位置〕	〔層位〕	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	
	棒状礫	砂岩	SA1	床面	16.65	6.00	5.35	723.2	
	棒状礫	砂岩	SA1	床面	19.55	5.80	4.05	812.8	
	棒状礫	砂岩	SA1	床面	15.40	6.30	3.70	433.1	
	棒状礫	砂岩	SA1	埋土	20.70	9.00	5.40	1074.0	
	棒状礫	砂岩	SA1	埋土	15.50	6.10	5.30	773.5	
	棒状礫	砂岩	SA4	床面	15.00	6.70	4.35	503.1	
	棒状礫	砂岩	SA4	埋土	18.30	6.75	3.30	685.3	
	棒状礫	砂岩	SA4	床焼土面	14.40	7.65	4.95	681.8	
	棒状礫	砂岩	SA4	床焼土面	18.10	8.40	7.65	1355.0	
	棒状礫	砂岩	SA7	床面	18.40	6.10	4.40	526.8	
	棒状礫	砂岩	SA7	床面	16.80	7.40	4.65	807.1	
	棒状礫	砂岩	SA12	床面	14.50	8.30	5.30	885.7	
	棒状礫	砂岩	SA12	床面	18.90	5.90	5.50	727.1	
	棒状礫	砂岩	SA12	床面	16.80	6.75	5.10	762.0	
	棒状礫	砂岩	SA12	埋土	17.50	8.00	5.30	1102.4	
	棒状礫	砂岩	SA12	埋土	18.10	7.50	3.15	575.4	
	棒状礫	砂岩	SA13	埋土	17.30	7.90	4.60	719.1	

6 古代～近世の遺構と遺物

(1) 概要

今回の調査では、表土直下の遺構検出中、多数のピットが検出された。また、包含層掘削や遺構掘削の過程で新たなピットが検出されることもあり、調査区全体にわたり900基以上のピットを確認した。掘立柱建物跡を現場での調査中及び整理事業の過程において12棟確認し、近世のものと思われる溝状遺構を8条確認した(第71図)

また、遺構や攪乱、包含層の掘削の結果、中世の土器や近世の陶磁器、古銭等が出土している。

(2) 遺構

掘立柱建物跡(第32表)

第4次調査区内の掘立柱建物跡は、E-1区で3棟(SB1～3)、E-2区で2棟(SB4・5)、F-1区で2棟(SB6・7)、F-2区で5棟(SB8～12)の合計12棟である。現地調査中に確認できたものは2棟(SB8・9)で、他は整理事業の過程で配置や埋土等を検討した結果、認定した。

遺物の出土したものは少なく、時期が不明確であるものがほとんどである。根固め石のようなものも見られなかった。身舎面積は、第2・3次調査で確認されたものと比較して小さいものが多い。

SB1(第72図)

E-1区の谷部の北側傾斜面に位置し、SB2・3と隣接している。5つの柱穴のうちP2～4は第層上面で、P1・P5は第層上面で検出された。主軸は北から2°西に振れる。桁行2間(約27m)、梁行1間(約1.7m)であると思われるが、P1と対になる柱穴は検出されなかった。身舎面積約44m²を測る。今回確認した掘立柱建物跡の中では最も面積の小さいものである。梁行の向きを谷の向きにほぼ並行にして建てられている。

SB2(第72図)

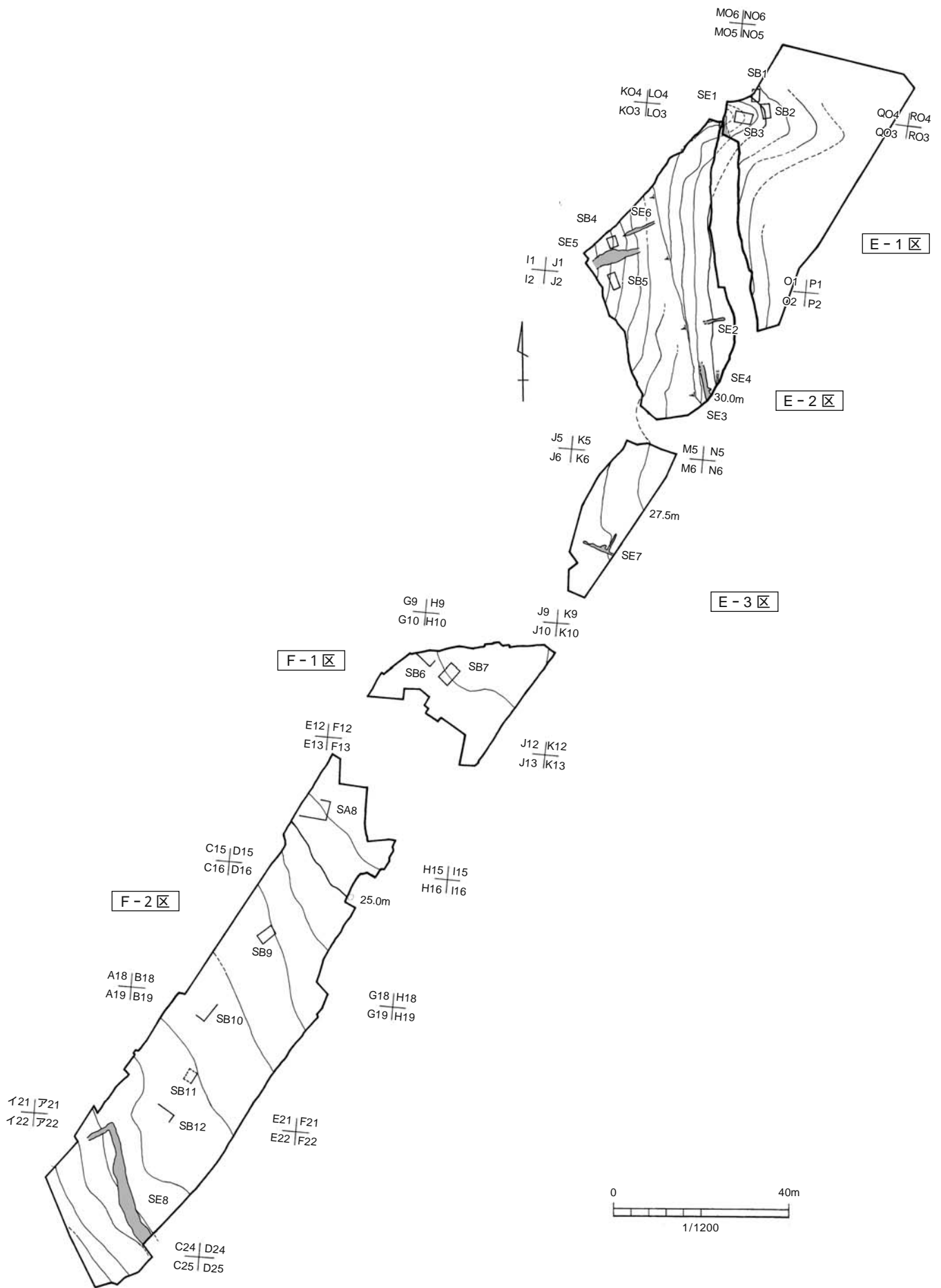
E-1区の谷部のほぼ中央部に位置する。6つの柱穴のうち、P5は第層上面で、他の5つは第層上面で検出された。主軸は北から16°西に振れる。桁行2間(約35m)、梁行1間(約20m)で、身舎面積約68m²を測る。SB1と同様に、梁行の向きを谷の向きにほぼ並行にして建てられている。

SB3(第72図)

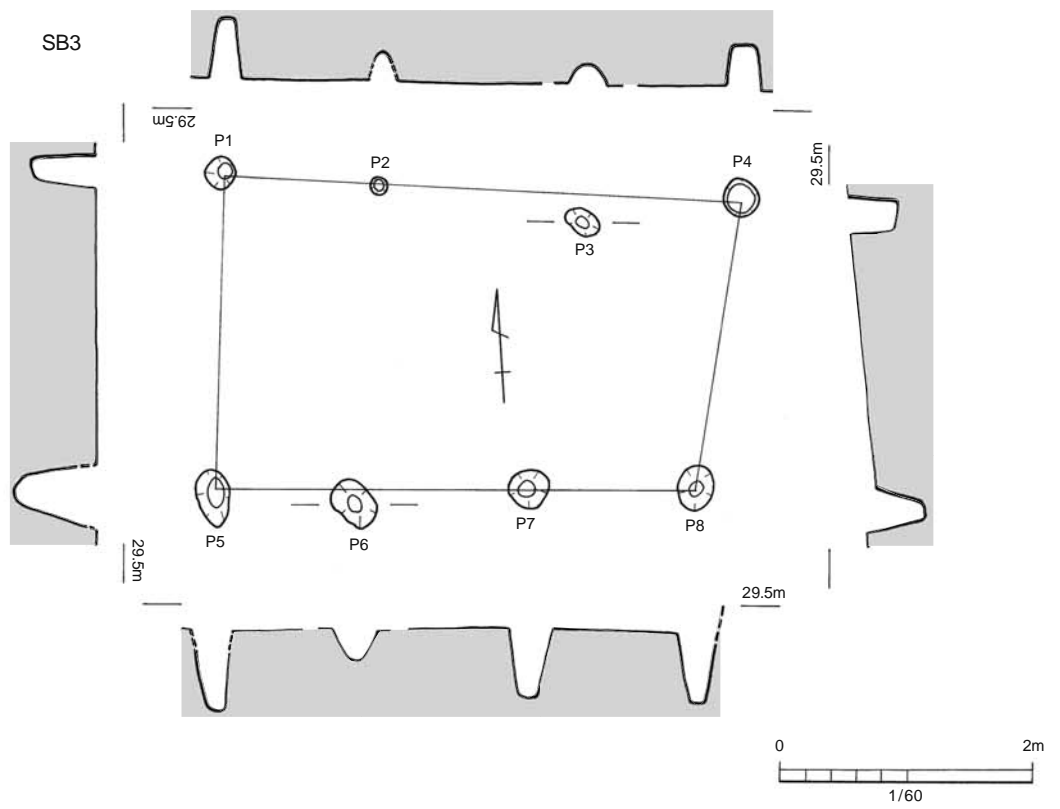
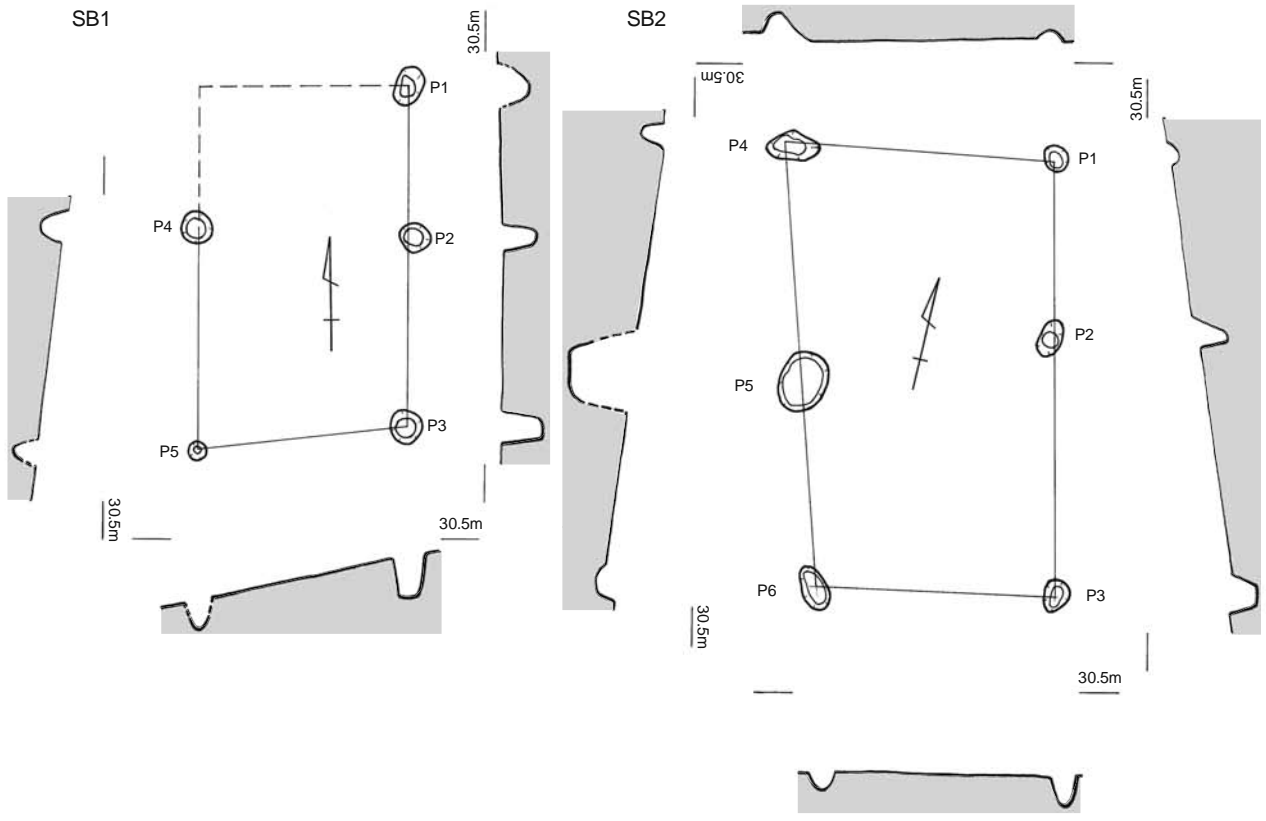
E-1区の谷部のほぼ中央部に位置する。柱穴は、SA1(竪穴建物跡)の掘削中に検出された。主軸は北から86°西に振れ、隣接するSB1・2と異なり、桁行を谷の向きにほぼ並行にして建てられている。桁行3間(約39m)、梁行1間(約24m)で、身舎面積約94m²を測り、SB1・2よりやや大きい。

第32表 掘立柱建物跡一覧表

遺構	位置 〔グリッド〕	主軸方位	身舎面積 〔m ² 〕	桁			梁			備考
				規格	桁行 〔m〕	平均柱間 〔m〕	規格	梁行 〔m〕	平均柱間 〔m〕	
SB1	N04	N - 2 ° - E	4.41	2間	2.67	1.34	1間	1.65	1.65	整理事業で認定
SB2	N04・N03	N - 16 ° - E	6.83	2間	3.50	1.75	1間	2.01	2.01	整理事業で認定
SB3	N03	N - 86 ° - E	9.35	3間	3.93	1.31	1間	2.38	2.38	整理事業で認定
SB4	K1	N - 24 ° - E	4.55	2間	2.32	1.16	2間	1.96	0.98	整理事業で認定
SB5	K1・K2	N - 28 ° - E	5.98	2間	3.74	1.87	1間	1.62	1.62	整理事業で認定
SB6	G10～H11	N - 51 ° - E	7.43	2間	4.22	2.11	1間	1.76	1.76	整理事業で認定
SB7	H11	N - 39 ° - W	12.35	3間	4.38	1.46	2間	2.82	1.41	整理事業で認定
SB8	E14・F14	N - 83 ° - E	27.10	3間	6.16	2.05	1間	4.40	4.40	現地調査中に確認 縄文時代早期土器片・弥生土器片・古墳時代土器片・近世後半陶器片が出土
SB9	D17・E17	N - 48 ° - W	8.49	2間	3.79	1.90	1間	2.24	2.24	現地調査中に確認 近世後半陶器片が出土
SB10	C19	N - 33 ° - W	10.70	3間	4.84	1.61	2間	2.21	1.11	整理事業で認定
SB11	C20・C21	N - 29 ° - W	5.47	2間	2.58	1.29	1間	2.13	2.13	整理事業で認定
SB12	B21・C21	N - 58 ° - E	6.96	3間	4.38	1.46	1間	1.59	1.59	整理事業で認定



第 71 図 古代～近世遺構配置図



第 72 図 掘立柱建物跡実測図 (1)

S B 4 (第 73 図)

E - 2 区に位置する。最も近い S B 5 から約 6 m 離れた位置にある。柱穴は第 層上面で検出された。P 2 はテラスを持つ 2 段ピットである。主軸は北から 24 西に振れる。桁行 2 間(約 23 m) 梁行 2 間(約 20 m) であるが、梁行が 2 間とすると、その平均柱間が約 1 m と短いことから、P 4 は独立した棟持柱である可能性もある。身舎面積約 46m²を測る。等高線に並行に建てられている。

S B 5 (第 73 図)

E - 2 区に位置する。柱穴は第 層上面で検出された。P 4・5 は 2 段ピットである。主軸は北から 28 西に振れ、近くにある S B 4 とほぼ並行であり、等高線にほぼ並行に建てられている。桁行 2 間(約 37 m) 梁行 1 間(約 16 m) で、身舎面積約 60m²を測り、S B 4 よりやや大きい。

S B 6 (第 73 図)

F - 1 区の平坦地に位置する。柱穴は表土直下の第 層で検出された。S B 7 と隣接している。P 1 は 2 段ピットである。主軸は北から 51 西に振れる。桁行 2 間(約 42 m) 梁行 1 間(約 18 m) であると思われるが、P 1・2 と対になるピットは確認できなかった。身舎面積約 74m²を測る。等高線に並行に建てられている。

S B 7 (第 73 図)

F - 1 区の平坦地に位置する。柱穴のうち P 1 ~ 4 は S B 6 と同じ第 層で、P 5 ~ 7 は S A 6 (竪穴建物跡) 掘削中に検出された。主軸は北から 39° 東に振れ、S B 6 の主軸と直交している。対になる柱穴が一部見つからなかったが、桁行 3 間(約 44 m) 梁行 2 間(約 28 m) であると思われる。身舎面積は約 1235m²を測り、S B 6 より大きい。等高線に対し直交して建てられている。

S B 8 (第 74 図)

F - 2 区で検出された。他の掘立柱建物跡と離れたところにある。表土直下の第 層で検出した。他のものと比較して、柱穴が大きく、深さが揃っており、埋土がとても似通っている(第 層の土と似ている小礫の混じった暗褐色土) ため、現場調査中に掘立柱建物跡と確認した。主軸は北から 83 西に振れる。桁行 3 間(62 m) 梁行 1 間(44 m) であると推測されるが、P 7 と対になる柱穴は調査区外にあると思われる。また、梁行が比較的長く、2 間であるとも考えられたが、中間付近に柱穴らしいピットは確認できなかった。等高線に並行に建てられている。

P 1 から古墳時代の土師器片と近世後半の陶器片、P 3 から縄文時代早期の土器片、P 7 から弥生土器片が出土した。縄文時代早期の炉穴(S P 15 ~ 22) と古墳時代の土坑(S C 60) を囲むようにして建てられていることから、この時代の土器が入り込んだと考えられる。この建物自体は、近世後半以降のものと思われる。

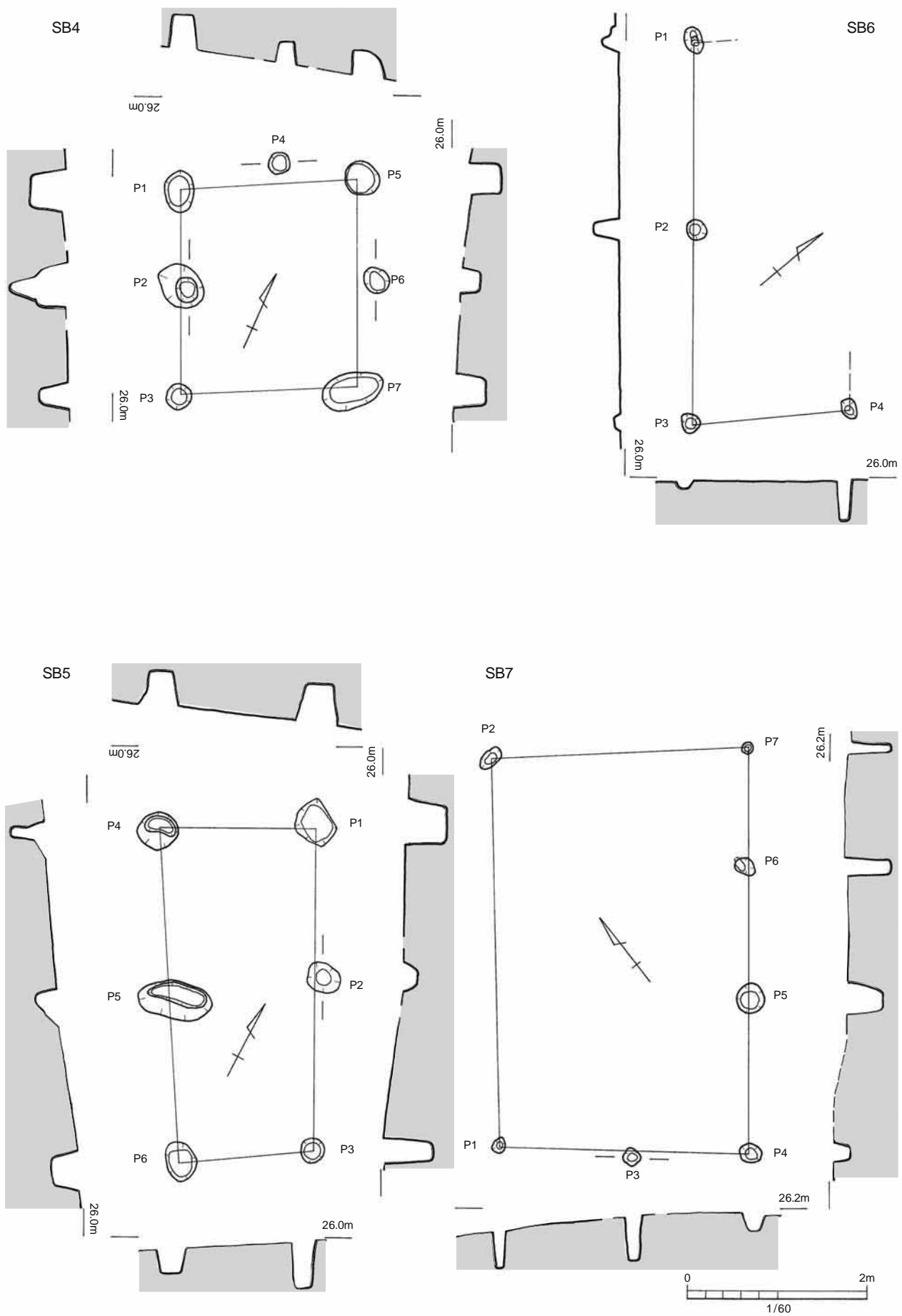
S B 9 (第 74 図)

F - 2 区で検出された。他の掘立柱建物跡と離れたところにある。表土直下の第 層で検出され、現場調査中に掘立柱建物跡と確認した。埋土は暗褐色土で、埋土上部に灰白色の土をブロック状に含んでいる。主軸は北から 48 東に振れる。桁行 2 間(約 38 m) 梁行 1 間(約 22 m) で、身舎面積約 85m²を測る。等高線に直交して建てられている。

P 4 から近世後半の陶器片が出土しており、この時期以降の建物跡であると思われる。

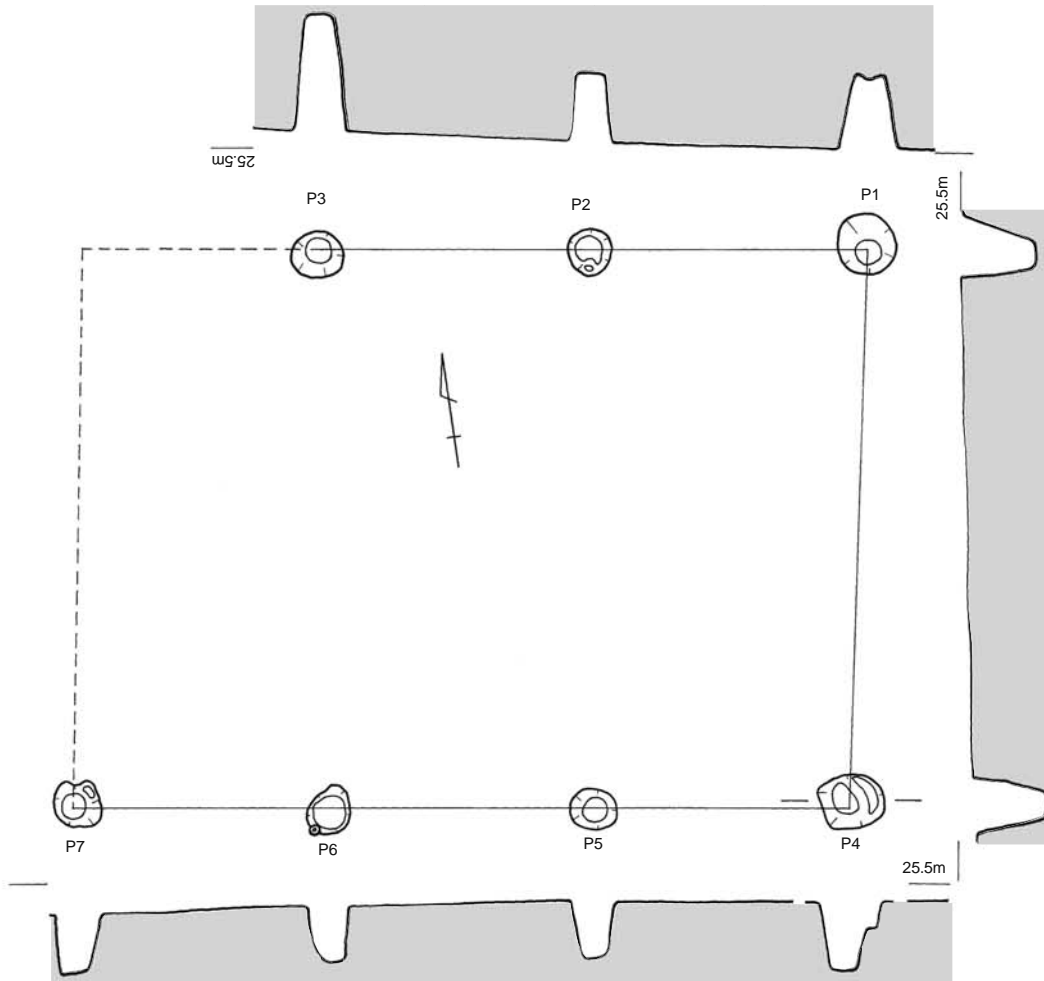
S B 10 (第 75 図)

F - 2 区に位置する。最も近い S B 11 から約 10 m 北にある。柱穴は表土直下の第 層で検出された。主軸は北から 33 東に振れる。P 2・4 ~ 6 に対応する柱穴は確認されなかったが、桁行 3 間(約 48 m) 梁行 2 間(約 22 m) であると思われる。身舎面積約 107m²を測る。等高線に直交して建てられている。

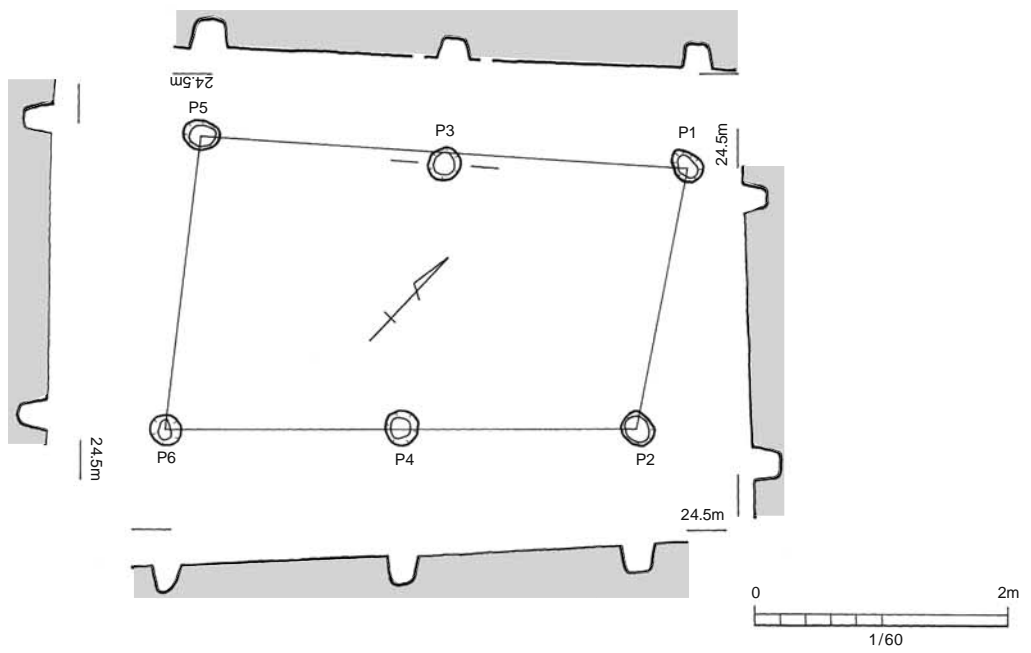


第 73 図 掘立柱建物跡実測図 (2)

SB8



SB9



第74図 掘立柱建物跡実測図(3)

S B 11 (第 75 図)

F - 2 区に位置する。S B 10 と S B 12 の間にある。柱穴は第 層上面で検出された。主軸は北から 29° 東に振れ、S B 10 とほぼ並行である。P 1・3 に対応する柱穴は確認されなかったが、桁行 2 間 (約 26 m) 梁行 1 間 (約 21 m) であると思われる。身舎面積約 55m²を測る。等高線に直交している。

S B 12 (第 75 図)

F - 2 区に位置する。最も近い S B 11 から約 10 m 南に位置する。柱穴は第 層上面で検出された。主軸は北から 58° 西に振れ、S B 10 や S B 11 と直交する。P 1 ~ 3 に対応する柱穴は確認できなかったが、桁行 3 間 (約 44 m) 梁行 1 間 (約 16 m) であると思われる。身舎面積約 70m²を測る。等高線に直交して建てられている。

溝状遺構

調査区全体から、表土直下で多数の溝が検出された。そのうち、現代の耕作に用いられたと思われるものを除き、8 条の溝状遺構を確認した (第 71 図)。

埋土や遺物の状況から、近世後半以降のものであると考えられる。また、位置関係などから、耕作用や土地区画用の溝として掘られたものであると考えられる。

S E 1

E - 1・2 区の間で検出された。谷を横切るように掘られている。検出面からの深さは約 0.5 m で、埋土は第 層 (耕作土) の土に近い。S A 1 (竪穴建物跡) を切っているため、土師器片が多く出土し、S A 1 の貼床上で見つかったものと接合したのものもある。近世後半の染付 (第 75 図 291) が出土した。

S E 2 ~ 4

E - 2 区南側で検出された。S E 2 は等高線に直交し、S E 3・4 は並行している。検出面からの深さは S E 2 は非常に浅く、S E 3・4 は約 0.4 m である。埋土はともに第 層に近い。S E 2 から縄文時代早期の土器片、S E 2 ~ 4 から古墳時代の土師器

片、S E 2 から中世の瓦、S E 3 から近世後半の瓦・陶器が出土している。

S E 5・6

E - 2 区北側で検出された。ともに等高線に直交している。検出面からの深さは、S E 5 の中央付近で約 0.3 m、S E 6 は約 0.1 m であった。埋土はともに第 層の土に近い。S E 5・6 で出土した近世後半の染付 (第 75 図 295) が接合した。その他、S E 5 からは、近世のキセルと弥生土器片、S E 5・6 から古墳時代の土師器が出土した。

S E 7

E - 3 区で検出された。削平により、検出面からの深さは約 0.1 m である。直交する 2 条の溝からなる。

S E 8

F - 2 区南側で検出された。第 2 次調査区側から北西に約 30 m 延びたところで直角に曲がり、南西に約 5 m 延びている。幅は広いところで約 3.5 m を測る。底の中央部が高くなっており、2 条が並行する。埋土は第 層由来と思われる暗褐色土で、小礫や A T ブロックを含んでいる。

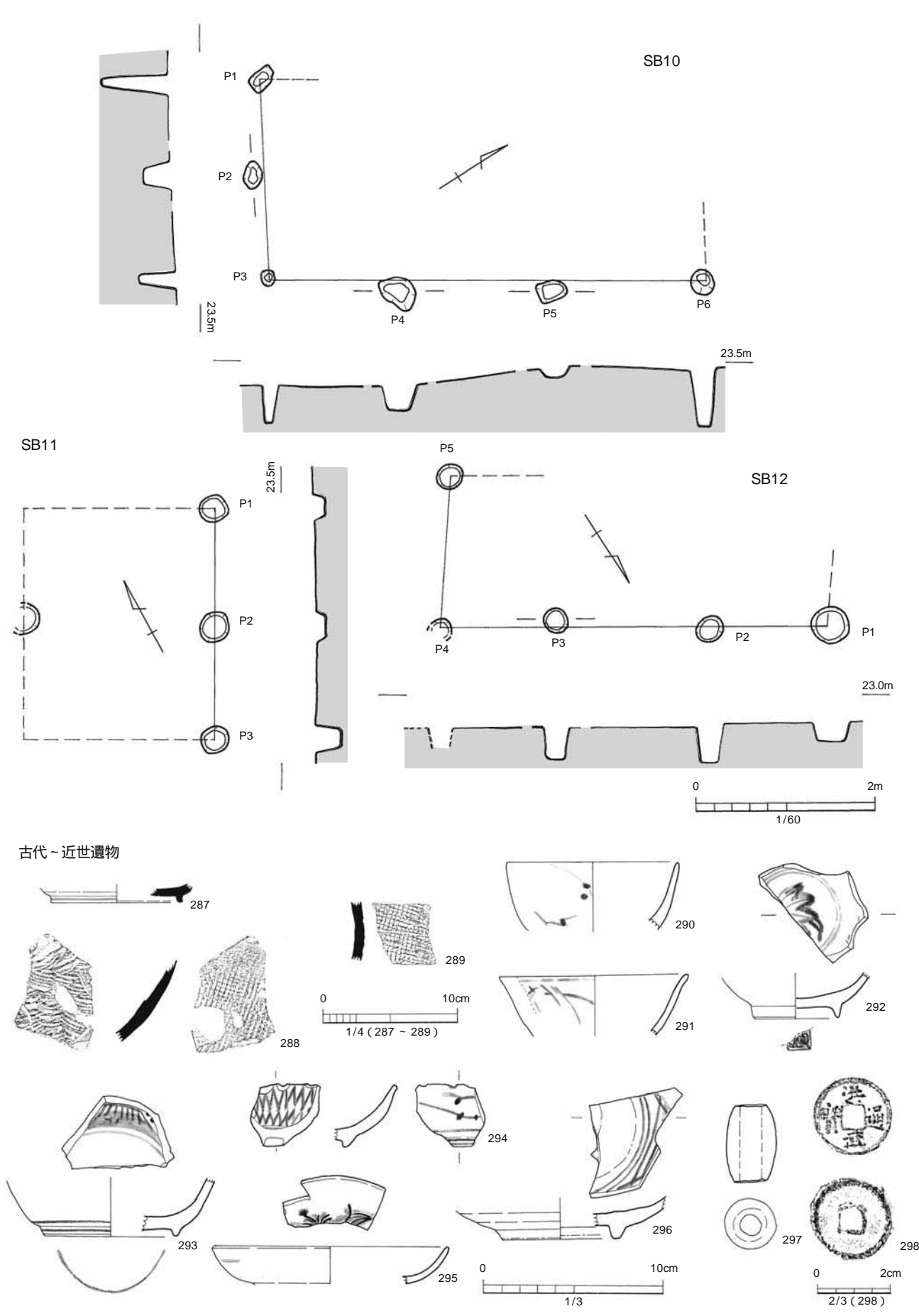
石錘 (第 84 図 310)、弥生土器片、古墳時代の土師器片、近世の瓦、近世後半の陶器・磁器が出土した。

(3) 遺物

表土中や攪乱土、ピットや溝状遺構より古代~近世の遺物が出土した。古代~中世の遺物は須恵器や土師器などがある。近世の遺物は、肥前系磁器を主体とする陶磁器や土製品などで、陶磁器の総重量は 1,989 g である。古代~近世の遺物は細片化が著しいために図化・掲載できたのは 287 ~ 298 の 12 点にとどまる (第 75 図)。

なお、その他に近代の瓦製品や銅版転写磁器やクロム青磁なども出土している。

須恵器の高台付壺 (287) と甕胴部片 (288) はともに焼成は不良気味で形態や製作技法から 8 世紀前半段階に属する。289 は中世須恵器の甕片である。薄手のつくりで堅く焼き締まる。



第 75 図 掘立柱建物跡実測図（4）及び古代～近世遺物実測図

肥前系磁器は碗と鉢、皿がある。291はSE1、295はSE5より出土した。

碗は、雪輪梅花文の染付(290)、青磁染付(292)赤絵の端反碗(291)がある。292は見込に蝶の文様、高台内に渦福文がある。鉢(293)は内面に花文の染付がある。皿(294~296)のうち、294は内面に網目文を施す。296は蛇の目釉ハギがなされるが、全体のつくりは粗雑である。

これらの磁器は、概ね18世紀後半~19世紀前半の時期と考えられる。

陶製品は土鍾(297)がある。内外面は褐色釉だが、両端の小口部は釉薬を掻きとられて露胎となる。孔径は12cmである。近世から近代にかけての製品と推定される。

金属製品は、洪武通宝(298)の銭貨2枚と近世後半のキセル(SE5出土)がある。

第33表 古代~中世土器観察表

種別	器種	部位	出土地点		手法・調整・文様		色調		胎土	備考 (法量:cm)	
			[位置]	[層位]	外面	内面	外面	内面			
287	須恵器	高台付碗	底	F-2区		回転横ナデ 底面:砂粒の目の痕	回転横ナデ	暗灰黄 2.5 Y 5/2	灰黄 2.5 Y 6/2	1mm以下の黒褐色の粒を含む	焼成不良 底径 9.6
288	須恵器	甕	胴	A 23Gr	トレンチ内	擬格子目タタキ 上部:横方向カキ目	同心円文当て具痕	にぶい黄橙 10 Y R 7/3	にぶい黄橙 10 Y R 7/3	1mm以下の赤褐色・灰白色の粒を含む	焼成不良
289	須恵器	甕	胴	S A 12	埋土	格子目タタキ	ナデ	黒 10 Y R 2/1	橙 7.5 Y R 6/6	1mm以下の灰色の粒を含む	外面全体スス付着

第34表 近世陶磁器観察表

種別	器種	部位	出土地点		手法・調整・文様		胎土	焼成	色調		備考 (法量:cm)	
			[位置]	[層位]	外面	内面			外面	内面		
290	染付	碗	口縁	B 20 Gr	攪乱埋土	回転ナデ、施釉、雪輪梅花文	回転ナデ、施釉	精良	堅緻	灰白 2.5 G Y 8/1	灰白 2.5 G Y 8/1	口径(9.5)
291	染付	碗	口縁	SE1	埋土	回転ナデ、施釉、赤絵、口縁部圏線	施釉	精良	堅緻	灰白 2.5 G Y 8/1	灰白 N 8/	銅版転写、明治以降か 口径(10.3)
292	青磁染付	碗	底	F 16 Gr	攪乱埋土	施釉、高台釉はぎ、高台内「渦福」文	施釉、見込に蝶の文様・二重圏線	精良	堅緻	明緑灰 7.5 G Y 8/1	灰白 N 8/	底径(4.6)
293	染付	鉢	胴~底	F-2区		施釉、底部付近に圏線2本、高台釉はぎ・砂目、高台内圏線	胴部に花文、底部に圏線	精良	堅緻	灰白 5 G Y 8/1	灰白 5 G Y 8/1	底径(7.4)
294	染付	皿	口縁~底	F-2区		施釉、文様あり、高台に圏線2本	施釉、一重網目文	精良	堅緻	明緑灰 7.5 G Y 8/1	明緑灰 7.5 G Y 8/1	
295	染付	皿	口縁~胴	SE5・SE6	埋土	回転ナデ、施釉、胴部に破線状の圏線2本	回転ナデ、施釉、文様あり	精良	堅緻	灰白 2.5 G Y 8/1	灰白 2.5 G Y 8/1	口径(13.0)
296	染付	皿	胴~底	E-1区	攪乱埋土	施釉、高台釉剥ぎ	施釉、見込に蛇の目釉剥ぎ・砂目痕、二重圏線、文様あり	精良	堅緻	灰白 10 Y 8/1	灰白 10 Y 8/1	底径(6.4)
297	磁器	土鍾	完形	E-1区	表探	回転ナデ、施釉(鉄釉)、両端小口部釉はぎ	回転ナデ、施釉(鉄釉)	精良	堅緻	にぶい赤褐 5 Y R 4/3	にぶい赤褐 5 Y R 4/3	最大長 4.3 最大幅 2.85 重量 38.3

第35表 中世銭貨計測表

銭名	材質	出土地点		計測値				備考	
		[位置]	[層位]	銭径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
298	洪武通宝	銅	O 03 Gr	攪乱埋土	2.1	0.6	0.1	2.1	明銭 洪武元年(1368年)始鑄、完形

7 その他の遺構と遺物

(1) 概要

表土除去後や包含層の掘削を行っていく過程で、調査区全域において、第 層上面を中心に、陥し穴状遺構が 14 基、その他の土坑が 45 基検出された（第 76 図）しかし、その所属時期は明確には判断しづらいため、ここで取り扱うことにした。

また、F - 1 区の第 層を中心として、調査区全域の包含層や攪乱から石鏃、敲石、磨石、台石等の石器が多数出土しているが、流れ込み等も考えられ、時期が不明確のものも多い。そこで、石器については、F - 1 区の第 層（A T）下位で出土した旧石器時代のものと、時期が特定される遺構から出土したものを除き、ここでまとめて記載することにした。

(2) 遺構

陥し穴状遺構（第 36 表）

E - 2 区で 1 基、E - 3 区で 2 基、F - 1 区で 2 基、F - 2 区で 9 基の陥し穴状遺構が検出された。その分布は調査区全域に広がっており、S C 50・51 が切り合っている以外は、隣接しているものはない。これは、約 20 m 四方の範囲で集中して見つかった第 2 次調査の結果とは対照的である。検出面はすべて第

層であるが、表土直下での検出であるものが多い。また、土器片等の遺物が出土しているが、少数であり、ほとんどが埋土中からのものである。そのことから、所属時期ははっきりとしない。なお、分布の詳細や

時期の検討については、第 章に譲る。

遺構の規模は、長径約 15 m、短径約 0.5 m 程度ものが多い。また、14 基中 9 基で、底面に杭痕と見られる小穴が検出されている。

また、等高線に対し、長軸方向が直交するもの、並行するものの両方がみられた。

この節では、検出面の平面形態をもとに、

A a 類...長方形で、短軸の短いもの（7 基）

A b 類...長方形で、短軸の長いもの（4 基）

B 類...楕円形であるもの（2 基）

C 類...円形であるもの（1 基）

の 4 類に分類し、報告する。なお、S C 51 は B 類であるが、S C 50（A b 類）と切り合っているため、ともに第 78 図で掲載した。

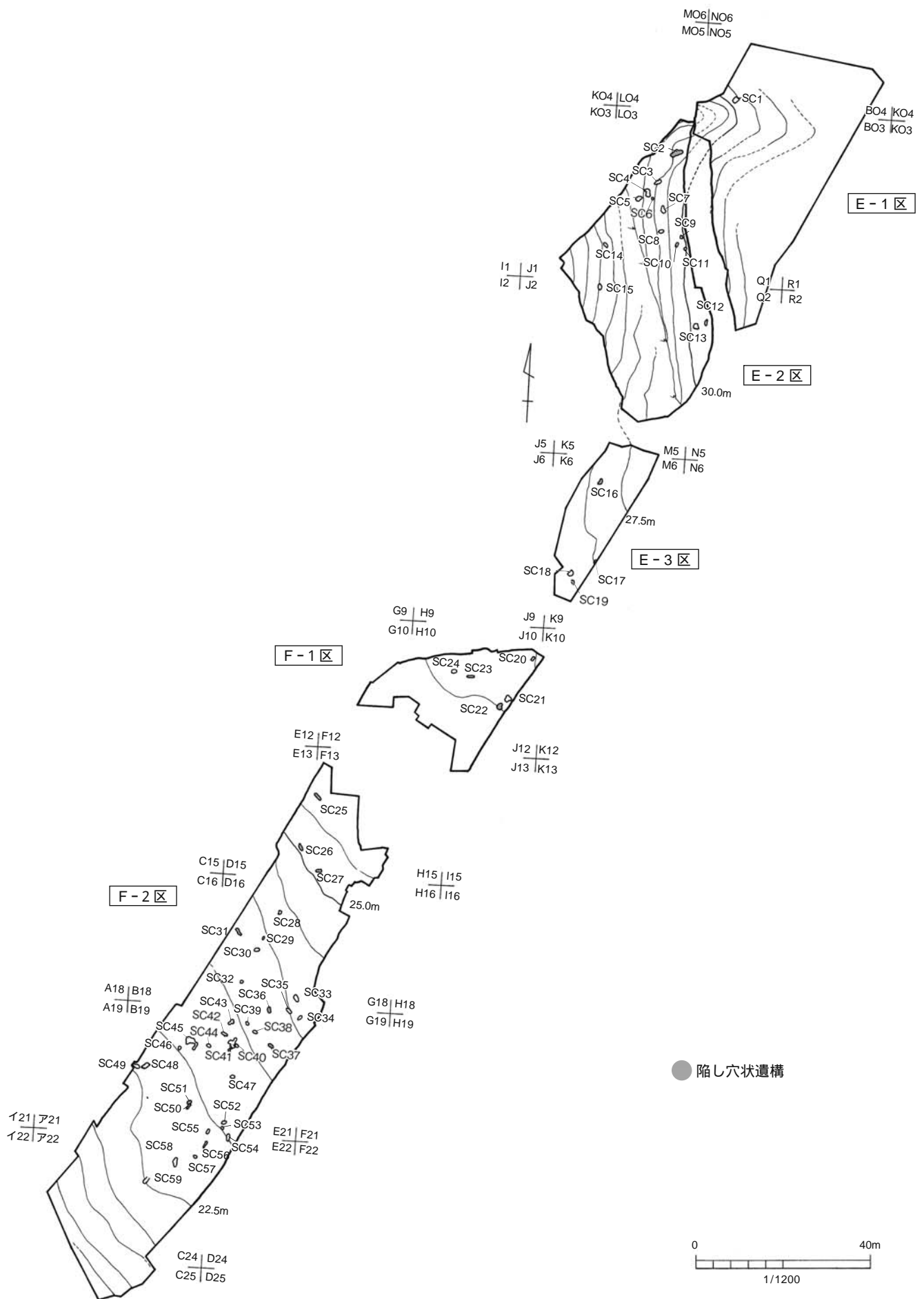
A a 類

S C 16（第 77 図）

E - 3 区の平坦面で検出された。同区の S C 19 とは 20 m 以上離れている。第 層上面で検出された攪乱を掘り上げたところで確認されたため、埋土の記録はない。長軸 1.5 m、短軸 0.5 m の細長い長方形で、等高線に並行である。断面形態は深さ 0.6 m の長方形である。底面に杭痕と見られる小穴が 5 つ確認でき、うち 4 つは長軸方向の直線上に並んでいる。小穴の深さは 0.05 m 程度である。壁に第 層（A T）があり、底面は第 層である。埋土から縄文時代後期の土器片、古墳時代の土師器片が出土した。

第 36 表 陥し穴状遺構一覧表

遺構	出土位置 〔グリッド〕	検出面 〔層〕	遺構規模〔m〕			等高線 との位置	グループ	断面形態 長軸方向	備考
			長径	短径	深さ				
S C 2	M03-02		2.8	1.5	0.7	並行	A b	台形	底面 3 か所に掘り込み
S C 16	L6	攪乱下	1.5	0.5	0.6	並行	A a	長方形	底面に小穴、縄文時代後期土器片、古墳時代土師器片出土
S C 19	K8		1.0	0.9	0.3	-	C	長方形	底面に掘り込み
S C 22	J11		1.8	1.1	0.5	直交	A a	長方形	古墳時代土師器片出土
S C 23	I11		(1.8)	0.4	0.4	並行	A a	長方形	底面に小穴、古墳時代土師器片出土
S C 25	F14		1.9	0.4	0.2	並行	A a	台形	底面に小穴
S C 26	E15		1.7	0.5	(0.7)	並行	A a	長方形	
S C 27	F15		1.4	0.5	0.6	直交	A b	逆三角形	底面に小穴、古墳時代土師器片出土
S C 31	D17		1.9	0.5	0.3	並行	A a	台形	底面に小穴
S C 36	E19		1.3	0.7	0.4	並行	A b	台形	底面に小穴
S C 37	E19		1.3	0.6	0.3	並行	B	長方形	底面に小穴
S C 50	C21		1.4	0.5	0.5	直交	A b	台形	底面に小穴、古墳時代土師器片出土 S C 51 と切り合い
S C 51	C21		1.2	0.7	0.5	直交	B	台形	S C 50 と切り合い
S C 56	C22		1.4	0.3	0.3	直交	A a	台形	底面に小穴



第 76 図 土坑配置図

S C 22 (第 77 図)

F - 1 区の平坦面で、表土直下の第 層で検出された。長軸 1.8 m、短軸 1.1 m の長方形で、等高線に直交している。北・東・西側は上部にテラス状の広がりが見られ、南側は真っ直ぐ落ち込んでいる。断面形態は深さ 0.5 m の長方形で、底面は第 層に近いところまで掘り込まれており、長方形に近い形態である。

・ S C 22 出土遺物 (第 79 図)

299 は二重口縁壺の口縁部である。厚手なつくりで、外面に粗雑な波状文が施される土師器である。色調は赤褐色 (5 Y R 系) で、1 mm 程度の赤色粒を含む胎土である。

S C 23 (第 77 図)

F - 1 区の平坦面で、表土直下の第 層で検出された。一番近い S C 22 から約 8 m 離れている。農業用の溝と見られる攪乱に両端を切られ、上端の一部がはっきりしないが、長軸 1.8 m (推定)、短軸 1.1 m の細長い形状で、等高線に並行である。長軸方向の断面形態もはっきりしないが、短軸方向の断面から判断すると、深さ 0.4 m の長方形であると思われる。底面は第 層 (A T) で、杭痕とみられる小穴が 6 つあり、2 つは中央部で短軸方向に並び、4 つは長軸方向に並んでいる。埋土に第 層 (アカホヤ) が粒状に見られる。埋土から古墳時代の土師器片が出土した。

S C 25 (第 77 図)

F - 2 区北側の平坦面で、第 層上面で検出された。一番近い陥し穴状遺構である S C 26 から約 10 m 北に位置する。長軸 1.9 m、短軸 0.4 m の細長い形状で、等高線に並行である。断面形態は深さ 0.2 m の台形である。底面は第 層で、深さ約 0.1 m の小穴が 10 個あり、中央付近に集中している。埋土に第 層 (A T) 粒状の炭を含む。

S C 26 (第 77 図)

F - 2 区の北側の平坦地で検出された。S C 27 とは約 5 m 離れているが、ほぼ同じ高さにある。第

層で検出されたが、上面の大部分は重機によると思われる攪乱の影響を受けている。長軸 1.7 m、短軸 0.5 m の細長い形状で、等高線に並行である。断面形態は長方形で、深さ 0.7 m (推定) と深く、底面は第 層である。

S C 31 (第 77 図)

F - 2 区の北側の平坦地で、第 層で検出された。長軸 1.9 m、短軸 0.5 m の細長い形状で、等高線に並行である。断面形態は深さ 0.3 m の台形である。埋土上面の状況から、当初は攪乱であると判断し掘削を行ったため、埋土についての記録はない。底面は第 層で、杭痕とみられる小穴が 7 つ見られ、小穴の深さは 0.1 ~ 0.2 m である。

S C 56 (第 77 図)

F - 2 区南側の平坦地で、表土直下の第 層で検出された。最も近い陥し穴状遺構である S C 50・51 から約 9 m 南東に位置し、ほぼ同じ高さである。長軸 1.4 m、短軸 0.3 m の細長い形状で、等高線に直交している。断面形態は深さ 0.3 m の台形である。底面は第 層であり、中央部に杭痕とみられる小穴が 5 つ見られる。

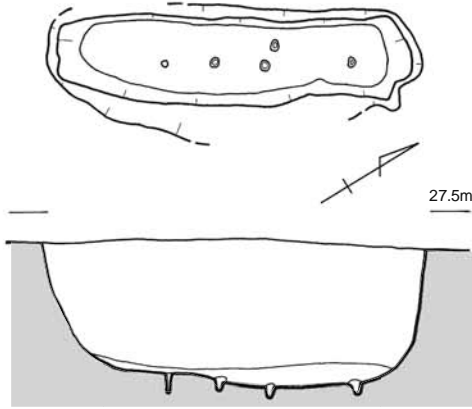
A b 類

S C 2 (第 78 図)

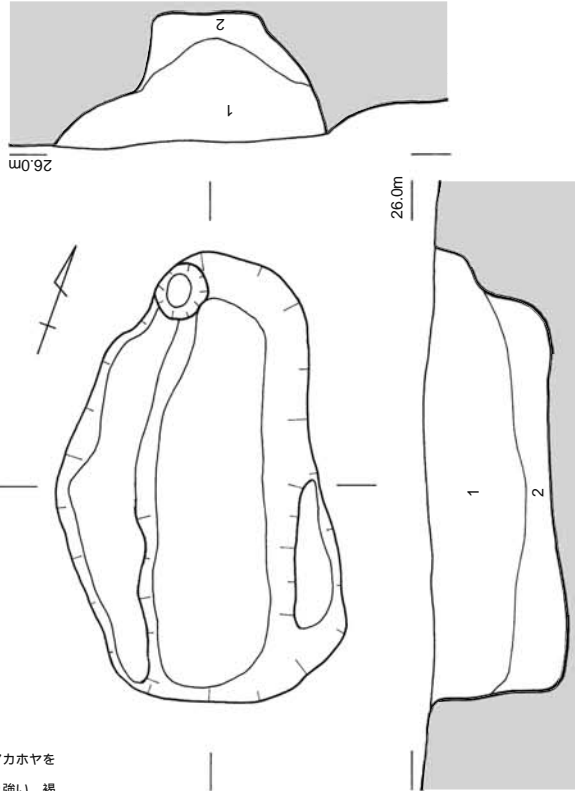
E - 2 区の北側、北東向きの傾斜地で、表土直下の第 層で検出された。他の陥し穴状遺構から離れた位置にある。長軸 2.8 m、短軸 1.5 m の長方形で、第 4 次調査で検出された陥し穴状遺構では最大規模であり、等高線に並行である。北側上部はテラス状に広がっている。断面形態は深さ 0.7 m の台形で、底部は約 2.5 m × 0.7 m の長方形で、第 層まで掘り込まれている。底面に 3 箇所の掘り込みがあり、東側のものは底面よりさらに約 0.3 m の深さを持つ。埋土に A T・アカホヤのブロック、小礫を含む。

< Aa 類 >

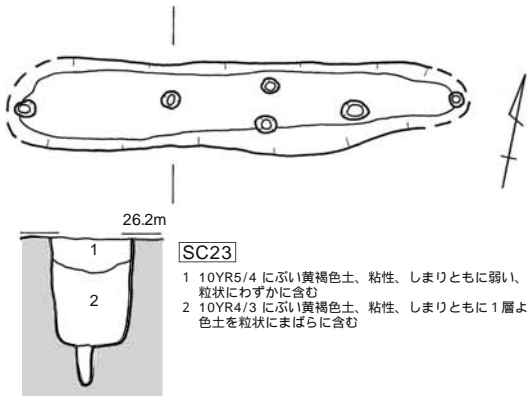
SC16



SC22



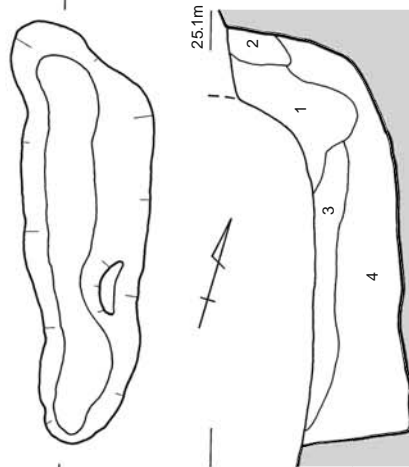
SC23



SC23

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色土、粘性、しまりともに弱い、アカホヤを粒状にわずかに含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色土、粘性、しまりともに1層より強い、褐色土を粒状にまばらに含む

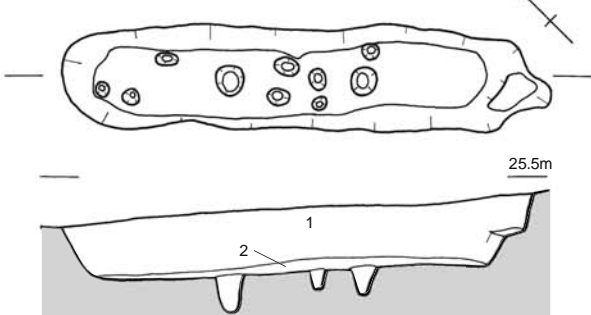
SC26



SC26

- 1 10YR3/4 暗褐色土、粘性ややあり、しまりあり、10YR4/6 褐色土を10%程度ブロック状に含む(下の方が多い)、第 1層由来か
- 2 10YR4/4 褐色土、粘性は1よりやや弱い、しまりあり、第 1層よりやや暗い、10YR4/6 褐色土をブロック状に20%程度含む
- 3 10YR4/4 褐色土、2層と同様だが、10YR4/6 褐色土がこねられて混ざる
- 4 10YR4/6 褐色土、粘性は3層より強い、しまりあり、床面凹凸(第 1層)よりやや暗く、第 1層と混ざったブロックを含む

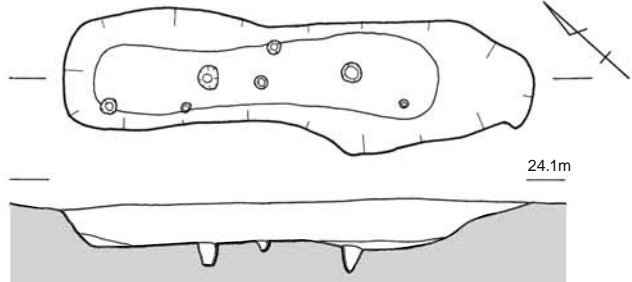
SC25



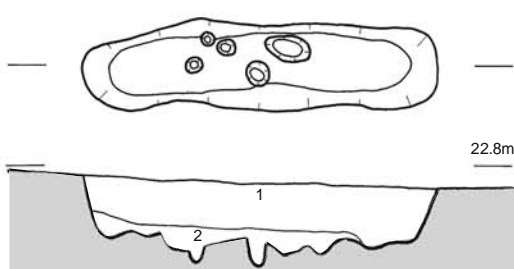
SC25

- 1 10YR3/4 暗褐色土、粘性、しまりともになし、炭を粒状に少量含む
- 2 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともになし、10YR6/6 明黄褐色土、ATブロックを少量含む、炭は1層より少ない

SC31



SC56



SC56

- 1 7.5YR3/3 暗褐色土、粘性、しまりともになし、さらさらしている、アカホヤをブロック状にわずかに含む
- 2 7.5YR3/4 暗褐色土、粘性、しまりともになし、炭、褐色土ブロックをわずかに含む



第 77 図 陥し穴状遺構実測図(1)

S C 27 (第 78 図)

F - 2 区の北側の平坦地で、表土直下の第 層で検出された。長軸 1.4 m、短軸 0.5 m の長方形で、等高線に直交している。断面形態は深さ 0.6 m の逆三角形である。埋土は A T をブロック状に含む。床面は第 層である。底面に杭痕とみられる小穴が 4 つ、長軸方向にならんでおり、深さは約 0.2 m で、うち 2 つは第 層(礫層)まで達している。埋土から古墳時代の土師器片が出土している。

S C 36 (第 78 図)

F - 2 区の中央部の平坦地で、表土直下の第 層で検出された。約 8 m 離れた陥し穴状遺構 S C 37 とほぼ同じ高さにある。一部を攪乱に切られている。長軸 1.3 m、短軸 0.7 m の長方形で、等高線に並行である。断面形態は深さ 0.4 m の台形である。埋土にアカホヤ・白斑ロームのブロックを含む。底面は第 層であり、杭痕とみられる深さ約 0.3 m の小穴が 6 つ見られ、そのうち 5 つは長軸方向に並んでいる。

S C 50 (第 78 図)

F - 2 区南側の平坦地で、第 層で検出された。等高線と直交している。長軸 1.4 m、短軸 0.5 m の台形に近い形状である。断面形態は深さ 0.5 m の台形である。埋土全体に第 層(アカホヤ)が混ざり、炭も見られる。底面は第 層である。杭痕とみられる小穴が 6 つ見られ、うち 4 つは長軸方向に並んでおり、深さは約 0.3 m で、第 層上面に達している。埋土中の炭化材の ¹⁴C 年代測定では 6,185 ± 25 年 B P (B C 5,220 ~ 5,050 年)との結果が出ている。

・ S C 50 出土遺物 (第 79 図)

300 は小型壺の頸部付近である。器表に丁寧なミガキがなされる土師器である。色調はにぶい黄橙色(10 Y R 系)で胎土は精良だが微細な雲母片を多く含む。

B 類

S C 37 (第 79 図)

F - 2 区の中央部の平坦地で、表土直下の第 層で検出された。長軸 1.3 m、短軸 0.6 m の楕円形で、等高線に並行である。断面形態は深さ 0.3 m の長方形

である。埋土にアカホヤ・白斑ロームのブロックを含む。底面は第 層である。実測図には表れていないが、杭痕とみられる小穴が 4 つ見られ、長軸方向に並んでいる。

S C 51 (第 78 図)

F - 2 区南側の平坦地で、第 層で検出された。南側の一部を S C 50 に切られている。長軸 1.2 m、短軸 0.7 m の楕円形で、等高線と直交している。断面形態は深さ 0.5 m の台形である。埋土に A T ブロックを含んでいる。底面は第 層である。杭痕のような小穴は見られない。

C 類

S C 19 (第 79 図)

E - 3 区の南側の平坦地で、表土直下の第 層で検出された。半分程度をトレンチにより削平されているが、復元すると直径約 1.0 m の円形であると思われる。断面形態は深さ 0.3 m の長方形である。底面は第 層で、北側に深さ約 0.1 m の掘り込みがある。その南側にも小穴が検出されたが、別の時期のピットであると思われる。

その他の土坑 (第 37 表)

前述のように、陥し穴状遺構を除く土坑が 45 基検出されたが、これらは現場での調査において、形態的特徴などから土坑と判断した。しかし、E - 1・2 区がもと果樹園であったように、多くの樹木があったところであるため、樹痕である可能性の高いものも見られる。整理作業の段階で検討した結果、樹痕でないと思われる 31 基について、掲載・報告する。

この節では、土坑の平面形態をもとに、

A 類...長方形のもの(4 基)

B 類...楕円形であるもの(15 基)

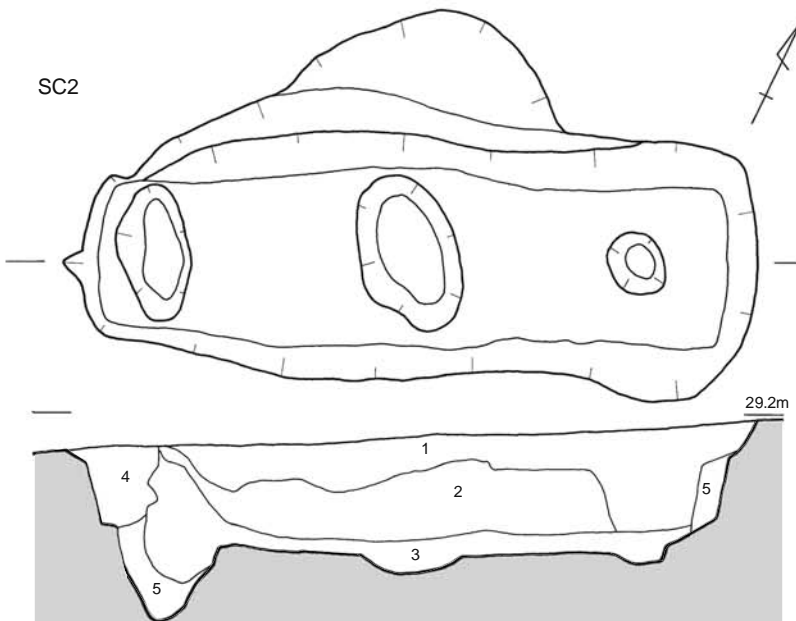
C 類...円形であるもの(6 基)

D 類...不整な形状のもの(6 基)

の 4 類に分類して、各類ごとに報告する。

< Ab 類 >

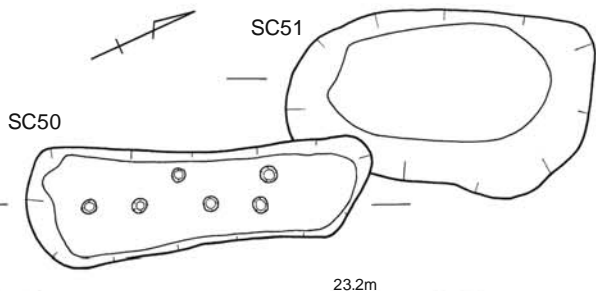
SC2



SC2

- 1 7.5YR5/8 明褐色土、粘性なし、しまり弱い、ATをブロック状に含む
- 2 7.5YR5/6 明褐色土、粘性なし、しまりあり、さらさらしている、径1mm程度の礫をわずかに含む
- 3 7.5YR5/6 明褐色土、粘性あり、しまり弱い、黒褐色土をブロック状にわずかに含む
- 4 10YR5/3 にぶい褐色土、粘性弱い、しまりあり、径1mm大の礫を大量に含む
- 5 7.5YR4/6 褐色土、粘性あり、しまりなし、アカホヤをブロック状にわずかに含む

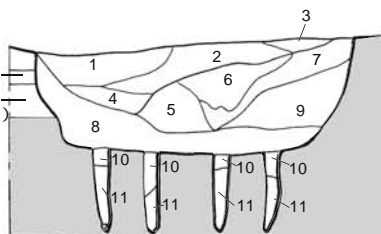
SC50



SC50

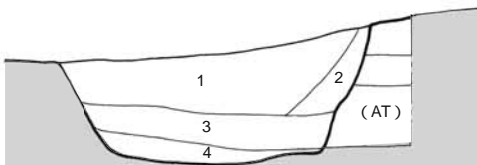
- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性、しまりともになし、アカホヤをブロック状に含む
- 2 7.5YR4/4 褐色土、粘性、しまりともになし、にぶい褐色土、炭を含む
- 3 7.5YR4/4 褐色土、粘性、しまりともになし、にぶい褐色土をブロック状に含む
- 4 7.5YR3/3 暗褐色土、粘性、しまりともになし、炭を含む、アカホヤをわずかに含む
- 5 7.5YR3/3 暗褐色土、粘性、しまりともになし、アカホヤ、にぶい褐色土を含む
- 6 7.5YR4/4 褐色土、粘性、しまりともになし、アカホヤ、にぶい褐色土、炭を含む
- 7 7.5YR4/4 褐色土、粘性、しまりともになし、にぶい褐色土をブロック状に含む
- 8 7.5YR3/3 暗褐色土、粘性、しまりともになし、アカホヤ、にぶい褐色土ブロック、炭を含む
- 9 7.5YR4/4 褐色土、粘性、しまりともになし、アカホヤ、灰褐色土を多く含む
- 10 7.5YR4/4 褐色土、粘性、しまりともになし、さらさらしている
- 11 7.5YR3/3 暗褐色土、粘性ややあり、しまりなし、黒色土を少し含む

(AT)



SC50 断面図

23.2m

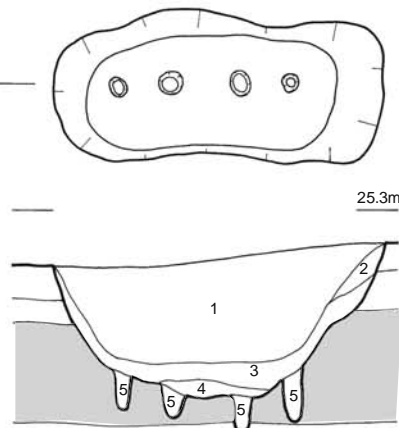


SC51 断面図

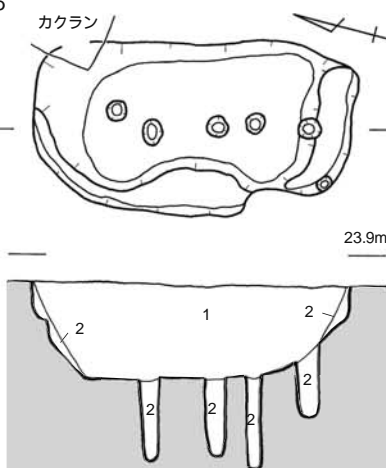
SC51

- 1 7.5YR5/6 明褐色土、粘性、しまりともがあり、暗褐色土を少し含む
- 2 7.5YR4/4 褐色土、粘性、しまりともがあり、にぶい褐色土を含む
- 3 7.5YR4/4 褐色土、粘性弱い、しまりなし、さらさらしている
- 4 7.5YR4/4 褐色土、粘性弱い、しまりなし、ATをブロック状に少し含む

SC27



SC36



SC27

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色土、粘性、しまりともに弱い、さらさらしていて、粒子が細く砂状、下部はやや粒子が細かく、やや明るい
- 2 1層に10YR4/4 褐色土を30%程度ブロック状に含む、粘性、しまり弱い
- 3 10YR4/4 褐色土、粘性強い、しまっている(第1層由来か)
- 4 10YR4/4 褐色土、粘性強い、第1層に似ている、ATをブロック状にまばらに含む
- 5 10YR3/2 黒褐色土、しまりが弱く、ばさばさしている

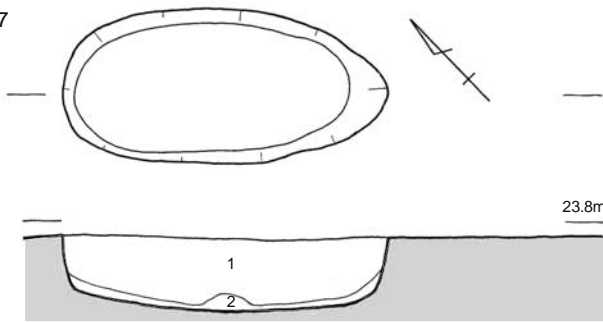
SC36

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、アカホヤをブロック状に含む
- 2 7.5YR4/4 褐色土、粘性なし、しまりあり、さらさらしている、白斑ロームをブロック状に含む



第 78 図 陥し穴状遺構実測図 (2)

< B類 >
SC37



SC37

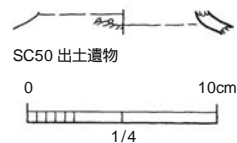
- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、アカホヤをブロック状に含む
- 2 7.5YR4/4 褐色土、粘性なし、しまり弱い、さらさらしている、白斑ロームをブロック状に含む



SC22 出土遺物

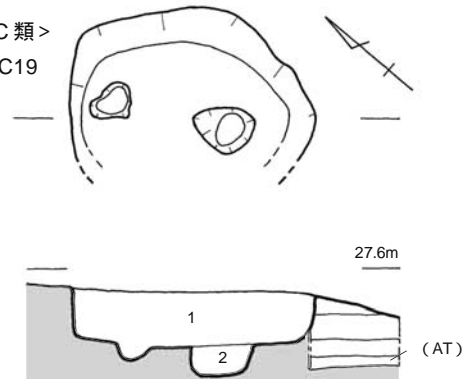


299



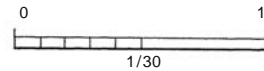
SC50 出土遺物

< C類 >
SC19



SC19

- 1 10YR5/8 黄褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、黒色土をブロック状にわずかに含む
- 2 7.5YR 明褐色土、粘性あり、しまりあり、乾くと固くなる



第 79 図 陥し穴状遺構実測図 (3) 及び陥し穴状土坑出土遺物実測図

第 37 表 陥し穴状遺構を除く土坑一覧表

遺構	出土位置 〔グリッド〕	検出面 〔層〕	遺構規模〔m〕			等高線との位置	グループ	断面形態 長軸方向	備考
			長径	短径	深さ				
SC 1	N 04		1.4	1.0	0.3	直交	A	台形	底面 2 辺に掘り込み 古墳時代の土師器、敲石出土
SC 6	L 01		0.6	0.5	0.7	-	C	縦長長方形	埋土に焼土を含む。 ピットの可能性あり。
SC 8	M 01		1.2	0.6	0.2	直交	B	台形	
SC 9	M 01		0.9	0.7	0.1	-	D	台形	埋土に焼土を含む。 古墳時代の土師器片出土
SC 10	M 1		0.9	0.5	0.3	直交	B	長方形	
SC 11	M 1		0.8	0.7	0.3	-	C	長方形	
SC 13	N 2		1.4	1.2	0.2	並行	D	長方形	古墳時代の土師器片出土
SC 14	K 1		1.3	0.6	0.3	並行	B	台形	
SC 15	K 2		(1.3)	0.8	0.3	並行	B	台形	
SC 24	H 11・I 11		1.3	0.7	0.7	直交	B	不整台形	
SC 28	E 16		0.7	0.5	0.3	直交	B	逆三角形	埋土に焼土を含む。 弥生時代中期の土器片出土
SC 29	D 17・E 17		0.7	0.2	0.2	直交	B	台形	埋土に焼土を含む。
SC 30	D 17		1.2	0.7	0.3	直交	D	台形	埋土に焼土と炭を含む。 古墳時代の土師器片、凹石出土
SC 32	D 18		0.7	0.7	0.3	-	C	台形	埋土に焼土と炭を含む。
SC 34	E 19		1.1	0.6	0.2	直交	D	長方形	
SC 35	E 19		1.4	0.7	0.2	並行	B	台形	
SC 38	D 19		1.0	0.6	0.2	並行	B	台形	
SC 39	D 19		0.8	0.6	0.3	-	C	台形	
SC 42	D 19		1.3	0.5	0.4	並行	A	台形	古墳時代の土師器片出土
SC 43	D 19		1.3	0.6	0.4	直交	B	逆三角形	
SC 44	C 19		1.0	0.6	0.2	並行	B	台形	石鏃出土
SC 46	C 20		0.8	0.7	0.3	-	C	逆三角形	
SC 47	D 20		1.0	0.5	0.2	並行	B	台形	
SC 48	B 20		2.0	1.0	0.1	直交	B	台形	埋土に焼土と炭を含む。 古墳時代の土師器片出土
SC 49	B 20		1.7	1.0	0.1	並行	D	台形	埋土に焼土と炭を含む。 弥生時代・古墳時代の土器片出土
SC 52	D 21		1.1	0.6	0.2	直交	B	台形	
SC 53	D 21		0.7	0.5	0.4	-	C	逆三角形	
SC 54	D 21・D 22		1.6	0.8	0.1	並行	D	台形	
SC 55	C 21		1.2	0.6	0.7	直交	B	不整台形	
SC 58	C 22		2.1	0.9	0.4	直交	A	台形	
SC 59	B 23		(1.5)	0.9	0.4	直交	A	台形	

A類

SC 1 (第80図)

E - 1区の谷部において、第 層で検出された。SA 2 (竪穴建物跡) を切っており、全体がSA 2内に収まる。長径1.4 m、短径1.0 mの長方形に近い形で、南西・南東側は底面より約0.1 m掘り込まれている。埋土は炭を含む暗褐色土である。

・SC 1出土遺物 (第80図)

301は高坏の脚部である。脚柱部外面にはタテ方向へのヘラミガキが施される。色調は浅黄橙(10 Y R系)ないし橙色(5 Y R系)で、胎土には1~2 mm大の赤色粒や白色粒、石英と雲母片が含まれる。SA 1の埋土中より出土した破片と接合した。その他埋土中より、古墳時代土師器片、敲石(砂岩)が出土した。

SC 42 (第80図)

F - 2区中央部の表土直下第 層で検出された。埋土にアカホヤをブロック状にわずかに含んでいる。長径1.3 m、短径0.5 mの長方形で、古墳時代の土師器の甕の破片が出土した。

SC 58 (第80図)

F - 2区南側の第 層上面で検出された。長径2.1 m、短径0.9 mの楕円形で、検出当初は形状などから炉穴であると考えていたが、底面に焼土や炭などは見られなかった。南側にテラス状の段があり、底面は第 層である。

SC 59 (第80図)

F - 2区南側第 層で検出された。長径推定1.5 m、短径0.9 mの楕円形である。北側の一部を攪乱に切られている。埋土は明褐色土で第 層より明るい、しまりのない土で、アカホヤもしくはAT由来であると思われる。

B類

SC 8・10 (第80図)

E - 2区西側の表土直下第 層で検出された。どちらも長径1.0 m、短径0.5 mほどの楕円形で、深さが約0.3 mである。ともに等高線に直交している。

SC 14・15 (第80・81図)

E - 2区東側緩斜面の第 層で検出された。ともに長径1.3 mの楕円形で、深さは0.3 mであり、SC 15では底面は第 層に達する。

SC 24 (第81図)

F - 1区の第 層で検出された。長径1.3 m、短径0.7 mの楕円形で、深さ0.7 mである。埋土は第 層が主体である。東側は壁面の張り出しが見られる。

SC 28・29 (第81図)

F - 2区北側の第 層掘り下げ中に検出された。どちらも埋土に焼土を含むが、底面に焼土は見られない。SC 28は長径0.7 m、短径0.5 mの長方形に近い。焼土粒は比較的少なく、上面に見られる。埋土中から、弥生時代中期とみられる土器片が出土した。SC 29は長径0.7 m、短径0.2 mの楕円形である。焼土粒は埋土中ほどに多い。

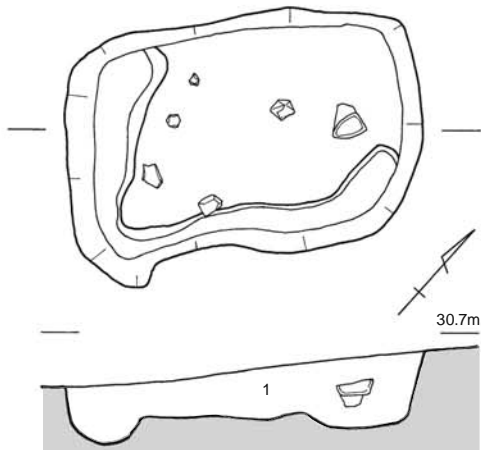
SC 35・47 (第81図)

F - 2区中央部の表土直下第 層で検出された。近くで検出されたSA 36・37(陥し穴状遺構)と、楕円形であることや埋土(アカホヤブロックを含む褐色土)が似ているが、やや浅く、杭痕とみられる小穴は検出されなかった。SC 35は長径1.4 m、短径0.7 m、SC 47は長径1.0 m、短径0.5 mである。

SC 38 (第81図)

F - 2区中央部の表土直下第 層で検出された。長径1.0 m、短径0.6 mの楕円形である。中央部に浅い凹みがあるが、底面の白斑ロームによるものと思われる。

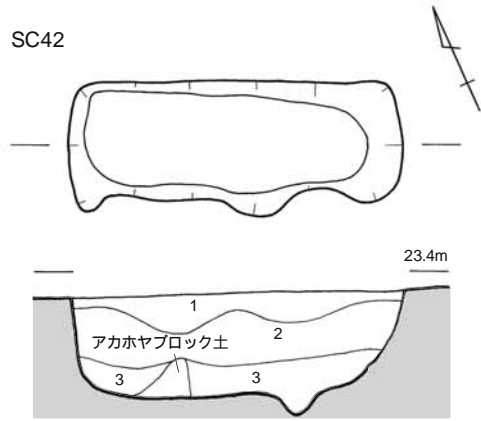
< A 類 >
SC1



SC1

- 1 7.5YR3/4 暗褐色土、粘性なし、しまりなし、褐色土をブロック状に含む、所々に炭を含む

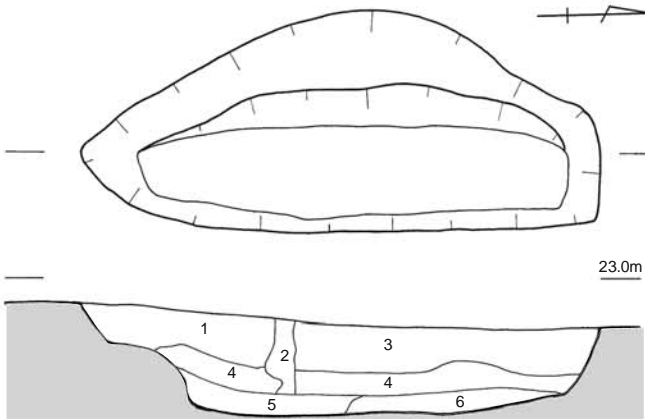
SC42



SC42

- 1 7.5YR3/3 暗褐色土、粘性なし、しまりなし、アカホヤをブロック状にわずかに含む
2 7.5YR3/4 暗褐色土、粘性なし、ややしまりあり、アカホヤ、黒褐色土をブロック状に含む
3 7.5YR3/4 暗褐色土、粘性わずかにあり、ややしまりあり、明るい褐色土をブロック状に多量に含む

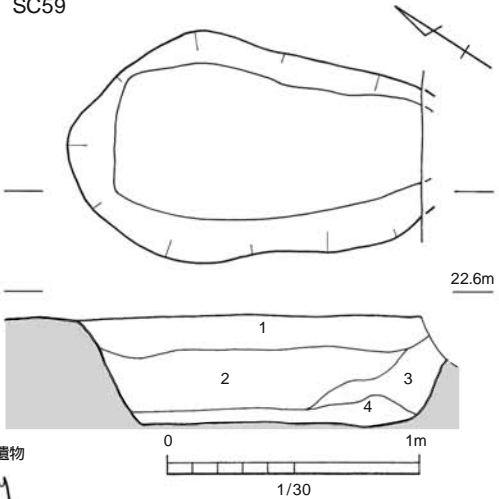
SC58



SC58

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性ややあり、しまりあり、明褐色土をブロック状に含む
2 7.5YR4/3 褐色土、粘性なし、しまりあり、明褐色土をブロック状に含む
3 7.5YR3/3 暗褐色土、粘性なし、しまりあり、明褐色土をブロック状に含む
4 7.5YR3/3 暗褐色土、粘性なし、しまりあり、黒色土をブロック状に含む
5 7.5YR4/6 褐色土、粘性、しまりともにあり、黒色土を含む
6 7.5YR4/4 褐色土、粘性なし、しまりあり、暗褐色土をブロック状に含む

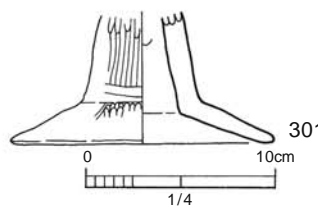
SC59



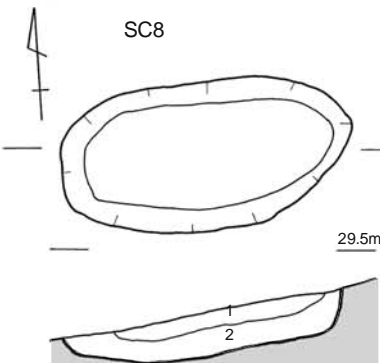
SC59

- 1 7.5YR5/8 明褐色土、粘性、しまりともに弱い
2 7.5YR5/6 明褐色土、1層と似ているが、しまりは1層よりある
3 7.5YR5/8 明褐色土、粘性、しまりともに弱い
4 10YR4/4 褐色土、粘性ややあり、しまりあり、第1層由来か

SC1 出土遺物



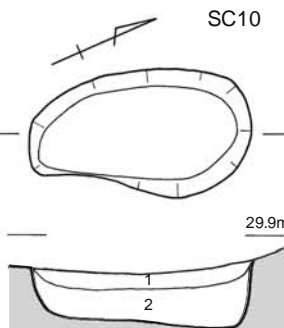
SC8



SC8

- 1 7.5YR5/8 明褐色土、しまりなし、さらさらしており、乾くと固くなる、ATをブロック状にわずかに含む
2 7.5YR5/6 明褐色土、粘性弱い、しまりあり、褐色土をブロック状に含む

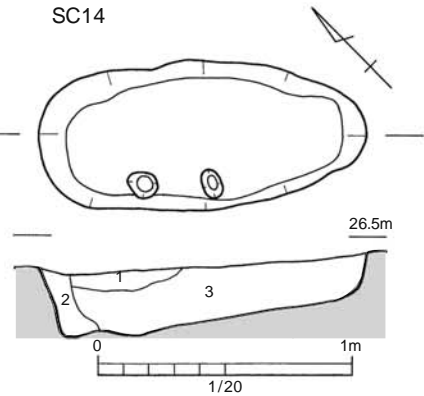
SC10



SC10

- 1 7.5YR5/6 明褐色土、しまりなし、さらさらしており、乾くと固くなる
2 7.5YR5/8 明褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、径1mm程度の礫を含む

SC14



SC14

- 1 10YR5/4 に近い黄褐色土、固くしまる、アカホヤのブロックか
2 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともにやや弱い、炭化物を少量含む
3 10YR3/2 黒褐色土、粘性、しまりともに弱い

第 80 図 土坑実測図 (1) 及び土坑出土遺物実測図 (1)

S C 43・44 (第 81 図)

F - 2 区中央部の表土直下第 層で検出された。どちらも埋土にアカホヤをブロック状にわずかに含んでいる。S C 43 は長径 1.3 m、短径 0.6 m の楕円形である。東側に 2 箇所の掘り込みがあるが、後世の別遺構に切られたものと思われる。S C 44 は長径 1.0 m、短径 0.6 m の楕円形で、底面は第 層で、一部を後世のピットに切られている。

・ S C 44 出土遺物 (第 83 図)

304 は石鏃である。石材は頁岩である。鏃身は平面二等辺三角形の長身で、基部に抉りをもつ。

S C 48 (第 82 図)

F - 2 区南東側調査区境の表土直下第 層で検出された。長径 2.0 m、短径 1.0 m の楕円形で、焼土や炭を多量に含む。深さが 0.1 m 程度と浅く、底面には焼土が見られないため、削平の影響を強く受けているか、自然為の凹みのどちらかと思われる。

・ S C 48 出土遺物 (第 83 図)

303 は弥生土器甕の口縁部である。端部に刻目が施され、口縁部に刻目突帯がつく。口縁部の傾き具合から突帯文土器と考えられる。浅黄橙色(10 Y R 系)できめの細かい粘土に 1 ~ 3 mm 大の円磨度の高い砂粒を含む。他に、古墳時代の土師器片も出土した。

S C 52・55 (第 82 図)

F - 2 区南側の表土直下第 層で検出された。S C 56 (陥し穴状遺構) の近くにあり、どちらも楕円形であるなど似ている点もあるが、杭痕と見られる小穴は検出されなかった。S C 52 は長径 1.1 m、短径 0.6 m であり、中央部にピット状の掘り込みがあり、埋土にアカホヤ・白斑ロームのブロックを含む。S C 55 は長径 1.2 m、短径 0.6 m で、中央部に底面から 0.4 m のやや深い掘り込みを持つ。

C 類

S C 11 (第 82 図)

E - 2 区西側の表土直下第 層で検出された。S C 9・10 と隣接している。直径約 0.8 m の円に近い形状で、深さ約 0.3 m である。

S C 32 (第 82 図)

F - 2 区北側の第 層掘り下げ中に検出された。S A 10 (竪穴建物跡) と隣接している。直径 0.7 m の円形で、埋土上部から中部にかけて、焼土と炭を含むが、底面に焼土は見られない。

S C 39 (第 82 図)

F - 2 区中央部の表土直下第 層で検出された。直径約 0.7 m の円形であり、底部に凹みがあるが、底面の白斑ロームの地山の凹みによるものと思われる。

S C 46 (第 82 図)

F - 2 区中央部の表土直下第 層で検出。直径 0.8 m の円形で、埋土に A T のブロックを含む。

S C 53 (第 82 図)

F - 2 区南側の表土直下第 層で検出された。S C 56 (陥し穴状遺構) の近くにあり、埋土などに共通点はあるが、杭痕と見られる小穴は検出されなかった。直径 0.6 m の円に近い形状で、埋土に白斑ロームのブロックを含む。

S C 6 (第 82 図)

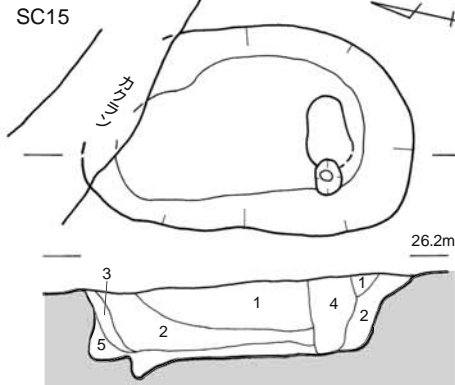
E - 2 区西側の緩斜面の表土直下第 層で検出された。直径約 0.5 m の円形で、約 0.7 m の深さまでほぼ真っ直ぐに掘り込まれている。上面に焼土をブロック状に含み、埋土にも炭と焼土粒を含む。規模や断面の形状からピットの可能性もあるが、周囲のピットより深く、埋土も異なる。

D 類

S C 9 (第 83 図)

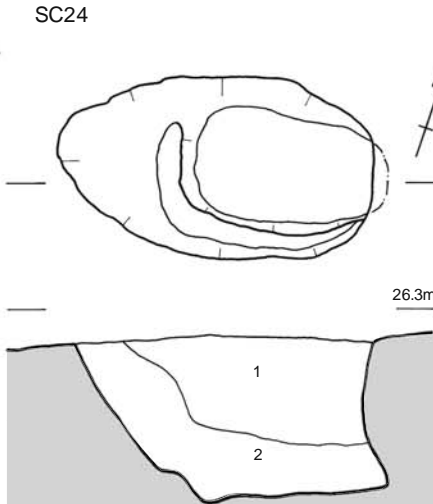
E - 2 区西側の表土直下第 層で検出された。長径 0.9 m、短径 0.7 m の横長の台形に近い形状である。深さは浅いが、埋土上面に焼土ブロック状に含む。古墳時代の土師器片が出土した。

< B類 >



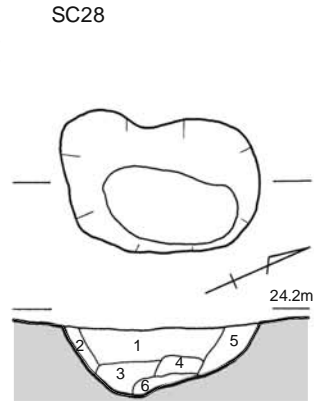
SC15

- 1 10YR6/6 明黄褐色土、粘性あり、しまりやや弱い、アカホヤを多く含む
- 2 10YR6/4 に近い黄褐色土、粘性、しまりともに強い、アカホヤを粒状に若干含む
- 3 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともにやや弱い
- 4 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともにやや弱い、10YR5/4 に近い黄褐色土をブロック状にまばらに含む
- 5 10YR5/4 に近い黄褐色土、粘性、しまりともに強い、地山(第 層)に似ており、掘り過ぎによるものと思われる



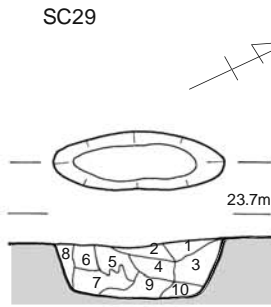
SC24

- 1 10YR6/4 に近い黄褐色土、粘性、しまりともに弱い、アカホヤを粒状に含む
- 2 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともに1層より強い



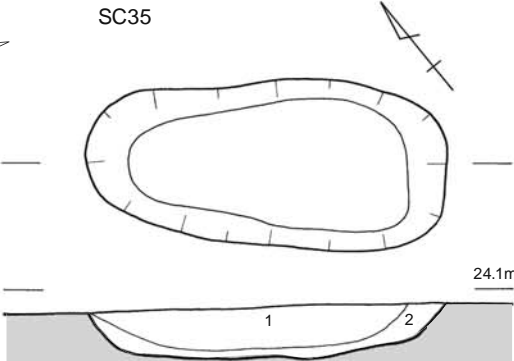
SC28

- 1 10YR3/4 暗褐色土、粘性、しまりともに弱い
- 2 10YR3/3 暗褐色土、粘性弱い、しまりやや強い
- 3 10YR3/4 暗褐色土、中央部に10YR3/3 暗褐色土をブロック状に多く含む
- 4 10YR3/3 暗褐色土、粘性、しまりともに弱い
- 5 10YR3/3 暗褐色土、褐色土をブロック状に20%程度含む、しまりは1層より強い
- 6 10YR4/4 褐色土、第 層よりややしまりが弱い



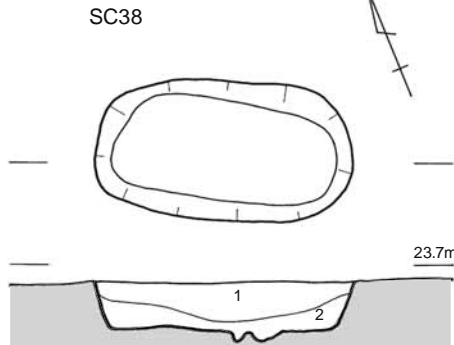
SC29

- 1 10YR3/3 暗褐色土、粘性、しまりともにあり、焼土粒をわずかに含む
- 2 10YR3/3 暗褐色土、しまり弱い、ばさばさしている、焼土粒をわずかに含む
- 3 10YR3/3 暗褐色土、1層よりしまりが強く、やや黒い
- 4 10YR3/4 暗褐色土、1層よりやや明るい、焼土粒は1層より多い
- 5 10YR3/4 暗褐色土、4層よりしまりがやや弱い
- 6 10YR3/4 暗褐色土、5層と同様だが、焼土を含まない
- 7 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともにあり、焼土粒をわずかに含む
- 8 10YR4/4 褐色土、7層より固い
- 9 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりとも8層よりやや弱い
- 10 10YR4/4 褐色土、9層よりしまりがあり、やや暗い



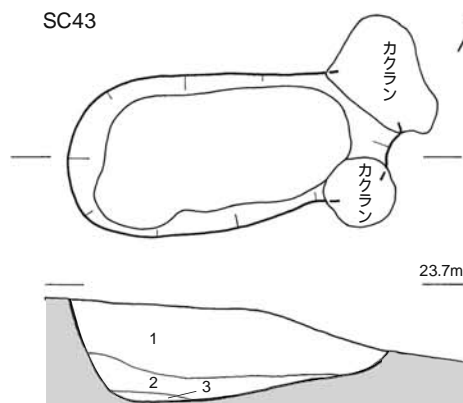
SC35

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、アカホヤをブロック状に含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性なし、しまり弱い、さらさらしている、1層よりやや明るい、白斑ロームをブロック状にわずかに含む



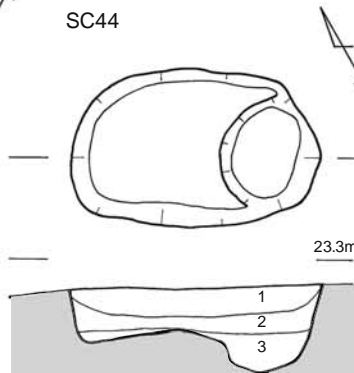
SC38

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、黒褐色土をブロック状に含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、白斑ロームをブロック状に含む



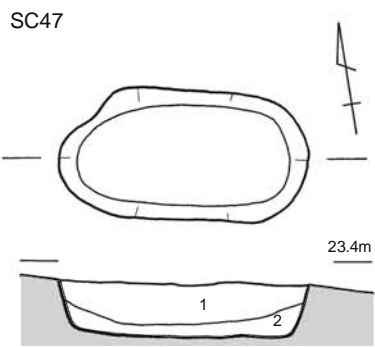
SC43

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性なし、しまりあり、さらさらしている、アカホヤをブロック状にわずかに含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、1層よりわずかに明るい
- 3 7.5YR5/4 褐色土、粘性、しまりともにあり、褐色の土をわずかに含む



SC44

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、アカホヤをブロック状にわずかに含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性、しまりともなし、さらさらしている、1層より明るい、白斑ロームをブロック状に含む
- 3 10YR5/8 黄褐色土、粘性、しまりなし(第 層由来か)



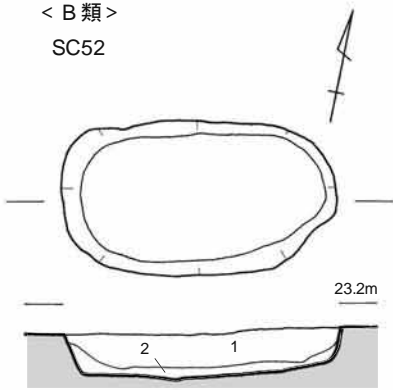
SC47

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、アカホヤをブロック状に含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性弱い、しまりなし、さらさらしている、1層より明るい、白斑ロームをブロック状に含む



第 81 図 土坑実測図 (2)

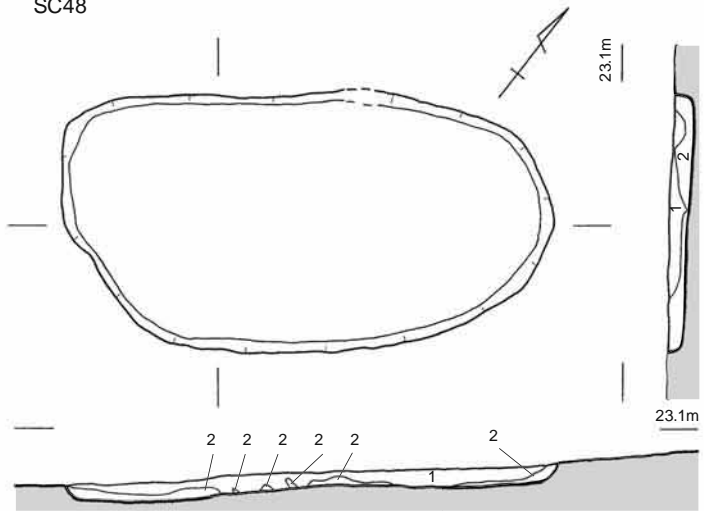
< B類 >
SC52



SC52

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、アカホヤをブロック状に含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性、しまりともになし、さらさらしている、1より明るい、白斑ロームをブロック状に含む

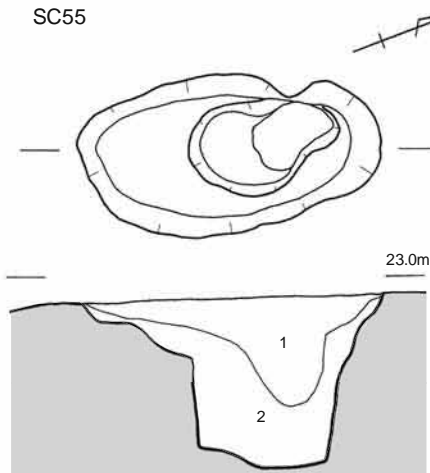
SC48



SC48

- 1 7.5YR3/4 暗褐色土、粘性、しまりともになし、さらさらしている、炭を多く含む
- 2 7.5YR4/4 褐色土、粘性弱い、しまりあり、明褐色土を粒状にわずかに含む

SC55

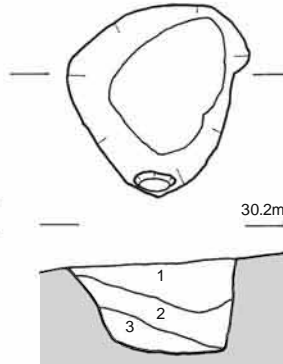


SC55

- 1 7.5YR3/4 暗褐色土、粘性なし、しまりあり、さらさらしている、明るい褐色土をブロック状に含む
- 2 7.5YR5/6 明褐色土、粘性、しまりともがあり、白斑ロームをブロック状に含む

< C類 >

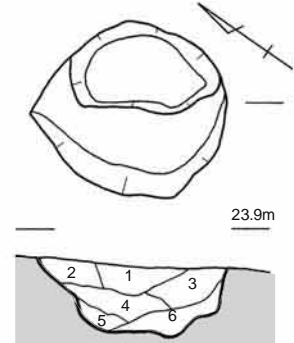
SC11



SC11

- 1 7.5YR5/8 明褐色土、粘性なし、しまりあり、径1mm程度の礫を大量に含む
- 2 7.5YR3/4 暗褐色土、粘性、しまりともになし、褐色土をブロック状にわずかに含む
- 3 7.5YR5/6 明褐色土、粘性あり、しまりなし、径1mm程度の礫を含む

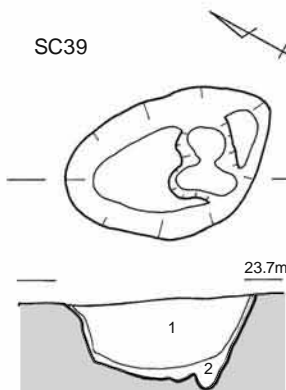
SC32



SC32

- 1 10YR4/4 褐色土、粘性やや弱い、しまりはあり、炭、焼土をブロック状に含む
- 2 10YR3/4 暗褐色土、粘性は第1層よりわずかに弱い、しまりあり、炭を粒状に少し含む
- 3 10YR4/4 褐色土、4層と同様だが、暗褐色土をブロック状に含む、焼土なし
- 4 10YR4/6 褐色土、しまりややあり、炭の粒と焼土(5YR5/6 明赤褐色土)を含む
- 5 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともがあり
- 6 10YR4/4 褐色土、粘性、しまりともがあり、5層よりやや赤みがある

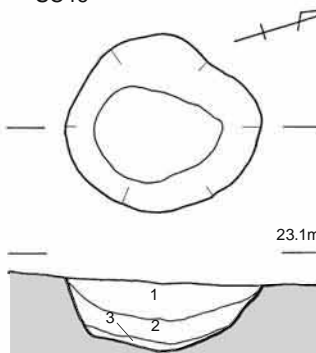
SC39



SC39

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、黒褐色土、アカホヤをブロック状にわずかに含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性なし、しまりあり、さらさらしている、白斑ロームをブロック状に含む

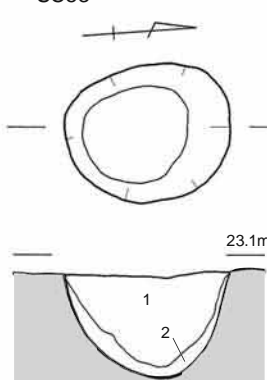
SC46



SC46

- 1 7.5YR4/6 褐色土、粘性なし、しまりあり、さらさらしている、ATをブロック状に含む
- 2 7.5YR4/4 褐色土、粘性弱い、しまりあり、明るい褐色土をブロック状にわずかに含む
- 3 7.5YR4/6 褐色土、粘性、しまりともがあり、白斑ロームをブロック状に含む

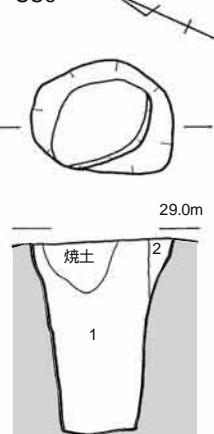
SC53



SC53

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性は弱い、しまりあり、黒褐色土をブロック状に含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性、しまりともがあり、白斑ロームをブロック状に含む

SC6



SC6

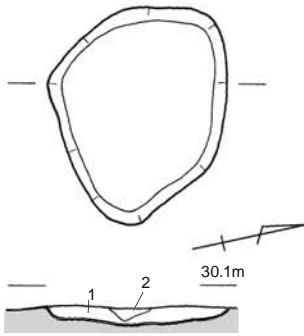
- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性弱い、しまりなし、炭、焼土粒を多量に含む
- 2 7.5YR5/6 明褐色土、粘性、しまりともになし、径1mm程度の礫を含む



第 82 図 土坑実測図 (3)

< D 類 >

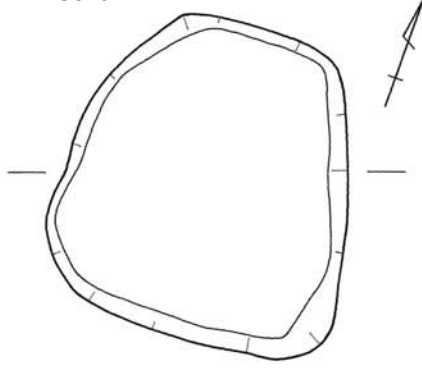
SC9



SC9

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性なし、しまりあり、明褐色土をブロック状に含む
- 2 7.5YR5/6 明褐色土、粘性なし、しまりあり、焼土、礫をわずかに含む

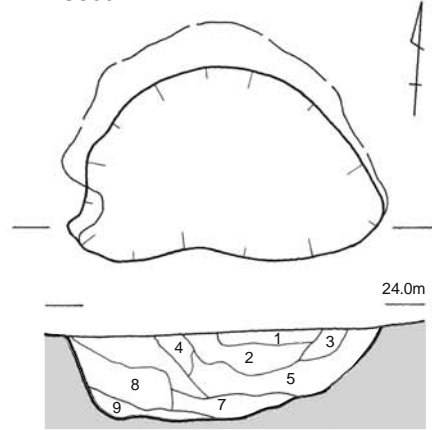
SC13



SC13

- 1 7.5YR5/6 明褐色土、しまりなし、さらさらしているがかわくと固くなる、アカホヤをブロック状にわずかに含む
- 2 7.5YR5/8 明褐色土、粘性なし、しまりあり、径1mm程度の礫を大量に含む、ATをブロック状にわずかに含む

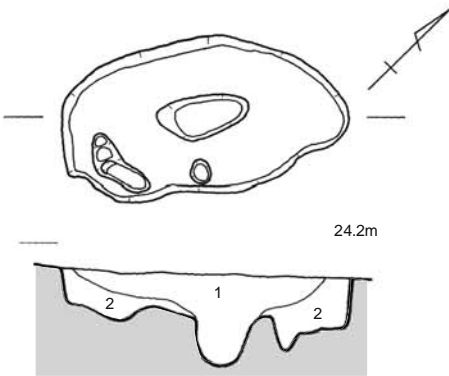
SC30



SC30

- 1 7.5YR3/4 暗褐色土、粘性弱い、しまりややあり、5YR5/6 明赤褐色土（焼土）を粒状に含む
- 2 7.5YR3/4 暗褐色土、1よりも焼土粒が大きく全体が赤っぽく見える、炭化物をわずかに含む
- 3 5層よりしまりが強く、やや明るい
- 4 10YR3/4 暗褐色土、5層よりややしまりが強い、3層よりやや明るい、焼土粒を含む
- 5 10YR3/4 暗褐色土、粘性少しあり、焼土粒をわずかに含む
- 6 10YR3/4 暗褐色土、粘性は弱い、しまりあり、第1層よりやや暗い
- 7 10YR4/4 褐色土、粘性あり、しまり弱い、第1層よりやや暗い
- 8 10YR3/4 暗褐色土、粘性は6層より強い、6層と7層の間くらいの色合いである
- 9 10YR4/4 褐色土、粘性は第1層よりやや弱い、しまり強い

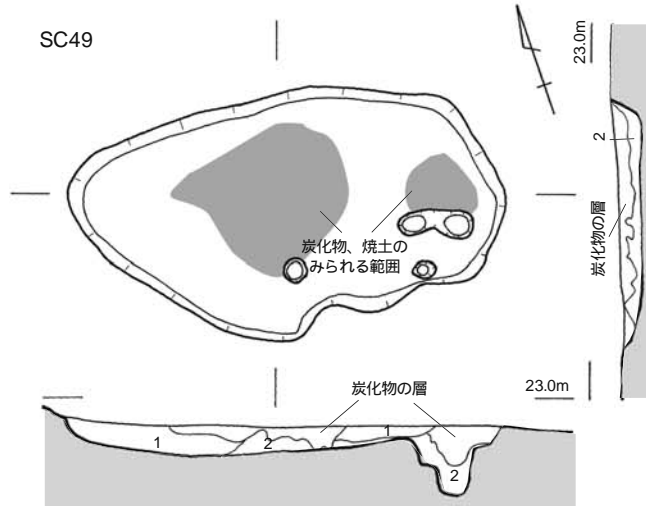
SC34



SC34

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性わずかにあり、しまりあり、アカホヤをブロック状に含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土、粘性なし、しまり弱い、さらさらしている、白斑ロームをブロック状に含む、1層よりやや明るい

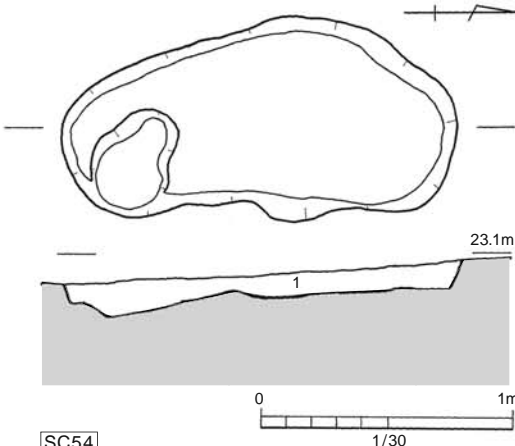
SC49



SC49

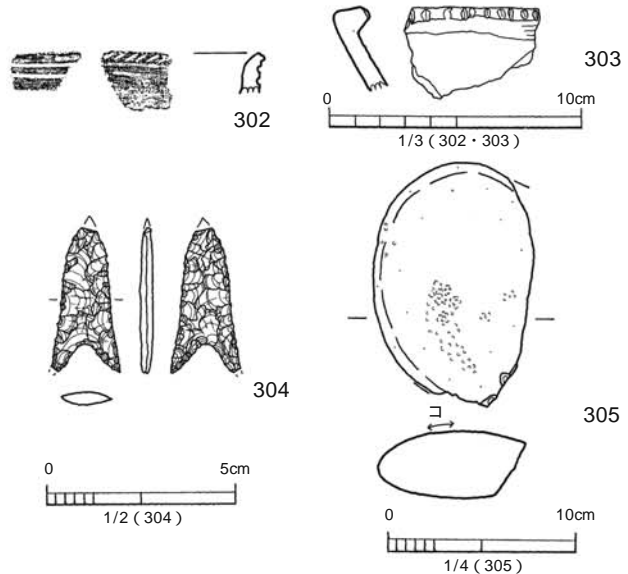
- 1 7.5YR3/4 暗褐色土、粘性、しまりともなし、さらさらしている、炭を多く含む
- 2 7.5YR4/4 褐色土、粘性弱い、しまりあり、明褐色土を粒状にわずかに含む

SC54



SC54

- 1 7.5YR4/4 褐色土、粘性なし、しまりあり、さらさらしている、アカホヤ、黒褐色土をブロック状にわずかに含む



第 83 図 土坑実測図 (4) 及び土坑出土遺物実測図 (2)

S C 13 (第 83 図)

E - 2 区西側の表土直下第 層で検出された。長径 14 m の台形に近い形状で、深さは 02 m ほどである。古墳時代の土師器片が出土した。

S C 30 (第 83 図)

F - 2 区北側の第 層掘り下げ中に検出された。検出時は長径 12 m、短径 03 m ほどの細長い形態であると考え、南側を断ち割ったため、土層断面図より南側の底面についてははっきりしない。北側は検出面より円状に広がり、壁面が張り出しており、床面付近で攪乱と見られる別遺構と切り合っている。埋土上部から中ほどにかけて焼土や炭を含むが、底面に焼土は見られない。埋土中から、古墳時代の土師器片と凹石が出土した。

S C 34 (第 83 図)

F - 2 区中央部の表土直下第 層で検出された。近くにある C 35・47 同様、検出時は陥し穴状遺構と考えたが、深い掘り込みや、杭痕とみられる小穴は検出できなかった。長径 1.1 m、短径 0.6 m で、中央部に掘り込みがあるが、別のピットであると思われる。底面は第 層である。

S C 49 (第 83 図)

F - 2 区南東側調査区境の表土直下第 層で検出された。S C 48 と隣接し、形状は似ているが、向きが異なる。長径約 1.7 m、短径 1.0 m の楕円形に近い形状である。S C 48 と同様、焼土や炭を多量に含んでいるが、深さが浅く、底面には焼土が見られない。古墳時代の土師器片が出土した。

S C 54 (第 83 図)

F - 2 区南側の表土直下第 層で検出された。S C 53 と隣接している。長径 1.6 m、短径 0.8 m のやや真ん中がふくらんだ楕円形である。埋土にアカホヤを含むなど、近くにある S C 56 (陥し穴状遺構) と共通点もあるが、浅く、杭痕とみられる小穴は確認されなかった。底面南側にピット状の掘り込みが見られる。

・ S C 17 出土遺物 (第 83 図)

302 は縄文土器深鉢の口縁部である。端部に刻目、外面に二条の沈線がめぐる。

・ S C 20 出土遺物 (第 83 図)

305 は砂岩製の台石である。全体の 1/3 程度を欠損している。片面に潰打痕が認められる。

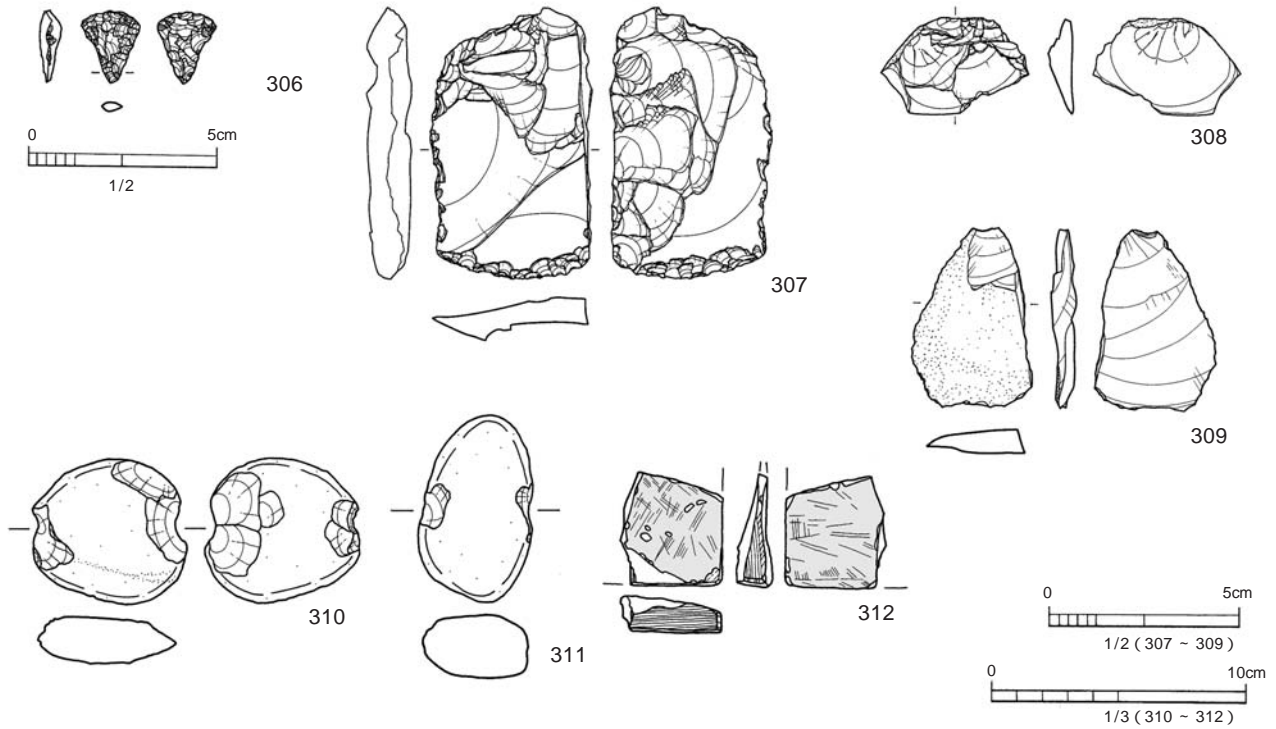
(3) 遺物

ここでは、表土や耕作土中より出土した遺物のうち、所属時期が明確に把握できなかった石器について図化・掲載して報告する (第 84 図)。

石錐 (306) の石材はチャートである。逆三角形の平面を呈し、錐先以外の周縁を微細剥離調整する。スクレイパー (307) は珪質頁岩を石材とする。短冊形の平面の短辺を刃部とし、側縁部も微細剥離がなされる。剥片は 308 と 309 がある。308 は砂岩、309 は礫面の残る珪質頁岩の剥片である。石錘は砂岩製の 310・311 がある。打ち欠きは、長軸 (310) のものと短軸方向 (311) がある。砥石 (312) は、緑色頁岩製である。両面とも使い込まれて薄くなっている。光沢痕や擦痕が認められる。大半を欠損しているが、平面形は方形で、側辺は直角・直線的に加工してその隅角は面取りするなど規格的なつくりである。

第 38 表 土坑出土土器観察表

種別	器種	部位	出土地点		手法・調整・文様		色調		胎土	備考 (法量: cm)	
			[位置]	[層位]	外面	内面	外面	内面			
299	土師器	壺	口縁	S C 22	埋土	ナデ 2条の粗い波状文	ナデ	明赤褐 5 Y R 5/6	明赤褐 5 Y R 5/6	3mm 以下の黒褐色の粒を含み、2mm 以下の灰白色・赤褐色の粒をわずかに含む	
300	土師器	小型壺	頸	S C 50	埋土	上部: 横ナデ下部: 斜方向のミガキ	上部: 横ナデ 下部: 丁寧なナデ	にぶい橙 7.5 Y R 6/4	にぶい橙 7.5 Y R 6/4	1mm 以下の灰白色・灰色・褐色の粒を含み、角閃石をまばらに含む	
301	土師器	高坏	脚	S C 1・ S A 1	埋土	脚柱部: 縦方向のヘラミガキ 裾部: ナデ後縦方向のミガキ 裾部端部: 横ナデ	脚柱部: 粗い横ナデ 裾部: 横ナデ	橙 5 Y R 6/6	にぶい橙 7.5 Y R 7/4	3mm 程の白色・赤褐色、1mm 程の灰色・灰白色・暗褐色の粒を多く含み、角閃石をまばらに含む	裾部径 (14.0)
302	縄文土器 (後期)	深鉢	口縁	S C 17	埋土	端部: 連続押圧刻目 横方向に 2 条の沈線文	ナデ	にぶい黄褐 10 Y R 4/3	明褐 7.5 Y R 5/6	1mm 以下のにぶい橙色の粒を含む	
303	弥生土器	甕	口縁	S C 48	埋土	口縁部: 刻目突帯文 横ナデ	ナデ	橙 7.5 Y R 7/6 褐灰 7.5 Y R 4/1	にぶい橙 7.5 Y R 7/4	1mm 程度の灰白・褐色の粒を含む	外面スス付着



第 84 図 包含層等出土石器実測図

第 39 表 土坑出土石器計測表

	器種	石材	出土地点		計測値				備考
			〔位置〕	〔層位〕	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	
304	打製石鏃	頁岩	S C 44	埋土	3.80	1.80	0.40	2.22	細長い二等辺三角形、凹基で挟りは大きい、先端部欠損
305	台石	砂岩	S C 20	埋土	12.90	8.60	3.60	527.8	正面にまばらな敲打痕、一部欠損

第 40 表 包含層等出土石器計測表

	器種	石材	出土地点		計測値				備考
			〔位置〕	〔層位〕	長さ〔cm〕	幅〔cm〕	厚さ〔cm〕	重量〔g〕	
306	石鏃	チャート	F - 2 区		1.90	1.60	0.60	1.25	二等辺三角形、全面に剥離調整
307	スクレイパー	珪質頁岩	P 03 G r	上面	7.05	4.16	1.18	39.00	縦長剥片素材か、刃部は剥離調整、両側面は微細剥離調整
308	剥片	砂岩	E - 3 区	攪乱埋土	2.54	3.89	0.65	5.80	横長剥片
309	剥片	珪質頁岩	D 20 G r	トレンチ内	4.73	3.22	0.62	9.90	縦長剥片、正面に自然面
310	石錘	砂岩	S E 8	埋土	5.70	6.10	1.80	84.8	長軸方向の両側面を打ち欠き
311	石錘	砂岩	G 15 G r	トレンチ内	7.40	4.55	2.45	122.4	長軸方向の両側面を打ち欠き
312	砥石	緑色頁岩	E - 3 区	攪乱埋土	4.45	4.00	1.40	24.1	正面・裏面とも全体に磨面状の光沢のある使用痕・多数の線状の使用痕、下面と右側面に長軸方向の線状の使用痕、一部欠損

第6節 自然科学分析の結果

自然科学分析では、放射性炭素年代測定、樹種・種実同定、金属分析を実施した。

板平遺跡（第4次調査）では、炉穴や竪穴建物跡、土坑より炭化材、さらにフローテーションにより種実が得られた。当時の自然環境や食料や建築材における植物利用のあり方を把握するため、炭化材や炭化物の樹種等を同定した。さらに出土遺構の年代を推定するために、放射性炭素年代測定も行った。

また、竪穴建物跡（SA1）出土鉄滓等を分析することで、始発原料および製造工程上の位置づけを図り、古墳時代の鉄生産の実態を把握するために顕微鏡組織観察・化学成分分析・硬度試験を実施した。

各分析の方法や・結果の詳細については、下記に掲載した。

1 放射性炭素年代測定

(1) 試料

2 SA 1床面出土の炭化材（ツブラジイ）

9 SP 2床面出土の炭化材（クリ）

11 SP 7床面焼土内の炭化材（クリ）

12 SI 1の下部埋土出土の炭化材
（アカガシ亜属）

13 SC50床面出土の炭化材

(2) 分析方法

各資料を超音波洗浄と酸 - アルカリ - 酸処理の後、AMS [加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)] により年代を測定し、暦年校正した。

(3) 測定結果

第41表に放射性炭素年代測定結果および暦年代（校正年代）を示した。

2の炭化材では 1670 ± 20 年 BP（2の暦年代で AD260 ~ 280, 330 ~ 430年）、9の炭化材では 9260 ± 30 年 BP（BC8610 ~ 8340年）、11の炭化材では 9230 ± 30 年 BP（BC8550 ~ 8320年）、12の炭化材では 4090 ± 20 年 BP（BC2860 ~ 2810, 2750 ~ 2720, 2700 ~ 2570, 2520 ~ 2500年）、13の炭化材では 6185 ± 25 年 BP（BC5220 ~ 5050年）の年代値が得られた。

このうち、12の炭化材では暦年代の年代幅がかなり広がっているが、これは該当時期の校正曲線が不安定なためである。なお、樹木（炭化材）による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、遺構の年代よりも古い年代値となることがある。

2 樹種同定

(1) 試料

試料は、竪穴建物跡、炉穴、集石遺構から採取された炭化材11点である。

(2) 分析

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）放射断面（柁目）接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50 ~ 1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(3) 結果

第41表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。また、その樹種の特徴も記した。

a) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmくらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

b) ツブラジイ *Castanea crenata* Schottky ブナ科

ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径15mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材等に用いられる。

c) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen.

Castanea crenata ブナ科

コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径15m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

d) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8～10m、径20～30cmである。材は強靱、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

(4) 所見

樹種同定の結果、ツブラジイ5、クリ4、コナラ属アカガシ亜属1、サカキ1が同定された。SA1(竪穴建物跡)の貼床面から採取された6試料のうち5試料はツブラジイである。また、炉穴SP2、SP6、SP7)から採取された3試料は、いずれもクリである。

ツブラジイ、コナラ属アカガシ亜属、サカキは、温帯下部の暖温帯に分布する常緑高木で、ツブラジイとコナラ属アカガシ亜属は照葉樹林を構成する主要高木である。コナラ属アカガシ亜属は一般にカシと総称されるが、イチイガシ、アラカシなど多くの種があり、イチイガシは自然度が高いがアラカシは二次林性でもある。クリは温帯に広く分布する落葉高木で、乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。

3 種実同定

(1) 試料

試料は、竪穴建物跡(SA4)の炉周辺から採取された選別済みの種実類である。

(2) 方法

肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定し、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

(3) 結果

分析の結果、草本1分類群(イネ)が同定された(第41表)。イネ(*Oryza sativa* L.)は長さ×幅:4.69mm×2.67mmである。炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がかぼむ。表面には数本の筋が走る。

(4) 所見

種実同定の結果、竪穴建物跡(SA4)の炉周辺から採取された種実類はイネ(炭化米)と同定された。この炭化米は、粒形と大きさから短粒の小粒に区分される(佐藤, 1988)。

4 金属分析

(1) 試料

- No.1 SA1 床面出土の高坏脚部(掲載番号206)
- No.2 SA1 炉内埋土上部出土の鉄滓状の塊(222)
- No.3 SA1 炉内埋土上部出土の鉄滓状の塊(223)
- No.4 SA1 炉内埋土出土の鉄滓状の塊(224)
- No.5 SA1 床面出土の鉄滓状の塊(225)

(2) 分析方法

a) 重量計測、外観観察および金属探知調査

試料重量の計量は電子天秤を使用して行い、小数点2位で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に、試料の外観をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。試料の出土位置や試料の種別等は提供された試料に準拠した。着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、6mmを1単位として35cmの高さから吊した磁石が動きは始める位置を着磁度として数値で示した。遺物内の残存金属の有無は金属探知機(MC: metal checker)を用いて調査した。金属検知にあたっては参照標準として直径と高さを等しくした金属鉄円柱(1.5mm x1.5mmH、2.0mm x2.0mmH、5mm x5mmH、10mm x10mmH、16mm x16mmH、20mm x20mmH、30mm x30mmH)を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

b) 顕微鏡組織観察

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨(鏡面仕上げ)する。顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物(不純物、非金属鉱物)の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍、及び400倍で撮影を行う。

c) 化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。

・全鉄(T. Fe): 三塩化チタン還元 - ニクロム酸カリウム滴定法。

・金属鉄(M. Fe): 臭素メタノール分解 - EDTA 滴定法。

・酸化第一鉄(FeO): ニクロム酸カリウム滴定法。

- ・酸化第二鉄 (Fe₂O₃): 計算。
- ・化合物 (C.W.): カールフィッシャー法。
- ・炭素 (C) イオウ (S): 燃焼 - 赤外線吸収法。
- ・ライム (CaO) 酸化マグネシウム (MgO) 酸化マンガン (MnO) 酸化ナトリウム (Na₂O) 珪素 (Si) マンガン (Mn) リン (P) ニッケル (Ni) ジルコニア (Zr) アルミニウム (Al) バナジウム (V) チタン (Ti): ICP 発光分光分析法。
- ・シリカ (SiO₂) アルミナ (Al₂O₃) 酸化カルシウム (CaO) 酸化マグネシウム (MgO) 二酸化チタン (TiO₂) 酸化リン (P₂O₅) 酸化カリウム (K₂O): ガラスビード蛍光 X 線分析法。

但し CaO, MgO, MnO は含有量に応じて ICP 分析法またはガラスビード蛍光 X 線分析法を選択。

- ・酸化ナトリウム (Na₂O): 原子吸光法。

なお、鉄滓中成分は、18 成分 (全鉄 T. Fe、金属鉄 M.Fe、酸化第一鉄 FeO、酸化第二鉄 Fe₂O₃、シリカ SiO₂、アルミナ Al₂O₃、ライム CaO、マグネシア MgO、酸化ナトリウム Na₂O、酸化カリウム K₂O、二酸化チタン TiO₂、酸化マンガン MnO、酸化リン P₂O₅、ジルコニア Zr、化合物 C.W.、炭素 C、バナジウム V、銅 Cu) を化学分析している。分析は各元素について、酸化物に換算して表示した。

d) 耐火度試験

耐火物及び耐火物原料の耐火度試験は、JISR 2204 (耐火物及び耐火物原料の耐火度試験方法) 及び JISR 8101 (耐火度試験用標準コーン) に準拠して測定する。

遺物試料を粉砕し、規定 (量的に少量であるから寸法は第 2 種の小型: 幅 7mm、高さ 27mm) のゼーゲルコーンを成型する。このゼーゲルコーンを傾斜 80° で受台に装着し、毎分 5 で加熱する。コーンの先端が曲がり始め、受台に接触したときの温度を耐火度とする。

なお、耐火度を測定できない場合は、必要に応じて既分析の 146 試料について耐火度 (ゼーゲルコーン溶倒温度 y ()) の試験結果を整理して得た $y = 110.98 f(x) + 927.82$ の推算式から耐火度を測定する。

$f(x) = (25.8Al_2O_3 + 5.2SiO_2) / (146MgO + 448MnO + 12.5T.Fe + 10.4TiO_2 + 78.6CaO)$

e) 硬度試験

ビッカース硬度計を用いて硬度を測定する (JIS Z 2244) 鏡面仕上げした試料面に対面角 136° の四角錐ダイヤモンド圧子を一定荷重、荷重時間 10 秒で押し込み、生じた圧痕の対角線の平均長さ d から、次式によって硬度を算出する。

$$\text{ビッカース硬度 (Hv)} = (\text{荷重}) / (\text{圧痕の表面積}) \\ = 2 P \sin (\theta / 2) / d^2 (\text{kg/mm}^2)$$

ここで、Hv はビッカース硬度、 θ は対面角で 136°、d は圧痕の対角線の平均長さ μm 、P は荷重 g f である。本測定に当たっては組織の硬さを考慮して荷重は 100 g f としている。

(3) 分析結果

- a) No.1 試料 [着磁度: なし、メタル反応: なし]

外観観察: 長さ 468mm × 幅 478mm × 厚さ 7.4 mm。試料の重量は 29.4g である。12 頁に外観写真を示す。先端部の内径は 22mm、炉壁部の内径は 55mm の接合補修された羽口で、先端部は末広がりになっており、緻密でよく練り上げられた組織である。先端部から 10mm 程度の外表面部分は、被熱により本来の羽口の色彩の茶褐色から灰色に変色し、やや発泡しているが溶融には至っていない。羽口の内面側、及び炉壁側は羽口本来の茶褐色の状態である。変色の少ない部分を分析する。

顕微鏡組織: 半透明の石英粒や長石類の粒子が観察され、外観に比べ石英や長石類が多い。素地は締めまり緻密である。

化学成分: 強熱減量は 4.1% で、熱影響は余り強く受けておらず結合水の一部が抜けた状態での分析である。SiO₂ は 62.4% と羽口としては低目の値であり、通常の粘土の約 60% に近いが、耐火度に有利な Al₂O₃ は 21.1% とやや高い。一方、造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + Na₂O + K₂O) 中の軟化性を持つアルカリ土類成分 (CaO + MgO) は 1.79% と通常の範囲である。耐火度を低下させると思われる Na₂O + K₂O は 3.39% とやや多く、軟化性成分である全鉄分も 4.57% とやや多い。MnO は 0.05% である。

耐火度: 耐火度は 1140 で、成分系を反映している。鍛冶炉用羽口としては低めで、炉壁並みの値である。

以上から本試料は、炉壁並みの耐火度 1140 の鍛冶炉羽口と思われる。

b) No.2 試料 [着磁度 : なし、メタル反応 : なし]

外觀観察 : 長さ 41.9mm × 幅 24.2mm × 厚さ 15.7 mm。試料の重量は 13.4g である。滓が炉壁と反応した炉壁付着滓の小片で、表面には微細な亀裂が多く、ぼそぼそとした感じである。明確な破面は観察されない。厚みの約半分の部分は褐色で残り半分は滓と反応したものと思われ、やや灰黒色を帯びている。下面側はよく溶融している炉底部付近の炉壁付着滓と思われる。

顕微鏡組織 : 全面が胎土の粘土組織であり鉄滓の組織は殆ど見られない。滓と反応してよく発泡した多孔質な組織で、所々にメタル粒が観察される。

化学成分 : 全鉄は 7.98% と極めて少なく、FeO は 0.64%、 Fe_2O_3 は 10.5% である。SiO₂ が 54.5 %、Al₂O₃ が 27.4%、CaO が 1.06%、MgO が 1.63% をそれぞれ示しており炉壁と反応した炉壁付着滓と思われる。

推算耐火度 (参考値) : 試料が少なく耐火度の測定が困難であったため、胎土と見られる部分から試料を採取して化学成分を分析して推算した。推算耐火度は 1150 であった。

以上の結果を総合すると、本試料は炉底部付近の炉壁と反応し生成した炉壁付着滓の小片と思われる。

c) No.3 試料 [着磁度 : 0 ~ 1、メタル反応 : なし]

外觀観察 : 長さ 55.2mm × 幅 37.1mm × 厚さ 19.0 mm。試料の重量は 22.2g である。表面が溶岩のようにゴツゴツとした凹凸が激しい形状の炉壁付着滓であり、小石の噛み込みも観察される。明確な破面は観察されない。表面は酸化土砂に覆われて茶褐色を帯びているが、滓そのものは黒色でよく溶融する。

顕微鏡組織 : 全面が胎土の粘土組織であるが、僅かながら微細な白色微小結晶の多角盤状のマグネタイト (Magnetite : Fe_3O_4) 組織が晶出している。顕微鏡組織写真 3 - 1 は結晶がやや大きい部分、顕微鏡組織写真 3 - 2 は結晶が微細な部分である。

化学成分 : 全鉄は 18.5% と少なく、FeO は 10.4%、 Fe_2O_3 は 14.6% である。SiO₂ が 45.7 %、Al₂O₃ が 21.5%、CaO が 1.84%、MgO が 1.54% をそれぞれ示しており炉壁と反応した炉壁付着滓と思われる。本試料は炉壁と反応した炉壁付着滓の小片と思われる。

以上の結果を総合すると、本試料は炉壁付着滓の小片と思われる。

d) No.4 試料 [着磁度 : 0 ~ 1、メタル反応 : なし]

外觀観察 : 長さ 48.1mm × 幅 35.5mm × 厚さ 22.2 mm。試料の重量は 15.1g である。不整三角形で酸化土砂に覆われ茶褐色を呈した炉壁付着滓の小片で、明確な破面は 1 である。破面で見ると滓そのものは黒色でよく溶融しており、内部はブツブツと発泡している。20 × 15mm 大の木炭痕が観察される。

顕微鏡組織 : 約半分が粘土組織、残り半分が滓の組織である。滓組織にはウルボスピネル (Ulvospinel : $2FeO \cdot TiO_2$) 組織が観察され、その背景にはファイヤライト (Fayalite : $2FeO \cdot SiO_2$) 組織も観察される。

化学成分 : 全鉄は 14.0% と少なく、FeO は 4.59%、 Fe_2O_3 は 14.6% である。SiO₂ が 49.6 %、Al₂O₃ が 23.5 %、CaO が 2.47 %、MgO が 1.17 % をそれぞれ示しており炉壁と反応した炉壁付着滓と思われる。TiO₂ が 1.06% であることや、顕微鏡組織から TiO₂ 鉱物組織のウルボスピネル (Ulvospinel : $2FeO \cdot TiO_2$) 組織が観察されたこと等から判断すると、始発原料は砂鉄と判断される。本試料は炉壁と反応した炉壁付着滓の小片と思われる。

硬度試験 : ビッカース硬度計を用いて硬度を測定した。ウルボスピネル (Ulvospinel : $2FeO \cdot TiO_2$) 組織と見られる部分の硬度は Hv705 で、ファイヤライト (Fayalite : $2FeO \cdot SiO_2$) 組織と見られる部分の硬度は Hv625 をそれぞれ示した。

以上の結果を総合すると、本試料は始発原料を砂鉄とする炉壁付着滓の小片と思われる。

e) No.5 試料 [着磁度 : 3 ~ 4、メタル反応 : 2 ~ 3]

外觀観察 : 長さ 51.1mm × 幅 46.0mm × 厚さ 17.7 mm。試料の重量は 60.8g である。不整三角形の栗のような形状をした緻密で重量感のある鉄滓である。炉壁の胎土が付着していた痕跡があり、中央部がやや窪んだ形状であること等から本試料は椀形滓底部の小片と思われる。表面は酸化土砂に覆われて茶褐色を呈し、滓は黒色でよく溶融している。

顕微鏡組織 : 多角盤状のマグネタイト (Magnetite : Fe_3O_4) 組織と凝集したウスタイト (Wustite : FeO) 組織の混晶で、背景にわずかながらファイヤライト (Fayalite : $2FeO \cdot SiO_2$) 組織が観察される。

化学成分 : 全鉄 56.7% に対して金属鉄は 0.13% とわずかである。FeO は 39.3%、 Fe_2O_3 は 37.2%、SiO₂

は 14.3%、TiO₂ は 0.28% であり始発原料は砂鉄か否かは判断できない。FeO-Fe₂O₃-SiO₂ の 3 成分系に換算すると FeO は 43.3 %、Fe₂O₃ は 41.0 %、SiO₂ は 15.7% となり、9FeO-Fe₂O₃-SiO₂ 系の平衡状態図ではマグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄) 領域にあり、顕微鏡観察の結果と一致する。鍛錬鍛冶滓と思われる。

硬度試験：ピッカース硬度計を用いて硬度を測定した。マグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄) 組織と見られる部分の硬度は Hv551 でウスタイト (Wustite : FeO) 組織と見られる部分の硬度は Hv496、ファイヤライト (Fayalite : 2FeO · SiO₂) 組織と見られる部分の硬度は Hv676 をそれぞれ示した。

以上の結果を総合すると、本試料は鍛錬工程の初期に生成した椀形鍛冶滓の小片と思われる。

4 分析結果のまとめ

(1) 試料群の性格

試料群は、炉壁付着滓が 3 試料、椀形滓が 1 試料、羽口が 1 試料の合計 5 試料である。椀形滓の工程別分類では、鍛錬鍛冶滓であり、製錬滓の該当はなく本遺跡では鍛冶炉による精錬から鍛錬が行われていたものと考えられる。

(2) 始発原料について

鉄滓 (5 試料) から、TiO₂ 鉱物のウルボスピネルが観察されていることから、本遺跡の始発原料は砂鉄と判断された。

(3) 高坏転用のフィゴの羽口

羽口 (1 試料) は、外面側が炉内還元炎に曝され先端部は溶融していた。耐火度は 1140 で、成分系を反映して鍛冶炉用の羽口としては低めで、炉壁並みの値であった。

第 7 節 小結

第 4 次調査では、第 1 ~ 3 次調査と同様に、後期旧石器時代から近世までの遺構や遺物を確認することができた。

その結果、調査範囲は、板平遺跡の位置する河岸

【文献】

(放射性炭素年代測定)

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37 (2), p.425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.

Paula J Reimer et al., (2009) IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.

(樹種同定)

島地謙・佐伯浩・原田浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造．文永堂出版，290p.

島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.

山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 - 用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別 1 号．植生史研究会，242p.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の 14C 年代，p.3-20 .

(種実同定)

笠原安夫 (1988) 作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第 2 巻生業，雄山閣出版，p.131-139 .

佐藤敏也 (1988) 弥生のイネ．弥生文化の研究第 2 巻生業，雄山閣出版，p.97-111.

南木睦彦 (1991) 栽培植物．古墳時代の研究第 4 巻生産と流通 I，雄山閣出版，p.165-174 .

吉崎昌一 (1992) 古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル No.355，ニューサイエンス社，p. 2-14 .

段丘平坦部のほとんどの部分に及び、第 3 次調査と合わせて、第 2 次調査区より西側への遺構や遺物の広がりを把握することができた。

本来ならばここで第 4 次調査についてまとめるところであるが、重複を避けるため、後述の第 7 章の中で一括して述べることにする。

第 41 表 自然科学分析の結果 (1)

放射性炭素年代測定結果

試料	測定番号 PED-	¹³ C (‰)	¹⁴ C年代 (年 BP)	暦年代 (較正年代)	
				1 (68.2% 確率)	2 (95.4% 確率)
2	16266	-26.99 ± 0.14	1670 ± 20	AD350-370 (20.2%) AD375-415 (48.0%)	AD260-280 (2.1%) AD330-430 (93.3%)
9	16267	-26.46 ± 0.14	9260 ± 30	BC8570-8450 (68.2%)	BC8610-8340 (95.4%)
11	16268	-27.01 ± 0.13	9230 ± 30	BC8540-8500 (13.9%) BC8490-8420 (32.6%) BC8410-8390 (6.6%) BC8380-8340 (15.2%)	BC8550-8320 (95.4%)
12	16269	-27.75 ± 0.16	4090 ± 20	BC2840-2810 (12.2%) BC2670-2570 (56.0%)	BC2860-2810 (18.5%) BC2750-2720 (2.9%) BC2700-2570 (73.1%) BC2520-2500 (1.0%)
13	16270	-27.97 ± 0.14	6185 ± 25	BC5210-5200 (1.7%) BC5170-5070 (66.5%)	BC5220-5050 (95.4%)

板平遺跡における樹種同定結果

	遺構	出土位置	結果 (学名 / 和名)	
2	S A 1 (竪穴建物跡)	貼床面 (1)	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
3	S A 1 (竪穴建物跡)	貼床面 (2)	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
4	S A 1 (竪穴建物跡)	貼床面 (3)	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
5	S A 1 (竪穴建物跡)	貼床面 (4)	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
6	S A 1 (竪穴建物跡)	貼床面 (5)	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
7	S A 1 (竪穴建物跡)	貼床面 (6)	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
8	S A 1 1 (竪穴建物跡)	炉内	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ
9	S P 2 (炉穴)	床面	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
10	S P 6 (炉穴)	焼土	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
11	S P 7 (炉穴)	焼土	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
12	S I 1 (集石遺構)	下部埋土	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属

板平遺跡における種実同定結果

	遺構	出土位置	分類群		部位	個数	備考
			学名	和名			
1	SA4 (竪穴建物跡)	炉周辺	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	炭化果実	1	種実ではない 9

第 42 表 自然科学分析の結果 (2)

調査試料と調査項目

試料 No.	遺構番号	出土位置	分析試料	着磁度	MC 反応	外観観察	化学分析	組織観察	耐火度試験	硬度試験	掲載図・掲載番号
No.1	SA1	貼床面	高杯脚部								第 58 図 206
No.2	SA1	炉内埋土上部	鉄滓状の塊								第 59 図 222
No.3	SA1	炉内埋土上部	鉄滓状の塊								第 59 図 223
No.4	SA1	貼床面	鉄滓状の塊								第 59 図 224
No.5	SA1	貼床面	鉄滓状の塊								第 59 図 225

分析資料と結果

試料 No.	遺構番号	出土位置	分析試料	分析結果
No.1	SA1	貼床面	高杯脚部	耐火度 1140 の鍛冶炉口
No.2	SA1	炉内埋土上部	鉄滓状の塊	炉壁付着滓
No.3	SA1	炉内埋土上部	鉄滓状の塊	炉壁付着滓
No.4	SA1	貼床面	鉄滓状の塊	始発原料を砂鉄とする炉壁付着滓
No.5	SA1	貼床面	鉄滓状の塊	鍛錬工程の初期に生成した椀形鍛冶滓

耐火度試験結果

試料 No.	耐火度 (SK)	溶倒温度 (°C)	色	膨張	試験錘の性状
No.1	SK3a	1140	茶褐色	やや収縮	普通

硬度試験結果

No.4		No.5		
ウルボスピネル	ファイヤライト	マグネタイト	ウスタイト	ファイヤライト
705	625	551	496	676

鉄滓の化学成分分析結果 (%)

試料 No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O	比率 (%)	
											FeO	Fe ₂ O ₃
No.2	7.98	0.16	0.64	10.5	54.5	27.4	1.06	1.63	1.9	0.77	5.8	94.2
No.3	18.5	0.18	10.4	14.6	45.7	21.5	1.84	1.54	2.57	0.92	41.5	58.5
No.4	14	0.25	4.59	14.6	49.6	23.5	2.47	1.17	1.96	0.77	24	76
No.5	56.7	0.13	39.3	37.2	14.3	5.93	1.35	0.44	0.61	0.17	51.4	48.6

鉄滓の化学成分分析結果 (つづき) (%)

試料 No.	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	Zr	C.W.	C	V	Cu	TiO ₂ /T.Fe	MnO/TiO ₂	造滓成分 %
No.2	1.23	0.33	0.136	0.021	0.53	0.12	0.02	0.005	0.154	0.268	87.3
No.3	0.99	0.27	0.184	0.019	0.54	0.11	0.014	0.009	0.054	0.273	74.1
No.4	1.06	0.18	0.153	0.02	0.79	0.08	0.011	0.006	0.076	0.17	78.5
No.5	0.28	0.09	0.089	0.004	0.3	0.03	0.001	0.016	0.005	0.321	22.8

C.W.= 化合水、造滓成分 = SiO₂+ Al₂O₃+ CaO+ MgO+ Na₂O+ K₂O

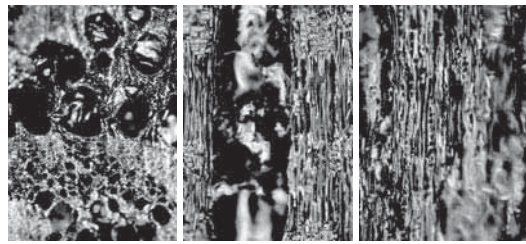
羽口の化学成分分析結果 (%)

試料 No.	T. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O	TiO ₂	MnO	C	強熱減量
No.1	4.57	0.43	6.06	62.4	21.1	0.66	1.13	1.96	1.43	0.79	0.05	0.3	4.1

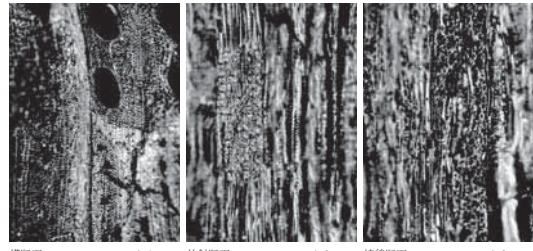
胎土の化学成分分析結果 (%)

試料 No.	T. Fe	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	TiO ₂	MnO
No.2	8.1	52	29.6	0.62	1.5	1.17	1.36	0.3

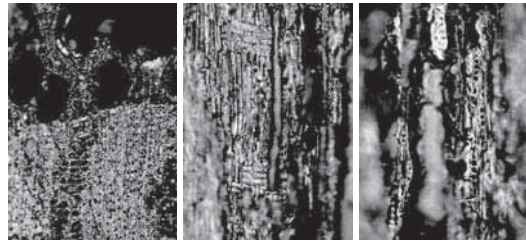
板平遺跡出土の炭化材



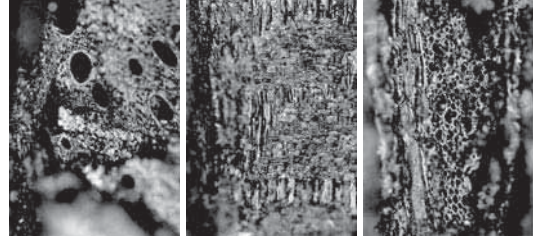
横断面 : 0.4mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
1. 4 SA1 (竪穴建物跡) 貼床面 (No.3) クリ



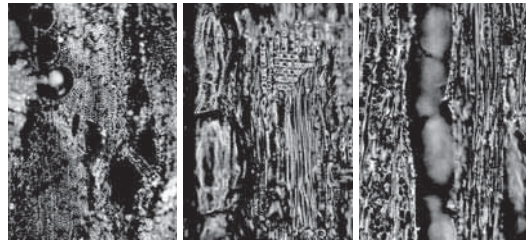
横断面 : 0.4mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
4. 6 SA1 (竪穴建物跡) 貼床面 (No.6) ツブラジイ



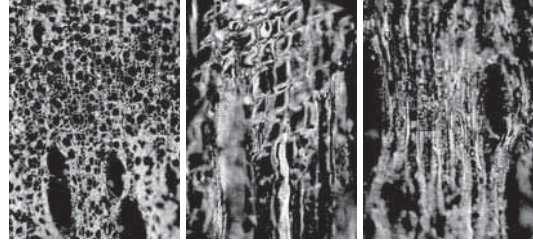
横断面 : 0.4mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
2. 9 SP2 (伊穴) 床面 クリ



横断面 : 0.4mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
5. 12 SI1 (集石遺構) 下部埋土 コナラ属アカガシ亜属



横断面 : 0.4mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
3. 5 SA1 (竪穴建物跡) 貼床面 (No.4) ツブラジイ



横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.1mm 接線断面 : 0.2mm
6. 8 SA11 (竪穴建物跡) 炉内 サカシ

板平遺跡出土の種実

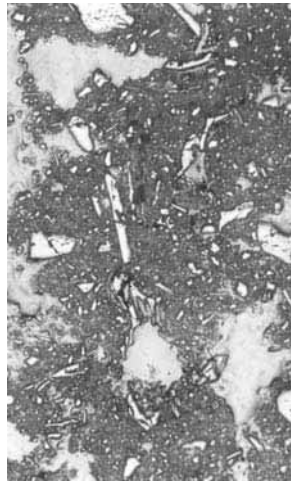


1 イネ炭化果実



2 同左

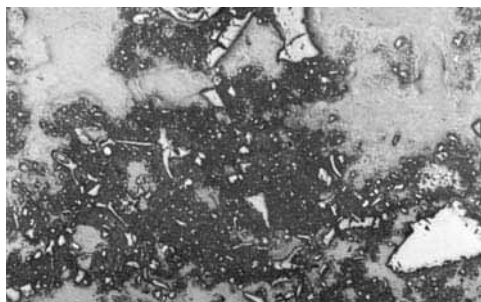
1.0mm



× 20



× 80



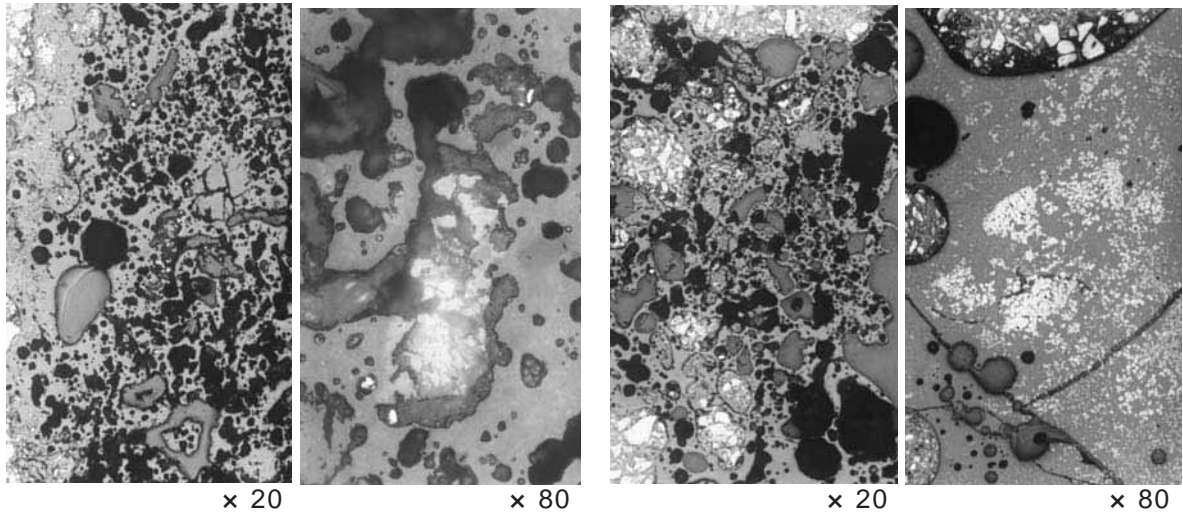
× 20



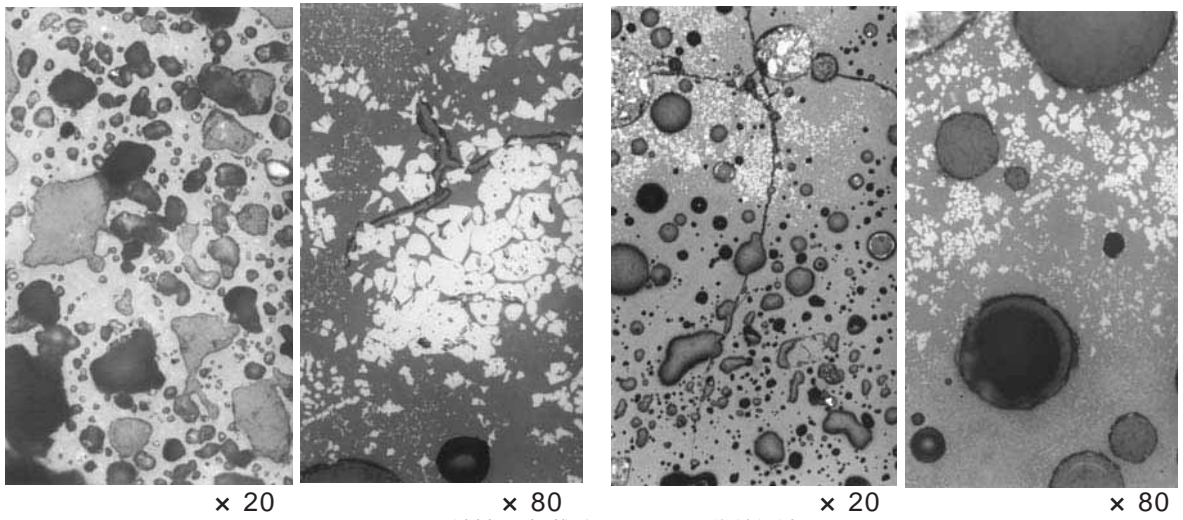
× 80

試料1(掲載番号206)の顕微鏡組織

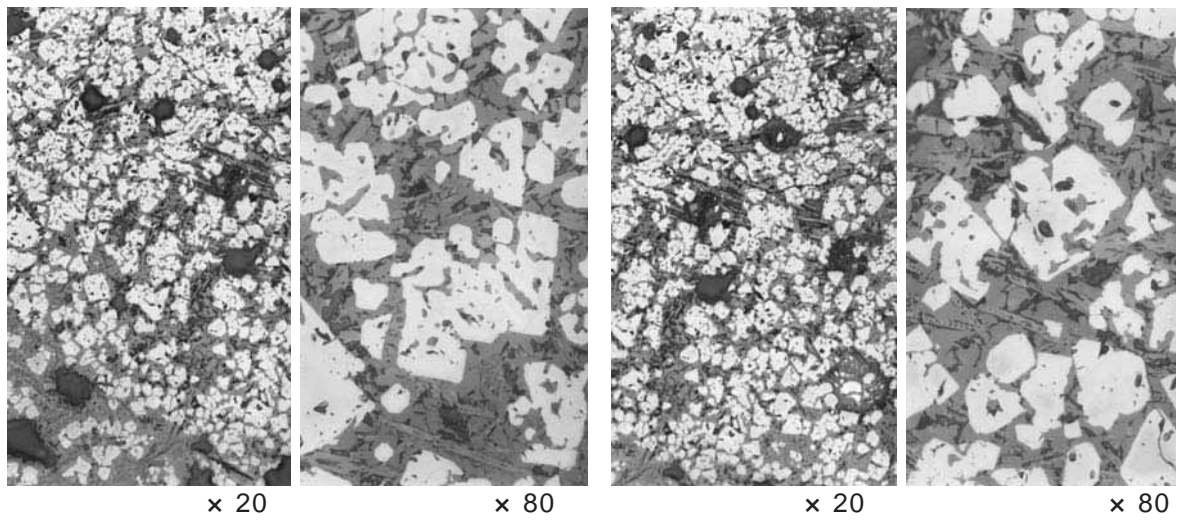
第85図 自然科学分析の結果(1)



試料 2 (掲載番号 222) の顕微鏡組織

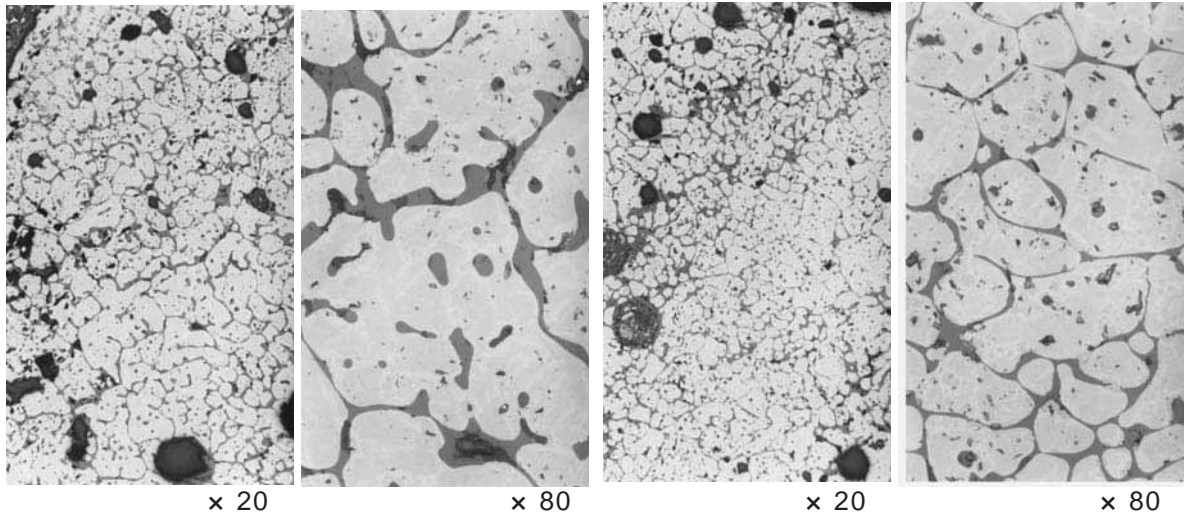


試料 3 (掲載番号 223) の顕微鏡組織

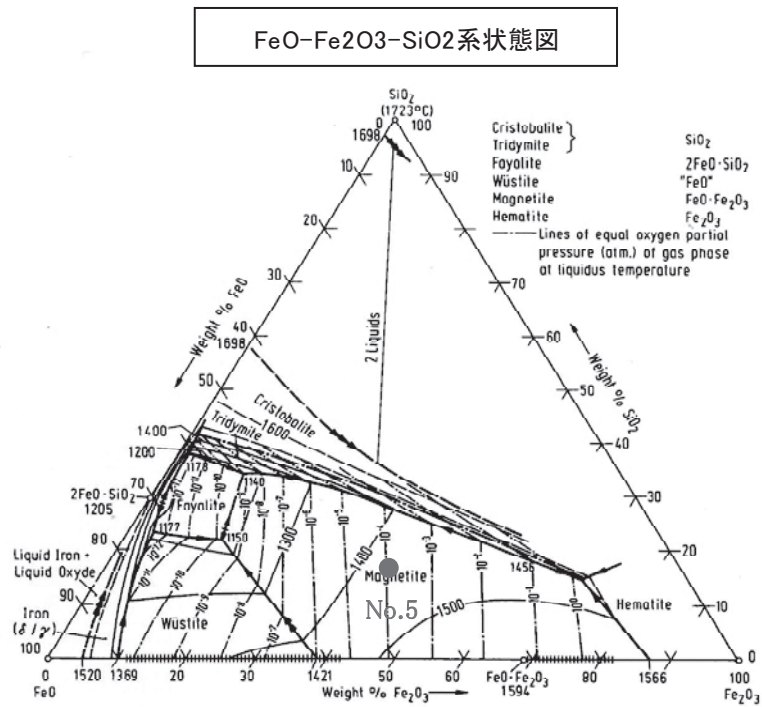


試料 4 (掲載番号 224) の顕微鏡組織

第 86 図 自然科学分析の結果 (2)



試料 5(掲載番号 225) の顕微鏡組織



FeO-Fe₂O₃-SiO₂ 系状態図 (by Osborn and Muan) :Slag Atlas
 [ドイツ鉄鋼協会](1981) [Verlag Stahleisen] Düsseldorf, Fig. 106, p.76

図 1 FeO-Fe₂O₃-SiO₂系鉄滓の平衡状態図

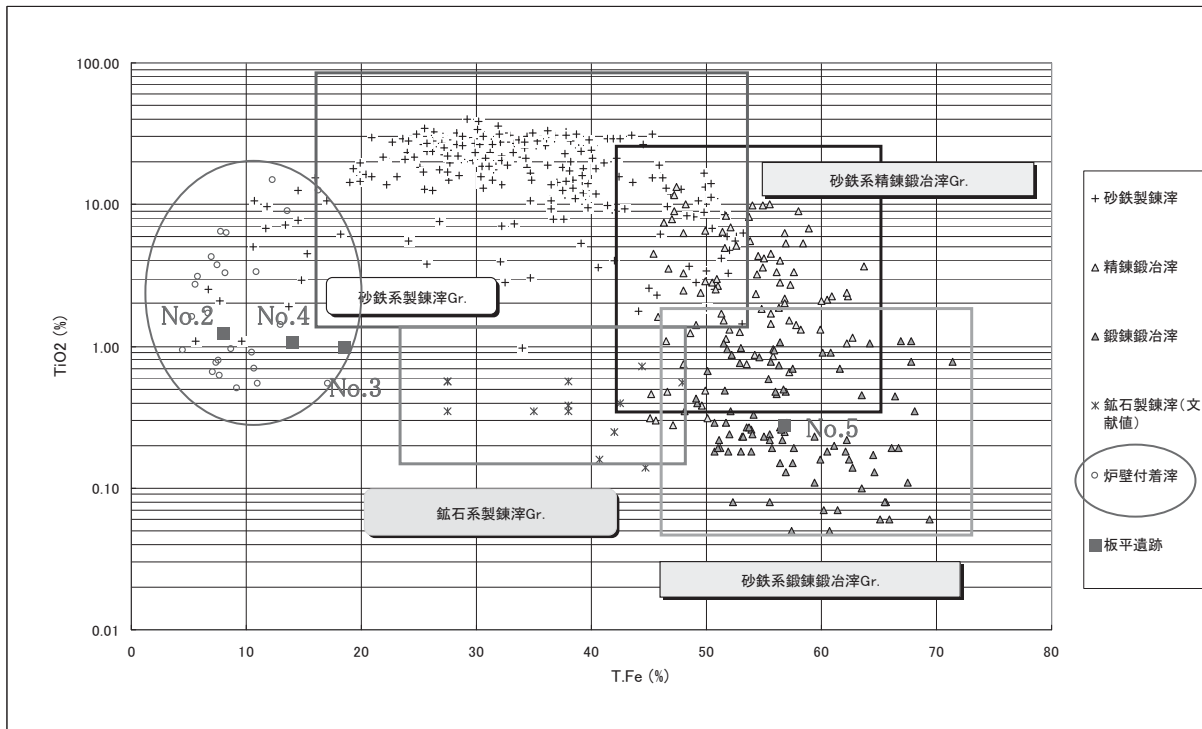


図2 鉄滓のT.FeとTiO₂濃度

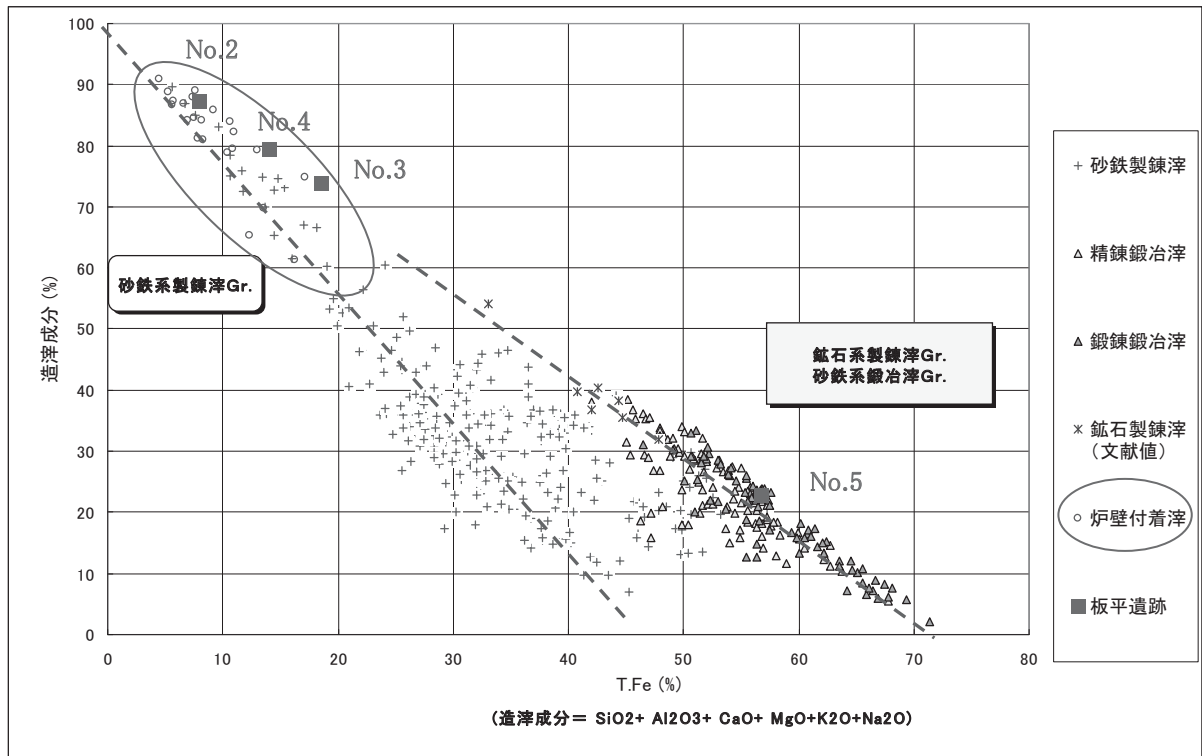


図3 製錬滓と鍛冶滓の分類

第88図 自然科学分析の結果(4)

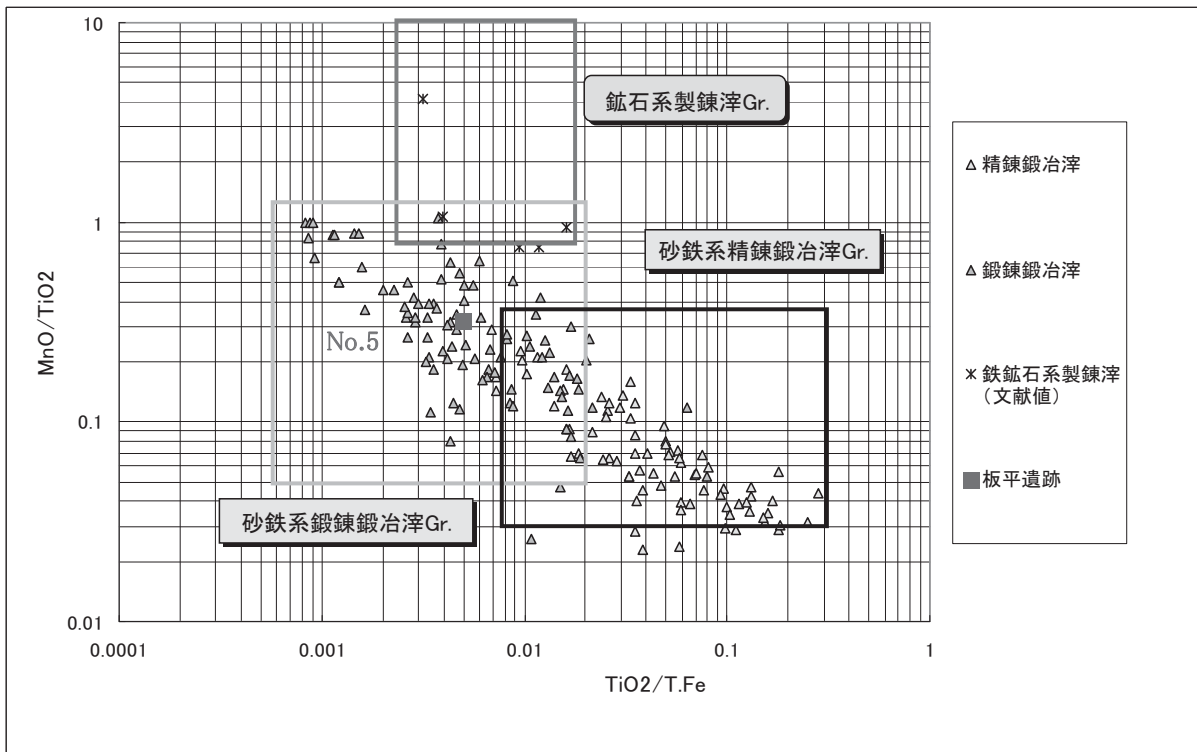


図4 砂鉄系鍛冶滓と鉍石系製錬滓の分類

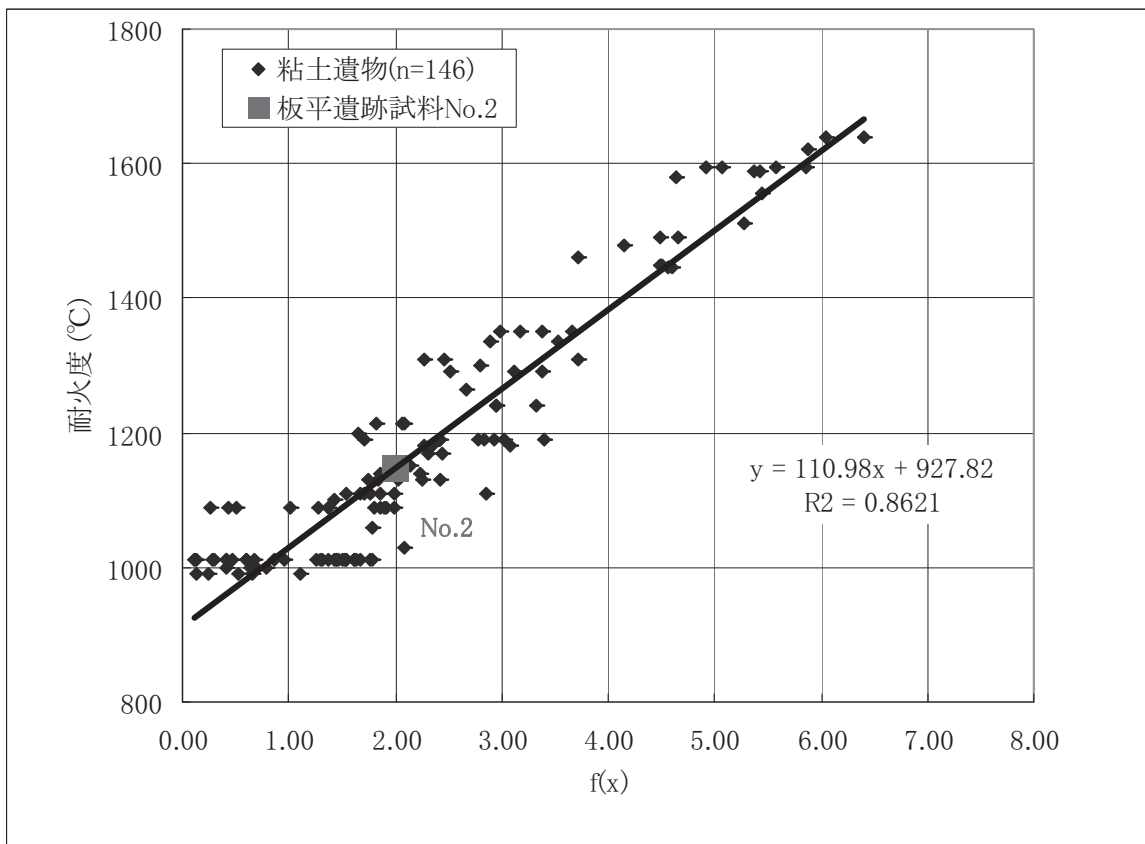


図5 粘土遺物の耐火度の推算

第 89 図 自然科学分析の結果 (5)

第 章 総括 ～今次までの調査成果～

板平遺跡の調査は、都合 4 次、4 ヶ年を数えた。本章では、既報告分(第 1・2 次)と今回の報告分(第 3・4 次)の調査成果を時代毎に総括することにする。

後期旧石器時代

第 1・2 次調査で、N 9 グリッド杭を中心に半径約 10 m の範囲(以下、A エリア)で 41 点、第 3 次調査で、J 9 グリッドなど(以下、B エリア)で 14 点、第 4 次調査で J 12 グリッド杭を中心に半径約 10 m の範囲(C エリア)を中心に 253 点の旧石器が出土した。

まず、各調査での出土範囲の地形と位置関係、出土層位について述べる。A エリアは、谷部への落ち込み際の AT 下位の第 層であるのに対し、B・C エリアは、A エリアから緩い尾根状の地形を越えた、平坦地の AT 下位の第 層である。また、A エリアと C エリアの中心は約 50 m 離れている。

次に、使用石材について述べる。A エリアでは 41 点中、ホルンフェルス 23 点(56%)、流紋岩 18 点(44%)であった。B エリアでは 14 点中ホルンフェルス 8 点(57%)、流紋岩 5 点(36%)、チャート 1 点であった。C エリアでは 253 点中珪質頁岩 241 点(95%)、流紋岩 4 点(2%)、チャート 5 点、その他 3 点であった。A・B エリアのホルンフェルスと C エリアの珪質頁岩は、色調などからほぼ同じものと考えられ、各調査を通じてこの石材が多く利用されている。また、A～C エリアを通じて流紋岩が出土していることは、第 2 次調査報告にもあるように、五ヶ瀬川流域との交流の可能性があると言えよう。ただしその割合は、A エリアで流紋岩が約 4 割を占めているのに対し、C エリアではその割合が極めて少ない。

製品は 2 点のみで、ほとんどが剥片・石核であったことから、調査区付近は、石器の使用の場というより、製作の場であったと考えられる。また、旧石器出土数の多い A エリアと C エリアは、出土位置が離れており、出土層位や使用石材の割合も大きく異なっていることから、調査区周辺には、使用石材の

異なる複数の石器の製作場所があり、その製作時期は少なくとも 2 期にわたると推定される。

製品 2 点は、C エリアで出土したチャート製の楔形石器と、調査区南側の S A 11(竪穴建物跡)で出土した頁岩製のナイフ形石器である。第 層で頁岩製の剥片・石核は出土せず、チャート製についても出土数が少ないことから、この 2 点について、調査区内で製作されたものであるかは明らかにすることはできなかったが、こうした器種の石器が調査区内で製作されていた可能性は指摘できる。

縄文時代

1 縄文時代早期

a) 散礫

散礫は 4 群(調査順に A～D 群)に分かれ、主に第 層で検出された。

このうち、A 群は C 群と繋がっており、遺跡中央部の尾根状の微高・平坦地である J 12・13、K 12・13 グリッド周辺に位置し、南北方向約 30 m、東西方向約 25 m の範囲に広がっていることが確認された。この散礫は J 11 グリッド付近では疎になっている。

B 群は A 群から東に 8 m 離れた谷部への落ち込み際に、半径 4 m の範囲で検出されている。

D 群は、調査区西側の尾根状の微高・平坦地である H 11 グリッド周辺に位置し、南北方向約 15 m、東西方向約 10 m の範囲で広がっており、A・C 群とは約 7 m ほど離れている。A・C 群と D 群を連続した一群とみなすと、南北方向約 30 m、東西方向約 40 m のドーナツ状の散礫が見出せる。この散礫群の主体は、A・B 群の散礫構成礫(散礫範囲内集石遺構の礫を含む)の重量が約 2,200 kg、C・D 群約 440 kg であることや、それぞれの礫群の礫の密度の状態から、A 群であると推定される。

b) 集石遺構

集石遺構は合計 36 基が検出された。内訳は掘り込み・配石ありが 15 基、掘り込みあり・配石無しが 11 基、掘り込み無しが 10 基である。

集石遺構 36 基中 30 基は、散礫内または周辺で集中して分布する。散礫 A 群内・周辺では、S I 5・16 第

2次)等20基がある。その中で掘り込み・配石のあるものが11基と多く、直径12m程度のもが多い。散礫D群内・周辺ではS I 8・S I 10(第4次)等8基がある。掘り込み・配石のあるものは2基のみであり、直径0.8m以下の比較的小規模のもが多い。また、散礫B群内では掘り込みが深く、配石が見られる2基(第2次S I 18・19)を確認している。

散礫と関係の薄い6基(第2次S I 1・第4次S I 1等)は調査区北側の斜面地・南側の谷状の緩斜面に散漫に分布する。配石のあるものはなく、比較的規模の小さいものが多い。

このことから、周囲よりやや小高く平坦な土地である調査区中央部が集石遺構の好適地と考えられる。

散礫・集石遺構を構成する礫の大半は砂岩であり、供給源は富高川の河原等と考えられる。また、集石遺構埋土出土の炭化材の樹種同定の結果からは、燃料材としてコナラ類が利用されていたと推定される。

c) 炉穴

炉穴は合計55基が検出された。内訳は、切り合い関係のある炉穴は9群(37基)、単独の炉穴は18基である。炉穴埋土出土の炭化材の樹種同定からは、燃料材にブナ類やクリ類の利用が推定される。

炉穴の形状 炉穴の平面形は概して長楕円形で、規模は長径約2m、短径約1mが多い。S P 4・7(第4次)のように1つの焼土部分からL字状に2方向に延びるもの、S P 19(第2次)のように煙道とみられる部分が扇状に広がるものもある。ブリッジの痕跡とみられる、くびれがあるものが10基(第2次S P 8・21、第4次S P 2等)あり、うち4基(第2次S P 12・19・21、第4次S P 6・7間)では、ブリッジの残存もしくは崩落土が土層断面から確認された。

炉穴の切り合い状況 炉穴の切り合いについては、いくつかのパターンがあり、切り合いの前後関係等がはっきりしているものについて、日高広人氏による分類(日高2003)を参考に、次のように分類した(は作られた順番を示す)

古い炉穴の焼土がある側に、新しい炉穴を構築するもの...2例(第4次S P 12 11 9)

古い炉穴の焼土がない側に、新しい炉穴を構築す

るもの...7例(第2次S P 5 6 7、第4次S P 13 14等)

軸をずらし交差するように新たに炉穴を構築し、古い炉穴の一部を足場にするもの...10例(第2次S P 26 24、第4次S P 10 9等)

古い炉穴の長軸に対して並列するように構築するもの...2例(第2次S P 5 18、S P 23 24)

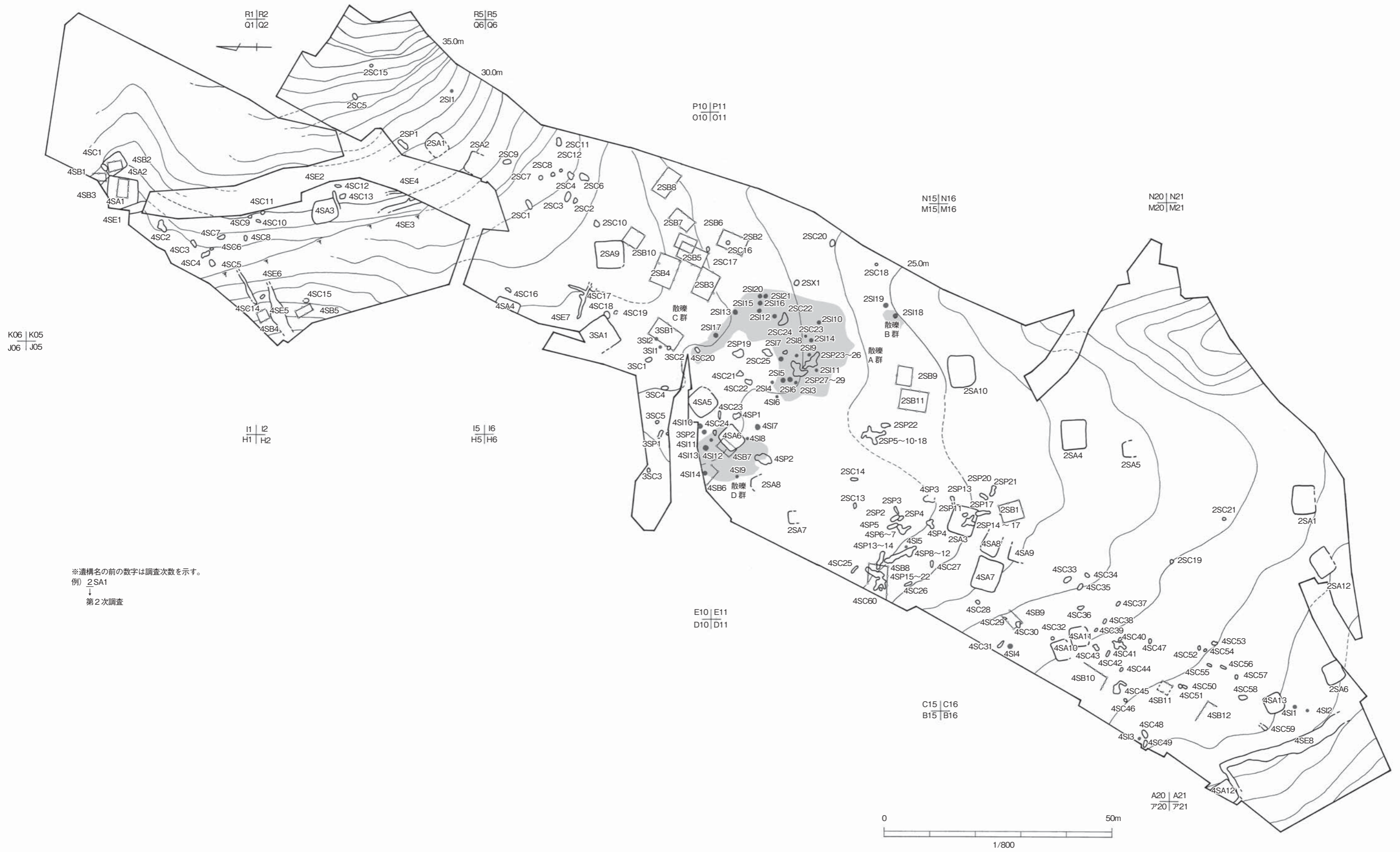
いずれのパターンにおいても、何も無いところに炉穴を新たに作るよりも、古い炉穴をもとにする方が合理的であるため、掘り直しによる切り合いが行われると考えられる。また、とにおいては長軸が並ぶため、片方がもう一方の煙道として機能しやすいと思われる。特に、S P 2(第4次)、S P 6・7(第4次)、S P 8・9(第4次)等は、間にくびれの見られる大小の穴の組み合わせであることから、そうした利用が行われた可能性もあるが、大小両方の穴に焼土面が見られることなどから、独立した炉穴であったとも考えられる。

炉穴の分布状況 炉穴が最も多く検出されたのはE 14～G 17グリッドの南北方向約40m、東西方向約20mの範囲で、S P 15～22(第4次)等、5群(21基)、単独11基の計32基が集中して検出された(群)、この付近は尾根状の微高・平坦地から東へ下る緩斜面へ変わる変換点で、炉穴は6基を除き、等高線に並行に作られている。この範囲内には集石遺構は1基のみしか確認されなかった。散礫A・C・D群付近では、S P 27～29(第2次)等、2群(7基)、単独5基の計12基がやや集中して確認された(群)、平坦地であるこの範囲では、炉穴は切り合いのうちの3基を除き、等高線に直交して作られている。

・ 群間のやや窪地状の平坦地(I 14グリッド付近)に、S P 5～10(第2次)等、1群(7基)と単独1基によるまとまりがある。その他、S P 1(第2次)は北側の斜面地に、S P 30・31(第2次)は調査区南端の平坦地に、それぞれ離れた分布である。

d) 集石遺構と炉穴の関係

炉穴埋土中の炭化材について、放射線炭素年代測定の結果では、北側斜面地のS P 1(第2次)、散礫D区内のS P 2(第4次)、群中のS P 7(第4次)



第90図 全体遺構配置図

とも、約 9,200 年 B P との結果が出たので、炉穴群はかなり近接した時期に存在したと考えられる。

また、集石遺構埋土中の炭化材の放射性炭素年代測定では、散礫 B 群内の 2 基については約 8,200 年 B P、散礫 A 群内の S I 12 (第 2 次)については約 9,300 年 B P との結果が出た。S I 12 は、炉穴とほぼ同時期、S I 18・19 は約 1,000 年ほど後出する。数少ない年代測定結果ではあるが、遺構が近接した時期に営まれたことや、長期間の空間利用が読み取れた。

一方、集石遺構と炉穴の切り合いは S I 5 と S P 9 (第 4 次)のみで、S P 9 の埋設後に S I 5 が構築された前後関係が読み取れる。一方、散礫 A 群内では、炉穴と集石遺構の前後関係を示す切り合いはなく、まるで、炉穴が集石遺構を、もしくは集石遺構が炉穴を避けるような分布のあり方を示す。その点では、ある時期には炉穴と集石遺構は併存していた可能性を指摘できる。

e) 出土遺物

出土土器については、貝殻文が施されるものが多い。中でも、口縁部に 2～3 段の貝殻刺突文 (第 2 次 19・21 等) や貝殻条痕文 (第 4 次 135 等) が施され、内面はナデ調整がなされるタイプの深鉢が多く出土しており、これらは中原式土器に相当すると考えられる。出土量全体のおよそ半分にあたる。

中原式土器の時期は縄文時代早期前半にあたり、放射性炭素年代測定で得られた散礫 A 群内の集石遺構や炉穴の推定構築年代とほぼ対応する。こうしたことから、縄文時代早期前半においては、人々の活動が盛んに行われていたことが想像される。

また、第 1 層から、手向山式土器 (第 4 次 143) 天道ヶ尾 (妙見) 式土器 (第 4 次 144) に相当するものも数少ないが出土している。これらの土器は縄文時代早期後半にあたり、放射性炭化物年代測定で得られた散礫 B 群の集石遺構の推定構築年代とほぼ一致する。縄文時代早期後半においても、人々の営みが続いていたことが想像される。

出土土器については、炉穴内や第 1 層 (縄文時代早期相当) から、打製石鏃や石皿、磨石等、定住的要素を窺わせるものが出土している。

2 縄文時代後～晩期

この時期の遺構は、第 2 次調査で検出された縄文時代後期の土坑 1 基 (S C 20) 石組遺構 1 基 (S X 1) のみである。この 2 基はいずれも調査区東側の谷部付近に位置するため、遺構は調査区外の谷部縁辺に広がる可能性がある。

土器は、調査区東側の第 1・2 次調査区で多く出土している。一方、調査区西側の第 3・4 次調査区では出土数が少なく、そのほとんどが古墳時代の竪穴建物跡の埋土から出土している。また、当時期の遺構はほとんど確認できないことから、人間活動の希薄さが窺える。

縄文時代後期の土器では、三万田式系のものが大半を占める。深鉢 46 (第 2 次) などは頸部が明瞭に屈曲し、上げ底の底部を持つ器形である。全体に口縁部に 1 本ないし数本の沈線を持つものが多く、66 (第 2 次) のように、横沈線の間に波状沈線のあるものも数点出土した。

縄文時代晩期の土器では、黒川式に相当すると考えられるもの (第 2 次 97 等) や無刻目突帯文をもつもの (第 2 次 90 等) が出土した。

弥生時代

1 弥生時代前期末～中期前半の土器

第 4 次調査では、口縁端部やその直下に刻目突帯をもつ甕が少量ながら出土した。いわゆる下城式土器や突帯文土器の系譜を引く「亀の甲」タイプである。

現段階までに、北は延岡市北浦町中野内遺跡、南は都城市大岩田村の前遺跡などを宮崎県内でも広く確認される。これらの大分県沿岸部を中心とする下城式土器と北部九州域を代表する亀の甲タイプといった二系統の甕の存在は、弥生時代前期末～中期前半の土器の一様相として把握可能となりつつある。

板平遺跡のある日向市域 (旧東郷町を含む) では越シ遺跡、鶴野内中水流遺跡や下水流遺跡などで出土している。板平遺跡は、塩見川支流の富田川沿いの狭隘な土地で沖積地よりも内陸側に立地する。同じく日向市下水流遺跡や鶴野内中水流遺跡も耳川支流沿いの自然堤防上といった狭隘な地形に位置する。

弥生時代前期末～中期前半は、弥生文化がこれら

県北部の中山間地帯にも波及していく動きであり、板平遺跡はその過程を示す遺跡と位置付けられる。

2 弥生時代後期

弥生時代の遺構は、第4次調査で検出されたSA3（竪穴建物跡）のみである。この所属時期を建物内出土の弥生土器壺（173）から導くことにする。

胴部は「ソロバン玉」状を呈し、いわゆる、免田式土器の重弧文長頸壺に類似する。しかし、胴部肩部に特徴的な重弧文は認められず、胎土も在地的であるから器形を模倣した土器といえる。この壺は、器形的には西健一郎氏の編年観でいう第2～4a型式や宮崎市中岡遺跡の中岡式に相当するので、弥生時代後期中葉～後葉の時期と考えられる。

このことから、SA3の時期は弥生時代後期と捉えておきたい。そうすると、SA3と第2次調査出土の挟入石包丁（第2次399）や磨製石鏃（第2次400）の存在は、板平遺跡における弥生時代後期の生業活動を意味付ける資料と評価できよう。

古墳時代

1 遺構出土遺物の検討

a) 竪穴建物跡出土の土器

板平遺跡では26軒の竪穴建物跡が検出されたが、古墳時代に属するのは25軒である。その出土土器群は、概ね古墳時代の前期～中期を中心とする時期と考えられる。この土器群から各竪穴建物時期を割り出し、集落の変遷を導くことで総括としたい。

しかし、土器群の特徴は外来的要素（器形や調整技法）の影響を強く受けた甕や庄内・布留式系の高坏及び小型丸底壺といった小型器種を一定量含んでおり、従来の編年的指標とされた在在甕は少ない。

そこで、土器群の時間的位置付けをはかるために、従来提示されてきた先学諸氏による編年案を尊重しつつ、板平遺跡とその周辺地域（延岡・日向）の古墳時代初頭～中期の土器編年（変遷）を改めて概括した（第91～93図）。対象とした資料は、耳川・塩見川・五ヶ瀬川流域の資料を中心に、一部は、宮崎平野部等の資料で補完した。器種は、主要なものに限定した。

古墳時代初頭～中期土器の変遷過程 古墳時代初頭から中期末葉までの土器器の変遷過程を大きく3期（～期）の画期に区分し、各々の小画期を段階として細分した。（なお、以下の本文中で触れる土器の番号は第2次調査分と第3・4次調査分の遺物掲載番号で、第91～93図の挿図番号ではない。）

〔 期の概要 〕

甕の口縁部は「く」の字形で、底部は小さな平底や上げ底状となる。平底タイプは、円盤状や端部が外方に張り出す形態がある。外面をタタキ調整する甕も 期より一般化する。甕の口縁部つけ根のしまりが強く、屈曲するタイプを 期a段階、しまりが緩くなり「く」の字状タイプと立ち上がり気味タイプの口縁部を 期b段階とした。

高坏は 期a段階では石川悦雄氏分類のA・A類から、坏部の口縁部付け根断面が三角形となるタイプに移行する。B1類も出現するようだ。 期b段階では、A類とB類が伴うようである。

期は、石川悦雄氏による弥生土器編年の 期および後続する土器群であり、加飾された細頸壺や高坏、台付の小型壺や広口壺の存在が特色である。装飾高坏は、瀬戸内海沿岸地域の庄内式土器併行期に認められるタイプと類似する。

この庄内式土器を弥生時代終末期とするか、古墳時代初頭に位置づけるか見解が分かれるが、少なくとも、 期の土器群は弥生時代の終わりから古墳時代への移行期と位置付けられる。

期に相当する土器は、包含層出土の土器にわずかに破片が認められるのみである。

〔 期の概要 〕

期a段階の甕は、口縁部付け根の締まりは強いが、 期b段階には緩くなる。 期c段階ではさらに緩くなり、立ち上がり気味の口縁部となって口径と胴部最大径が近似する。 期の甕底部は、 期段階よりも接地面の小さい平底を指向する。

なお、 期a段階には、布留式甕の器形や調整手法（内面のヘラケズリ）を模倣した甕が製作されはじめ、 期c段階まで続くようである。

高坏は、 期a段階になると石川分類のA類は認められなくなる。 期b段階は、脚部がエンタシ

ス状となるB・類と、有稜高坏や有段高坏と呼称される庄内式系及び、坏部底部が水平な布留式系の長脚な高坏が伴う。期c段階は布留式系の高坏が主体となり、今のところ石川分類のB類はこの段階には衰退するようである。

壺は、期と同様に単口縁と複合(二重)口縁タイプがある。単口縁は大きく逆「八」の字に開く。安国寺式系譜の壺は、b段階で二次口縁部と一次口縁部の接合部に突出部をなす形態となる。二次口縁部が直立する壺類は期C段階まで続くようである。

浅鉢類は底部が尖底や丸底気味となり、口縁部端部が外に突出するタイプも認められる。

布留式土器にみられる小型丸底壺(鉢)は期b段階以降に盛行する。期a段階は、その先駆的な小型土器が出現する。

器台はb・c期段階に、布留式系譜のX字形器台や山陰系の鼓形器台、口縁部が短く直立し脚部に三角形の透かしを持つ器台が認められるなどバリエーションが豊かとなる。

段階は、甕の球形胴指向や庄内式・布留式系譜の新たな小型器種の登場と展開に特色づけられる。高坏や小型丸底壺の形態から、各小期は期b段階は久住猛雄氏のB・C期、期c段階はA期と併行関係にあると推定される。期a段階は宮崎県域における布留式土器の本格的な波及時の段階と考えられる。従って期は古墳時代前期の前半(期a・b段階)と後半(期c段階)としておきたい。

期に相当する土器のうち、第2次調査のSA10の甕(155・157・158・160・161)が期a段階にあたる。二重口縁壺(169)はそれに前後する段階であろう。SA9の甕(131・132)は期b段階である。共伴して出土した有段高坏(146)もこの段階としておく。SA1の高坏(104)、SA4の甕(117)、SA6の小型丸底壺(126)は期c段階と考えられる。

第3次調査SA1は全体形の判明する遺物に乏しいが、甕(27)や高坏(29)から期a段階であろう。壺類(35～37)も期に位置付けられる。

第4次調査SA7出土の高坏(265)は期c段階で、内面ヘラケズリ甕(263)も同じ段階となる。

〔期の概要〕

甕の底部は、平底から丸みを帯びた尖底や丸底に変化する。今のところ、口縁部と底部形態により4小期に細分される。期a段階の甕は、口縁部付け根のしまりが強く、底部は丸みを帯びた平底である。後続するb段階は、しまりは弱くなるが、「く」の字形口縁部で底部は尖底となる。なお、口径と胴部最大径が等しいタイプと、胴部最大径が口径を上回るが、期a段階よりは口縁部付け根のしまりが弱いタイプがある。

期c段階になると、口縁部の屈曲が弱まり、底部は期a段階よりも接地面の広い丸みを帯びた平底や丸底を志向する。一方、内湾気味や直立する口縁部を持つも加わる。期d段階になると口縁部の屈曲や締まりは、さらに弱くなって口縁部と胴部との境が不明瞭となる。底部は丸底を基調とし、丸みを帯びた平底の形態もある。

高坏は、脚柱部の長いタイプに加えて短いタイプも加わる。坏部と脚部の接続方法は「凸面付加法」のほかに円錐形粘土塊による「重填法」があり、後者による製作が多くなるようだ。期のc・d段階の器面調整はヘラミガキからナデ主体と変化する。

期a段階は、期c段階より坏部の口縁部付け根の稜は薄くなる。期b段階になると、坏部が深くなる短脚高坏が出現する。長脚・短脚高坏とも脚部は小ぶりなつくりとなり、脚裾径は口径より小さくなる傾向となる。また大型の高坏が認められるのもb段階の特徴である。

期c段階では、坏部の底面は脚柱部側へやや落ち込む形態となり、受部と口縁部との境が不明瞭になる。この坏部底面の形態変化からc段階を古相と新相に細分することができる。また、脚部がスカート状に開く形態がある。c段階には食器類の坏に脚部を接合した古墳時代後期につながる新しいタイプも出現する。

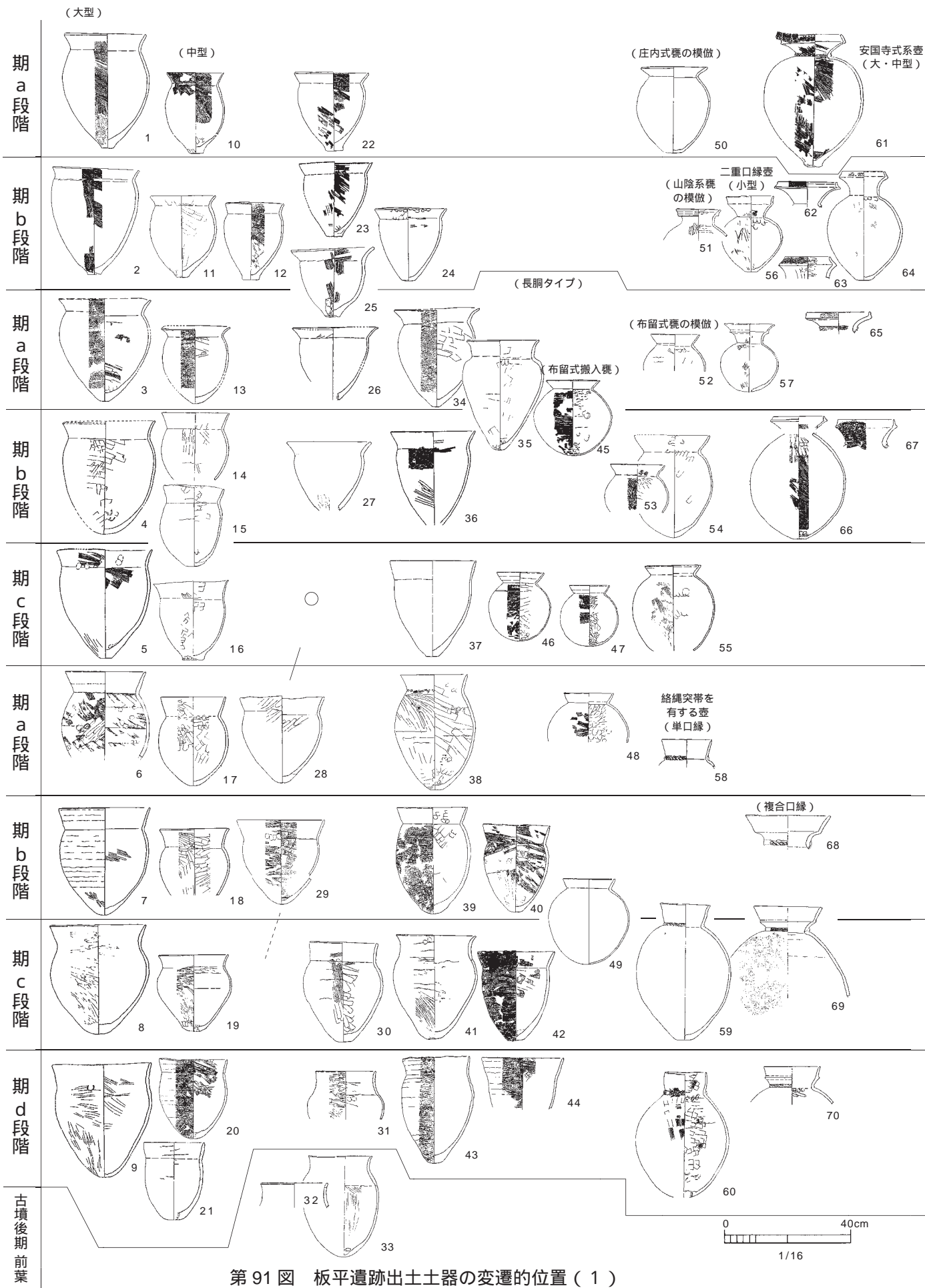
期d段階になると、坏部の矮小化が進む。

壺は、頸部の付け根に絡縄突帯を付す単口縁や複合口縁の壺が認められる。内湾口縁の広口壺も多く出土するようになる。

小型丸底壺は、期a段階で口径と胴部最大径が

甕類

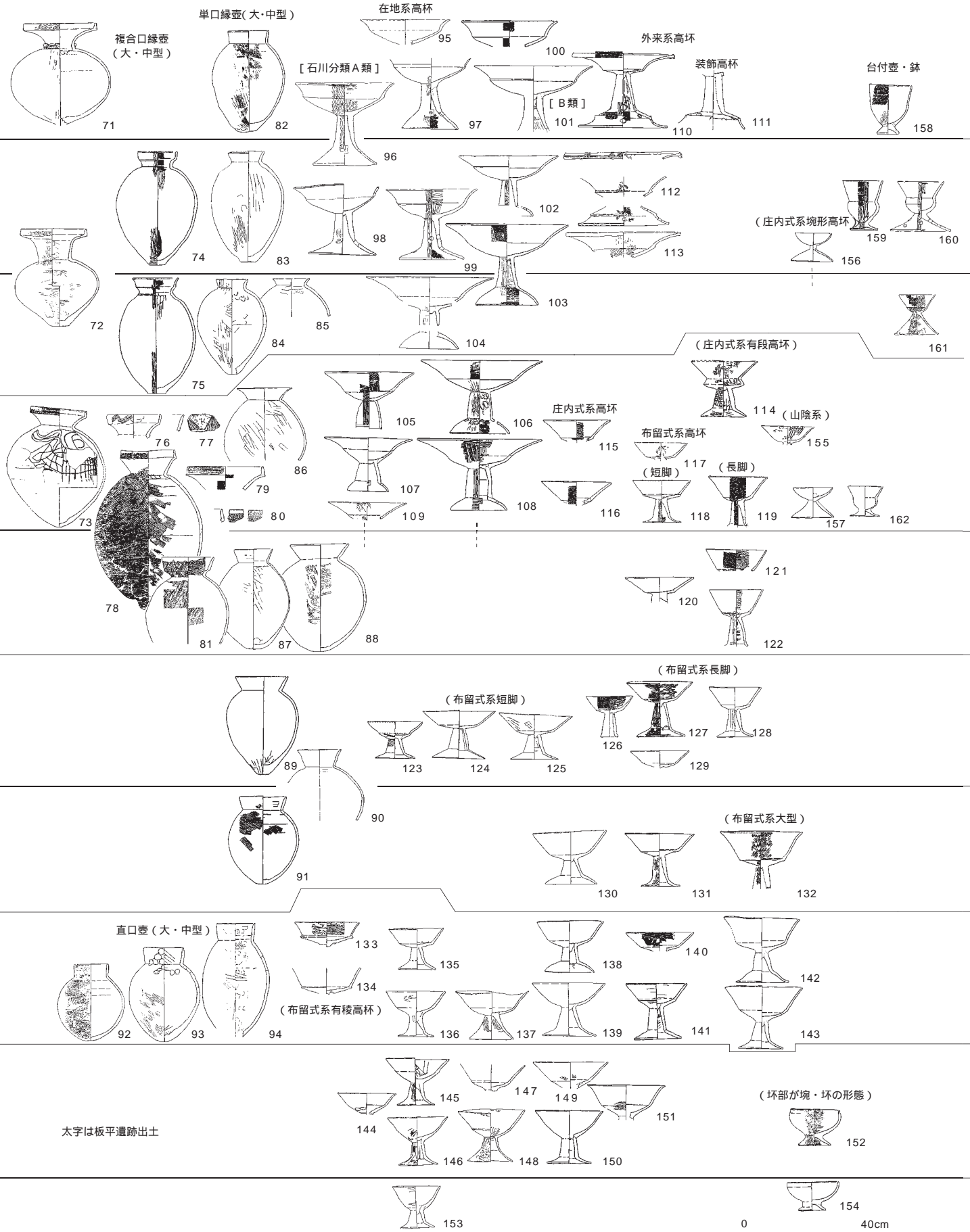
壺類



第 91 図 板平遺跡出土土器の変遷的位置 (1)

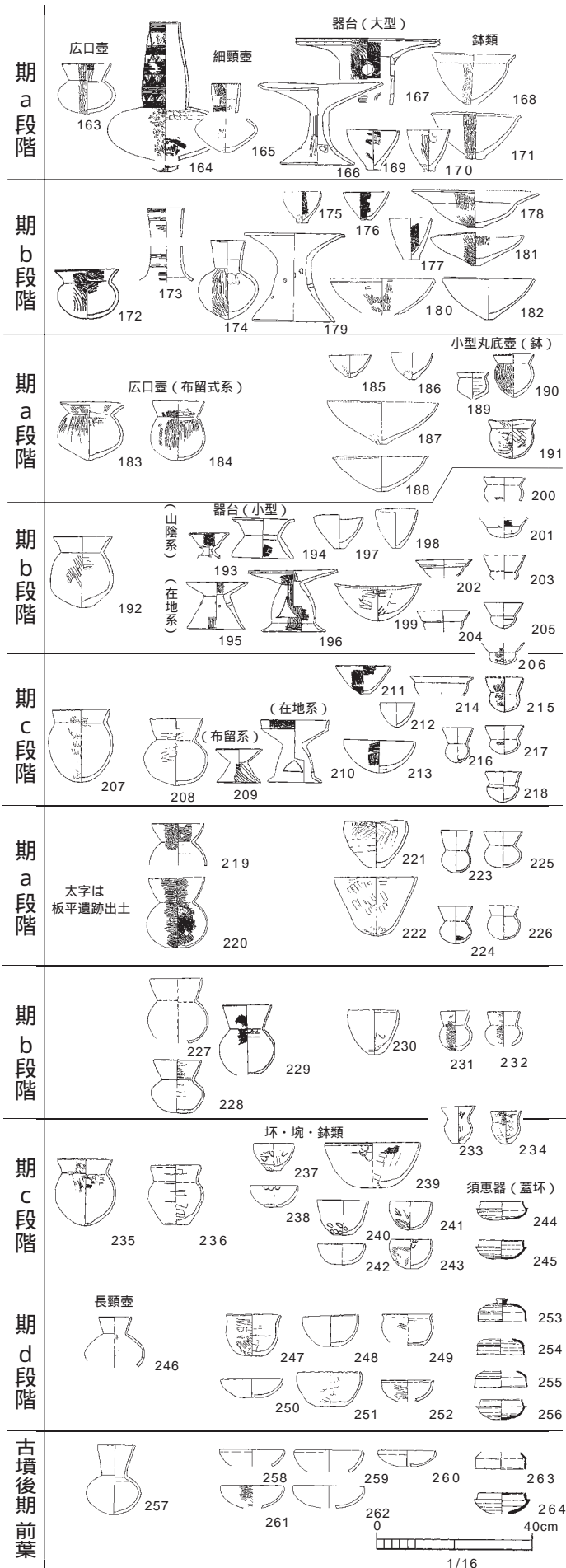
壺類

高杯類



第92図 板平遺跡出土土器の変遷的位置(2)

壺・鉢類



第 93 図 板平遺跡出土土器の変遷的位置 (3)

等しくなり、b 段階では口径が縮小化、c 段階までにはつくり自体が粗雑化・萎縮化し終焉を迎える。

壺や坏は 期 c 段階で出現し、食器構成の主要な器種となる画期である。この画期は集落内に須恵器が持ち込まれる時期と同調している。

段階は、布留式系譜の高坏や小型丸底壺の盛行と衰退期にあたる。甕は精美な器形から弛緩への過程をたどる。小型丸底壺の形態から 期 a 段階は、久住猛雄氏の B・C 期に併行関係がとれる。期 b 段階の土器群には田辺昭三氏の TK73 型式に類似した須恵器と、寺沢薫氏の布留 4 式にあたる小型丸底壺が伴う。期 c 段階は TK216・208 型式に類似する須恵器が伴い、小型丸底壺の終焉期にあたる。期 d 段階は TK23・47 型式に類似する須恵器が伴う。

よって、期は古墳時代中期前葉 (a 段階) 中葉 (b・c 段階) 後葉 (d 段階) に位置付けられよう。

期に相当する土器のうち、第 2 次調査 S A 3 の小型丸底壺 (109) は 期 b 段階に位置付けられる。

第 4 次調査 S A 12 の出土遺物のうち、底部がやや平底気味の甕 (270) や高坏 (273) および小型丸底壺は概ね 期 a 段階と考えられる。S A 1 の甕 (184) は、c 段階に位置付けられる。183 はそれより後続する d 段階である。高坏 (220) は c 段階でも古相、203 は新相に位置付けられる。受部と口縁部の境が突出するタイプ (204) も c 段階であろう。小型丸底壺は b 期 (196) と c 期 (198) の両者がある。従って、S A 1 の出土土器は概ね 期 c 段階となる。また、S A 4 の甕 (227・230) と高坏 (238) は c 段階である。S A 6 の甕 (258) は c 段階となる。S A 11 の甕 (266) は d 段階に位置付けられる。

〔 期に後続する土器 〕 古墳時代後期前半代に位置付けられるのは、第 2 次調査の S A 5 (MT15 型式に併行する須恵器) と S A 11 の坏、第 3 次調査の S A 13 (MT15 型式に併行する須恵器) がある。後期後半代は第 2 次調査 S A 12 出土の須恵器がある。

第 43 表 土師器の色調 / 胎土の分類基準

色 調			胎 土	
分類番号	内容 (標準土色帳)		分類番号	内容 (肉眼による識別 / 面積割合は標準土色帳に準拠)
A a	橙色	5 YR		精選された粘土に赤色粒 (1 ~ 5 mm大) を含む (面積割合 2%程度)。黒・灰色粒 (1 mm以下) はごくわずか
A b	橙色	7.5YR	a	粒径の揃わない黒・赤・灰色粒 (1 ~ 2 mm大) を含む (面積割合 15%程度)
B	明赤褐色	5 YR	b	粒径のそろった黒・灰色粒 (1 mm大) と揃わない赤色粒 (1 ~ 5 mm大) を含む (面積割合 15%程度)
C	明黄褐色	10YR		粒径の揃わない灰・黒色粒 (1 mm以下)・雲母片を含む (面積割合 15%程度)
D	にぶい黄橙色	10YR		シルト質に富み、粒径の揃う黒・白・透明色粒 (1 mm以下) を含む (面積割合 15%程度)
E a	浅黄橙色	7.5YR		粒径の揃う赤・黒・白・透明色粒 (1 mm以下) を含む (面積割合 15%程度)
E b	浅黄橙色	10YR		粒径の揃う白・透明色粒 (1 mm以下) を含む (面積割合 15%程度)
F	灰白色	10YR		ほぼ精良

第 44 表 板平遺跡出土土師器の色調 / 胎土の分類 (1)

小型丸底壺

	Aa	B	C	D	E a	Eb	F
						277 (4次)	
a			235 (2次)	109 (2次) 126 (2次) 206 (2次)			
b				103 (2次)			
						196 (4次) 197 (4次)	198 (4次)
	234 (2次)						
		233 (2次)					
	110 (2次)				207 (2次)		

鉢・坏類

	Aa	B	C	D	E a
		183 (2次)			
a	231 (2次)	230 (2次)	141 (2次)	102 (2次)	
b				112 (2次)	
		212 (4次)		242 (4次) 199 (4次)	
		286 (4次)			
				125 (2次) 142 (2次)	
				232 (2次)	145 (2次)

第 43 ~ 45 表中の番号は、各調査分の遺物掲載番号である。

b) 古墳時代土師器の色調と胎土について

第 1・2 次調査分の報告書 (宮崎県埋蔵文化財センター 2008) では、胎土と調整技法の観点から在地系土器と外来系土器の比較検討を行っている。この項は第 3・4 次調査分を含めた総括としたい。第 44・45 表は、土師器の色調と胎土の相関関係を示したものである。色調と胎土の分類は第 43 表に一覧化した。

甕は D・E・F (色調) - 類 (胎土) が最も個体数が多い。砂粒の大きくて多量に含む 類胎土への選択性が強いことが指摘できる。なお、類胎土中の砂粒は基本土層の第 層に認められる。

壺は A・D・E - 類が主体的である。次いで 類の順となる。絡縄突帯を有する成川式土師器の影響を受けた壺は、類胎土である。

高坏は D・E (色調) - a 類胎土が主体である。甕ほどの砂粒の混入を避けた胎土 (a) が主に選択される。次いで砂粒の細かく揃う (類) 精選された土に赤色砂粒を混入する (類) 胎土が使用されるので精製品を目指したようである。

小型丸底壺は色調的には D 類がやや多い程度で、バラツキが認められる。胎土は、高坏と同様な選択性が読み取れる。

鉢・坏類は、色調的には A b・D 類が主体となる。ただ、胎土の選択性はまとまりを持たない。

このように、器種別の色調と胎土の傾向をみると、色調は D・E 類、胎土は 類の個体が最も多い。この点から板平遺跡における在地系土師器の色調と胎土と位置付けられる。類に含まれる赤色砂粒は 類と共通するので、類胎土の土器は在地系となる。

他方、類は雲母片を含み、類はシルト質、類は 類とは異なる胎土のあり方を示す。今後は、その由来を探索していくことが必要となる。このうち、甕の F - 類 (第 4 次 284) や A a - 類 (第 4 次 263) は、いわゆる布留式甕であり、在地系甕とは一線を画す調整技法であり、胎土も異なるので搬入品である可能性が極めて高い。

さらに、甕 (第 2 次 156) 壺 (第 2 次 223) 高坏 (第 2 次 147) 小型丸底壺 (第 2 次 233) の色調は赤褐色 (B 類) で異彩を放つ存在である。胎土は 類で在地系胎土とは異なる。147 は坏部と脚部の接合部に軸芯痕を有する山陰系の高坏でもある。これら赤色系の土器は、器形や製作技法的な精美さや精緻さを有さないが、特別な意味を持たされた土器もしくは搬入品の可能性を指摘できる。

第45表 板平遺跡出土土師器の色調 / 胎土の分類 (2)

種

	Aa	Ab	B	C	D	E a	Eb	F
a	16ㄩ 2次>21ㄩ 2次> 21ㄩ 2次)	9ㄩ 2次>21ㄩ 2次)		13ㄩ 2次)	12ㄩ 2次/布留式模倣>11ㄩ 2次>115ㄩ 2次>13ㄩ 2次> 15ㄩ 2次>16ㄩ 2次>16ㄩ 2次>16ㄩ 2次>16ㄩ 2次> 20ㄩ 2次>21ㄩ 2次>21ㄩ 2次>21ㄩ 2次>21ㄩ 2次)	21ㄩ 2次)	11ㄩ 2次>13ㄩ 2次>16ㄩ 2次)	20ㄩ 2次)
b	25ㄩ 4次)	5ㄩ 3次)			12ㄩ 2次>13ㄩ 2次>15ㄩ 2次>16ㄩ 2次/布留式模倣> 21ㄩ 2次>5ㄩ 3次>5ㄩ 4次>18ㄩ 4次>18ㄩ 4次> 18ㄩ 4次>22ㄩ 4次>25ㄩ 4次)	16ㄩ 2次>20ㄩ 2次> 25ㄩ 4次>28ㄩ 4次)	15ㄩ 2次>2ㄩ 3次>18ㄩ 4次> 18ㄩ 4次>23ㄩ 4次>23ㄩ 4 >26ㄩ 4次>27ㄩ 4次)	13ㄩ 2次>15ㄩ 2次>16ㄩ 2次> 20ㄩ 2次>18ㄩ 4次>18ㄩ 4次> 23ㄩ 4次>25ㄩ 4次>27ㄩ 4次)
		13ㄩ 2次/布留式模倣> 21ㄩ 2次>22ㄩ 4次>22ㄩ 4次)			22ㄩ 4次>26ㄩ 4次)	23ㄩ 4次)	15ㄩ 2次)	2ㄩ 3次)
	20ㄩ 2次>26ㄩ 4次/ 布留式)		15ㄩ 2次)		20ㄩ 2次)		13ㄩ 2次)	28ㄩ 4次/布留式)
	13ㄩ 2次)							

壺

	Aa	Ab	B	C	D	E a	Eb	F
	22ㄩ 2次)							
a	10ㄩ 2次>17ㄩ 2次> 22ㄩ 2次)	17ㄩ 2次>17ㄩ 2次/成川式系> 17ㄩ 2次>22ㄩ 2次/成川式系> 3ㄩ 3次/成川式系)	14ㄩ 2次/成川式系)	12ㄩ 2次)	10ㄩ 2次>11ㄩ 2次>11ㄩ 2次>12ㄩ 2次>17ㄩ 2次> 22ㄩ 2次>23ㄩ 4次/成川式系>18ㄩ 2次/二重口縁> 22ㄩ 2次/成川式系)	22ㄩ 4次>22ㄩ 2次)	19ㄩ 4次>13ㄩ 2次/複合口縁> 22ㄩ 2次)	3ㄩ 3次>10ㄩ 2次)
b	19ㄩ 4次)				10ㄩ 2次>12ㄩ 2次/複合口縁>22ㄩ 2次)	17ㄩ 2次>17ㄩ 2次)	19ㄩ 4次)	
	26ㄩ 4次/成川式系)	27ㄩ 4次>26ㄩ 4次)			17ㄩ 2次>16ㄩ 2次>3ㄩ 3次>23ㄩ 4次)		3ㄩ 3次>19ㄩ 4次>19ㄩ 4次/ 二重口縁>23ㄩ 4次>30ㄩ 4次)	3ㄩ 3次)
	14ㄩ 2次)	19ㄩ 4次)				3ㄩ 3次)		
	3ㄩ 3次>27ㄩ 4次> 29ㄩ 4次)		22ㄩ 2次)					
				13ㄩ 2次/複合口縁)				
	14ㄩ 2次)							

高杯

	Aa	Ab	B	C	D	E a	Eb	F
						20ㄩ 4次)	20ㄩ 4次>21ㄩ 4次> 21ㄩ 4次)	
a	11ㄩ 2次>18ㄩ 2次> 24ㄩ 2次)	14ㄩ 2次>30ㄩ 4次)	18ㄩ 2次)		18ㄩ 2次>14ㄩ 2次>23ㄩ 2次>23ㄩ 2次)	20ㄩ 4次>27ㄩ 4次)	18ㄩ 2次>18ㄩ 2次>23ㄩ 2次> 23ㄩ 2次>20ㄩ 4次>20ㄩ 4次> 20ㄩ 4次>21ㄩ 4次>24ㄩ 4次> 24ㄩ 4次>26ㄩ 4次>26ㄩ 4次> 27ㄩ 4次)	20ㄩ 4次>21ㄩ 4次>23ㄩ 4次)
b					18ㄩ 2次>20ㄩ 2次)		20ㄩ 4次>23ㄩ 4次)	
					14ㄩ 2次/庄内式系>20ㄩ 4次>26ㄩ 4次)	2ㄩ 3次>30ㄩ 3次> 20ㄩ 4次)		
	20ㄩ 4次)			14ㄩ 2次)		5ㄩ 3次)		
				14ㄩ 2次/山陰系)				
					10ㄩ 2次)			

c) 石器

石器が床面より複数個出土した竪穴建物跡は、複数軒が認められた。第2次SA4(敲石1・石皿1) SA9(敲石1・台石2・石錘1) SA10(敲石3・砥石1・石錘1)と第3次SA1(二次加工剥片3・磨石3・敲石類6・石錘1・台石1) 第4次SA1(砥石1・石皿2) SA4(磨石1・敲石2・台石4・石皿2)等である。また、遺構埋土中からは打製石斧が第4次SA1・4で出土した。

板平遺跡では、古墳時代前期～後期を通じて磨石・敲石・台石・石皿がセット関係をなす。打製石斧や剥片石器は鉄器と補完関係にある利器である。石皿は長くて幅狭な川原石が好まれ、台石の機能も併せ持つ(第2次SA8・12、第3次SA1、第4次SA1・4) 石皿・台石は炉の付近や建物内の隅角部に置かれ、その場所が作業空間となるようだ。

敲石は円形と棒状の二者があり、前者は磨石の転用例(246)が少なくない。後者は中ほどや端部・側面に潰打痕を残す場合(218)があり、間接・直接打撃兼用の使用法が類推される。

石器石材は砂岩が圧倒的に卓越(全体の約84%)し、ついで尾鈴山酸性岩類(11%)やホルンフェルス・頁岩(5%)である。器種による石材選択の差異も認められない。石材の採取地は遺跡近くの富高川や露出した礫層とみたい。

なお、第4次SA1・4・7・12・13や第3次SA1では使用痕のない棒状の砂岩礫が出土した。第4次SA4では北東隅付近でまとまって出土している。法量的には平均値で長165cm、幅7.4cm、厚さ51cmの806.3gで、ほぼ同じ大きさの礫である。

これら古墳時代竪穴建物内に存する棒状礫は、宮崎県下では延岡市吉野第2遺跡A地点1号竪穴建物跡(中期後半)や新富町上園F地区1・9号竪穴建物跡(中期後半) 都城市中尾遺跡1号竪穴建物跡(中期末)などの類例が知られている。

棒状礫の機能として、先学により「編物石」や「錘具」等が指摘されているが、板平遺跡の場合、出土状態等からは判断しえなかった。

2 遺構の位置づけ

a) 古墳時代集落の変遷

さきに、古墳時代初頭(弥生時代終末期を含む)から中期末葉まで土器の変遷過程(～期)を想定し、板平遺跡出土土器群との対応関係を確認した。ここでは個々の建物跡の細別時期(期)を与えて板平遺跡の古墳時代集落の消長・変遷過程をまとめる。

細別時期は、以下のとおりである。第94図は、各期の竪穴建物跡の分布状況を示している。

A期(a・b期:古墳時代前期前葉)

...SA9・10(第2次) SA1(第3次)

B期(c期:前期後葉)

...SA1・4・6(第2次) SA5・7(第4次)

C期(a期:中期前葉)...SA2・12(第4次)

D期(b・c期:中期中葉)

...SA3(第2次) SA1・4・6(第4次)

E期(d期:中期後葉)...SA11(第4次)

F期(後期前葉)

...SA5・11(第2次) SA13(第4次)

G期(後期後葉)...SA12(第2次)

上記以外の竪穴建物跡6軒は、出土土器が細片なため、細別時期が不明である。しかし、その立地状況からA・B・C期に属する竪穴建物跡が含まれるものと考えられる。

集落の範囲は、調査区(路線)の位置から類推しておきたい。調査区は富高川左岸の高位段丘面全体に広がり、ほぼ南北に貫いている。北端は山稜が迫り、東側に谷部、西側は低位段丘面に接する。南端は富高川で分断される(第2図) このことから、調査区は段丘面西縁の一部を残して可住域の多くを表出させたものと考えられる。また、調査区内では古墳時代の掘立柱建物跡は検出されなかったため、竪穴建物主体の集落としておきたい。

集落の形成は、古墳時代前期前葉に始まる(A期) 調査区中央付近に2軒、やや南側に1軒ある。ともに南北に延びる尾根線上に位置する。

次の段階(B期)は、調査区中央部に1軒と南側に2軒、南端と北端付近に1軒ずつ位置する。配置的には尾根線上から西側緩斜面にかけて、A期の住居よりやや西側に列状となり、軒数も増加する。

C期には、調査区南端と北端のSA 2・12（第4次）の2軒が認められる。富高川に向けて下の西斜面に位置する。どちらも調査区西側に位置するため、集落主体は段丘面の西縁に広がる可能性がある。

D期になると竪穴建物跡は、調査区やや西側の緩斜面部上に4軒が列状の分布を示し、B期の分布と同じような傾向であるといえる。この期は集落内鍛冶が行われている（第4次調査のSA 1）

E期はSA 11（第4次）の1軒と少ない。立地から段丘面西縁に集落主体が存在する可能性がある。

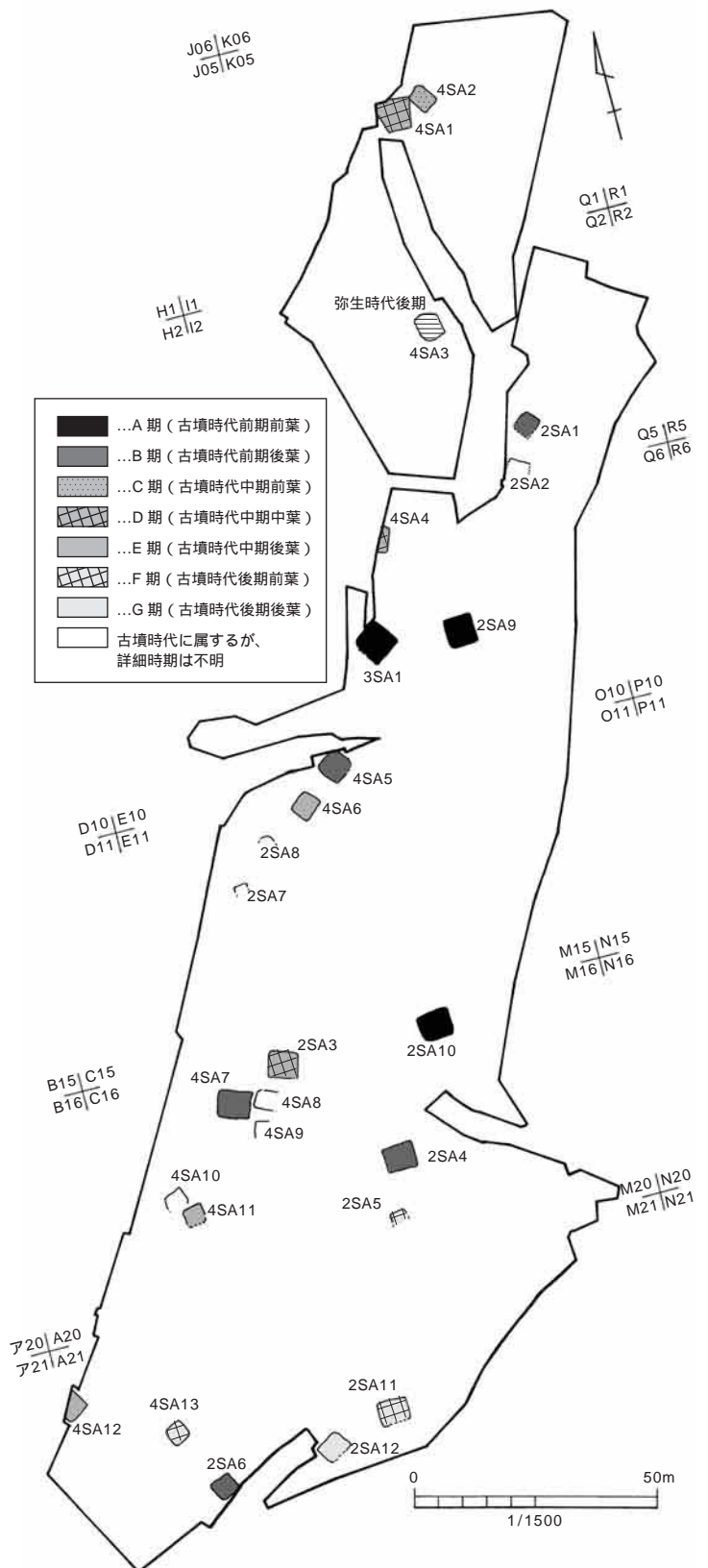
F期の3軒は調査区南側に移動し、D・E期と大きく分布が異なる。この調査区南端より南側は谷部や急崖となるので、集落範囲は狭く限られる。

G期はSA 12（第2次）の1軒と少ない。立地形態はF期と同様だが、集落規模の減少が読み取れる。また、G期より後出する竪穴建物跡や掘立柱建物跡は認められず、包含層出土遺物にも見いだせない。この期で古墳時代集落は終焉すると考えられる。

上記のように、板平遺跡における古墳時代集落の消長は、合計7期に区分できる。集落形成はA期、G期には終焉を迎える。その盛行期はB～D期頃と考えられる。その集落の規模は一時期に3～5軒程度で、拠点集落ではなく小規模な村落像となる。

そうすると、第2次調査出土の車輪石（石製腕飾）は集落規模とは対照的な存在となる。この車輪石は全体の1/4程度に破片化しているが、遺跡内への流入経路を考える上で富高古墳群2号墳の存在は無視し得ない。築造時期は「前方後円墳集成編年」でいう4期後半ないし5期と考えられ、塩見川流域を束ねる初源的な地域首長墳とされている。築造時期は板平遺跡の集落盛行期とほぼ重なる。また、板平遺跡例と類似する車輪石が副葬される時期（熊本県向野田古墳例）とも同調的である。

車輪石の来歴は、第2次調査報告で指摘された遺跡付近に存在していた前期古墳の崩壊によるものという想定に加えて、4世紀後半代における塩見川流域の勢力伸長過程のなかで入手され、それが板平遺跡にも首長層との関係性を示す品に姿を変えて分与（分割）された可能性も指摘しておきたい。



第94図 竪穴建物変遷図

b) 屋内炉に関して

S A 4 (第4次)の東壁付近で河原石の配置された炉が検出された。矩形に配置された上に積み重ねられて石組状となる。台石や石皿も使用されていた。

この石組状の炉は、宮崎県下では延岡市山口遺跡第2地点の3号竪穴建物跡(砂岩製砥石の転用)や宮崎市猿野遺跡4号竪穴建物跡(軽石)例がある。板平遺跡例も合わせて古墳時代中期前～中葉にあたる。また、炉に伴うかは不明だが宮崎市北中遺跡(平成13年度調査)の15号竪穴建物跡(中期後半)より焼土と赤化した軽石が大量に出土した事例もある。

宮崎県下の古墳時代前・中期の炉は、掘り込みのない炉(焼土の広がりのみ)や地床炉(土坑状)となるので、石使用の炉は特異的である。炉の上部は立体的構造となるから、カマドの導入と定着(古墳時代後期)以前の先駆的な炉形態または手工業生産に必要な特化した炉の可能性を指摘しておきたい。

3 古墳時代の鉄生産に関して

a) 第4次調査 S A 1 検出の鍛冶関連遺構と遺物

S A 1の床面には埋土に焼土を含み壁体が焼けた「炉」が検出され、鉄滓や高坏を転用した羽口も出土した。S A 1は古墳時代中期中葉に属する。

「炉」は、焼土や鉄滓の出土状況から「鍛冶炉」と考えられる。その構造は帯状に深く掘り込んだ後に一旦埋め戻し、浅く窪めて炉心(火窪)とする。土坑埋土より出土した鉄滓状の塊は、炉壁付着滓との分析結果を得たので、「鍛冶炉」の裏付けとなった。

また、床面出土の椀形滓は工程別分類上、鍛錬鍛冶滓と推定されたので、鍛冶炉では精錬から鍛錬工程が行われたものと考えられる。

「鍛冶炉」に隣接する「建物内土坑」は、その埋土に炭化物や鉄滓を含むので鍛冶に伴う残渣を廃棄(集積)する施設とみなしたい。

なお、竪穴建物内の鍛冶関連施設には「水溜め」の施設(土坑)が付随するケースが多いが、本例の場合は見出しにくい。ただ、その候補として「炉」の西側端に置かれた土師器甕(184)が挙げられる。

この土師器甕に相対する位置に石皿(221)が置かれていた。この石皿は三面に使用痕が認められる。

上面は敲打痕と全体的に赤みを帯びている。左右側面には潰打痕とこなれた光沢面を有し長軸方向への擦痕があることから、石皿というよりは鉄を対象とした砥石とみなせる。さらに、使用面の凹みや端部には粒状の錆着が点々と確認される。これら肉眼的所見と鍛冶炉との位置関係を積極的に捉えるならば、砥石兼用の「金床石」として評価できる。

上記の検討結果と付属施設と遺物出土状況の関係性から、S A 1内部に鍛冶炉と土師器甕及び金床石が矩形に配置された作業空間の存在を想定できる。

その操業は土師器高坏脚部を転用したフィゴの羽口が5個体確認された点から、単発的ではなく継続的な形態となる。特に、本書の掲載番号208は竪穴建物内で高坏を羽口へと転用する再加工の過程を如実に示す資料である。

また、鍛冶には「金鎚」も必要な道具であるが、そのものは見当たらなかった。おそらく敲石がその機能を果たしていたと考えられるが、S A 1出土の敲石(247・248)にはその使用痕が見出しにくい。

なお第4次調査のS A 4出土の石皿(254)にも点々と粒状の錆着が認められるので、鍛冶関連遺物の可能性が指摘できる。

b) 板平遺跡における古墳時代の鉄(器)生産

鍛冶関連の遺構(鍛冶炉)と遺物(金床石・羽口・鉄滓)が認められたのはS A 1(第4次)のみで生産規模としては小さいが、その立地は集落域外縁部にあたり、かつ谷地形に位置するなど特異な立地である。これは、集落における鍛冶工房的な存在であり、通風のよい地形を選地した結果と考えられる。

また、椀形滓の始発原料は砂鉄で、鍛錬工程に伴う鍛冶滓と判明した。S A 1内から鉄器(製品)そのものや鍛造鉄片は認められなかったが、集落内で鍛錬工程後に引き続いて鉄器(利器)生産が行われた可能性は低いとは考えられない。

なお、原料の入手先と、精錬より前の段階である「製錬」の実態解明は今後の課題となった。

南部九州における古墳時代の鉄(器)生産を窺える遺跡は、現時点でそれほど多くはなく、「鍛冶炉」の具体的構造が把握できる遺跡は数例にとどまる。

類例の一つには、鹿児島県指宿市の尾長谷迫遺跡 1号竪穴建物跡(6世紀代)の「中央ピット」がそれにあたる。「中央ピット」は、浅く掘りくぼめた中心にピットが付設する2段の掘り方をなす。1段目の壁面は焼土化している。高坏脚部を転用したフィゴの羽口14点も出土するなど、炉の構造や羽口のあり方は板平遺跡第4次調査のSA1と共通している。SA1の調査成果は数少ない重要な類例となった。

また、鍛冶関連遺物[敲石・台石(金床石)・鉄滓や羽口など]が出土した遺跡は、管見の限りにて(発掘調査報告書刊行分:2010年現在)鹿児島県指宿市尾長谷迫遺跡(古墳時代後期)・橋牟礼川遺跡(後期)・鹿屋市榎木原遺跡(後期)・高山町永野原遺跡(中期~後期)・宮崎県えびの市内小野遺跡(前~中期)・佐牛野遺跡(後期)・宮崎市北中遺跡(後~終末期)・新富町上菌遺跡F地区(中期)・E地区(後期)などがある。共通的なのはフィゴの羽口は高坏の転用品が多く、敲石を用いる点である。

これらの特徴について、野島永氏によると5~6世紀の畿内地方では、高坏の転用羽口はほとんど認められないが、関東地方と九州地方で多くの事例が存在するという(野島1997)。また、角南総一郎氏は尾長谷迫・永野原遺跡における敲石と台石を鍛冶具とする点を「鉄製鍛冶具を積極的に採用する畿内とは大きく異なる」とし、両遺跡の「5~6世紀段階の鉄器生産の様相は(中略)弥生時代的鉄器生産形態」と解釈されている(角南2000)。

板平遺跡の鉄(器)生産のあり方は、南部九州の他の遺跡と同様に、高坏の転用羽口を用いる列島弧の周縁部的な様相と石器を鍛冶具とする弥生時代的様相の脈絡のなかに位置付けられる。

しかしながら、先進地的生産のあり方ではないにせよ、古墳時代の一般集落における自家生産・消費的様態を、板平遺跡においても読み取ることができた。

4 植物質食料・建築材と古環境

板平遺跡では、竪穴建物跡の床面や炉より土を採取してフローテーション作業を行い、析出した炭化種実の同定を進めた。その結果は本書と第2次調査報告(宮崎県埋文センター2008)に掲載している。

食用となる種実は、ツブラジイ(第2次SA4)・コナラ属(第2次SA9)・イネ(第2次SA6・10、第4次SA4)がある。タデ属やヒユ属、カタバミ属とカラスザンショウなども検出されている。タデ属は集落や畑地及びその縁辺に生育する人里植物ないし耕地雑草とされるから、集落の付近には耕地(イネ)が広がる環境が復元される。あわせてツブラジイといったドングリ類も食用された可能性が高い。

SA1(第4次)からは床面や埋土下層で炭化材がまとまって検出された。埋土中には焼土も含むので「焼失住居」の一種とみなせる。

この炭化材の一部(8点)のうち、ツブラジイ(7点)とクリ(1点)との分析結果が得られている。検出状況から判断すると、SA1の場合、屋根材(垂木)にはツブラジイが主に使用されたようである。ただし、耐朽性・保存性の低い樹種である。また、SA1(第3次)よりクリ近似種が認められている。

燃料材としては、SA10(第2次)ミズキ属の可能性のあるものやSA11(第4次)のサカキがある。カラスザンショウやヒユ属、タデ属とカタバミ属といった木本・草本類も燃料材とされた可能性がある。ツブラジイやサカキは照葉樹林を構成する主要な高木であり、クリは落葉高木で乾燥した台地や丘陵地を好む二次林性であるという。カラスザンショウは温暖な沿岸部の森林要素で二次林種とされる。

建築材や燃料材を遺跡周辺より獲得したとするならば、当時の遺跡周辺は照葉樹林帯に囲まれた環境となる。その一部は二次林(里山)や耕地といった人為による環境も造りだされていたようである。

古代~近世

掘立柱建物跡を計24棟把握できた。その内訳は、2間×1間が9棟、3間×1間が8棟、3間×2間が5棟、2間×2間が2棟である。身舎面積別の内訳は、10㎡未満が9棟、10㎡~20㎡が8棟、20㎡~30㎡が6棟、30㎡以上が1棟である。

中世の掘立柱建物跡 最も多くの建物跡が確認されたのはM9・M10グリッド付近で、SB3・4(第2次)・SB1(第3次)など9棟が集中している。このうち6棟が身舎面積15~25㎡であり、3間×2

間または3間×1間の間取りのものが多く、第2次調査の考察で示されたように、中世の平均的農家の建物跡の可能性が高い。この範囲は遺跡中央部の尾根状の平坦地であり、集落の立地条件を満たしている。また、身舎面積12～15m²の比較的小規模の建物も含まれており、住居以外の機能を負った建物も併設されていたとも考えられる。

この範囲にはSB5・6(第2次)の切り合い関係があり、建て替えとみなされる。また、建物の向きにより、SB7・8・10(第2次)・SB1(第3次)とSB2～6(第2次)と、掘立柱建物群を大きく2グループに区分できる。これらは、複数の世帯や数世代による村落経営の反映と考えられる。

他に、調査区南側の尾根状の平坦地に、SB1・9・11(第2次)の3棟が、調査区東側の平坦地にSB6・7(第4次)の2棟がそれぞれ位置する。やや規模が小さいものもあるものの、立地等から住居として利用されたと考えられる。SB9・11(第2次)とSB6・7(第4次)は隣接し、建物の向きが一致するため、それぞれ併存した建物であると思われる。

中世の板平遺跡では、調査区中央部東側の尾根状の平坦地が日常生活の中心地であったといえよう。

近世の掘立柱建物跡 北側の傾斜地にSB1～5(第4次)の5棟、西側の平坦地～緩い傾斜地にSB8～12(第4次)の5棟が認められる。このうちSB8は身舎面積28m²とやや大きく、住居として利用されたと考えられる。また、SB8・9は近世後半の磁器片が複数出土しており、この時期以降の建物であると考えられる。

この建物群の特徴は、SB8を除き身舎面積が13m²未満と小規模で、柱間距離も短いことである。機能的には、農耕用等の小屋としての利用が想定される。SB1・2、SB4・5はそれぞれ、ほぼ同じ等高線上で隣接し、建物の向きが一致するため、同一時期の建物と思われる。SB9～12は10～20mの間隔で等高線に直交して列状に並んでおり、このうちSB10～12は建物の向きがほぼ一致する。

出土遺物 古代～中世の土師器、中世～近世の陶磁器・銭貨、近世のキセル等が出土した。特に中世については第2次調査区(調査区東側)を中心に、

輸入陶磁器や青磁、宋・明銭等が出土している。これは中世とした掘立柱建物跡の分布等とも一致する。

これらの遺物は、中世の平均的な農家といえども、中世の物資や貨幣の流通ルートとの関係性を示すものと解釈される。天然の良港である美々津・細島港にほど近い立地条件も影響しているのであろう。

陥し穴状遺構について

陥し穴状遺構は合計29基確認した(第95図)

縄文時代早期の陥し穴状遺構 斜面地から緩やかな勾配に変わる変換点付近であるN7グリッド付近で10基(第2次SC1～4、SC6～11)による群となる求心的な配置である。埋土にアカホヤ火山灰土が含まれず、貝殻条痕文土器が出土すること、谷部の埋没土から縄文時代のものと思われる石鏃等の狩猟具が出土していることから、縄文時代早期の遺構である可能性が高い。

東へ下る緩い傾斜地であるH9～K9グリッドで、SC1・3～5(第3次)SC19(第4次)が等高線に直交して弓状に並ぶあり方が認められた。遺構の時期を確認できる遺物の出土はないが、埋土にアカホヤ火山灰は含まれず、炉穴の埋土に近い土質を示すことから、縄文時代早期の遺構の可能性が高い。

また、SC5(第2次)は、調査区北側の急な傾斜地で、他の陥し穴状遺構とは離れて検出された。SC51(第4次)は、南側の緩い傾斜地で検出され、SC50(埋土にアカホヤ火山灰と古墳時代土師器を含む)に切られている。この2基についても、埋土の観点から、縄文時代早期の遺構の可能性が高い。

アカホヤ火山灰降灰後の陥し穴状遺構 SC2(第4次)はSC5(第2次)と同様に、調査区北側に位置する。SC2は長径28m、短径15mと最大の陥し穴状遺構であり、SC1(第2次)と似た底面の両端に掘り込みを持つ形状で、大型動物を捕らえる目的のもと考えられる。遺物の出土はないが、埋土にアカホヤ火山灰が含まれるため、少なくともアカホヤ火山灰降灰後の遺構であると考えられる。

その他、第4次調査では、西側の平坦地から南側の緩い傾斜地にかけて11基の陥し穴状遺構が検出された。これらは、平面形態が隅丸長方形または楕円



第 95 図 土坑配置図

形で、うち9基に床面に杭痕とみられる小穴がみられる。SC 23・24、SC 25～27、SC 31・36・37、及びSC 50・56はお互いに形状が類似し、10mほどの距離で同一の等高線上に並ぶことも共通するので、各々の遺構は関係性を有し、且つ同時性が高いと考えられる。また、埋土にアカホヤ火山灰が含むものが5基(SC 23・36・37・50・56)、古墳時代の土師器片が出土したものが5基(SC 16・22・23・27・50)ある。遺構の時期は、少なくとも3基(SC 31・36・37)はアカホヤ火山灰降灰以降、8基(SC 16・22・23・25～27・50・56)は古墳時代以降の遺構であると推定される。このように立地や形態・配置の共通性から、この11基は古墳時代集落廃絶後の遺構である可能性が高い。

なお、今次までの調査では、底面に杭痕とみられる小穴の有無の他、平面・底面の形状や掘り込みの有無、断面形態や深さなどについて検討し、陥し穴状遺構であるかどうかを判断してきた。しかし、検出された遺構は既に上部を削平される場合が多いことを考慮すると、「その他の土坑」として報告した土坑には、陥し穴状遺構が含まれている可能性がある。

板平遺跡では4次にわたる発掘調査の結果、旧石器時代から近世にかけての遺構や遺物が確認され、本書では調査報告を記載し、その成果を総括した。

後期旧石器の出土に始まり、縄文時代早期の集石遺構や炉穴の検出、弥生時代後期の免田式系土器や古墳時代の集落跡・鍛冶炉の存在は塩見川系流域を含めて、日向市域の重要な成果といえよう。第2次調査出土の車輪石は県内で唯一であり特筆される。

今後、周辺地域での発掘調査や研究が進められることにより、各時代に暮らした人々の実相や交流等がさらに明らかになることを期待したい。

参考文献

- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
宮崎県総合博物館 1983「六野原古墳群」『宮崎県総合博物館収蔵資料目録』考古・歴史編
宮崎県教育委員会 1983「東平下1号円形周溝墓」『宮崎県文化財調査報告書』第29集
宮崎市教育委員会 1984「中岡遺跡」『宮崎市遺跡等詳細分布

- 調査報告書』宮崎市教育委員会
宮崎県教育委員会 1985「熊野原遺跡(C地区)」『宮崎学園都市遺跡群発掘調査報告書』第2集
川南町教育委員会 1986「上ノ原遺跡」『川南町文化財調査報告書』4
寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
指宿市教育委員会 1986「尾長谷遺跡」『指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書』第7集
東郷町教育委員会 1987「赤松遺跡・下水流遺跡」『東郷町文化財調査報告書』第1集
宮崎県教育委員会 1988「陣ノ内遺跡」「前原南遺跡」「前原北遺跡」『宮崎学園都市遺跡群発掘調査報告書』第4集
石川悦雄 1989「弥生時代後期後半から古墳時代の土器編年にむけて」『宮崎県総合博物館研究紀要』第15輯
都農町教育委員会 1990「新別府下原遺跡」『都農町文化財調査報告書』第3集
高鍋町教育委員会 1991「大戸ノ口第2遺跡」『高鍋町文化財調査報告書』第5集
東郷町教育委員会 1991「樋田遺跡」『県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
延岡市教育委員会 1991「中尾原遺跡」『延岡市文化財調査報告書』第6集
米田敏幸 1991「土師器の編年近畿」『古墳時代の研究』6
雄山閣
新富町教育委員会 1991「八幡上・銀代ヶ迫遺跡」『新富町文化財調査報告書』第13集
正岡睦夫ら編 1992『弥生土器の様式と編年』木耳社
西都市教育委員会 1992「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集
日向市教育委員会 1994「百町原地区遺跡」『県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
新富町教育委員会 1995「上園遺跡F地区」『新富町文化財調査報告書』第18集
吉本正典 1996「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察 - 須恵器出現以前の資料を中心として -」『宮崎考古』第14号
石川悦雄 1996「宮崎県の後期土器」『日本土器事典』雄山閣
宮崎市教育委員会 1996「猿野遺跡・萩崎第2遺跡」『市道下北方通線改良工事に伴う発掘調査報告書』
新富町教育委員会 1996「上園遺跡A・B・C地区()E地区

- () 『新富町文化財調査報告書』第 19 集
- 野島永 1997 「弥生・古墳時代の鉄器生産の様相」『たたら研究』38 たたら研究会
- 北浦町教育委員会 1997 「中野内遺跡」『北浦町文化財発掘調査報告書』第 1 集
- 西健一郎 1997 「重弧文長頸壺」『弥生土器』雄山閣出版
- 久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』第 19 号
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999 「鶴野内中水流遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 16 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999 「上の原第 3 遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 25 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2000 「上の原第 1 遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 25 集
- えびの市教育委員会 2000 「内小野遺跡」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第 24 集、「佐牛野遺跡」『同』第 27 集
- 梅木謙一ら編 2000 『弥生土器の様式と編年』木耳社
- 角南総一郎 2000 (. 小結) 「永野原遺跡」『高山町埋蔵文化財調査報告書』第 7 集高山町教育委員会
- 宮崎市教育委員会 2002 「江田原第 3 遺跡」『宮崎市文化財調査報告書』第 50 集、「北中遺跡」『同』第 51 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002 「別府原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 61 集
- 宮崎市教育委員会 2003 「史跡生目古墳群・保存整備事業発掘概要報告書」- 宮崎市文化財調査報告書第 54 集
- 日高広人 2003 「宮崎県別府原遺跡の炉穴について」『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』九州縄文研究会
- 中原一成 2003 「2 炉穴(連結土坑)」『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』九州縄文研究会
- 東郷町教育委員会 2003 「上野原遺跡」『東郷町文化財調査報告書』第 6 集
- 新富町教育委員会 2004 「祇園原遺跡・春日遺跡」『新富町文化財調査報告書』第 39 集
- 松永幸寿 2004 「日向における古式土師器の成立と展開 - 宮崎平野部を中心として - 」『西南四国 - 九州間の交流に関する考古学的研究』平成 14 年度 ~ 15 年度科学研究費補助金
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005 「山口遺跡第 2 地点」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 99 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006 「西ノ別府遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 124 集
- (財)大阪府文化財センター編 2006 『古式土師器の年代学』
- 久住猛雄 2006 「土師器からみた前期古墳の編年」『前期古墳の再検討』第 9 回九州前方後円墳研究会大分大会発表要旨
- 宮崎市教育委員会 2006 「史跡生目古墳群 - 保存整備事業発掘概要報告書 - 」宮崎市文化財調査報告書第 61 集
- 坪根伸也 2007 (第 2 節下郡遺跡出土の弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器について) 「下郡遺跡群」『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 76 集大分市教育委員会
- 大手前大学史学研究所 2007 「弥生土器集成と編年」『大手前大学史学研究所研究報告』第 5 号
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「登り口第 2 遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 141 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「国光原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 149 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「赤坂遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 151 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「湯牟田遺跡(二次調査)」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 152 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「吉野第 2 遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 155 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 「尾立第 2 遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 169 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 「野首第 2 遺跡」第二分冊『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 172 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008 「板平遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 176 集
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008 「上水流遺跡 2」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 121 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2009 「黒仁田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 181 集
- 吉本正典 2009 「西都原古墳群墳丘上出土土師器の検討」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第 5 号
- 第 35 回九州古墳時代研究会実行委員会 2009 「宮崎北部の古墳と古墳群」『第 35 回九州古墳時代研究会(宮崎県大会)資料』
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2010 「中野内遺跡」『森ノ上遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 189 集
- 杉井健 2010 「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』第 13 回九州前方後円墳研究会大分大会発表要旨



1号集石遺構検出状況



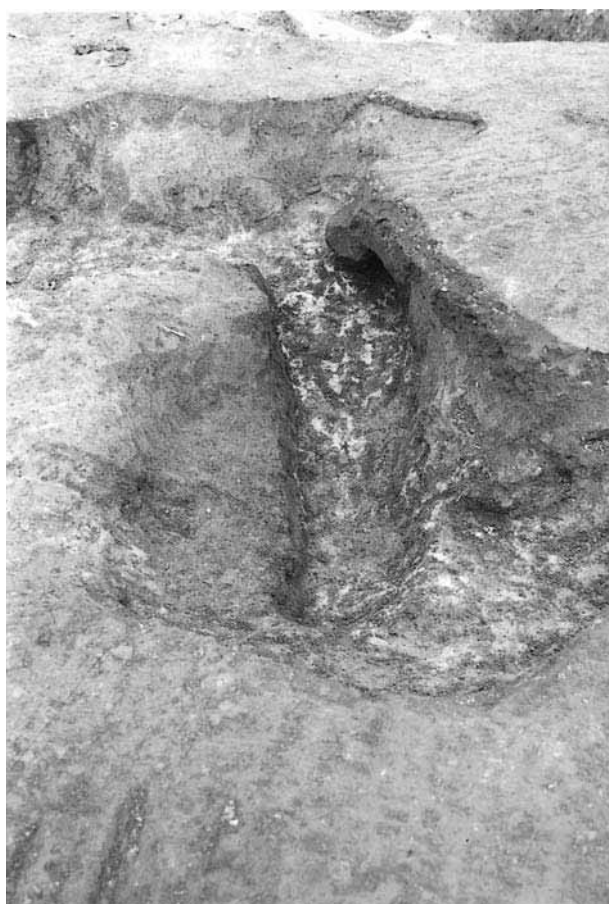
2号集石遺構検出状況



散礫検出状況



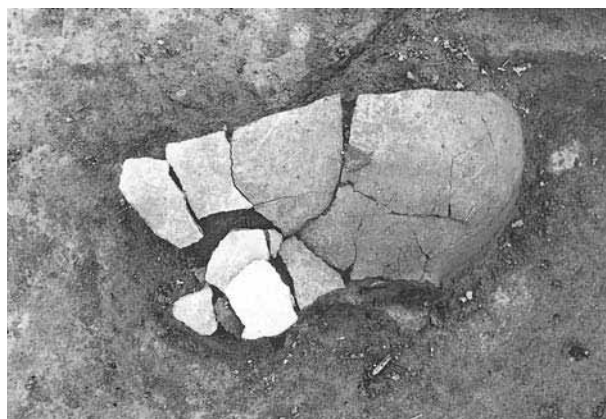
2号陥し穴状遺構完掘状況



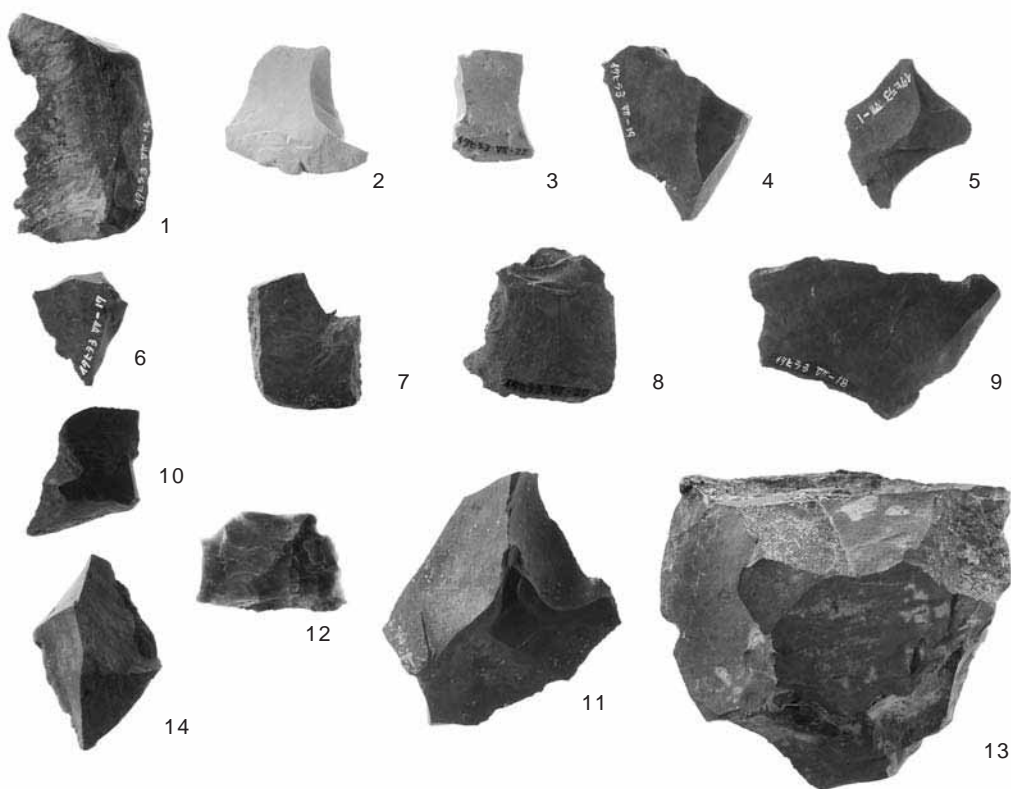
1号炉穴完掘状況



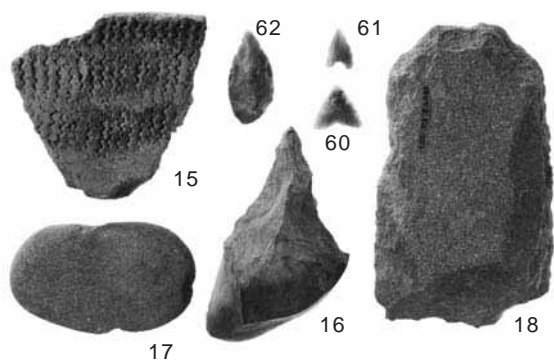
1号竪穴建物跡完掘状況



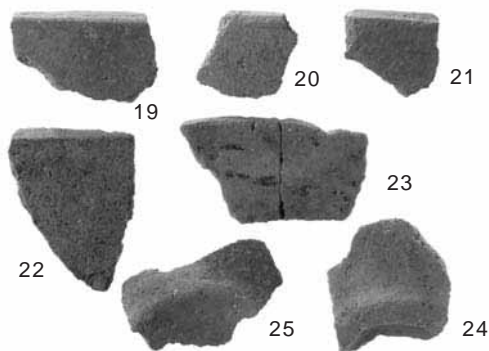
1号竪穴建物跡遺物出土状況



旧石器時代石器



縄文時代早期遺物



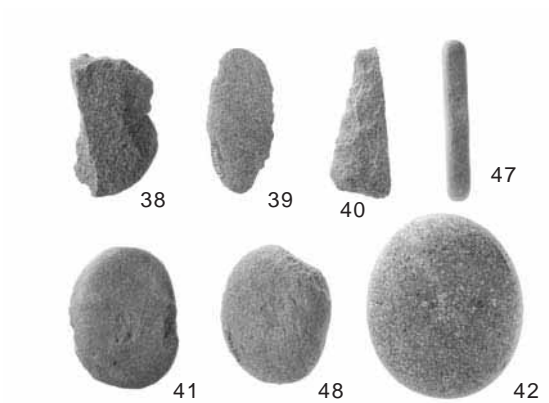
縄文時代後期土器



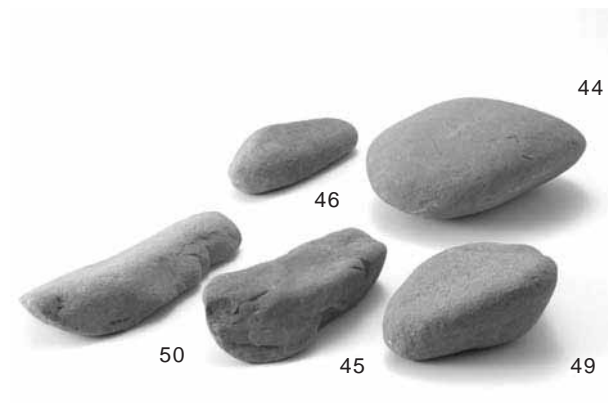
1号竪穴建物跡出土土器(1)



1号竪穴建物跡出土土器(2)



1号竖穴建物跡出土石器(1)



1号竖穴建物跡出土石器(2)



参考資料

参考資料

1号竖穴建物跡出土石器(3)



51

1号竖穴建物跡出土石器(4)



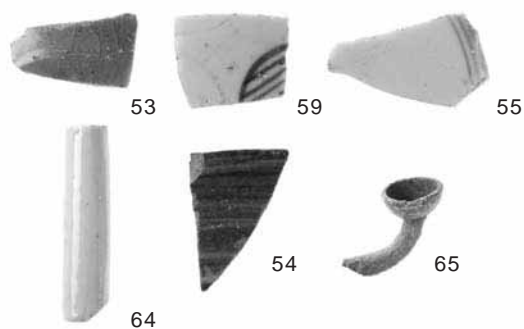
57

古墳時代土器(1)



56

古墳時代土器(2)



中世・近世遺物



1号集石遺構検出状況



3号集石遺構検出状況



4号集石遺構検出状況



6号集石遺構検出状況



8号集石遺構検出状況



8号集石遺構半截状況



10号集石遺構検出状況



11号集石遺構検出状況



12・13号集石遺構検出状況



14号集石遺構検出状況



1号炉穴完掘状況



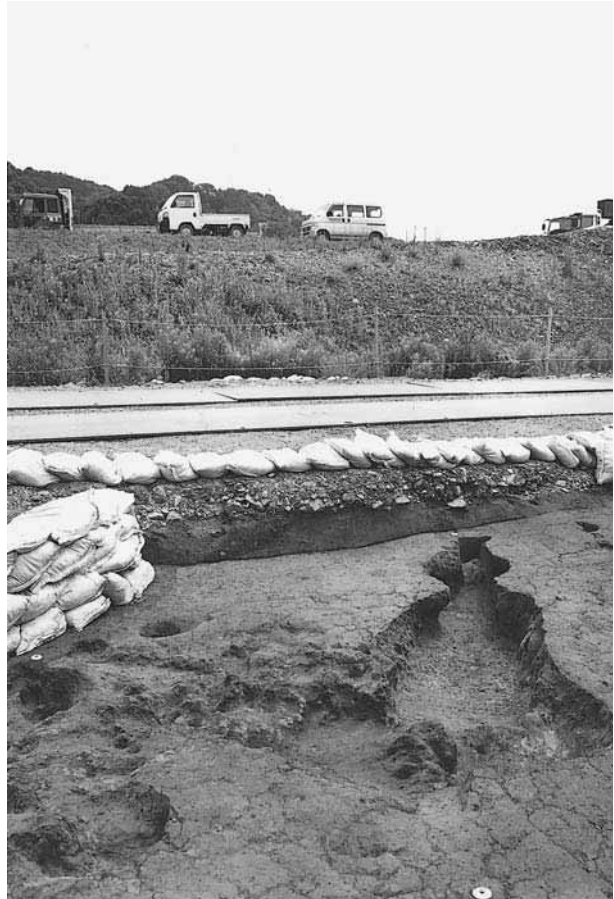
2号炉穴完掘状況



F - 2区炉穴群(1)



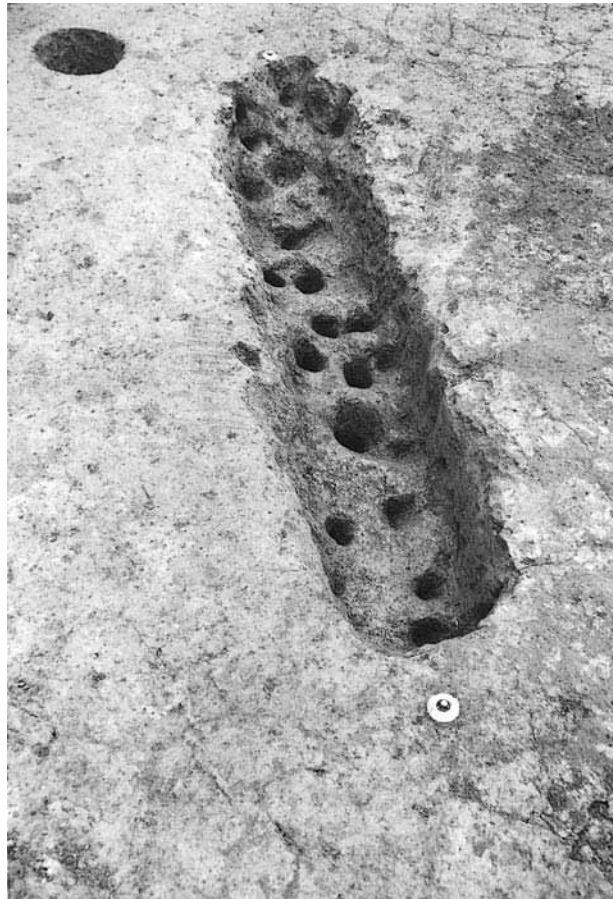
F - 2 区炉穴群 (2)



6・7号炉穴完掘状況



8 ~ 10 号炉穴完掘状況



25 号陥し穴状遺構完掘状況



27号陥し穴状遺構完掘状況



31号陥し穴状遺構完掘状況



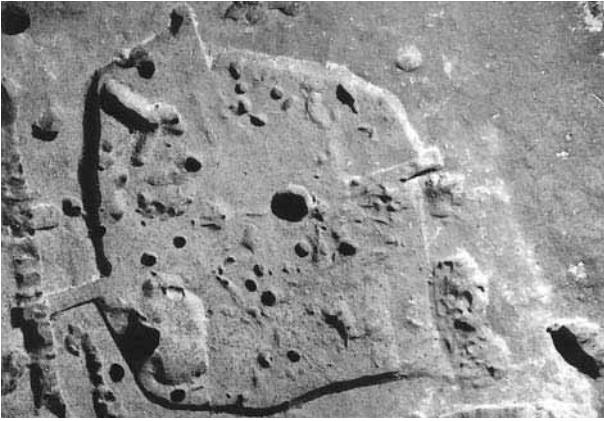
27号陥し穴状遺構半截状況



60号土坑遺物出土状況



36号陥し穴状遺構完掘状況



3号竖穴建物跡完掘状況



1号竖穴建物跡遺物出土状況(1)



1号竖穴建物跡遺物出土状況(2)



1号竖穴建物跡炭化材出土状況



1号竖穴建物跡貼床下状況



2号竖穴建物跡完掘状況



4号竖穴建物跡遺物出土状況



5号竖穴建物跡完掘状況



6号竪穴建物跡焼土検出状況



7号竪穴建物跡完掘状況



10号竪穴建物跡完掘状況



11号竪穴建物跡完掘状況



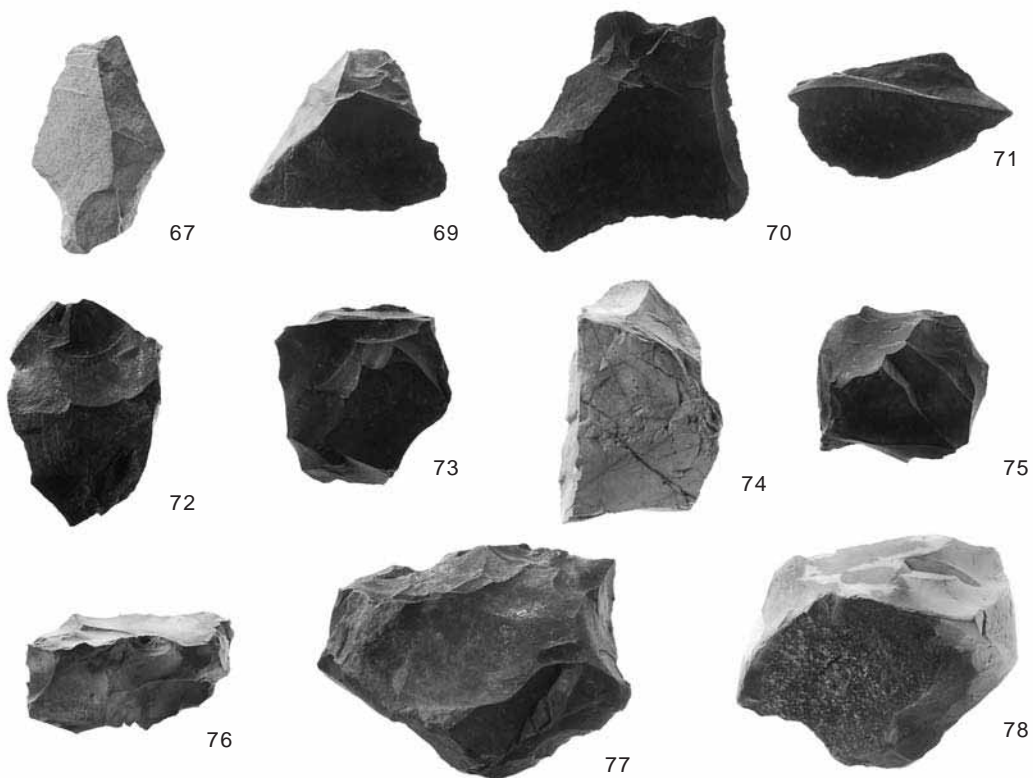
12号竪穴建物跡完掘状況



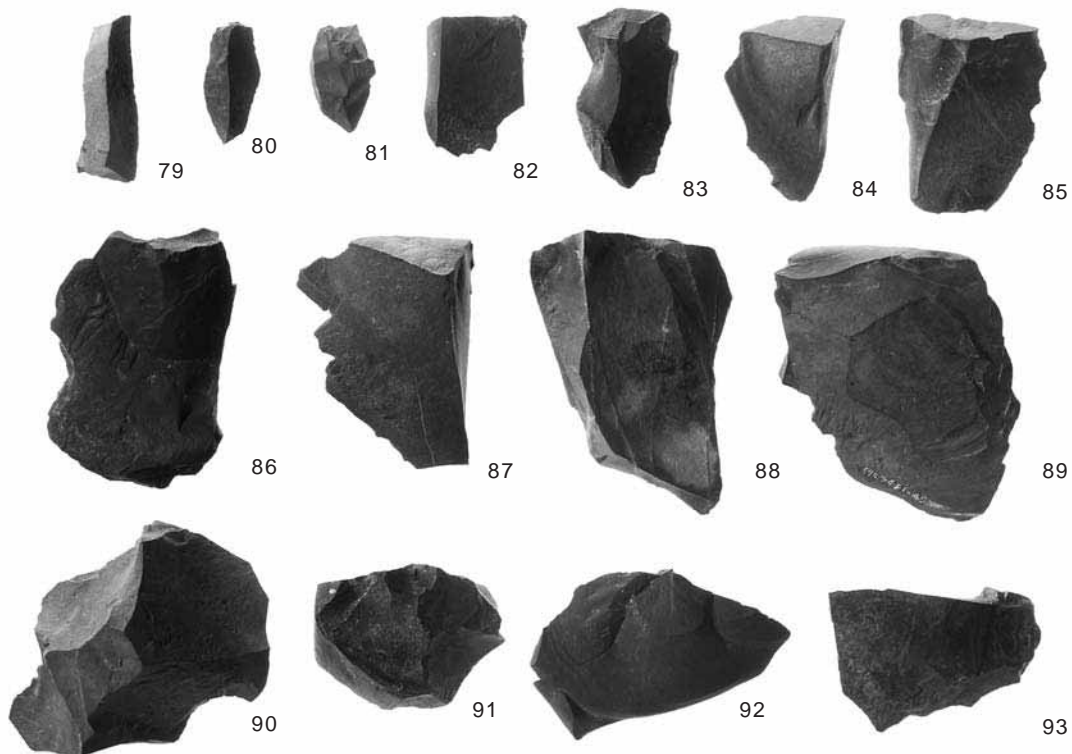
13号竪穴建物跡完掘状況



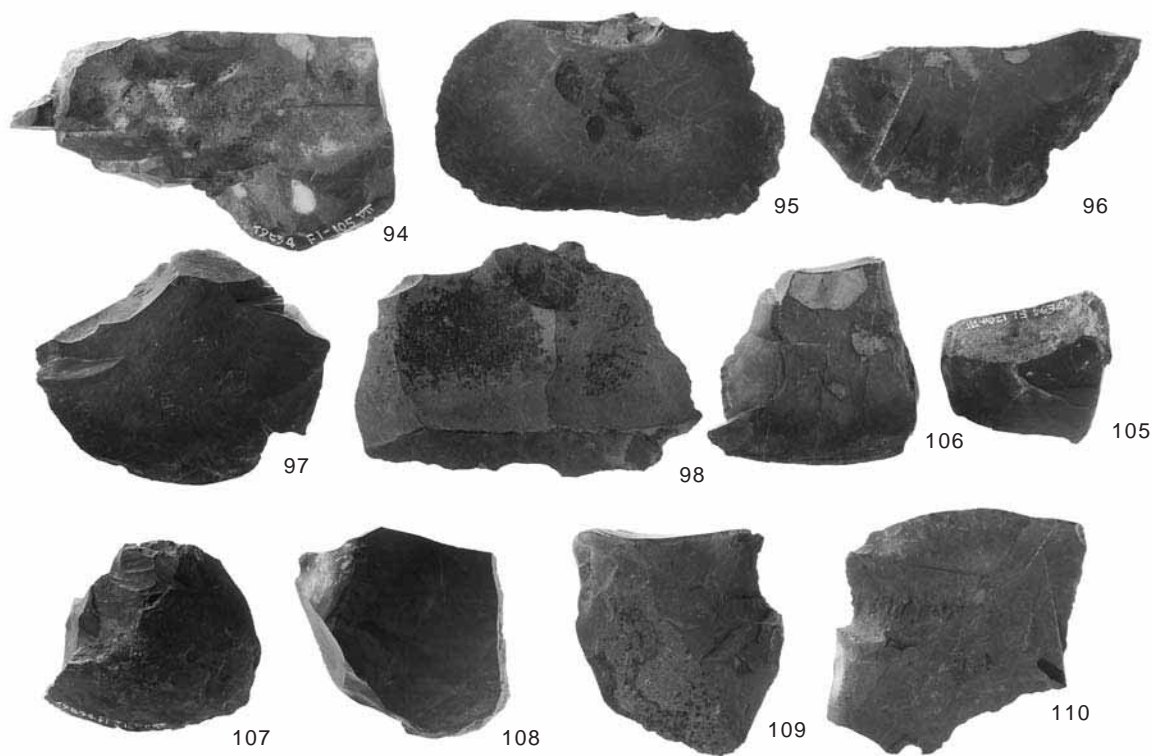
F - 1区全景



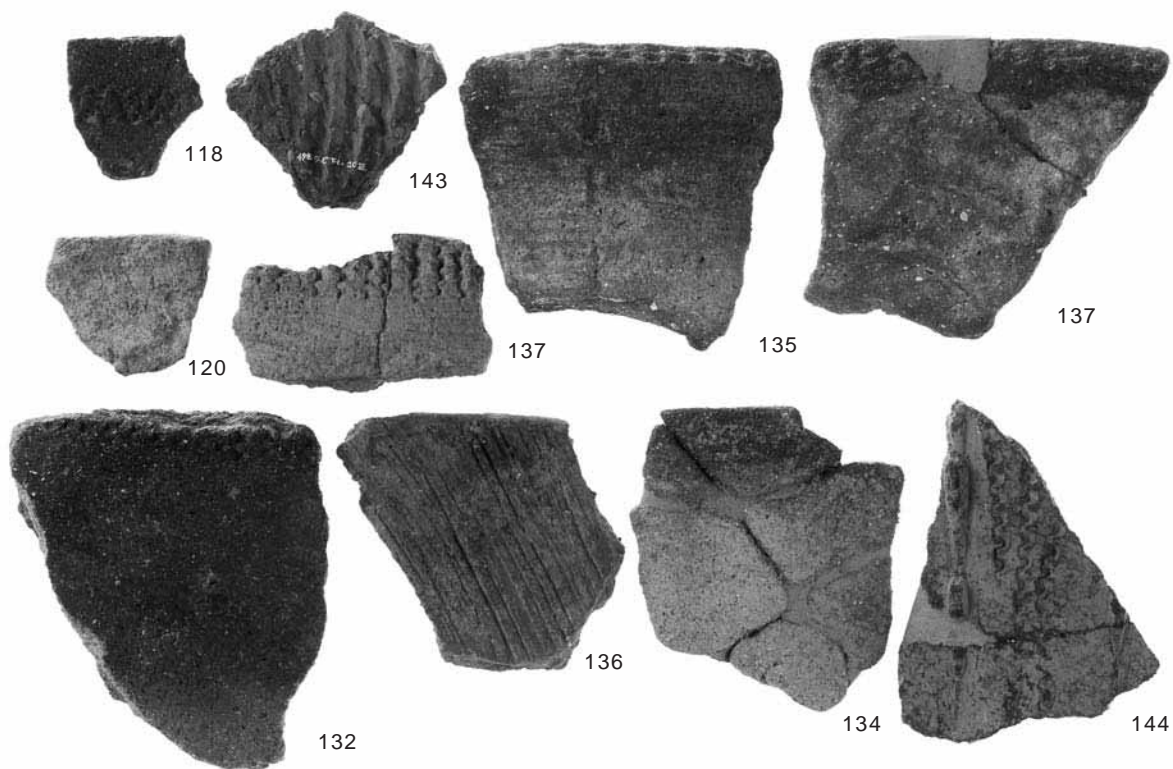
旧石器時代石器 (1)



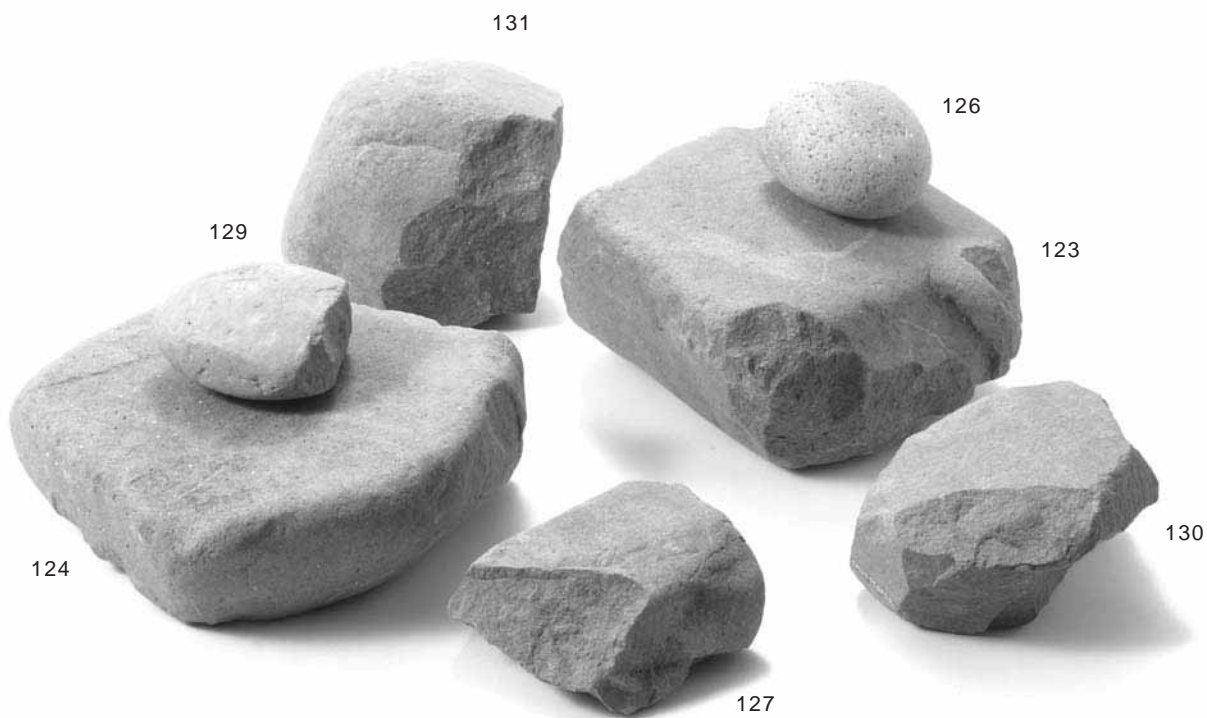
旧石器時代石器 (2)



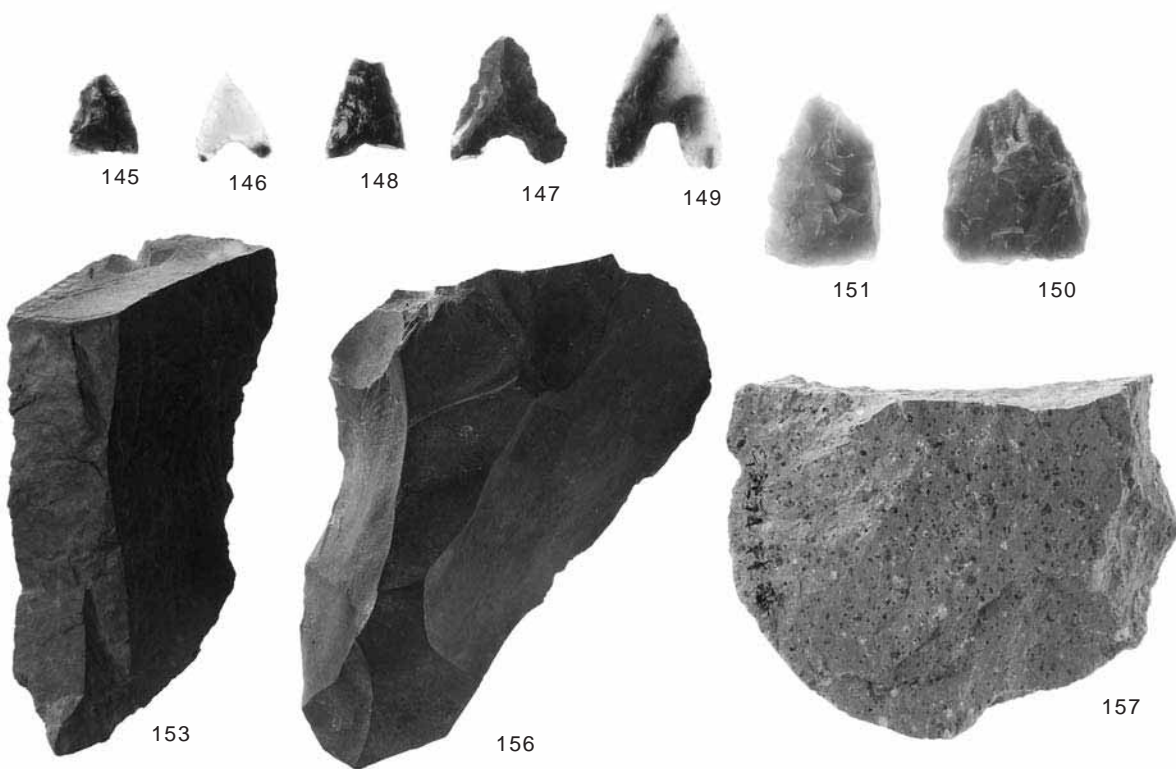
旧石器時代石器 (3)



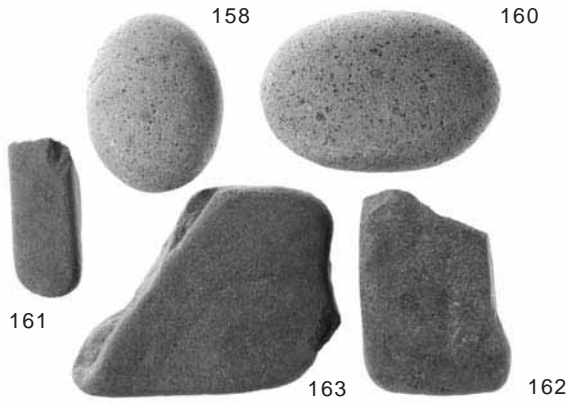
縄文時代早期土器



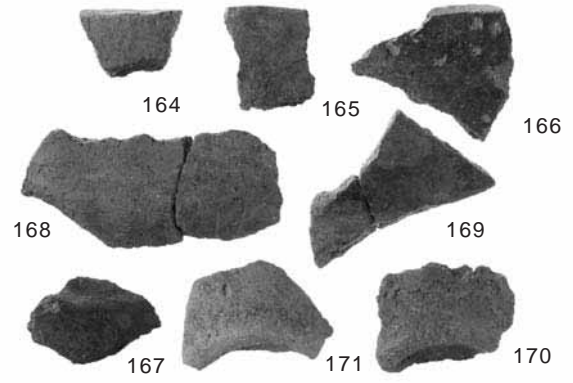
縄文時代早期炉穴出土石器



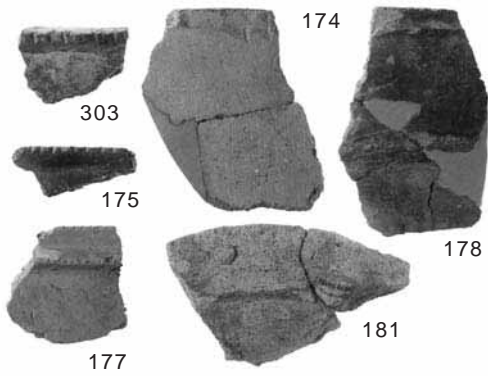
縄文時代早期包含層等出土石器 (1)



縄文時代早期包含層等出土石器 (2)



縄文時代後期土器



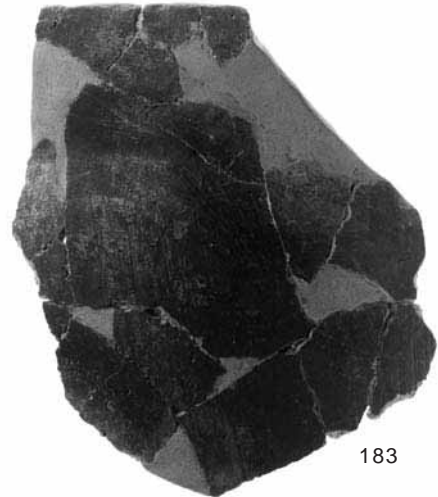
弥生時代中期土器



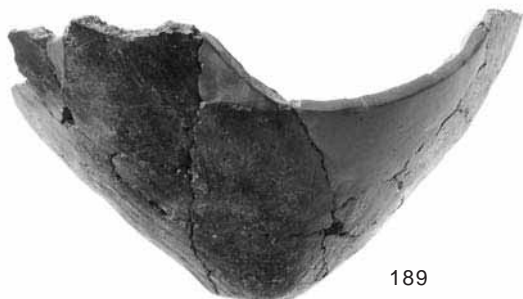
3号竪穴建物跡出土土器



1号竪穴建物跡出土土器 (1)



1号竪穴建物跡出土土器 (2)



1号竪穴建物跡出土土器 (3)



1号竪穴建物跡出土土器 (4)



1号竖穴建物跡出土土器 (5)



1号竖穴建物跡出土土器 (6)



1号竖穴建物跡出土土器 (7)



1号竖穴建物跡出土土器 (8)



1号竖穴建物跡出土土器 (9)



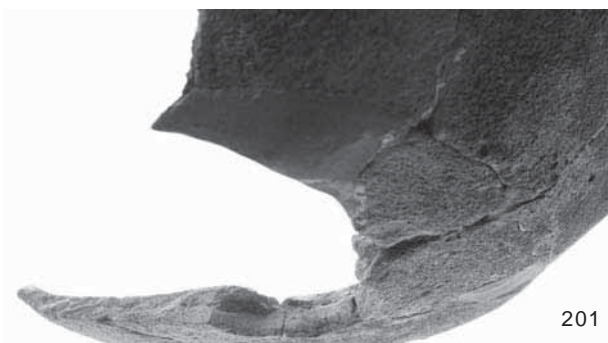
1号竖穴建物跡出土土器 (10)



1号竖穴建物跡出土土器 (11)



1号竖穴建物跡出土土器 (12)





206

1号豎穴建物跡
出土土器(13)



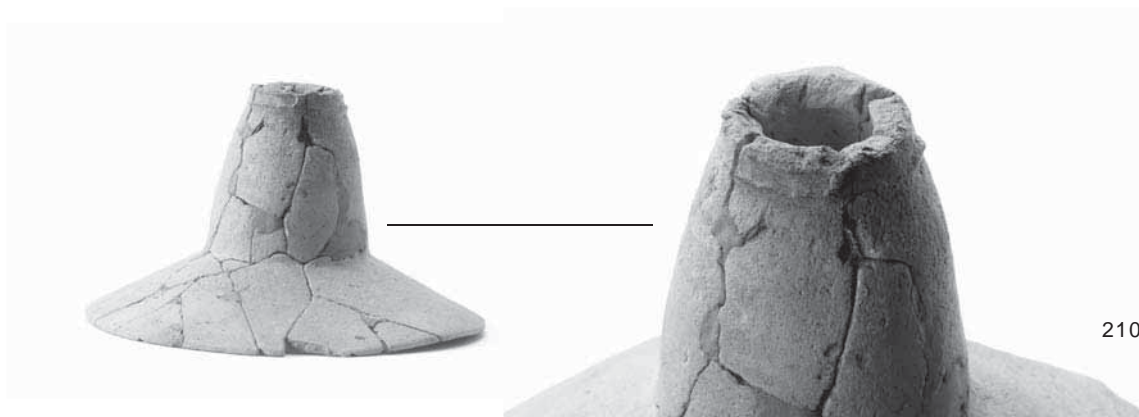
207

1号豎穴建物跡出土土器(14)



209

1号豎穴建物跡出土土器(15)



210

1号豎穴建物跡出土土器(16)



208

1号豎穴建物跡出土土器(17)



1号竖穴建物跡出土土器 (18)



1号竖穴建物跡出土土器 (19)



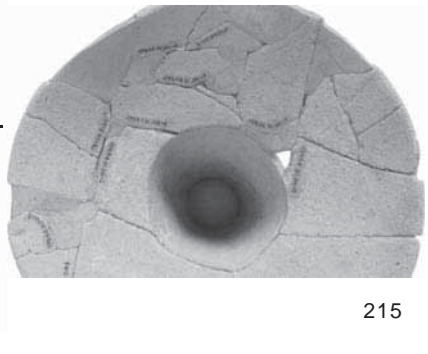
1号竖穴建物跡出土土器 (20)



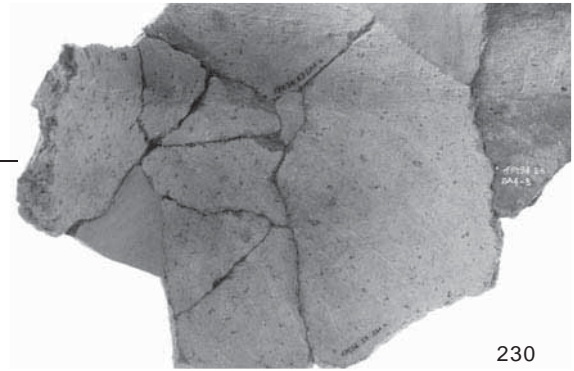
1号竖穴建物跡出土土器 (21)



1号竖穴建物跡出土土器 (22)



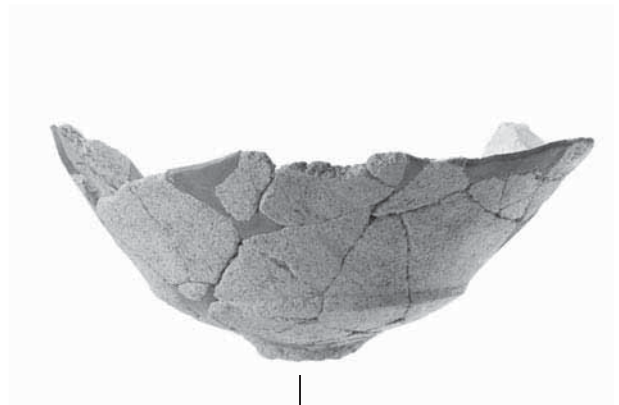
1号竖穴建物跡出土石器



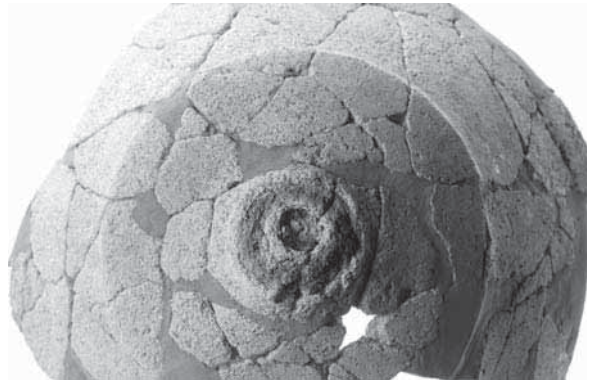
4号豎穴建物跡出土土器(1)



4号豎穴建物跡出土土器(2)



4号豎穴建物跡出土石器



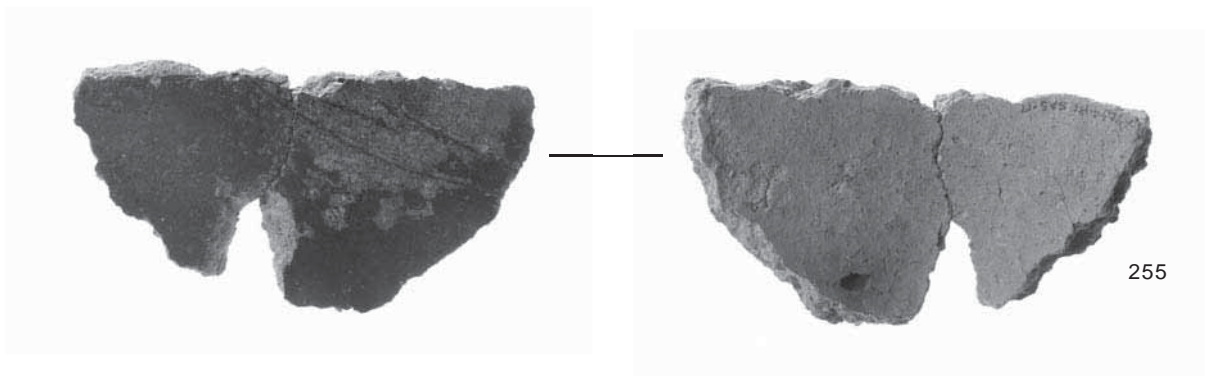
4号豎穴建物跡出土土器(3)



古墳時代豎穴建物跡出土石器



古墳時代豎穴建物跡出土棒状礫



5号竖穴建物跡出土土器



6号竖穴建物跡出土土器(1)



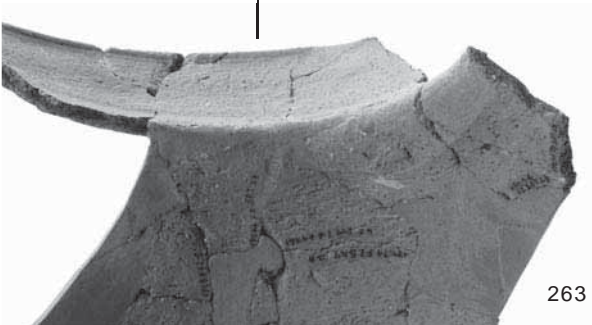
6号竖穴建物跡出土土器(2)



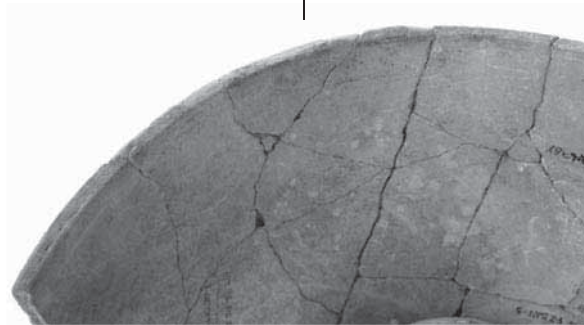
7号竖穴建物跡出土土器(1)



7号竖穴建物跡出土土器(2)



263

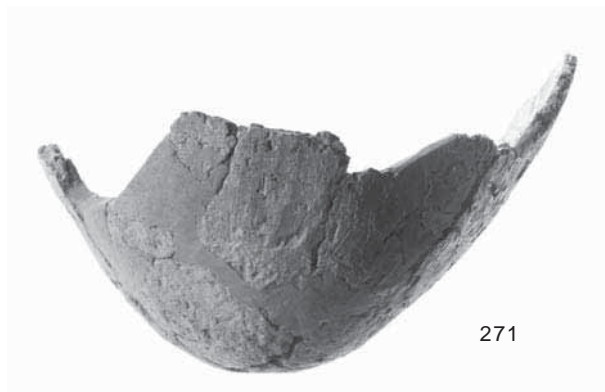


265



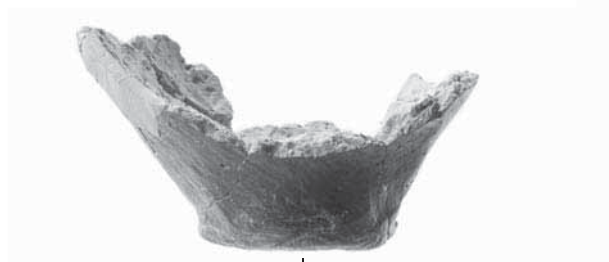
266

11号竪穴建物跡出土土器



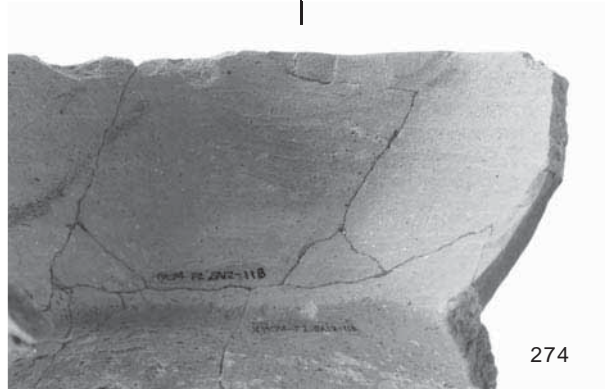
271

12号竪穴建物跡出土土器(1)



272

12号竪穴建物跡出土土器(2)



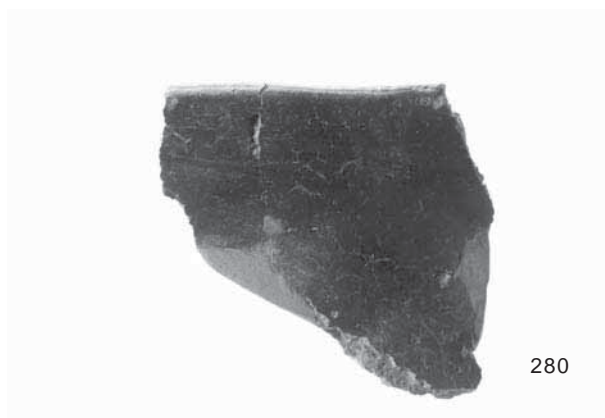
274

12号竪穴建物跡出土土器(3)



277

12号竪穴建物跡出土土器(4)



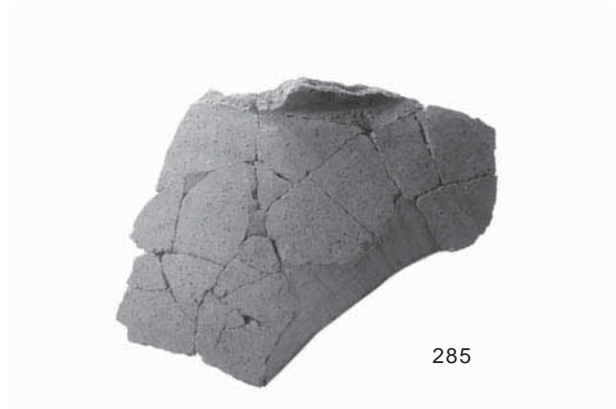
280

13号竪穴建物跡出土土器(1)



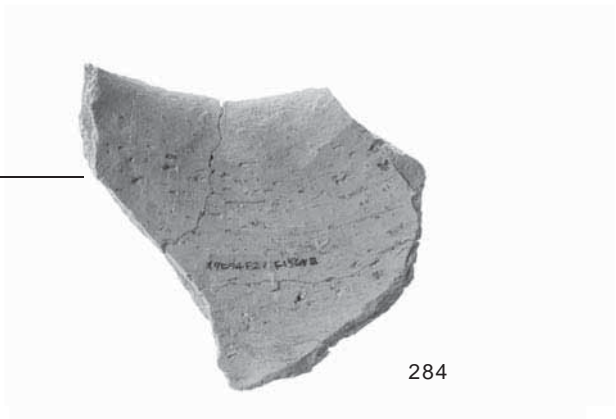
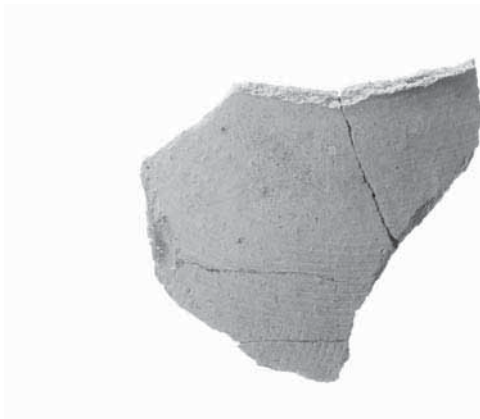
281

13号竪穴建物跡出土土器(2)



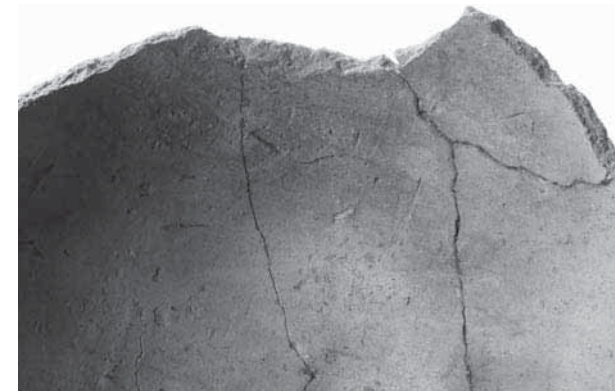
285

古墳時代包含層出土土器(1)



284

古墳時代包含層出土土器(2)



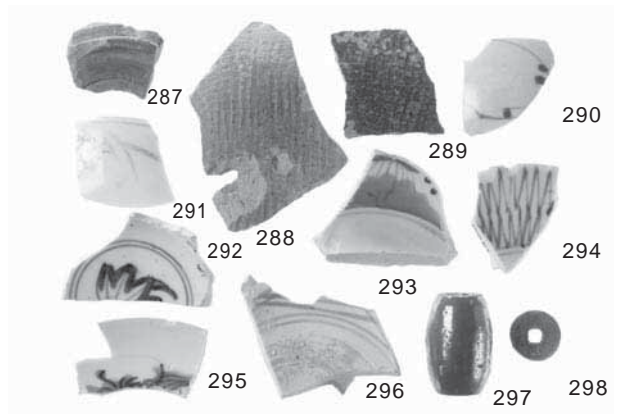
283

60号土坑出土土器



301

1号土坑出土土器



古代・中世・近世遺物

報告書抄録

ふりがな	いたびらいせき(だい3・4じちょうさ)							
書名	板平遺跡 第3・4次調査							
副書名	東九州自動車道(門川～日向間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第199集							
編著者名	土屋 雄毅 島木 良浩 松田 博幸 今塩屋 毅行							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	宮崎市佐土原町大字下那珂 4019 番地							
発行年月日	2011年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いたびらいせき 板平遺跡 だい3・4次 ちようさ 調査	みやざきけん 宮崎県 ひゅうがし おおあざとみたか 日向市大字富高 あざいたびら ほか 字板平 他	45206	3009	32° 26 43	131° 36 22	【第3次調査】 2008.5.7 ～ 2008.6.13 【第4次調査】 2009.5.18 ～ 2010.1.13	480㎡ 8,500㎡	東九州自動車道(門川～日向間)建設に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
板平遺跡 第3次調査	集落	旧石器時代			剥片・石核			
		縄文時代早期	集石遺構 2 基、陥し穴状遺構 4 基、土坑 1 基、炉穴 2 基		土器・石器			
		縄文時代後期			土器			
		古墳時代	竪穴建物跡 1 軒		土師器・石器			
		中世・近世	掘立柱建物跡 1 棟、ピット		土師器・陶磁器・キセル・火打ち石			
板平遺跡 第4次調査	集落	旧石器時代			石器・剥片・石核		鍛冶関連 遺物の出土	
		縄文時代早期	散礫、集石遺構 14 基、炉穴 22 基		土器・石器			
		縄文時代後期			土器			
		弥生時代	竪穴建物跡 1 軒		土器			
		古墳時代	竪穴建物跡 12 軒、土坑 1 基		土師器・須恵器・石器・鉄滓・ガラス小玉			
		古代・中世・近世	掘立柱建物跡 12 棟、溝状遺構 8 条		須恵器・土師器・陶磁器・銭貨			
		時期不詳	陥し穴状遺構 14 基、土坑 45 基、ピット		石器			
要約	<p>板平遺跡は日向市大字富高に所在し、富高川の河岸段丘上に位置する。第3次調査は2008年5月～6月、第4次調査は2009年5月～2010年1月に行われた。調査の結果、第1・2次調査(2006～2007年)に続いて旧石器時代～近世にかけての遺構・遺物が確認され、遺跡の広がりが確認された。旧石器時代については、遺構は検出されなかったが、多数の剥片・石核が集中して出土した。縄文時代については、早期の集石遺構 16 基、炉穴 24 基が検出された他、少数ながらも早期の土器を中心に遺物が出土した。弥生時代については、竪穴建物跡 1 軒が検出され、少数の土器が出土した。古墳時代については、竪穴建物跡が 13 軒検出され、その建物内から土師器を中心とする多くの土器・石器が出土した。土師器は在地系・畿内系のどちらのものも出土している。また、竪穴建物跡のうち 1 軒は上屋構造が焼失したものであり、建物内から鍛冶関連遺物(転用羽口等)が出土した。古代～近世については、掘立柱建物跡 13 棟を確認した他、少数ながら近世の陶磁器などの遺物が出土した。その他、陥し穴状遺構が 18 基検出された他、多数の土坑・ピットが確認された。</p>							

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第199集

板平遺跡（第3・4次調査）

東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書3

2011年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 小柳印刷株式会社
〒880-0803 宮崎市旭1丁目6-25
TEL 0985(24)4155 FAX 0985(24)1512
